
魔法少女リリカルなのは～蒼天に舞う騎士～

秋風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは蒼天に舞う騎士

【Nコード】

N7797I

【作者名】

秋風

【あらすじ】

「魔法って信じますか？」

「魔法？」

「そう、魔法です」

それが僕、井上直人の魔法との出会い。小学6年生の冬に、出会った古代ベルカの融合騎「マリカ」それをきっかけに、僕はベルカの騎士となった。そして、物語が動き出す。

魔法少女リリカルなのはの二次創作物です。二次創作がお嫌いな方、オリジナルキャラ介入が嫌いな方は回れ右をお願いします。なにぶ

初心者ですので、誤字脱字、それに設定の間違いなど、その辺は考慮してお読みください。設定の間違いや矛盾などは連絡をくれれば直しますので、よろしくお願いします。

キャラクタープロフィール（前書き）

初めまして。秋風^{アキカゼ}と申します。

こちらは魔法少女リリカルなのはの二次創作となります。二次創作が嫌いな方は回れ右をお願いします。

さて、今回はキャラクターの設定です。なにかと矛盾点などもあると思いますが、その辺は温かい眼で見守って欲しいと思います。

キャラクタープロフィール

オリジナルキャラクター解説

井上直人（主人公）

年齢 15歳

誕生日 7月25日

所属学校 私立聖祥大附属中学三年生（3年2組）

魔法 古代ベルカ式

デバイス 古代ベルカ式アームドデバイス「メシア」

ユニオンデバイス
古代ベルカ融合騎「マリカ」

好きなもの 辛いもの 姉（千草）の料理

嫌いなもの 甘すぎるもの 交通事故 人の名前を覚えること

趣味 スケッチ

解説

本作品の主人公。正確は温厚でありながら、喧嘩や剣術などに長けている。普段は人との接触を避け、一人でいることが多い。幼いころ両親を失ったことをきっかけに、友達を作ることでの大切な存在が消えることを恐れている。そのため、友達は一人しかいない。クラスでも「目立たない静かな奴」という認識が強い。

小学校6年生のとき、古代ベルカ融合騎「マリカ」との出会いをきっかけに騎士となる。しかしながら、地球にいるため魔導士や騎士との実戦経験はない。だがマリカの指導によって、通常の騎士と同等の力を持っている。ユニゾンすると髪と瞳が蒼くなる。

井上千草

年齢 不明

誕生日 10月9日

仕事先 高級レストラン『アトランティカ』

デバイス なし

好きなもの 家族 料理 直人の書くスケッチ

嫌いなもの 血 孤独

趣味 オリジナル料理の作成

解説

直人のたった一人の肉親。高級レストランで働く一流のシェフであり、料理の腕は抜群にうまい。性格も温厚かつ天然。おっとりしているが、少々おっとりしすぎて、人がいい。

直人が騎士になったことは知っており、マリカ、そしてメシアを家族と認識している。しかし、直人同様、両親を亡くしたトラウマを抱えており、孤独を嫌う。

マリカ

誕生日、年齢 不明

種別 古代ベルカ式ユニゾンデバイス

契約者 井上直人

好きなもの 千種の料理 本

嫌いなもの 闇 悪

趣味 読書

解説

ミッドチルダから地球に到達した古代ベルカの融合騎。元マスターゼオンを探したいと願い、直人と契約を交わす。正確はまじめだが、少々我侷で、極端に朝が弱い。ミニサイズでいるときは少々子供っぽさが出てしまう。これは現マスター直人の影響とも言える。瞳の色は蒼で、髪は紫。古代ベルカの生き残り「クラウン家」によって作られた。

得意な魔法は主に結界や治療系。しかし、ユニゾンデバイスとしての性能が非常に高く、それと同時に身体能力も高い。攻撃などでも「クリスタルダガー」を使用する。ゼオンから剣術を学んでいるため、その剣術のなんたるかも理解している。

ゼオン・クラウン

年齢 20歳

誕生日 11月30日

所属 なし

魔法 古代ベルカ式

デバイス 古代ベルカ式アームデバイス「メシア」
古代ベルカ融合騎「マリカ」
ユニオンデバイス

好きなもの 甘いもの 空

嫌いなもの 疲れること 汗 めんどくさいこと

趣味 昼寝

希少技能 次元回路の旅人

解説

マリカ、そしてメシアの前マスター。元時空管理局の武装隊に所属していたが、任務中に恋人の死に直面して辞職。世界を回り、自分の罪を償おうとする。

古代ベルカの血を宿す「クラウン家」の末裔であり、自らのアームドデバイス「メシア」を操る姿から、『剣帝』の二つ名を持っている。旅の途中盗賊団「シャドウ」に遭遇し、村人を守るため奮闘。しかし傷を負い、援軍が来たことから自らの希少技能を使い、マリカとメシアを地球に送って生死不明。

希少技能「次元回路の旅人」は、あらゆる物質を自分の意思であらゆる空間、場所に移動させることができる。しかし、質量的に人間

一人が限界という欠点を持つ。

ユニゾン状態は赤髪が直人と同じく蒼に変わる。瞳は金色に変わる。

メシア

年齢 稼動暦15年

誕生日 11月30日

契約者 井上直人

種別 古代ベルカ式アームデバイス

好きなもの 現在のマスター

嫌いなもの 裏切り

解説

ゼオンが5歳の時に一族の長から授かったアームデバイス。待機モードは蒼い宝石のブレスレット。発動時は剣となる。1stは西洋剣で、2ndは双剣、3thはレイピア、4thは大剣となっている。前マスターゼオンが契約を破棄したことで、現在のマスター直人と契約している。甲冑は全体的に蒼いが、ブーストモードを使うと、全体的に紅くなる。

水嶋雨月

年齢 15歳

誕生日 8月30日

所属学校 私立聖祥大附属中学三年生（3年2組）

魔法 一般人のためなし

好きなもの ゲーム

嫌いなもの 学校の授業

趣味 徹夜でゲーム

解説

直人の唯一の親友であり、よき理解者。幼馴染であり、クラスは小学校からずっと同じ。性格はお調子者でゲーマー。学校をサボることが多い。5大美女の中ではフェイトを狙っているらしい。剣道部であり、インターハイに出るほどの実力者。

キャラクタープロフィール（後書き）

次回からいよいよ本編です。

是非感想をお待ちしております！

第一話「落ちてきた天使」(前書き)

こんにちは、秋風です。

一話目連載開始です。魔法少女リリカルなのはの世界に自分の作品のキャラクターが入るというのもどこか緊張します。間違いや矛盾が多く出てしまうかもしれませんが、読んで見てください。

秋風「魔法少女リリカルなのは」蒼天に舞う騎士「始まります」

第一話「落ちてきた天使」

「魔法を信じますか？」

「魔法？」

「そう、魔法です。」

これが僕の出会い。魔法という名の、不思議な力との出会い。

一話「落ちてきた天使」

出会ったのは小学6年生の冬。海鳴に珍しく雪が降った日だった。僕が自然公園でスケッチをしていたとき、その女性は突然現れた。それも、空から。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

空から降ってきたのに、大丈夫かと聞くのはないだろうとも思いながら、一応女性に聞いてみた。僕はゆっくりと女性を起こした。女性は僕より年上で、20歳くらいか。薄紫色の長い髪が、とてもきれいな女性だ。一瞬、天使かと思った。

「は、はい・・・何とか・・・」

体は傷だらけ。そして冬にも関わらず袖のない服を着ている。寒くないのかな？

「あの、どこかで木登りでもしていたんですか？」

小学生の発想。突然上から降ってくる理由のひとつであるが、大人がそんなことをするわけがない。

「い、いえ・・・私は・・・その・・・」

「とにかく、これを着てください」

僕は羽織っていた少し大きめのジャンパーを女性にかけた。

「あ、ありがとう・・・えっと、君は・・・」

「僕は井上直人。小学校六年生です。あなたは？」

「私はマリカ・・・古代ベルカの融合騎です」

「ベルカ？融合騎？」

「あの、ここはなんという惑星ですか？」

突然聞かれたその言葉に、僕は動揺する。いきなりそんなことを聞くか？などと思う。

「ち、地球ですよ。当たり前じゃないですか」

「地球・・・そう・・・ここが・・・」

「あの、もしかして宇宙人とか言いませんか？」

少し冗談交じりで言ったが、マリカさんは少し苦い表情になった。

もしかして、あたったりしたのかな？

「当たらずとも遠からず・・・私は、異世界から来ました」

「い、異世界？」

マリカさんの言葉に、僕はわけがわからなくなった。異世界・・・正直そんなもの、何かの小説や、アニメでしか見たことがない。もしくはこの人がおかしいのか？そんな顔をしていると、マリカさんは僕に質問を投げかけた。

「あなたは、魔法を信じますか？」

「魔法？」

「そう、魔法です。」

そう言ってマリカは手から光を出した。それを見て、僕は絶句する。

「・・・・・・・・！！」

「これが魔法。正確には、古代ベルカの力です。今は、ただ魔力を垂れ流しただけですけど」

「あの、ドッキリですか？」

思わずそんな質問をしてしまう。だが、マリカさんは首を横に振る。

「いいえ、紛れもない、現実です。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう、わけがわからない。すると、マリカさん腕から血が出てきている。

「っ・・・・・・・・！」

「だ、大丈夫ですか？」

「私はベルカの融合騎。人間ではないのです。ただ、このままだとちよつとまずいです。」
確かに体の傷が所々光っている。しかし、その服装からか、とても震えている。

「歩けますか？」

「はい、少しなら・・・・・・・・」

「少し歩きますが、僕の家があります。そこに行きましょう。」

「良いのですか？」

「あなたの言葉が真実なら、お医者さんに行くのはまずいでしょう？」

僕の言葉にマリカさんは頷き、僕はスケッチブックを脇に挟み、マリカさんを支えながら自然公園を出た。マリカさんいわく、阻害魔法というのを使っていろいろしく、自分達は人には見えないらしい。しばらく歩き、家に着いた。

「・・・大きな家ですね」

「そうですね？」

僕の家は一軒家で、確かに普通の家とは少し違う大きさだ。もともと財力があつた亡き祖父の家を、僕と姉がそのまま使っている。

「さ、早く」

そう言つて家の中に入った。家に入り、僕はすぐに部屋を暖め、救急用具でマリカさんの傷を手当てした。亡き父がアウトドアでキャンプに連れ出す機会が多かったので、色々なことを教えてもらっている。

「出来た」

少し不恰好だが、しっかりと処置は出来ている。後は自然に傷が消えるらしい。

「ありがとう。直人」

「ど、どういたしまして・・・」

初めて名前を呼んでくれた。僕はその言葉に、顔が少しだけ熱かった。人を助けてお礼を言われたからか。それともマリカさんの笑顔だからか。そんな顔を隠すように、僕は本題に入った。

「マリカさん。魔法のことと、異世界から来たのは信じますが、どうして空から降つて来たんですか？それも、傷だらけで。」

「はい。助けさせていただいたからには、きちんと話をしなければなりませんね。」

そう言つてマリカさんは静かに語り始める。

「私はミッドチルダという世界から来ました。そしてそこにはある組織が存在します。時空管理局という、さまざまな次元世界を管理する組織です。」

「もしかして、その組織に追われたとか？」

もしそうなら、僕も犯罪者か？などと思っていたが、マリカさんは首を振つた。

「いえ、私は管理局に追われているわけではありません。今回その組織は無関係です。話を戻します。私には主がいました。その人と私は旅をしていたのです。主の名は、ゼオン・クラウン。」

ミッドチルダの北西に歩いた平原。そこには二つの人影。それは一組の男女。

「主……もう休憩ですか？」

「あんな、マリカ……もう少し歩くスピードをだな……」

「そんなことを言つてたら、今日中に村に着くのは不可能ですよ？」

「まあそうなんだけどさ……」

赤い髪の男、ゼオンは、マリカにやれやれと思いつながら歩く。ゼオンは元時空管理局武装隊の空尉であり、時空管理局では珍しい、古代ベルカ式の魔法を使う、数少ない騎士である。

「主、村が見えましたよ。」

「よかった、これで休憩できる……」

ゼオンはため息をつくが、それは突如起きた爆発によって掻き消された。

「なんだ!？」

「主、村が襲われています!」

「ちっ!行くぞ、マリカ!」

「はい、主!」

ゼオンは村へと駆け出した。そしてその村では、盗賊の一団が略奪を行っていた。

「ひやははははは!金になるものと女は持って来い!それ以外はいらん!この村は我らシャドウがいたたく!」

頭のような男が叫ぶ。家は破壊され、次々と殺戮が起きる。

「やめやがれ!」

ゼオンは叫び、自分の剣型アームデバイス「メシア」を構え、盗賊に切りかかった。

「ギヤア!」

近くにいた下っ端が倒れる。非殺傷設定なので、死んでいない。

「なんだ！？管理局の奴か！？」

「・・・違えよ、ただの旅人だ」

ゼオンはアームドデバイス「メシア」を構え、言い放った。すると、頭領の手下達が現れる。ざっと百人くらいか。

「テメエ・・・この人数を相手にしようってか！？」

「ああ・・・そうだ。マリカ、ユニゾンだ！」

「はい、主！」

「ユニゾンイン！」

ゼオンの髪が赤から、蒼に変わった。

「と、頭領！あいつ、古代ベルカの騎士だ！」

「ふん、それがどうした？俺もベルカの騎士・・・ユニゾンが出るごときで調子に乗るな！」

頭領が駆け出し、斧型のデバイスと、メシアがぶつかつた。

「おいおい、この程度か？」

「ぐ・・・ぬうううう・・・」

その大剣の一振りによって、半数の盗賊が吹き飛ばされる。

「ひ、ひるむなあ！」

再び敵が襲い掛かる。そこにいたのが全員だったわけではなく、次から次へと敵が出て来る。

「ちい・・・！」

(主！後ろです！)

「！！」

見ると、下つ端が剣を振り上げてきていた。それを間一髪で避けて叩くが、さらに来た剣を掠る。

「ぐっ・・・！」

(主！)

(平気だ！どんどんいくぞ！)

そう言って大剣を振う。戦闘開始から一時間。そこには盗賊があちらこちらに倒れていた。そして残るは頭領のみ。

「さあ、管理局に出頭するか、俺にやられるか？」

「ひっ、ひい！」

ゼオンはゆっくりと頭領に歩み寄る。その時だった。頭領の足元に

「駄目だ。村の人たちは置いて置けない。」

そう言つてマリカに自分のデバイス、メシアを渡した。

「主……?」

「我が名はゼオン・クラウン。その名とベルカの血において、古代ベルカ式デバイス『メシア』、融合騎『マリカ』との契約を破棄する。」

「あ、主!?!」

『My, Master!?!』

「いいか、よく聞け、これから俺はお前達を異世界へ飛ばす。そうすればお前達は助かるはずだ。」

「し、しかし主は!?!どうして契約を……」

「俺はこれからこの村を守るために、戦う。ここで死ねば、契約したお前らに何らかの影響が出てしまう。なら、俺は契約を破棄する。」

「いやです!私主と戦います!」

『Me too!』

二人の言葉にゼオンは首を振った。

「お前らは、ここで犠牲になったら駄目だ。お前達にはきつと幸せが待っている。だから、ここでさよならだ。」

ギルバが笑い、転移用の魔方陣を発動する。

「あ、主！」

「マリカ・・・いつか生きて会おう。メシアもな・・・希少技能発動「次元回路の旅人」時空転移魔法、出力最大。そうだな、一番魔法と関わりのない世界へ送ろう。管理外世界97番世界惑星名称「地球」・・・転送！」

「ゼオン！」

「はは、名前で呼んでくれたの、初めてだよ・・・マリカ」

そこで、マリカはメシアと共に、地球へと転送された。

「そして、私達はここにたどり着いたのです。」

「そうだったんですか・・・じゃあ、ゼオンさんは？」

「わかりません。信じたくありませんが、あの重傷であの量の敵に勝つなど・・・ただでさえ転送魔法は超高等技術・・・もしかしたら・・・それに、転送魔法は主の希少技能・・・私は帰ることすら出来ない・・・」

そう言ったマリカの目から、一筋の涙が零れた。

「マリカさん・・・」

「すみません……」

僕はしばらく考えた。僕からすれば、作り話にしか思えない。でも、マリカさんの流す涙は本物だ。そして、これまで魔法というものを少し見た僕としては、もう信じるしかない。

「マリカさん……僕はまだ、少し信じられない所も多い。僕は子供だから。でも、マリカさんの涙が本物だつてことは、子供の僕でもわかる。」

「直人……」

「だから、僕の家でゆっくり考えてください。ミッドチルダに帰る方法を。」

「しかし、ご両親は……?」

「父さんと母さんはもうこの世にはいない。姉さんがいるけど、姉さんならきつとマリカさんのことをわかってくれるよ。」

事実、僕に両親はいない。二人とも事故で死んでしまった。今は姉が生計を立てている。

「ありがとうございます。直人。それでは、一つお願いが。」

「何?マリカさん」

「私と……いえ、私達と契約してください。」

「契約?」

「我が求めしは魔道の力」
「我が求めしは魔導の力」

僕がゆつくりとマリカさんと同じことを言う。

「契約の元、我が剣となり盾となれ古代ベルカの名の元に」
「契約の元、我が剣となり盾となれ古代ベルカの名の元に」

「我が名は井上直人！古代ベルカ式アームデバイス『メシア』
ベルカ式融合騎、ユニゾンデバイス『マリカ』ここに契約を果たさ
ん！」

最後には声が重なり、足元にベルカの魔方陣が姿を現した。それは
限りなく蒼い色だ。そしてマリカさんとメシアが光った。そして僕
はメシアに声をかけた。

「ど、どうかな？」

『Yes, it's perfect! How do you
do? New My Master』(はい、完璧です！よろしく
お願いしますよ？新たな主)

「う、うん・・・英語がわからないからあれだけど、多分よろしく
つてことかな？」

『That's right!』(そのとおり)

「そのとおりだそうです。私も、よろしく願いますね？主」

「うん、よろしく」

こうして、この管理外世界97番惑星名称「地球」に一人の騎士が誕生した。

そして、3年後・・・

「やばい！遅刻だ！」

「主、急ぎましょう！」

「わかってる！マリカ、俺のバツクの中へ早く！」

「はい！」

あれから3年、春である。僕・・・いや、俺はマリカ、そしてメシアと共に、騎士として日々鍛錬をしている。剣はマリカに教えてもらい、メシアにもある程度の基礎魔法を教わるようになった。しかし、いまだにミッドチルダへ行く方法は見つからない。俺は私立聖祥大附属中学三年生になった。来年は高校に進学しながら、バイトをして姉を楽しませようと思う。

「直人！お弁当！」

「あ、ありがとう千草姉さん！」

「マリカちゃん、メシア！直人を頼むわね！」

「はい！」

『Yes!』

姉さん、井上千草はコックとして、高級レストラン『アトランティカ』で働いている。ちなみに姉には契約をしたその日に全てを話した。はじめは信じられなかったらしいが、マリカの魔法を見て、納得をしてくれた。そしてマリカ。マリカは今ミニサイズになっている。そのほうが俺に負担がかからないかららしい。さらに、マリカと呼び捨てにするのは、マリカ曰く、主が「さん」をつけるのはおかしいということだ。メシアは相変わらず忠実だが、面白いことも言って、和ませてくれる。

『My master. Hurry or you' be late for school!』(主、急がないと学校に遅れま
す!)

「ああ!急ごう!」

そう言って今日も、俺は学校へと走り出した。

物語はようやく動き出す

第一話「落ちてきた天使」（後書き）

第一話終了です。

え？なのはたちが出てこないって？まあまあ、焦らないでください。次の第二話より、ようやくなのはたちは登場するのです。今回は主人公の直人がどんな奴なのか、と知ってほしいために書きました。第二話より、なのはたちと出会うのです。まあ、あの子は悪魔なんです、直人がどう反応するか、ちよつと自分でも楽しみです。そしてこの直人は結構作者のやりたい放題が詰め合わさったキャラなので、なんだこいつと思うかもしれませんが、気長に見守ってやってください。

え？後ろで白い服を着た悪魔が笑って杖構えてるって？あはは、そんな馬鹿な……

……

なのは「秋風君……少し、頭冷やそうか？」

秋風「……次回、第二話『名前』 TAKE OFF」

なのは「スターライトブレイカー！」

秋風「ぎゃあああああ！」

第二話「名前」（前書き）

連続投稿です。ちょっと頑張ってます。知人に「二次創作って書いてる奴おかしくね？」と言われました。いるんだけど。書いてる奴がその隣にさあ！

なのは「ディバインバスター！」

秋風「ギャアアアア！」

なのは「ここは愚痴を言うところではありません 魔法少女リリカルなのはは蒼天に舞う騎士は始まります」

第二話「名前」

学校まではそう遠くない。走れば10分くらいで着くだろう。学校に行く前に寄る場所があるので、俺は自然公園を抜けて近道をする。別に近道をしなくても間に合うが、教室には早く着いていたいと思った。すると、あるものが目に入った。

第二話「名前」

「なあ？いいだろ！？遊ぼうぜ！」

なにやら数人の柄の悪そうな男が女の子5人を囲んでいる。囲まれているのは同じ学校の制服を着た女子だ。

(どうします？主？)

(一応助けてあげようか。なんか、あの金髪の子、今にも飛び掛りそうだし)

見ている限りでは、その金髪の女の子が今にも殴りそうである。とりあえず、その女の子を掴んでいる男の手を掴んだ。

「なんだテメエ！」

「とりあえずやめたら？嫌がつているだろ」

「テメエには関係ないだろ！消えろ！」

男の拳が飛んでくる。それを避けると掴んだ男を引っ張り、その男

の顔面にヒットさせる。

「先に手を出したのはあんた達だ。これで文句ないな。」

その俺の放った殺気に、男達は押される。相手を殺すような目。こ
ういうのを言うらしい。ちなみにマリカに教わった。

「死ねやあ!」

今度は別の男が木刀で殴り掛かった。木刀を掴み、捻って木刀を取
った。

「武器使ったんだ・・・後悔するなよ?」

そう言っつ俺は木刀を振るい、男の顔面を吹っ飛ばした。

「お、覚えとけ!」

負け犬の遠吠えらしきことを言っつて、不良たちが退散した。木刀は
忘れ物だったので投げて返してあげた。

「大丈夫だった?」

「あ、ありがとうございま・・・っつて、あれ、井上君?」

「え?俺のこと知ってるの?」

突然名前を言われ、少し驚く。そこにいたサイドアップの少女が不
思議そうに見ている。そういえば、どこかで見たことがある。確か
この子は・・・

「私だよ、高町なのは。同じクラスでしょ？」

「あ、そうだった。高町さん。ごめん、まだクラスの人の名前を覚えてないんだ。」

そう、これが俺の弱点。人の名前を覚えるのが苦手なことだ。まあ、まだ4月の終わりなので、そこは許して欲しいのだが、いつもクラス全員の顔を覚える前に一年が過ぎる。

(主、急がないと学校に遅れます。これではお参りができません！)

(ほんとに!?!?やば・・・!)

「じゃ、じゃあ俺は行くよ。学校に行く前に寄るところがあるから。そうやってその場を立ち去った。」

そこは墓地だ。そして井上家之墓と記された墓石がある。俺はすぐにライターで線香に火を着け、手を合わせる。それは両親の墓だ。

「父さん、母さん、俺は今日も元気だ。それじゃ、行ってきます！」

そう言って墓地を後にした。そしてギリギリセーフで学校に入った。まあ、とりあえず間に合ったから良しとしよう。

(マリカ、一時間目何?)

(確か数学です。)

(そっか、じゃあシミュレーションよろしく、メシア)

(Yes.)

こうして午前の授業はノートを取りながら脳内ではメシアがシミュレーションを展開し、イメージトレーニングを行っている。こうして、午前の授業を終えると、俺は昼食を取りに、屋上へ向かった。

「ふう、気持ちいいな・・・」

風が吹きぬけ、いつもの場所に座る。ここからは鳴海市が一望できるのだ。人も来ないし、静かだし、何より一人でいるのが嬉しい。

「さすが千草、おいしいです。」

もうお弁当を食べているマリカ。小さくなってから心なしか、少し子供っぽくなった気がする。そんなことを思いながら、姉の千草が作った料理を食べる。コックなだけあって、やっぱり料理は上手い。もしお嫁に行ったら俺は飯を作るの大変だ。食事を少しずつ進めながら、俺はスケッチブックを取り出した。そこには屋上から見える鳴海の景色が描かれている。最近になって描き始めたので、まだ細かいところまでは行き届いていない。

「」馳走様。」

「はいな、食うの」

「それはもう、千草の料理がおいしいからですよ。」

「だろっな」

俺は笑いながらスケッチブックに鉛筆で書いていく。すると、ドアが開く音がした。マリカは急いで俺の内ポケットに身をくるめた。すると、そこにいたのは朝助けた5人娘だった。俺はスケッチブックを畳んだ。

「あ、井上君」

「えーと、高町さん」

「あ、覚えてくれたんだ。お昼食べてるの？」

「まあね。」

「じゃあ一緒にしてもいいかな？」

「まあ、いいよ……」

ショートカットの子が隣に座り、その隣に高町さんが座った。

「今朝は助けてくれてありがとな。うちは八神はやてや。覚えといてな」

「あ、うん……」

「あたしはアリサ・バニングスよ。一応お礼は言っておくわ。ありがとう」

「もう、アリサちゃんは……私は月村すずか。ありがとう、井上君」

「今朝は本当に助かったよ。私はフェイト・T・ハラオウン。よろしくね」

「え、えーと・・・八神さん、バニングスさん、月村さん、ハラオウンさん、高町さん・・・でいいのかな？」

「正解!」「」「」

声を揃えて言われ、ちよつと驚いた。その後ハラオウンさんに、「私とアリサも井上君と同じクラスだよ?」と言われてさらにびっくりしたのは言うまでもない。

「それにしても井上君のお弁当、すごいね」

まあ、一流のシェフが作るからね。

「そう?」

「うん、これ作ったのはお母さん?」

「いや、姉さん。一応、二人暮しだけど、朝作ってくれるんだ」

その言葉に、なのはは「ごめん」と謝った。

「いや、気にしてないよ・・・って、ハラオウンさん何してるの?」

いつのまにか、おかずが入れ替わっている。いつの間にか?

「おかず交換。だめ?」

食べてから言わないで欲しい。すると、いつの間にかほとんどのおかずが入れ替わっていた。みんながおかず取っている。この人たちは集り屋か・・・もういいや。すると、こんどは月村さんが俺のスケッチブックを持っていた。

「あ、ちよつと・・・」

「これ、井上君が書いたの？」

そう言っただけで見てきたのはこの屋上から見える景色だった。

「まあ、ね」

「上手だね！井上君美術部？」

「いや、趣味で書いてるんだ。小さいころから絵を書くのが好きだから」

「ほんと、上手やね！」

などと、褒めてくれた。俺は昼食（みんなとの交換したおかず）を食べ終え、スケッチブックを手に、スケッチを始めるが、なのはから「お話ししようよ」と言われ、書くのを断念した。

「そういえば井上君とは去年も一緒だったよね、クラス」

「そうだったけ？」

高町さんの言葉に、俺は戸惑う。確かいたようないなかったような・

「ごめん、覚えてないや」

「えーひどーい！あれだけ話しかけたのにー！」

そう言えばそんなこともあった気がする。なのはが頬を膨らませて
いる。

「う、ごめん・・・」

「冗談だよ、気にしてないから」

と、笑顔を作る高町さん。なんか笑顔可愛いな。

「それにしても、あんたクラスで一人だけ友達いるの？」

バニングスさん、痛い所突きますね。まあ、シミュレーションに忙
しいのはあるんだけど。

「ちょっとアリサちゃん！そついう言い方は・・・」

月村さんが注意する。なんか悪い子供をなだめるお母さんのようだ。

「いや、まあ・・・いることにはいるんだけど。よくサボる奴だか

ら。」

「そつなの」

と、バニングスさんが返答する。なんかこれ以上会話すると弱みと
か出されそう。すると、予鈴が鳴った。なので一足早くそこから
立ち去った。すると、廊下で後ろから肩を叩かれた。そこにはバニ
ングスさんに話した親友、水嶋雨月がいた。学校で唯一の親友であ
る。

「よ、直人！」

「雨月・・・久しぶりか？」

「そうだな！学校に来たのは一週間ぶりだ！」

「また学校サボってたのか？」

「まあな！ゲームをずっとやってたぜ！」

そう言えばネット回線ですつとオンラインだったな。このゲーム
め。しかしどうなっているかわからないが、こいつは俺より頭がい
い。

「それにしてもお前びっくりだぜ？私立聖祥大附属中学の5大美女
と話す所か食事をするなんて！」

「何それ？」

「知らないのか？高町さん、ハラウンさん、八神さん、バニング
スさん、月村さん、この5人は学校で美人と評判なんだぞ！」

「そうなんだ。知らなかった。」

そういえばそんな話は聞いた気がする。告白するも、ことごとく粉砕していく男達の姿を。まあ、興味ないんだけど。

「羨ましいにもほどがあるぞー！」

「いや、知らないよ。ちなみに雨月は誰がいいの？」

「そうだな・・・俺はやはり金髪美女のハラオウンさんだ！」

あれ、金髪ってバニングスさんもでは？まあ、細かいことは気にしないでおこう。そして一日の授業が終わり、帰ることにした。すると偶然か、高町さんたちが下駄箱の前にいた。

「あれ、高町さん？」

「あ、井上君。丁度よかった一緒に帰ろう？」

「え、ああ。別にいいけど・・・」

何故？という感じだ。そして何故？といえば・・・

（マリカ、どうした？黙ったままだけど）

（直人、気をつけて。この高町という子と、さっきのハラオウンという子、八神という子、とてつもない魔力を持ってる・・・）

（本当？でもデバイスがないならいいんじゃない？俺みたいにきつかけがなければ意味がないんだから）

（それはそうですが・・・）

「井上君、どうしたの？」

「いや、なんでもないよ。」

(とりあえずその話は鍛錬の時にしよう)

(わかりました・・・)

そう言っただけ俺は高町さんと外に出た。すると、そこには残りの4人も一緒だった。

「なのは、遅いわよ」

「にははは、ごめんごめん。井上君と会ったから、誘ったの」

「そうなんだ。じゃあ帰ろ？」

そう言っただけみんなが歩き出す。会話をしているが、正直男子が聞くような会話ではない。そして、分かれ道。ここで5人とは別れられる。

「それじゃあ、俺はこれで・・・」

分かれようとした瞬間、高町さんに腕を掴まれた。

「え？」

「実はみんなで考えたんだけど、今朝のお礼したいんだ。うちのケ
ーキ奢るよ。」

「いや、いいよ・・・」

「いいからいいから！」

そういつて高町さんに無理やり連行された。しばらく歩くと、そこは翠屋というケーキ屋さんだった。このケーキは何回か食べたことがある。そういえばこの店長は高町だったけど、この娘さんだったのか。などと驚く。店に入ると随分と体格のいい男性と、綺麗な女性に迎えられた。

「みんないらっしやい。それとなのは、お帰り」

「うん、ただいま」

「おや、その子は？」

男性が俺の存在に気がつく。

「うん。私のクラスメートだよ。」

「高町士郎です。そうか、なのはのクラスメート・・・男の子は初めて見たよ」

「高町桃子です。よろしくね」

「あ、どうも・・・井上直人です」

と、自己紹介。俺は思わず二人に頭を下げる。この人たち、15歳の子供を持つにしては、随分若い気がする。

「実は井上君は今朝不良に絡まれたのを助けてくれたんだ。だから

うちのケーキご馳走しようと思って。」

「ほう、それはそれは。ありがとう、井上君。」

「あ、いえ……」

「たくさん食べて言ってね？」

「はい……」

なんか、どえらいことになってきた。甘いもの、そこまで好きじゃないんだけど。すると、紅茶を出され、それを飲んだ。随分とおいしい。姉が入れるのよりおいしいかもしれない。すると、次にケーキが運ばれてきた。それは「フルーツタルト」である。食べると、甘さ控えめにしてあって、とてもおいしい。

「どう？それ、私が考えたんだけど」

と、高町さんが言った。

「うん、おいしいよ。とっても」

そう答えると、高町さんの顔が若干赤くなった。何故だろう？すると、もう7時。家に帰らないと、鍛錬が出来ない。5人は相変わらず会話している。これなら、俺は必要ないだろう。

「俺はそろそろ帰るよ。ご馳走様」

「じゃあ、あたし達も帰ろうか？」

え、何だそれ。と、心で突っ込む。

「そうだね、もうすぐお稽古だし。」

その後話によると、ハラウンさんはすぐ家が近くで、バニングスさんと月村さんは車のお迎えが来るらしい。外に出て分けられると、俺と八神さんが残った。

「じゃあ、帰るか?」

「そうだね。八神さん、遅いから送るよ。家どっち?」

「あ、ほんまか?ちょっと遠いよ?」

「いいよ、女の子の夜の一人歩きは危ないから。」

そう言って歩き出す。しばらく無言だったが、八神さんが口を開いた。

「なあ、アリサちゃんも言っとったけど、井上君はクラスでどうしていつも一人なん?」

「うーん・・・まあ、人と関わるのが苦手で・・・」

「嘘やね」

一蹴された。なんだ?この視線は。てか、何でバレた。

「どっしてそう思っつ?」

「だってウチらと話すとき、楽しそうに話してるもん」

「そう、かな？」

「そっや。」

ニッコリとはやてが笑う。

「よかつたら聞かせてくれへん？別に無理ならええけど・・・でも、話して楽になることもあるんやで？」

「・・・ごめん、話せない。」

「そか・・・なら、待つてる。井上君が話してくれるの」

その優しい言葉には、どこか信頼できるものがあつた。俺は人と付き合うのが苦手だ。それは事実。だが、もう一つトラウマがある。それは、親しくなった人が消えるという事実だ。両親を失ってから、自然と、人と関わるのが苦手になつていた。だから正直、この人たちとも関わるのにはためらいを持っている。でも、その八神さんの誠意は嬉しかった。だから俺は敬意を持って、言った。

「八神さん・・・ありがとう」

「どういたしまして」

それから少し歩くと、一人の少女が駆け寄つてきた。

「はやて！」

「ヴィータ！迎えに来てくれたん？」

赤毛の少女が嬉しそうに八神さんに抱きついた。そして、俺を睨む。

「何見てんだ……」

え？俺何かした？

「ヴィータ、そんなこと言ったらあかんよ？うちのクラスメイトや」

「ごめん……」

「八神さん、この子は？妹さん？」

「まあ、そんなところや。紹介するで、ヴィータや」

「ヴィータです……」

なにやら睨まれながら言われた。それほど俺は何かしたか？すると、今度はまた二人の女性が歩いてきた。ピンク色のポニーテールの女性。そして金髪のセミロングの女性。

「こらヴィータ、走るなと言っただろっ。」

「あ、シグナムにシャマル。二人も来てくれたんか？」

「はい、翠屋にいと聞いたので来たのですが……そちらは？」

「ああ、うちのクラスの井上君や。送ってもらってたんよ」

「井上直人です。」

そう言ってお辞儀をした。

「シャマルです。わざわざありがとうございます。」

「シグナムです・・・君は、剣術をやっているのか？」

突然の質問に驚いたが、俺は頷いた。

「まあ、少しだけ・・・」

「いや、失礼。随分と肩の筋肉がしっかりしていると思ってな・・・」

「シグナムは剣道の道場で指導しとるんよ」

「そうなんですか。」

なんか言われて見ればそうだな。なんかそんな感じがする。

「今度手合わせをしないか？」

「いいですよ。喜んで」

そう言っておニコリ笑う。それにしても・・・

(マリカ、どうした?)

何故か、警戒している。ポケットの中からはあるが。

(主・・・この人たち、人ではありません。魔力生命体です・・・！)

(え！？なんで？この世界に魔法は・・・)

(私にもよくわかりません。しかし、彼女達は人ではない)

「どうしたん？」

八神さんが不思議そうに尋ねる。まあ、念話は普通の人には聞こえないから、仕方がない。

「いや、ちよつとね・・・姉さんに用事があるから早く帰ってこい
つてのを忘れててさ」

「そうなん？じゃあここまででええよ。送ってくれてありがとな」

「どういたしました。それじゃ！」

そう言っつて直人は帰路へと走った。

「・・・気のせいかな？」

シグナムはポツリと呟いた。

家に帰り、メシアを発動。剣にして素振りをする。その途中でマリカが話す。

「で、さっきのは本当のことなのか？」

「はい、間違いありません」

先ほどの言葉。

(主……この人たち、人ではありません。魔力生命体です……！)

(え！？なんで？この世界に魔法は……)

(私にもよくわかりません。しかし、彼女達は人ではない)

「でもさ、この世界は管理外世界だから、魔法は存在しないんだろ
う？」

「そうです。だとすると、八神はやては魔導士かも……」

「うーん……まあそれは本人に聞いたほうが早いかな……」

「しかし、それは貴方が騎士だと教えるようなものですよ？」

まあ、確かに。自分が魔法を使える存在だと言ってしまふのは、管理局の間ではタブーらしい。なので、マリカからは絶対に言わないようにと言われている。だが……

「もしかしたらミッドチルダのこと知ってるかもよ？」

「それもそうですね……」

マリカも考える。そうすればマリカはミッドチルダで前の主を探せ

るかもしれない。

「でも……」

「俺のことは気にするなよ。探したいんだろ？ゼオンさん」

「はい……しかし、今の主を放っておくなど出来ません！」

この3年間で随分と我俣を言うようになったな……まあ、それがマリカのいい所かもしれない。自分の意見をはっきり言うこと。ただ従われるのは好きじゃない。

「ま、その辺は考えよう。さて、そろそろ姉さんが……」

「ただいま」

「ほら、帰ってきた」

8時だ。姉の千草はいつもこの時間に帰ってくる。

「おかえり、姉さん」

「ただいま。さ、食事にしましょう」

「うん」

俺はシャワーを浴び、食事にありつく。相変わらず飯はおいしい。夕食を食べ、俺はベッドになだれ込んだ。疲れた。この一言を言って、俺は闇に落ちた。

俺はこの時知らなかった。俺達の高町さん達との出会いが、俺の運命を大きく変えていくことを。

第二話「名前」（後書き）

さて、第二話終了。まあバトルはもう少しだけです。正直バトル苦手なんで（汗）

直人「それでも作者ですか？」

秋風「痛い所突くね」

直人「今まで散々クロス小説書いといてそれはないんじゃないの？」

秋風「俺だつてなあ！あんな難しいの作るのは大変なんだよ！」

直人「それじゃあこの小説成り立たないだろ！」

秋風「よく見る！ジャンルは恋愛だぞ！バトルではない！」

直人「じゃあ何で俺は騎士なんだよ！」

秋風「それはそのうちわかるさ・・・小説が続けばな！」

直人「嫌な言い方するな！」

直人・秋風「次回、第三話『襲撃』 TAKE OFF！」

第三話「襲撃」(前書き)

やっとバトルです。まあ、気長に気長に書いていますが、テストが近いので更新が遅れてしまいます。見てくれている人には申し訳ないです。さて、今回から新しいオリジナル要素が出てくるので、注目してほしいところですが、もしこれがどこかの方が似たのを書いているかと思うと震えが止まりません。しかし、気長に頑張ってくださいと思います。

秋風「魔法少女リリカルなのは蒼天に舞う騎士が始まります。」

第三話「襲撃」

第三話「襲撃」

次の朝。俺はいつものように起きる。そして顔を洗い、制服に着替え、そして専用のミニチュアベッドで寝るマリカを起こした。

「おい、マリカ起きろ」

「うん・・・後10分お願いします・・・主・・・スウ・・・」

いつもこれだ。まともに起きた試しがない。

『Good Morning My Master.』

「うん、おはようメシア・・・いつものを頼むよ」

『All Right My Master・・・Wake Up
!Marika!』

「きゃあああああああ！」

メシアの大声に、マリカが飛び起きた。これは登録したデバイス間
の間で大声で聞こえるらしい。これは便利だ。以前ゼオンさんがメ
シアにプログラムを組み込んだらしい。

「おはよう、マリカ」

「酷いです、主・・・」

「起きないお前が悪い」

頬を膨らませながら、マリカは顔を洗いにふよふよと洗面台へ向かった。さて、いつも通りの朝だ。階段を降り、いつも通りに姉がご飯を作っている。

「おはよう、姉さん」

「おはよう。お友達が来てるわよ」

友達？雨月か？でもあいつは家が遠いし・・・そこで、その姉が言う「お友達」を見て表情が固まった。そこにいたのは・・・

「おはよう、井上君」

高町さんだった。姉が出したであろう紅茶を飲んでいる。

「・・・おはよう。なんでいるの？」

「うん、朝インターフォン鳴らしたらお姉さんがまだ寝てるっていうから、待つっていったら入れてくれたの」

「・・・そうじゃなくて、なんで家に来たの？」

「うん、通り道だから。」

確かにそうだが、人の家に入ってくるとは超予想外だ。

(主・・・どうでしょう?)

(マリカはバッグに入って・・・姉さんは朝食と弁当を入れたみたいだ。)

(わかりました)

そう言っつてマリカはバッグに入った。高町さんが紅茶を飲み終え、立ち上がる。

「それじゃあ、学校行こうか？」

「うん、そうだね・・・って、早くない？」

「いいのいいの。行こう！」

高町さんの言葉に流され、外へ出た。すると、そこには5大美女の4人も揃っていた。

「おはよう井上君」

「あ、なのはちゃんもついたん？」

「うん 紅茶ご馳走になっちゃった」

「ちょっと、なのはに変なことしたの？」

「してないよ・・・てか、どういう意味？」

バニングスさんは何故か疑いの眼で俺を見た。

「井上君に限ってそれはないよ、アリサ。おはよう、井上君」

そう言ってみんなが歩き出す。しかし、その分かれ道で俺は止まった。

「高町さん俺さ、朝寄るところがあるんだけど・・・先に行ってくれる？」

「どこ行くの？」

「墓参り」

「じゃあ私達も行くよ。時間あるし」

えー・・・どうしてだよ。などと思う。まあ、仕方なく連れて行くことにした。そしていつもの場所に着く。いつも通り、ライターで線香に火を点け、手を合わせる。すると、他のみんなも手を合わせてくれた。

「父さん、母さん。今日はクラスメイトが来てくれたよ。今日も行ってきます」

そう言ってみんなで墓地を後にした。そして、周りで何か気配を感じた。これは、殺気だろうか？

「あの、高町さん。ちょっと先に行ってて。すぐに追いつくから」

「え？うん・・・わかった」

疑問を持ちながら、高町さんたちは行ってしまった。すると、数十

人の男子生徒が俺を囲んだ。多分、5大美女のファンだろう。どうしよう、すぐに追いつけないかも。

「えっと・・・何か用？」

「お前、どうしてあの5人と話してるんだ・・・」

「どうしてと言われても・・・向こうから話をしてくるから返しているだけ・・・かな」

「ふざけんな！お前みたいな目立たない奴とあの人たちが向こうから話すわけがないだろ！」

目立たない奴ねえ・・・なんかイラツとするな・・・言い返してやるつか。すると、そこに水嶋雨月が現れた。

「雨月」

「よう、なんか楽しそうだな」

そう言って囲いを飛び越え、俺の隣に立った。

（マスター・・・手加減してあげてくださいね？）

（わかってるよ）

「何？もしかして直人に嫉妬してるわけ？それで集団で囲む・・・発想が幼稚だな」

雨月のその馬鹿にした言葉に、全員がキレた。

「ふざけんなあああああ!!!」

全員が俺と雨月に襲い掛かった。そしてその日、クラスの俺と雨月以外の男子が保健室で寝ることとなったのは言うまでもない。

そして昼休み。今日は雨月が一緒だ。すると、いつも通りに5人がやってきた。

「あ、井上君。それに水嶋君」

「ども、高町さん」

なんか嬉しそうだな、雨月。

「うー一緒にいい？」

「うん、いいよ」

「どっぞどっぞ」

顔がにやけているよ、こいつ。今回は7人で食べた。マリカは隠れて先に食べ、鞆で寝ている。昨日も徹夜で本読んでたし。

「そういえばさ、今日はどうして他の男子いないのかしら？」

「さあ・・・」

バニングスさん、犯人の目の前でそういう話はしないで。原因は元

々君達なんだから。

「まあいいじゃないか！どーせ男子がいるとむさいだけだろ」

お前が言うな。まあフォローにはなっているけど。

「男子のあんたが言うセリフ？」

やっぱりそういう風に返すんだ、バニングスさん。あ、雨月ちよつと凹んだ。こんな感じで、昼休みは過ぎていった。そして放課後。

「井上君、一緒に帰ろう？」

「井上君、帰ろうか」

「井上君、帰るわよ」

「帰るで、井上君」

「早く帰ろう、井上君」

5人の声が聞こえる。まあ、仕方ない。ゆっくり彼女達のところへ行く。そして影から血の涙を流して睨み付けていた男子がいたが、見なかったことにしよう。一方悔しがっていた雨月は部活がある。これからインターハイに向けて頑張るらしい。ちなみに剣道部だ。そして、その時俺は別の場所から見ていた2つの影に気づかなかった。

そして今回も寄り道。海の見える公園だ。とても気持ちがいい。ま

あ、こういう場所は悪くない。ここにいるのは4人。俺と、高町さんと、ハラオウンさんと、八神さん。バニングスさんと月村さんは塾があるとか。

「いつ来ても綺麗やね〜」

「そうだね」

「やっぱりここが一番だね」

と、喜ぶ3人。まあその通りだ。鳴海市の中でもとても綺麗な公園。家からとても近いため、よくここにスケッチに来た。スケッチと風景を比べる。確か海を書いたのは2年前。ぜんぜん変わっていない。すると、電話が鳴った。姉からだ。

「あ、ちょっとゴメン」

そう言って3人から離れた。

そこは公園の草むら。そこにあるのは二つの影。

「彼女達、リンカーコアを持っていますねえ・・・」

「いただきますしょう・・・魔力」

男が言い、女が頷いた。そして、3人の前に姿を現した。

「どうも、綺麗なお嬢さんたち」

「あの、どなたですか？」

私はその男女に聞く。こんな人たちは知らないし……あ、井上君の知り合いかな？

「貴方達のリンカーコア……頂戴しましょう……」

「リンカーコア!？」

「あなた達、何者や!？」

フェイトちゃんとはやてちゃんが驚く。わたしもレイジングハートを構えた。

「デバイス……やはりこの世界にも時空管理局がある……楽しみそうだ……」

男が大型の鎌を構えた。女性の方は棒だろうか？結界が張られた。干渉用の結界。ここで何かする気だ。

「レイジングハート!」

『Yes, My Master!』

「バルディッシュ!」

『Yes, Sir!』

「リン！行くよ!」

『はいです！はやてちゃん!』

「……セーットアップ!」「」「」

全員でバリアジャケットを装備し、構える。

「ほう……ミッドが二人にベルカが一人……楽しめそうですね……！」

そうやって男はフェイトちゃんに襲い掛かる。女の人も、私に襲い掛かった。

「レイジングハート！」

『Accel Shooter!』

「アクセルシューターシュート！」

アクセルシューターが放たれ、女性に当たった。しかし、女性はそれを避け、棒で弾き飛ばした。

「嘘!?!」

「ギルバ……」

『ja.』

棒が変化して、三節棍になった。そしてなのはに襲い掛かる。

「つく!レイジングハート！」

『Protection!』

三節棍がぶつかる。そしてプロテクションにヒビが入った。まずい!

「ブレイク……」

「わっ……!」

防御魔法が破壊された。そしてその三節棍がヒットした。

「ガッ・・・ハッ・・・」

「なのは!」

「余所見をしている暇がありますか?」

「余所見をしている暇がありますか?」

なのはの方に気を取られてしまったため、男が近づくのに気がつか
なかった。鎌が振り下ろされる。私はすぐに行動に出た。

「バルディッシュユ!」

『Hearken from!』

バルディッシュユをハーケンフォームにして対抗する。鎌対鎌でも、
男のほうが強力。

「ほう・・・そのデバイス、鎌になるのですか・・・おもしろい
・・・」

男は下がると、鎌を再び構えなおした。

「デスサイズ・・・」

『Rode Cartridge』

カートリッジがロードされた。何か来る!

「死龍滅光」

男が鎌を振るった。その刃から黒い骸骨の龍が飛び出てくる。

「召喚術！？いや、違う・・・」

「そう、ただ単純にイメージして作られた斬撃・・・おもしろいでしょう？」

男が笑う。そして、その死龍は私のところへ迫ってくる。相殺しなければ、まずい！

「トライデント・・・スマツシャー！」

トライデントスマツシャーと死龍がぶつかる。相殺できた。そのときだ。

「はあ！」

「キヤア！」

男が煙から現れた。早い！そして鎌の刃が手に当たり、バルディツシユが吹き飛ばされた。

「フェイトちゃん！」

「フェイトちゃん！」

うちは両方がやられた瞬間、一番危ないと思ったフェイトちゃんの

支援に入った。

「リン！」

『ハイです！ブラッティダガー！』

ブラッティダガーが発動。男に向かってダガーが飛んでいく。しかし……

「無駄だ無駄だ無駄あ！」

全て素手で……いや、なにかガントレットのようなものに弾かれてもった。

「なっ！」

「紹介しよう、もう一つのデバイス『ブレイカー』です。」

男はそれを見せた。まさか二つもデバイスを持っているとは……すると、その二つのデバイスを重ね合わせた。

「デバイス複合」

『Device Compound』

「そんな……！」

デバイスが目の前で融合した。そんなもの見たことがない。

「フフフ……驚きですか……？これこそ私の複合デバイス『デ

スブレイカー』ですよ」

その鎌の刃と、ガントレットが一つになった。それはクローのようだが、少し違う。すると、眼にも止まらぬ速さで回り込まれ、それを振るわれた。

「キヤア！」

吹き飛び、回転し、フェイトちゃんの近くに落ちた。

「が……あ……」

「はやて……！」

「さて……お遊びはここまでです……私も少女をいたぶる趣味はない」

男はデスブレイカーを構える。そのときだ。男に向けて、突然大量のダガーが降り注いだ。

フェイトちゃんとはやてちゃんがピンチになっていたそのころ。私もピンチになりつつあった。それはその女性の接近戦だ。とても強い。これでは魔法を放つ余裕もない。

「くう……」

「ふん……やはり魔導士か……接近戦でここまで脆くなるとは」

「お願い、教えて……どうしてこんな……」

「答えるつもりはない。貴様はただ、私達にリンカーコアを渡せばいい。」

女性は話してくれない。すると、何かを取り出した。ナイフ……にしては長い。帯剣だ。

「我デバイスの一つ、クロイツ……冥土の土産に見せてやる」

そう言つて女性は棒と帯剣を重ねた。

「デバイス複合」

『Device Compound』

「えっ……！」

デバイスが重ね合わさり、それは棒から槍へと変化していた。

「神槍……ギルバクロイツ……」

槍から、黒い魔力が見える。そして、私にめがけ、その槍は振り下ろされた。

ガキーン！

思わず眼を瞑つてしまった。私は負けちゃった。お父さん、お母さん、お姉ちゃん、お兄ちゃん……ごめん……。……。あれ？おかしいな……。槍が振り下ろされたのに……。私はゆっくりと目を開けた。私の前にいたのは、蒼の甲冑を包み、剣を持った騎士

つづく
だった。

第三話「襲撃」（後書き）

さて、やっとバトルです。ちょっとかつこつけすぎた気がしますね、直人。

直人「作者の癖にそういうこと言うの？」

秋風「だって設定だともっと引きこもりみたいなキャラをイメージしてたのに」

直人「それは書き手の問題でしょ？」

秋風「……次回から出番減らしてやるっか？」

直人「主人公の出番減らしてどうするんですか？」

秋風「俺が主人公になったらどうでしょう？」

直人「高町さん、お願いします」

なのは「秋風君、少し頭冷やそうか？」

秋風「え、あの……ちょっと？なんでエクシードモードなの？」

なのは「全力全壊なの」

秋風「字が違っって……」

なのは「スターライトブレイカー！」

祝 一万ヒット！（前書き）

お陰様で一万ヒットです。なんとというか、もう感謝の気持ちでいっぱいです。

まだ三話しか投稿してないのになんだこれはという感じがです。まだまだ未熟者ですが、頑張っていきたいと思います！

祝 一万ヒット!

秋風「一万ヒットオ!」

直人「わー! やりましたね、今の心境は?」

秋風「複雑です。」

はやて「なんで!?!」

秋風「いや、実はテスト期間中だからさ、あんまり書けないのに申し訳ないというか…」

アリサ「勉強なんてしてないのに何いってんの?」

秋風「うゝ!」

アリサ「しかもパソコンは破壊しそうになるし、何やってるのかしら? このパーフェクトバイリンガル、アリサ・バニングスを見習ったら?」

秋風「黙れ黙れえ! 俺だって必死なんだぞ! お前らを活躍させるのをノートに書きまくってるんだぞ!」

すずか「そのわりには私たち出番ないね…」

秋風「いや、それはほら、しょうがないでしょ? 色々進行して増えますから、ね?」

アリサ「どーせやらないでしょ?」

秋風「ああもう、年下の癖に生意気な!」

アリサ「何ですって!? パソコンでキーボード叩くしか脳がないくせに!」

秋風「なにおう!」

アリサ「何よ!」

はやて「まあまあ、アリサちゃん、秋風さん」

アリサ・秋風「フン!」

フェイト「そういえばまだ出てきてない人沢山いるけど、出せるの?」

秋風「たとえば?」

はやて「ザフィーラとか...」

秋風「ああ、ザッフィーは出すよ?」

なのは「ザッフィー...」

秋風「あいつは戦闘要員じゃん。当たり前でしょ?」

フェイト「じゃあお兄ちゃんや母さんは?」

秋風「ああ、アースラクルーは出さなきゃね。アースラ使っし」

フエイト「やった!」

なのは「じゃあユーノ君は?」

秋風「……………」

なのは「あの、秋風さん?」

秋風「え?出しませんよ?」

なのは「なんで?」

秋風「だって無限書庫で働いてるのにでれないでしょ?」

なのは「いや、でも画面とかで…」

秋風「出しません」

直人「なんか秋風さん怒ってる?」

アリサ「てか、イラついてるわね」

秋風「ま、それはともかく」

はやて「流した!」

秋風「まだ三話ですが、質問や感想大募集です!」

はやて「些細な疑問から意見まで、様々な声をお待ちしています。」

直人「皆さんの応援で、僕達はもっと強くなります！」

なのは「応援しないと頭冷やしちゃうよ？」

はやて「お仕置きでもええかもな」

フエイト「まずはお話じゃない？」

アリサ「コラコラ、脅迫しない」

すずか「なにはともあれ、沢山のお手紙をお待ちしています。」

直人「そして」

なのは「この『魔法少女リリカルなのは蒼天に舞う騎士』」

秋風「これからもよろしく願います！」

全員「「「「「それじゃ、またね」」」」」

祝 一万ヒット！（後書き）

ありがとうございました。

キャラ対談は昔からやってみたかったので楽しかったです。

次の目標は5万人です。頑張っていきたいと思います。

文にもありましたが、感想や質問をお待ちしています。

それでわ失礼！

第四話「蒼天の騎士」(前書き)

一万ヒットの後も、もう一万五千を越えてしまいました。みなさん、ありがとうございます。これからもがんばっていくので、応援よろしくお願いします。

第四話「蒼天の騎士」

3年前のあの日、俺は騎士になった。だが、戦ったことはない。ずっと平和の中で、俺は騎士でよいのかとずっと考えていた。だが、俺が手に入れた力は、いつかきつと役に立つ。マリカがミッドチルダに行く方法が見つかったら、一緒に前の主を探すために。

それはほんの少し前のこと。俺は姉からの電話で、少し遅くなるといふ連絡を受けた。すると、マリカが突然大人サイズになった。

「マ、マリカ!?!」

「主!これは!」

周囲が何かドーム状の物に覆われている。これはいったいなんだ?

「主、これは広域の結界です!」

「なんだって!でも、どうして・・・」

その時だ。爆発が起きた。そこは高町さんたちがいた場所だ。

「主、3人が心配です!戻りましょう!」

「あ、ああ!」

その時一瞬フラッシュバックが起きた。燃え盛る炎。そして倒れている両親。

「もう二度と、失つてたまるかよ・・・！」

そう言つて俺は駆け出した。爆発の場所に着くと、そこには戦っている高町さん達の姿があつた。

「あ、あれは一体!？」

「主、それより今は彼女達を助けなと！」

「わかつてる!マリカ!ハラウンさんと八神さんを！」

「はい！」

そう言つて俺達は駆け出す。そして待機させてあつたメシアを手にとつた。

「さあ、初陣だメシア！」

『All right! My Master! Stand by Ready Set up!』

メシアの声と共に、俺は騎士の甲冑を身に纏い、高町さんへ向かう槍を防いだ。

突然大量のダガーが男に落ちてきた。でも、それはうちとリンのブラッティダガーやない。そのダガーは光り輝き、蒼く透明で、汚れない蒼やつた。そして、私達の前に女の人降りてきた。女は紫の髪に、ダガーと同じ蒼い眼。

「大丈夫でしたか？」

「直人・・・君？」

高町さんが、不思議そうな眼で俺を見ていた。まあ、当たり前だろう。こんな格好。でもまあ、高町さんも似たようなものだ。

「高町さん、大丈夫？」

「あ、うん・・・平気だよ・・・」

「俺がやるから、高町さんは下がってて。」

そう言っただけ俺は目の前の女性に剣を構えた。すると、女性が口を開いた。

「お前・・・騎士か？」

「ああ、そうだ。」

「ならお前のリンカーコア・・・先に頂くとしよう！」

そう言っただけ女性は俺に槍を振るった。

「いくぞ！メシア！」

『Yes, My Master!』

メシアを握り締め、互いに武器を交える。それによって火花が飛び散る。しかし、その長い槍と剣では、リーチが違いすぎる。剣が届

かない。再び襲ってくる。今度は棒が分解し、先に刃のついた三節棍が襲う。

「メシア！2thを！」

『all right!2th mode!』

メシアが光に包まれ、形状が変化した。それは双剣である。相手の攻撃パターンが増えるなら、使えるものを増やせばいい。

「はあああああああ！」

「うおおおおおおお！」

互いに激しい攻撃が繰り広げられる。三節棍によるそのイレギュラーな攻撃。俺はそれを双剣で対抗する。槍の攻撃を双剣で捌き、そのままもう片方で女性に振り下ろす。しかし、女性の手で持つパーツの一部に阻まれてしまう。

「やるな、貴様」

「それはどーも！」

再び互いに弾き、対峙する。この人、強い！

さて、私マリカはお二人を守るために対峙しましたが、この男、強い。その覇気が教えてくれます。

「さて、君はユニゾンデバイスのようだが・・・？」

「そうです。古代ベルカの融合騎マリカ・・・主の命により、お二人をお守りします。」

「ふむ・・・私としてはリンカーコアを持つその二人が欲しいのだが・・・？」

「知りません、あきらめなさい」

私は男に言い放った。すると、男はクツクツクと笑い出す。

「ユニゾンデバイスごときが私に勝てるか？」

「勝てないでしょうね」

「なら、どきたまえ」

「いやです」

「もう一度言う・・・そこを。どけえ！」

男がクローをこちらに向けて振ってきた。私はすかさず避けるとお二人の近くまで行って、魔方陣を張った。

「勝てそうもないので、逃げさせてもらいます」

「な、なに！」

こうして、男の前から私たちは姿を消しました。

突然助けくれたベルカの融合騎と名乗る女性に、私たちは助けられた。どうやらフィールドを展開してくれたみたい。マリカさんは私たちに「お静かに願います」とだけ言って、フィールドを形成し続ける。男はキョロキョロと見渡し、私たちを探している。目の前にいるのにもかかわらず。

「（あの人、どうしたんやろ？）」

「（わからない、私たちが見えなくなっただのかな？）」

はやてと一緒に考えていると、マリカさんが念話で説明してくれた。

「（このフィールドには迷彩機能があり、そして疎外結界を応用したものが形成されています。そう簡単には見つかりません。さらに、私の言葉のせいで彼は私たちが転移したと考えるでしょう。）」

随分と計算されたものだった。もしかしたらこの人は戦いに馴れているのかもしれない。一方で直人君が甲冑に似たものを纏い、女性と戦っている。

「（すごい・・・）」

双剣のデバイスで戦う直人君の剣捌きはなかなかのものだった。槍を切り返し、果敢に攻めている。しかし、どこかぎこちない。というか、動きの反応が鈍い。どうしてだろうか？

「（なんや、井上君の動きがおかしいな・・・）」

はやても、普段シグナムを見ているからわかるのだろう。その通りだ。すると、今度はマリカさんがとんでもないことを口にした。

「(当たり前です。主は魔導士や騎士との実戦は初めてですから。)

「(じ、実戦が初めて!?)」

「(言ってますでしたか?)」

「(初耳や!)」

そう言うてはやてがシュベルトクロイツを手に、結界を出ようとしたが、それをマリカさんに止められてしまった。

「(行つてはなりません)」

「(なんでや!井上君は・・・)」

「(ここを出れば迷彩は解けます。それに、その体で戦うつもりですか?)」

「(っ・・・!)」

確かに私たちはボロボロだ。今の状態では、井上君の足手まといになることは明白だ。そして、マリカさんは言葉を続ける。

「(それに・・・)」

「(???)」

「(私の主は、簡単にやられるほど、弱くありませんよ?)」

マリカさんは笑っていた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「よくやった・・・と、褒めておこう。貴様、実戦経験がないな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「貴様とは年季が違う・・・覚悟しろ！」

女性は言葉を放つ。まさか実戦経験が初めてと見破られるとは、やっぱり戦ってる人は違う・・・なら、自分のもてる力を出して、高町さんを守る。

「メシア・・・アレをやる。いいね・・・」

『All right! My Master! Remit Break!』

「リミットブレイク発動・・・！」

俺の体から、魔力が溢れ出し、甲冑の形状に変化が生じた。そして、蒼い甲冑が赤く染め上がる。さらに、メシアの刃が割れて下にスライドし、そこから新たに魔力刃が現れる。

「なんだ・・・その姿は・・・」

「リミットブレイク・・・クリムゾンセイバー・・・」

その真紅の魔力刃を持ち、俺は構えを取る。女性は構えを取りながら、その俺の姿に動揺していた。

「っ……!」

「行くぞ……」

「はああああああ!」

互いに駆け出し、刃が交わる。そして、俺はそのままそれを弾く。

「何!？」

「遅い……」

俺はそのままメシアを女性に叩きつけ、吹き飛ばした。

「ぐう……!」

どさりと崩れ落ち、男が駆け寄る。

「やられましたか、珍しい……」

「黙れ……油断しただけだ……」

「ふむ、どうやらこのままではギリ貧ですね……恐らく時空管理局が動くでしょう……撤退します」

「だが、ボスからは……!」

「仕方ありません。ここで捕まり、我々のデバイスを調べ上げられるよりはマシですよ?」

男の言葉に女性は舌打ちをして、一つのデバイスを二つに戻した。

「逃げるのか?」

「まさか・・・ここは引かせてもらっただけですよ。いずれ、また会いましょう。そうそう、あなたの名前、聞いていませんでしたね?」

「他人に名前を聞くな、自分から名乗ったらどうだ?」

俺の言葉に男は苦笑し、「これは失礼」と頭を下げた。

「私は革命団『シャドウ』の一人、オーガ・・・そしてこちらが・・・」

「『シャドウ』のダンピール・・・次は負けない・・・」

「俺は井上直人・・・古代ベルカ式を扱う騎士だ。こっちはメシア」

「井上直人・・・そしてそのデバイスのメシアとマリカですか・・・確かに覚えましたよ」

そう言っつて二人は姿を消した。

「ふう・・・」

『Reformation』

メシアの声と同時に、甲冑とメシアが元に戻った。すると、遠くからマリカが駆け寄ってきた。

「主、平気ですか？リミットブレイクを使うとは……」

「大丈夫だよ、とりあえずね。さてと……」

そう言っただけで俺は三人を見た。驚きながらも、こちらを警戒している。まあ、当然か。

「大丈夫だった？遅くなってごめんね」

「ううん、平気……それより、井上君は何者なの？」

「うーん……どこから説明していいのやら。それに、君たちが『魔導士』だったなんて、びっくりだよ。」

「あう……」

「まあ、ね……」

「あはは……」

三人が笑って誤魔化する。笑って誤魔化せるほど、世の中そんなに甘くないよ？

「とりあえずうちで話をしよう。ここからすぐ傍だし」

「うん、そうだね。」

「賛成や」

「うん・・・あっ・・・痛い！」

高町さんが小さく悲鳴を上げる。どうやら足を挫いたようだ。少し腫れている。立てないようなので、俺はしょうがなく高町さんを抱き上げた。

「よっと・・・」

「ふえ！？ちよっと、井上君!？」

「怪我してるならしょうがないよ。ほら、行こう」

高町さんは顔を赤くしていた。まあ、俺もちよっとだけ恥ずかしい。

「マリカ、周囲に疎外結界を。俺たちを囲むように半径3メートルだ」

「了解です、我が主」

そう言っつてマリカが結界を展開する。

「これなら回りから見えないよ。」

「あう・・・そう、なんだけど・・・」

高町さんはもう耳まで真っ赤にしている。そこまで恥ずかしいだろうか？とりあえず、俺たちは公園を後にした。

井上君の家に到着し、まずはマリカさんがヒーリングをしてくれた。

シヤマル先生並の回復魔法で、私たちの体の傷は消えた。その際「女性に傷をつけるとは最低です」という言葉に、私たちは思わず笑ってしまった。すると、井上君がお茶を出してくれてた。そして話が始まった。

「さて、まず何から話そうか？」

「そうだね・・・まず、私たちと井上君・・・お互いの素性から」

「そやね。井上君、お願いできるか？」

井上君は「ああ」と答え、口を開いた。

「俺は古代ベルカ式アームデバイス『メシア』、そして古代ベルカ融合騎・・・ユニゾンデバイス『マリカ』の二代目マスターだ。」

「二代目？」

「ああ、そのこともこれから話す。」

そうして、井上君はマリカさんの出会いと、騎士になった理由、そしてマリカさんのことについて教えてくれた。6年生の冬にマリカさんに会って、お話を聞いて、騎士になることを選び、マリカさんに協力しようとしたこと。それは、どこか私と似た魔法との出会いだった。

「・・・そんなところだ」

「じゃあ、そのゼオンさんを探すために騎士に？」

「正確に言えば、マリカも魔力がある人間と契約をしなければ魔法

を使えなくなるし、ミッドチルダに行った時にゼオンさんを探せなくなる。だから俺の魔力供給でなんとかしている。」

「成る程・・・でも、どうしてそこまで井上君はマリカさんに協力するんや？言ってみれば他人やる？」

その言葉に、井上君は少し悲しい目になった。

「似てるんだ・・・マリカと俺は」

「え？」

「俺は小さいときに両親を事故で亡くした。」

「俺は小さいときに両親を事故で亡くした。」

俺は静かに語り始める。その俺の過去を。今でも忘れない、リゾートホテルで起こった火災。その炎の海の中に横たわる両親の姿。そして、その目に焼きついた惨状を。

「俺の親は事故が起きた直後、俺と姉さんは両親に庇ってもらい、生き延びた。その時のことは、今でも思い出せる。」

「危ない！」

「お父さん！お母さん！」

「泣くな直人・・・男だろう・・・」

「だって、お父さん血が・・・血が・・・！」

父さんのわき腹からは血が出ていた。火災の時に爆発し、コンクリートの破片が刺さったのだろう。

『大丈夫よ？あなたたちは私達が必ず守りますから・・・』

母さんが笑ってくれた。そして、父さんと母さんはその炎から俺たちを守り、一酸化炭素中毒で息を引き取った。そして俺たちは、救助された。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一同が静まる。こんな暗い話をすれば、そうなるのも当然だ。すると、はやてが頭を下げた。

「ごめんな・・・辛い話させてもって・・・」

「別に気にしてない。だからこそ、俺はマリカさんに俺と同じ思いをして欲しくない。少しでも生きている可能性があるなら、ミッドチルダでゼオンさんを探してあげたい。そうおもったんだ。」

「・・・・・・・・主」

マリカも辛そうな顔をしている。俺は気分を変えるため、高町さんに話を続けてもらうことにした。

「じゃ、じゃあ、今度はそっちの番だ。君たちが何者なのか、教えて欲しい。」

その言葉に、3人が頷いた。

「私は時空管理局 武装隊 戦技教官」

「私は時空管理局 本局 執務官」

「うちは時空管理局 特別捜査官」

「時空・・・管理局」

俺は驚いた。時空管理局の人間がこんなに身近にもいるとは。すると、マリカが「あ！」と声を上げた。

「どうした？マリカ」

「聞いたことがあります。わずか9歳にして「PT事件」「闇の書事件」という歴史に名が残るほどの事件を解決に導いた、3人のエースの話です！」

「・・・あ、あはははは〜」「・・・」

と、3人は照れくさそうに笑っている。そんなに凄かったのか。この3人は。ん？そうになると・・・

「君たちが管理局員なら、マリカをミッドチルダに送ってやれるんじゃないか？」

「うん、そうなるんだけど・・・」

「実はちょっと問題があつてな〜・・・」

「その次元航空艇・・・今本局のほうで整備中なんだ・・・しかも色々許可がいるし、乗せてあげることができなくて・・・」

ハラオウンさんが頭を下げた。別に君のせいじゃないんだけどな。

「そっか、でもよかったよ。やっと糸口が掴めた。」

「糸口？」

「うん、俺は騎士になったのはよかったんだけど、まったく異世界へ行く方法も見つからなかった。でも今回、時空管理局にいる人に会えた。」

俺はようやくミッドチルダへの手がかりを手に入れた。そうすれば、マリカはゼオンさんに会えるかもしれない。だからこそ、俺は嬉しかった。

「さて、お互いのことはわかったけど、あの襲ってきたやつら・・・なんだったんだ？」

「うん、デバイスを融合させて来るなんて・・・」

「見たところ騎士みたいだったけど・・・」

と、みんなで考える。確かリンカーコアがどうとか言ってたな。

「リンカーコアが欲しいってことは、何か魔力を集めている？」

「革命団だって言ってたな・・・『シャドウ』・・・って」

「シャドウ!？」

マリカが声を上げた。俺もどこかで聞いた。シャドウという名前。

「マリカ? どうした」

「シャドウ・・・旅先の村を襲っていた盗賊団も、シャドウという名前でした・・・」

確かにそうだ。これは何かの偶然か? それとも何か関係しているのか。それはわからなかった。

「とにかく、シャドウについては連絡して調べてもらおうよ。」

「ああ、頼むよ」

フェイトさんの家は家族全員が管理局の人間であり、兄が提督だという。なんとまあ、凄いこと。エリート一家という奴だ。

「それでね、直人君のこれからけど・・・」

「え? 何か問題があるの?」

高町さんが少し真剣になってる。

「井上君、時空管理局に入らない? それでもなければ、管理局の嘱託魔導師」

「管理局に?」

「あの、すごく言いにくいことなんだけど、管理局に登録されていないデバイスを使うのは原則として禁止されてるの。だから、色々とマズイんだよね。」

「そうなのか？マリカ」

「はい、事実です。しかし、その心配はいりません」

マリカの言葉に、全員の頭に「？」のマークが浮かんだ気がする。

「八神様は主と同じく、ベルカ式をお使いになっていますね？」

「え、ええ・・・そうですけど・・・」

「ならばクラウン家はご存知でしょう？」

「確か、古代ベルカの戦で生き残った一族ですよ？確か一族の一人一人が一騎当千という。」

「はい、そして一族は管理局には属していませんが、支援者という形で管理局に参与しています。クラウン家の中で唯一、前マスターは管理局に入局していました。ですので、すでにメシアと私は登録されています。それに、辞職したときも、私たちの使用許可は特別な形でとられています。ですので、ご安心ください・・・それに」

「それに？」

「囑託魔導師になるのは今のマスターでは不可能です。」

マリカのきっぱりとした言い分に、3人は「え？」という顔になっ

た。まあ、当然なんだけど。マリカの言うことも、3人が驚く理由も。

「それはどういう意味なんや？」

「俺には囑託魔導師になるだけの技量ないんだ。」

「主の言うとおりです。主は魔導師ランクで言えば、ランクAAAはくだらない魔力をこの3年間で有し、鍛えてきました。しかし、実戦経験がないのです。さらに言えば、儀式魔法なども習得してませんし、筆記試験もパスできるほどの学力を持っていません。これでは囑託魔導師にはなれません。」

「つまり、魔力資質以外は駄目駄目ってことだ。」

と、俺は話すが、その言葉は3人に火を付けてしまった。

「そんなことないよ！」

「え？高町さん？」

「さっき私のこと助けてくれたし、それに戦闘だって凄かったよ！戦闘技能なら私が教える！」

「儀式魔法だって覚えれば何とでもなるで！あたしが教えたる！」

「筆記だって私が教える！」

あれ？何この流れ。もうなんか俺が囑託魔導師になるみたいなの……

「囑託魔導師ならきつとなれるよ！」

「いや、なんで俺がもう管理局に入るっていう話に……？」

「だって、管理局員になれば、次元転送装置の利用ができるし、三ツドチルダにも行けるよ？」

「え？」

「そうすればきつとゼオンさんを探せると思うの」

「うちらもゼオンさんを探すの手伝ったる！」

「みんな……でも、どうして？」

みんなの申し出はとても嬉しいが、どうしてそんな気になったのだろうか？

「その……井上君の話聞いて、私たちも手伝いたいって思ったの……」

「大切な人を失った悲しみは私も知ってるし」

「うちもマリカさんに希望を見せてあげたい」

全員の決意。そんな物が感じられた。俺はマリカを見た。少し涙目で、喜んでいるようにも見える。まあ、ここで断っては色々と駄目になる。それに、俺が力になれるなら、なってやりたい。

「わかった、3人にお願いするよ。嘱託魔導師になるために、力を貸してくれ」

「うん!」「」

こうして、俺の嘱託魔導師資格を得るための、特訓が始まった。

つづく

第四話「蒼天の騎士」（後書き）

おまけ

はやて「それにしても、聞きたいことがあるんやけど」

直人「え？何？」

はやて「メシアって、古代ベルカ式アームドライブって言ったよね？」

直人「そうだよ？」

はやて「じゃあなんでドイツ語で喋つたらんの？質問にも来てたで？」

直人「ああ、一応大人の事情と言いたいけど、理由があつてね。」

はやて「理由？」

直人「なりたてのころは、ドイツ語だとメシアが何言ってるかわからないし、英語を勉強していた俺としてはこんがらがってさ。だから英語に設定を無理やり変えたんだ。意味が直接わかるから、あんまり関係ないけど」

はやて「でも一話ではいきなり英語やで？」

直人「さあ？そこは作者さん？答えてください？」

秋風「俺にドイツ語が訳せるわけないじゃん。メシアの設定だってほぼ後からつけたよ？それにそのうちメシアの喋り表現は日本語にする予定だし。しかも一話だって、日本語入れてるでしょ？」

直人「本当にいい加減ですね」

秋風「大人には色々あるんだ。理解しろ」

直人「あなたまだ18でしょ！」

秋風「ここでそういうことはいいなあ！」

はやて「次回、第五話『大特訓！目指せ囑託魔導師！』 TAKE OFFや！」

第五話「大特訓！目指せ囃託魔導師！」（前書き）

もう気がつけば5話です。現在はもう2万件のアクセス数に達しています。うれしい限りです。物語としては、なるべくわかりやすく、かつ面白くするのを目標にしますので、よろしくお願いします。

第五話「大特訓！目指せ囑託魔導師！」

「特訓」・・・昔からやってきたが、これは地獄とも言えるかもしれない。俺は空中からの砲撃を避ける。その桃色の砲撃は容赦なく俺に連発される。

「くっそ！」

「ホラ、そんな防ぎ方じゃ潰されちゃうよ？」

もう潰されそうです。さっきからそんな砲撃ばかりじゃないですか。

『My Master Last 3 minute』

「あと3分逃げ切れるかな？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

そこで黙るな！とにかく避け、反射神経を鍛える。攻撃も早いものから威力の大きいもの、さらには広範囲の攻撃魔法が繰り出される。

「はあい、終わりだよ、お疲れ様」

「はあ・・・はあ・・・ありがとう・・・高町さん・・・」

「それじゃ、少し休んだら家でフェイトちゃんが勉強教えてくれるって。行くっ！」

そう言っただけなのだが歩き出し、俺も後に続く。あの襲撃から早くも4日。あれからこれを毎日繰り返している。ハラオウンさんは俺のために本局まで過去問を取りに行ってくれている。八神さんはマリカと共に、儀式魔法について考えてくれているらしい。

「あ、お疲れ様ですー！」

翠屋に着くと、そこには小さな妖精がいた。名前はリインフォース？。八神さんのユニゾンデバイスだ。

「リインがいるってことは、八神さんやハラオウンさんも？」

「はいです！奥にいますよ！」

奥に行くと、すでに八神さんたちが座っていた。

「あ、来た。」

「遅いじゃない」

「あれ？バニングスさんに月村さん？」

明らかに魔法について関係のない人間がそこにいた。

「アリサちゃんとすずかちゃん、どうしてここに？」

「翠屋に来たらたまたまはやてたちに会ったのよ。」

「それでフェイトちゃんが井上君の勉強のことをすっかり喋っちゃったの」

すると、ラインがバニングスさんの肩に乗る。

「ほんと、フェイトさんはお喋りです！」

「まったくよ。それで執務官なんだから驚きよ。」

二人合わせて「ねー」とか言ってる。ハラウンさんはそれに対してあうあうとバニングスさんに抗議している。俺はわけがわからなかった。

「え、あの・・・バニングスさんと月村さんは魔法のことを知ってるの？」

「あ、うん・・・昔ちよつと事件に巻き込まれたの。それで知ったんだ。」

「あ、そうなんだ」

なんともびっくりだ。すると、バニングスさんが俺を見た。

「フェイトに聞いたけど、あんたも魔導師なんですか？」

「いや、俺は正確には騎士・・・」

「どつちにしろ魔法が使えるんじゃない！羨ましいわ！」

話をまとめると、どうやらこの二人も魔法については知識を持っているらしいが、魔力を持ってないとか。高町家の人たちも魔法の存在は知っているし、ハラウンさんは一家で管理局員。八神さんの

家もそうだという。すると、マリカが飛んできた。

「主、もう来ていたのですね。」

「マリカ、お疲れ様」

「その子が井上君のユニゾンデバイス？」

「まあね。ほら、挨拶」

「私は主、井上直人のユニゾンデバイスマリカです。」

「あれ？マリカさん大きくなかったっけ？」

「あの姿は主に負担をかけるので、こちらのほうがいいんです。」

「わあ、リインと同じですー！」

「初めまして、夜天の書の管理人格様。」

そう言ってマリカが頭を下げる。

「そんな固くせんでええよ？この子はまだ子供やで？」

「いえ、高名な古代ベルカの夜天の書をお持ちになるあなたも、クラウン家に作られた私としてはとても・・・」

「いや、うちもリインも大層なもんやない。もっとお友達感覚で話さへん？」

「八神様がそう仰られるなら」

そう言つてマリカはそれ以降リインのことをリインと呼ぶようになった。まあ、年上だしな。リインもマリカを「マリカお姉ちゃん」と喜んでゐる。

「はは、姉妹みたいだな」

「ほんとやねえ」

二人で遊ぶ姿は、姉妹のようにも見える。すると、バニングスさんがそつえば、と口を開く。

「そつえばあんたも固いわよね？喋り方」

「そつえばそうだね。デバイスってマスターの影響を受けやすいのかな？」

バニングスさんと月村さんが言うが、答えはYESだ。デバイスにも人間と同じような意思を持つAIというものが組み込まれている。それによってマスター本人の性格の影響や、感情をコピーし、学習する。なので、もし俺ではなく雨月が契約していたら、もっとはっちゃけたキャラになつたかもしれない。

「そつじゃなくて、そろそろ長い付き合いだし、私たちのこと名前で呼んだら？ってことよ。ていうか、苗字で呼ばれるとくすぐつたいのよ。」

「そつえばそうだねー。私もすずかでいいから、直人君って呼ばせて？」

あの、バニングスさん？月村さん？いきなり何を言い出すんですよ
うか？

「あ、それうちも思った！うちらも下の名前で呼ぶし、これから管
理局に関わってくわけやし。どうやる？はやてって呼んでや？直人
君」

「えっと・・・それは・・・」
名前で呼ぶところなんてクラスの男子に聞かれたらどうなることや
ら。

「いいね、それ。私も名前でなのはって呼んで欲しいな、直人君？」

「私もフェイトでいいよ、直人」

「え・・・あ・・・でも・・・」

「何よ？文句あるの？直人」

バニングスさんが笑っている。目が笑ってないけど。他の4人も同
じだ。

「わ、わかりました・・・努力します」

「わかればよろしい・・・って、早速敬語じゃない！」

そう言ってアリサに殴られた。かなり痛い。そして、翠屋に笑いが
巻き起こっていた。

ここは暗闇・・・そして我が安らぎの地・・・そこに一組の男女が訪れた。我が僕、オーガとダンピール

「戻りました・・・ボス・・・」

「ご苦労・・・どうだ？収集率は？」

「はっ・・・3%です・・・」

「いつもより少ないな・・・」

「申し訳ありません。」

我が部下、オーガが頭を下げる。ダンピールも不服そうに頭を下げた。

「別に怒るつもりはない。何があった？」

「はっ・・・！思わぬ邪魔が・・・」

聞けば、魔導師を圧倒したが、騎士にやられ、撤退した。そして別世界で魔獣を狩って、リンカーコアの収集をしてきた。なんとも、律儀だ。

「その騎士・・・強いのか？」

「いえ、そのデバイスの能力の高さ故です。本人は実戦経験がない子供・・・」

「名は聞いたか？」

「はっ、井上直人・・・そしてデバイスは古代ベルカ式アームドデバイス『メシア』と古代ベルカ式ユニゾンデバイス『マリカ』です。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ボス・・・？」

「いや、ご苦労、下がれ・・・」

「はっ！我らがシャドウのボス“ゼオン”」

翠屋で勉強をすることになったのだが、その前にマリカから発表があるという。

「なんだ？発表って」

「はい、主の儀式試験の件です。」

「ああ、あれか。どうするんだ？」

「はい、どうせなら召喚魔法を行おうかと」

「召喚魔法？」

あれだろうか？どこのアニメの様に竜を召喚したりするあれだろうか？

「多分主の考えている通りです。召喚するのはエルフです。」

「エルフって・・・あの北欧神話に出てくるエルフか？」

「はい、それがクラウン家の中で一番親しみがあり、契約を結びやすいのです。」

「なるほど・・・具体的にどうするんだ？」

あれか？まさか血判とかじゃないよな？それとも腕一本とか？

「主、なんか物騒なことを考えてませんか？」

「いや、大丈夫。」

「エルフが望むものを渡せばいいのです。」

「望むもの？」

「はい、それを果たせば契約は終了。いつでも短い呪文で呼び出せます。しかし今回は初回。ちょっと長いので、頑張っつて覚えてください。」

そう言っつてマリカは俺にメモを渡した。・・・長い

「じゃあ、勉強の前にやっつてみましょうか？」

こうして俺たちは高町家の道場に行くこととなった。そこにいるのは俺とマリカ、そしてはやての3人である。そして深呼吸をして、

魔力を開放。魔法陣が出現する。

「まず、目の前に構築理論をイメージ、目の前にベルカの魔法陣を出す。そしたら心を落ち着かせ、詠唱で呼びかけるんや。ちよつと難しいかもしれへんけど、頑張りや。」

「では、始めてください。」

「わかった」

こうして、俺は詠唱を詠み始めた。

……我は望む、汝の力……その力は癒しの力

その力は全てを癒し、悪には苦しみを与える

何にも染まることのないその純粋な音色

その音は光に癒しを、闇に無を約束する

風のように流れ、なびく、その力

我が体を纏い守護する、聖なる力

我の前に姿を現せ神秘なる聖獣「エルフ」

我は汝との契約を求める！

詠唱が終わり、魔法陣が輝いた。そしてそこに現れたのは、一人の女性。耳は尖っていて、肌は透き通るように白い。紙は薄い金髪で、日の光で美しく輝く。そして綺麗なドレスを身に纏っていた。まる

でどこかのお姫様のような、そんな女性のエルフ。

「私はエルフ一族のカナリア・・・私を呼んだのはあなたですか？」

「ああ、そうだ・・・」

「・・・・・・・・私と契約を結ぶのですか？」

「そうだ」

「名前をお聞かせください」

「井上直人」

「良いでしょう・・・私が望むものを言います・・・こちらに来てください・・・」

言われるがまま、俺はそのエルフ、カナリアに近づく。すると、頬に何かが当たった。それは否、エルフの唇。

「なっ・・・・・・・・！」

「これが私の条件・・・私には特に望むものもありませんが・・・貴方の優しい心を持つ方なら私の身、預けましょう・・・それでは、ご用件をどうぞ」

「ああ、実は・・・」

俺は顔を赤くしながら、俺は囑託魔導師の試験について話、当日に召喚することを話した。

「わかりました。ではまた、その試験の日までごきげんよう、マイマスター直人」

そう言っつてエルフは消えていった。

「……………」

「すみません、エルフはああいうのが多いのです。先に言っておくべきでした」

「いや、まあ契約が済んだのはいいとして……あの、はやて？」

なんか固まってるんですけど。それも顔を真っ赤にして。

「おーい？はやて？」

「え……あ……うん……とりあえず大丈夫みたいやね」

「あの、はやてが大丈夫か？」

「うん、平気や……」

「はやてさんにはまだ刺激が強すぎたようですね？それともエルフに嫉妬してしまいましたか？」

マリカが少しからかうと、はやての顔がさらに赤くなる。

「そ、そんなんやない！ほら、戻るで！」

そう言うてはやてがそそくさと道場を後にした。店に戻ると、フェイト達が座る席には大量のプリントが置かれていた。

「……あの……フェイト？これ何？」

その山のように積み重なったプリントの束。

「何って、過去問だよ。去年から大体5年分くらいかな？」

マジかよ、高校受験の本だって5年分の奴でも辞典くらいの大きさだろ？

「私も過去問は3年分くらいでいいと思うんだけど……」

「でもやるからには満点を目指さない」と

「いやでも、フェイトちゃん？執務官の試験じゃないんだから、そこまでしなくても……」

なのはの言葉に、いきなりフェイトがうなだれてしまった。どうしたのだろうか？

「あの、どうしたの？フェイト」

「あ、ああ……フェイトちゃん、実は二回執務官の試験に落ちてしもつてるんよ。」

成る程、それを思い出してそうだったわけか……

「わかった、やってみるよ……やれるだけ」

「え？」

「でも、これだけの数だよ？」

「まあ、せっかく用意してくれたんだし、フェイトの気持ちを無駄にしたくないからな」

「え、あ……うん……ありがとう……」

フェイトの顔が赤くなる。俺、変なこと言ったかな？

「主は将来女泣かせですね……」

「……？何か言った？」

「いえ、何も」

こうして更に1週間が過ぎた。4月ももう終わる。この一週間で、なのはと徹底的に模擬線を繰り返し、そしてその後ははやてから詠唱の仕方、タイミング、制御の方法を教わる。カナリアを召喚しようとするが「召喚は当日だけで大丈夫だ」と、慌てて中止させられ、その近くでマリカがクスクスと笑う。そして試験前日となった。

「えっと……ここは……こうか？」

「あ、ちょっと違う。ここはこっちにしないと……」

「成る程」

色々とフェイトから筆記試験について教えてもらっている。場所はもちろん翠屋だ。前日ということ、何とか終わらせた過去問の回答などをしている。

「ふう・・・やっと終わった・・・」

「本当に全部やってくるとは思わなかったよ。お疲れ様」

「ああ、ちよつと疲れたな・・・」

この一週間、ほとんどの時間を3人は手伝いに当ててくれた。それは感謝しないといけない。本当に。

「はい、お疲れ様」

なのはがケーキと紅茶を出してくれた。ここに来るたび、ケーキと紅茶をタダで出してくれている。はじめは断ったが、自分の考えた試作のケーキなので問題ないと言われ、渋々口にする。よく考えればこれは毒味役にされているのではないかと考えたが、とてもおいしかった。

「いよいよ明日が試験だね。」

「ああ、これで落ちたら申し訳ないな・・・頑張らないと」

そう言って紅茶を口に運んだ。あ、おいしい。

「それにしても、直人君は飲み込みが早いなあ・・・うちもびっくりや」

「そうかな？」

「うん、この前までド素人だったのに、ずいぶん勉強したんだね」

フエイトさん、それは馬鹿にしてるの？褒めてるの？時計を見ると8時過ぎ。そろそろ帰らないと。

「じゃ、また明日。明日は翠屋の前に朝7時だっけ？」

「うん、遅れないでね？」

「わかった。それじゃ、また明日」

そう言って俺は店を出た。試験は明日。マリカに希望を見せるためにも、そして俺と同じ思いをさせないためにも、必ず試験に合格する。そう心に思いを秘めて、帰路に着いた。

第五話「大特訓！目指せ囁託魔導師！」（後書き）

さて、今回は新しく新キャラが登場しました。名前はカナリアです。登場は少ないかもしれませんが、どうぞ新キャラをよろしくお願ひします

プロフィール

名前 カナリア

種族 エルフ

性別 女性

属性 光

契約者 井上直人

力 癒しの音色 加護の音色

効力 癒しの音色はその名の通り、契約者の傷を癒したり、契約者が望む人物の傷を癒し、契約者が拒んだ相手には強力な魔法になる。

加護の音色は一定時間の間、物理的攻撃や、魔法を防ぐ。しかし、エルフにとって多大な負担となるので、ほとんど使用されることはない。

性格 温厚であり、クラウン家でも信頼の高いエルフ。その手に持

つハープはあらゆるものに安らぎを与えてくれる。契約者の肌に触れることで、その契約者の心や過去などを覗くことができるが、契約時以外は使わない。エルフが求めるのは「心正しき主」で、それ以外は求めず、力を貸す。

と、まあこんな感じですよ。これからも召喚する奴は増やそうと思うので、こんなのが出たらいいな、と思うものは何でもどうぞ。

秋風「さて、どう？カナリアは」

直人「……………まあ、いい奴だと思うよ？」

秋風「なんだ？その顔は？どうせ嬉しいんだろ？キスしてもらえて」

直人「黙れ！あんたが書いたんだらうが！」

秋風「サア？ワタシシリマセン」

直人「外人口調になるなあ！」

秋風「はっはっは！純粹だねえ君は」

直人「汚れきつたあんたよりマシだ！」

秋風「なにおう！」

なのは「次回第六話「囑託魔導師試験」 TAKE OFF また見てね」

秋風「ああ！いいところ持ってかれた！」

第六話「囑託魔導師試験」(前書き)

さて、最近毎日書いてますけど、結構楽しいです。しかも毎回長くなる。

まあ、それも小説の運命ですね(笑)

今回は久々に戦闘です。やっぱりどこまで書いてもへたくそなので、その辺はごめんなさい。

第六話「囑託魔導師試験」

ここは時空管理局本局。今日はそこに囑託魔導師としての試験を受けに来た。

「へえ〜・・・随分と面白いところだな・・・」

俺はあたりを見渡しながら歩く。すると、ポケットからマリカが顔を出した。

「主、あまりはしゃがないください、恥ずかしいです」

「ああ、悪い。それにしても、なのはたちはまだかな？」

「エントリーには時間が掛かると言っていましたから、しょうがないですよ」

そう、なのはたちは俺のエントリーの書類を届けてくれている。それまでしばらく時間があるので、ロビーで待っている。

「・・・それにしても、随分と殺風景だな、外」

「仕方ありません、ここは海で言えば深海のような場所ですからね。」

「そうか・・・」

そんな会話をしていると、一人の男がやってきた。

「君が井上直人君か？」

「え、はい・・・そうですが・・・」

「僕はクロノ・ハラオウンだ。君の試験官に抜擢された。よろしく頼む。」

「井上直人です。こっちが俺のユニゾンデバイスのマリカ。これが俺のアームドデバイスのメシアです。」

「マリカです。よろしくお願いします。」

『My Name is Messiah. Nice to meet you.』

「ふむ、聞いてた通り、主とデバイス。両方とも礼儀正しいな。」

「え？聞いていた？」

誰から聞いたのだろうか？いや、必然的にあの3人だろう。

「僕はフェイトの義兄なんだ。気がつかなかったかい？」

「あ、そういえばハラオウンって・・・」

そういえば言ってたな。じゃあこの人提督なのか。ちょっと緊張するな。

「いつもフェイトがお世話になってるよ。この前も助けてくれたらしいな」

「い、いえ・・・最近は何イトにはお世話になりっぱなしで・・・」
「なんというか、威厳があるというか、凄そうな人だ。」

「では、これから筆記の試験場に案内する。着いて来てくれ」

「わかりました。」

クロノさんの指示に従って、俺は後をついていく事にした。そして部屋に入ると、一人の女性が座っていた。確かこの金髪の女性は・

「あれ？あなたは確かシャルルさん？」

「ええ、お久しぶりです。私が試験官なので、お願いしますね」

「はい。お願いします。」

そう言っただ俺は頭を下げた。そういえばはやての家もみんな管理局員だっけ。

「では、ここで筆記試験を行います。どうぞ座ってください。デバイスのお二人は外でお待ちください。」

「わかりました。」

そう言っただマリカが退室した。俺は席に座り、シャーペンと消しゴムを取り出す。

「試験時間は50分、不正などはしないでくださいね？もつとも、はやてちゃんから聞いてる限り、そんなことはしそうにありませんが。」

「はは、わかりました。」

「では、始めてください」

俺はプリントを受け取り、問題を解き始める。あまり難しいわけではない。ほとんどフェイトとやったものが少し変えられているだけでも、フェイトと勉強しなかったらどうなっていたことやら。大体40分位で問題を仕上げ、見直しをする。なんだか学校でテストするのと変わらない気がした。

「はい、時間です。どうでしたか？」

「とりあえず、フェイトとの勉強が無駄にならない位には……」
シヤマルさんが苦笑する。そんなに変なことを言ったかな？部屋を出ると、マリカが不安そうに俺を見ていた。

「あの、主……どうでしたか？」

「ん？まあ、努力したよ。問題ない。」

「そうですか……」

そう言ってマリカがため息をつく。どんだけ心配性なんだお前は。すると、クロノさんが戻ってきた。

「さて、次は儀式試験だ。第二訓練場に案内する。」

「はい。」

返事をしてクロノさんと歩く。すると、クロノさんが口を開いた。

「井上君」

「はい、なんですか?」

「君はフェイトの事をどう思う?」

「え? うくん・・・学校のクラスメイト・・・というか、友達ですね。最近は」

「・・・ふむ。そうか・・・」

何故か安堵のため息をついている。

「いや、実は君の事を聞いたとき、どんな男がフェイトの近くにいるのか気になっていてね。」

「あの・・・それってフェイトのことが心配でたまらなかったと?」

「まあ、そうなる・・・」

シスコンなんだ、この人。まあ、悪いことじゃないけど。

「今、何か失礼なことを考えたか?」

「いえいえ、滅相もない。」

やばい、心の中読まれた。そんなことを言っているうちに、いつの間にか第二訓練場に到着していた。

「でわ、頑張ってくれたまえ」

「はい。」

部屋に入ると、スピーカーから声がした。

『これから儀式試験を始めます。氏名と出身世界をどうぞ』

軽快な女性の声が入ってくる。

「地球出身、井上直人です。」

『では最初に儀式実践のテストですが、召喚のよる儀式でよろしいですね？』

「はい、間違いありません。」

「それではさっそく始めてください。」

女性の言葉に「了解」とだけ答え、俺は魔法陣を展開した。

古よりある癒しの一族よ

我が名において契約を果たしし者の来訪を願わん

癒しのエルフ「カナリア」我が前に姿を現せ！

魔法陣が輝き、そこにはカナリアの姿が現れた。

「お呼びでしょうか？マイマスター」

「ああ、話したとおり、試験だから呼び出した。楽しんでくれ。」

「はい、マイマスター」

『お疲れ様です。これで試験は終了なので、戻っていいですよ。』

「呼び出して早々悪いが、戻っていいよ。済まなかったな、カナリア」

「いえ、我が命はあなたの為にあります。あなたの為ならどこへでも参上いたします。それでは・・・」

そういつてカナリアは姿を消した。

「ふう・・・」

『それじゃあ、ここで昼食にしてください。一時間後、戦闘実践のテストを行いますので。』

「わかりました。」

「お昼ですか」

マリカが嬉しそうにしている。そういえば朝はあんまり食べなかったからお腹すいたな。一旦訓練室を退室した。

「さて、食堂はどこだっけ？」

「直人君！」

「あ、なのは、それにフエイトにはやても・・・」

3人が駆け寄って来た。そういえばどこに行ってたんだ？

「試験お疲れ様。後は戦闘試験だけだね。」

「うん、まあね。食堂に行こうと思うんだけど、どこにあるの？」

「あ、それなんだけどね・・・」

そうやってなのは達がでかい重箱を出した。

「お弁当、みんなで作ったんだ。一緒に食べよう？」

「へえ、凄いな。じゃあそうしようか・・・」

こうして俺達はロビーでなのは達の弁当を食べることとなった。ロビーで弁当を広げると、そこには色とりどりのおかずやおにぎりが並んでいる。

「じゃあ、いただきます」

そう言っつて俺は箸で玉子焼きを食べる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ど、どうかな？」

フェイトが聞いたということは、これはフェイトが作ったのかな？

「うん、おいしいよ。」

「ほ、ほんと！？よかった・・・」

もしかして味見とかしてないのか？すると、どんどんおかずやら何やらが紙皿に乗せられる。

「さ、どんどん食べて午後に備えや、直人君」

「あ、ああ・・・そうするよ」

心なしか、随分と量が多い・・・

「なんとたつて次の相手は・・・」

「はやてちゃん、駄目だよ。対戦相手言ったら・・・」

「あ、そうやった。」

何？そんなに恐ろしい相手なわけか？すると、隣でパクパクとマリカが食事する。

「すごく美味しいです。千草の料理に匹敵するかもしれません」

と、ニコニコ顔で料理を食べている。

「千草さんって？」

「俺の姉さん。なのは会ったことあるだろ？」

「ああ、あの優しそうな人だよね。」

「姉さんはレストランのシェフをやってるかなら。料理は上手い」

「ちなみに何て言うレストラン？」

「アトランティカ」

「アトランティカ!?」

三人が同時に驚きの声を上げた。それもそのはず。「アトランティカ」は海鳴に存在する超高級レストランで、女性にも人気が高く、雑誌に何回も取り上げられている。たしか数回姉さんも取材を受けたことがあった。余談だけどね。

「アトランティカって、予約しても一ヶ月待ったりしないと入れないんだよね？」

「その上高級料理店だから料理も高いし、味もすごく美味しいって評判の」

「そんなレストランのシェフをやっている人が身近にいるなんて、世間も狭いんやな。」

と、3人はただ驚くばかりである。

「どうせならこの試験が終わってから主の家に来てはどうですか？」

「え？いいの？」

「主、どうせなら千草と一緒に料理を作っであげてはどうでしょう？今回のお礼もかねて」

「・・・まあ、そうだね。姉さんにも連絡しておこうか」

俺の言葉に、3人は喜びの声を上げる。

「わあ、楽しみだなあ・・・あ、そうだ。アリサちゃんやすずかちゃんも誘ってもいい？」

「ああ、いいよ。・・・というか、誘わないと後が怖いし」

3人が苦笑する。まあ当然だよな。それからしばらく食事をして、とうとう戦闘試験の時が来た。俺はバリアジャケットに身を包み、深呼吸をする。どんな相手かわからないので、少し緊張する。

『マスター、緊張せずに頑張りましたよ』

「ああ、そうしよう。」

メシアに励まされ、主がデバイスに励まされるのってどうなんだろう？などと考えてしまう。すると、向こう側の扉が開いた。そこにいたのはピンク色のポニーテールに騎士甲冑を見に包み、剣を持つ

た女性。俺はこの人を知っている。

「シグナムさん・・・でしたね、確か一度お会いしました。」

「ああ、今回の戦闘試験の担当だ。よろしく頼むぞ。まさかこんな形で剣を交えるとは思っていなかったが、楽しませてもらおう。」

「はい、お願いします。」

そうやって俺もメシアを手に取った。シグナムさんもデバイスを持つ。

「我が名はシグナム。そして古代ベルカ式アームデバイス『レヴアンティン』全力で相手をさせてもらおう。」

「井上直人。古代ベルカ式アームデバイス『メシア』いざ尋常に・・・」

「勝負！」

こうして俺とシグナムさんの勝負が始まった。互いのデバイスが交じり合い、攻撃が繰り返される。

「ぐっ・・・！」

俺は今やや押されている。その受ける剣の威圧感は達人の域に達している。この前の相手同様、強い！

「このぉー！」

俺は剣を弾き、そのまま斬りかかる。しかし、それは軽々と受け止められる。

「なかなかだが、その程度では私を倒せんぞ！レヴァンティン！」

《Explosion!》

そう言ってシグナムさんは距離を取り、カートリッジをロードした。

「紫電・・・一閃！」

炎を纏ったレヴァンティンが俺に襲い掛かる。

「メシア！」

『All right My master! Lode Cart
ridge!』

カートリッジがロードされ、メシアにも蒼い電撃が帯びる。

「蒼雷一閃！」

互いの技がぶつかり合い、爆発が起きる。俺は周囲が煙で見えないため、一旦距離を離れた。すると、煙から上空に何か飛び出す。答えは否、シグナムさんだ。

「フム・・・随分と良い技を持っているな」

「それはどうも」

そうやって俺はメシアを握りなおした。恐らくシグナムさんはまだ
余裕中の余裕だろう。だが、それでは試験を受ける俺としては、非
常に面白くない。

「・・・シグナムさん」

「なんだ？」

「本気でやりませんか？試験だからって、まだ力を抑えているでし
よ？」

「ほづ？」

シグナムさんがレヴァンティンを構え直した。

「いいんだな？後悔するなよ？」

「はい、もちろん・・・」

「では行くぞ！レヴァンティン！」

レヴァンティンが剣から鞭状に変わる。

「メシア！俺達も全開だ！あれをやるぞ！」

『All right! Remit break!』

俺のバリアジャケットが蒼から真紅に変わり、メシアの形が変わっ
た。

「それが本気か？」

「クリムゾンセイバー・・・全力でやらせてもらう」

そう言っただけ俺は空中にいるシグナムのところまで飛び、間合いを詰めた。

「火竜・・・一閃！」

俺に火竜一閃が襲い掛かる。俺はそれを受け止め、そして弾くが、押されてしまう。

「ぐっ・・・メシア！」

『Lode Cartridge!』

カートリッジがロードされ、魔力刃が伸びる。

「紅蓮蒼雷！」

俺がメシアを振ると、紅い稲妻と蒼い稲妻が混ざり、紫色の刃の波動が振り出される。

「ぐう・・・！やるな・・・！」

シグナムさんが紅蓮蒼雷を受け止める。結構本気だったのでシヨックだ。だが、そんなことを言っただけはいられない。俺は第二策を実行する。

「クリスタルダガー！」

『Crystal Dagger!』

マリカが使う魔法の一つでもあるが、元はメシアからの派生。なので、それを扱えるのは当然である。俺はその無数に生まれる魔力のダガーを投げる。

「ふっ……まさか飛び道具もあるとは……だが、その程度では話にならんぞ!」

「どうだかな……!」

「何!?!」

俺が手を振ると、飛んでいったダガーが戻ってくる。そしてシグナムさんがそれを再び斬り払う。

「まさか追跡機能を持っているとはな……」

「マリカとのユニゾン状態ならもう少しましにはなるんだが……まあ、文句を言ってもしょうがないな……」

そう言っただけは再びシグナムさんと剣を交える。カートリッジも、そろそろ無くなってきている。次で決めるべきだな。

「……そろそろカートリッジも少ない……次で決める。」

「奇遇だな……私もだ」

互いに地上に着地すると、俺は剣を握り直す。それはシグナムさん

も同じだ。沈黙が流れる。そして・・・

「レヴァンティン！」

「メシア！」

ほぼ同時にカートリッジがロードされ、互いに駆け出した。

「紫電一閃！」

「紅蓮一閃！」

互いの技が激突し、大爆発を起こした。

ずっと戦いを見てたけど、この前よりずっと成長してる。シグナムさんと渡り合えるなんて、びっくり。はやてちゃんもフェイトちゃんも、そしてクロノ君も啞然としている。そして二人の激突が本局を揺らした。周りの人たちはきつと何事だろうと騒ぐかもしれない。そして訓練場が煙に包まれてた。そして、そこにある二つの影。当然、さつきまで戦っていた二人。どっちが勝ったのかな？私達は急いで訓練場の中に入っていった。煙が晴れて、二人の姿があった。すると、直人君が肩ひざを着いてしまった。

「ぐっ・・・」

そして、シグナムさんが笑っていた。

「ふっ・・・無念・・・」

シグナムさん倒れちゃった。どこかの悪役のやられ方みたい・・・

って、そんなこと言ってる場合じゃなかった！そんなこと思ってる間に直人君も倒れてる！私達は急いで二人の元へ駆け寄った。

「ここは・・・」

俺が目を覚ましたのは医務室だった。確かシグナムさんと勝負して最後どうなったんだっけ？あんまり覚えてない。すると、シャマルさんが病室に入ってきた。

「目が覚めたのね。調子はどう？」

「はい、まだ頭が痛いですけど大丈夫です。」

「無理はしないでね？あなた、相当魔力を消費して戦ったのよ？」
シャマルさんの言うとおり、もう魔力は多分空だ。すると、3人が入ってきた。その後ろにはマリカもいる。

「あ、みんな・・・」

「直人君、大丈夫？」

「随分無茶したみたいだけど・・・」

「ああ、大丈夫だ」

「まったく、シグナムに勝ったのはええけど、滅茶苦茶やで。」

あ、勝ったんだ。それはちょっと嬉しいかも。すると、マリカが後

ろで怒っていた。

「まったく、主、あれほど無理はするなと……」

「無理はしてない。無茶しただけだ」

「意味がほとんど変わってません」

マリカに冷静な突っ込みを入れられ、あははと笑うしかなかった。
あ、そういえば……

「そういえば、シグナムさんは？」

「私ならここだ」

すると、隣のカーテンが空き、そこにはベッドに寝るシグナムの姿があった。

「大丈夫ですか？」

「ああ、問題はない。それにしても先ほどの戦い、心躍るものだった。礼を言っぞ」

「ど、どういたしまして……」

あれ？この人どうしてこんなに負けて嬉しそうなの？そんなことを思っていると、なのはから耳打ちで「この人バトルマニア戦闘狂なんだ」と教えられた。

「また手合わせしてくれるか？」

「ええ、いつでも」

そんな会話をしていると、クロノさんが入ってきた。

「クロノさん」

「やあ、試験お疲れ様。結果を発表しよう。」

その言葉に、全員に緊張が走る。

「地球出身 井上直人 受験番号0772 筆記、儀式、戦闘試験
共に満点！おめでとう、これで君は正式にAAAクラスの囑託魔導師として認定された。」

「ありがとうございます！」

嬉しさのあまり、声が高くなった。すると、なのはたちが俺の手を取り、ブンブンと振っている。

「やったね井上君！」

「これから一緒に頑張ろう！」

「一緒に働けるのはなんや嬉しいな！」

そう言ってみんな笑顔だった。こうして、俺は囑託魔導師として時空管理局に勤めることとなった。これから大いなる闇が、俺達を襲うとも知らずに……

••• ^UJ

第六話「囑託魔導師試験」(後書き)

さて、もうすぐ期末も終わるし、今以上に投稿できるように頑張ります

秋風「さて、どうだった？」

直人「何が？」

秋風「勿論シグナムさんとの戦闘だよ」

直人「もうあれだね、死ぬかと思った。」

秋風「まあ、シグナムと君だと経験は天と地の差だからね」

直人「随分はつきり言うね」

秋風「当たり前だろ、どんだけ俺が今日頑張ったと思ってるんだ」

直人「まあ、バトル描写苦手ですもんね」

秋風「まったくくだ。今更ながら普通の恋愛ものでも書けばいいと思
った」

直人「はは、それは無理だ」

秋風「何故だ？」

直人「だってセンスないもん」

秋風「なにおおおお！」

直人「事実でしょ」

秋風「うるせえええ！このへっぽこお！」

直人「誰がへっぽこだあ！」

なのは「デイバイイン・・・バスターアアア！」

秋風「ぎゃあああああああああ！」

なのは「まったく、ここは喧嘩するところじゃないんだよ？」

秋風「なんで俺だけ・・・」

なのは「だって今のは完璧に秋風さんが悪いです」

直人「そうだ、少しは自重しろ」

なのは「直人君？後でスペシャルメニューだからね？」

直人「・・・はい」

なのは・直人「次回第七話『初任務』 TAKE OFF！」

第七話「初任務」(前書き)

どうも、お久しぶりの更新です。最近忙しくて更新できませんでした。すみません。これからはもっとスケジュールを考えて書こうと思います。それではどうぞ

第七話「初任務」

試験に合格して早三日。俺は早くも任務を言い渡された。それは第162観測指定世界にあるロストロギアの回収。ただ、その任務を言い渡したのはクロノ提督である。そのため、なのは、フェイト、はやて、そしてはやての家族であるヴァルケンリッターが共に行く合同任務だ。午前11時……とりあえず学校は早退ということで、俺は教室を出る。そのときはなのはとフェイトも一緒である。

「じゃ、いつてらっしやいフェイト。授業のノート取っとくからね。」

「うん！ありがとうアリサ」

「なのはも！気をつけてね」

「はぁーい！」

そう言つて二人が教室を出た。そして俺はアリサにばれないように教室を出ようとしたが……

「直人、あんたもよ！」

「はいはい……」

見事に失敗。男子から睨まれて教室に出ることとなった。屋上ではやてと合流。俺たちはバリアジャケットを装着し、転送装置で管理世界へと飛んだ。

「……随分殺風景な世界だな」

「まあ、観測指定世界だからね。」

荒野が広がるこの世界。早速、北部定置観測観測基地に向かうことになった。3人とも空を飛んでしまう。

「あれ？どうしたの？早く行こうよ」

「・・・俺、空は飛べないんだが」

「あ、そういえば・・・」

「でも直人、登録は空戦騎士の設定だったよ？」

「そうなんだよな・・・マリカ？」

「そういえば剣術ばかりでそういう魔法はやっていませんでしたね・・・」

マリカが「あはは」と笑って誤魔化する。どーすんだよ、この状況。

「じゃあ、やってみよう。直人君。全身に魔力を張り巡らせて」

「あ、ああ・・・」

俺は言われたとおりに全身に魔力を流した。

「そこから少しだけ足に集中」

「・・・」

足に少しだけ魔力を移動。

「思いつきりジャンプ！」

「はっ！」

言われたとおりにジャンプすると、体が跳ね上がり、なのはたちよりも上で静止した。

「と、飛べた……って、高！」

「そこからゆっくり力を抜いて！上手くコントロール！」

「わ、わかった！」

俺は言われたとおりにコントロールし、ゆっくりと降りる。

「すごいね！一発で飛べるなんて！」

「あ、ああ……自分でもびっくりだよ」

まさか空を飛ぶなんて、考えたこともなかった。

「じゃあ、行こう！」

そう言っただけ俺たちは北部定置観測観測基地に向かうこととなった。

「直人君の今後の課題は空を飛ぶためのコントロールだね。みつちり教えてあげるよ」

「は、はは・・・よろしく、教官」

またなのはの指導を受けるのか・・・これはまたボロボロになるな。すると、デバイスに通信が入った。

『聞こえるみんな？』

「エイミイだ。聞こえるよ！」

「あれ？この声・・・」

確か召喚試験のときに聞いたような。

『あつと、直人君は初めてだね。執務官補佐兼アースラの通信担当のエイミイ・リミエッタです。以後よろしく』

「了解です、リミエッタ執務官補佐」

『固いなあ、エイミイでいいよ？』

「わかりました。エイミイさん」

『ふふ、じゃあ改めて任務の説明ね！その世界にある遺跡発掘先を二つ回って発見された古代遺物ロストロキアを確保。最寄の基地で詳しい場所を聞いて、モノを受け取って、アースラに戻って本局まで護送！』

「平和な任務ですねえ」

「でも物が古代遺物ロストロキアだろ？危ないと思うけど・・・」

『直人君の言うとおりだね。油断は禁物だけど、なのはちゃん、フ
イトちゃん、はやてちゃん、そして直人君が揃ってて、もう一ヶ
所にはシグナムさんとザフィーラがいるから、多少の天変地異はな
んとかしちゃうよね?』

天変地異も防げるのか、この3人・・・

『よろしく頼む』

「「「了解」「」」

そこで通信が切れる。すると、なのはがこんなことを言い出した。

「そういえば直人君、この前の試験で飛んでなかった?」

「え?あ、ああ・・・あの時か」

そう、シグナムさんに接近して斬りかかった時のことである。

「リミットブレイクだと色々直感的になるから、滅茶苦茶なんだよ
な」

「前にも使ったけど、リミットブレイクって具体的にどうなの?」

「ああ、デバイスと俺の体のリミッターを同時に解くんだよ。それ
で一時的に爆発的な力を得られる。」

「体のリミッター?」

「そこは私が説明しましょう」

そう言っつてマリカが俺の肩に乗る。

「人間は普段身体の30%の潜在能力しか使っていません。デバイスの補助を元にそれを無理矢理引き出すのがリミットブレイクです。言わば、人間の体に掛かっている枷を外すわけです。」

「なるほど・・・それって結構すごいんじゃない?」

「はい、しかしながらデバイスを補助にしても、限界というものがあります。普段眠っている力を一気に解放させたら体が持ちません。なので、あまり使わないようにさせているんです。今のマスターでは良くても20分が限界ですからね」

「そんな危ない技なんだ・・・」

なのはが俺を見る。まあ、訓練前に「無茶なことほしない」ということを聞かされているので、ちよつと怒っている。

「直人君?そのリミットブレイク、滅多なこと意外使っちゃだめだよ?」

「了解・・・」

やばい、なのはの視線が怖い・・・!

「でも、それが空を飛んだのと何の関係があるんや?」

「はい。マスターの体に流れる魔力を底上げするので、脳が刺激さ

れ、直感能力が上がるんです。わかりやすく言えば、本能的に動くことになるわけです。」

「成る程、だからあの時だけ飛んだんやな？」

「そういうことだ。」

「あ、あれじゃないかな？基地」

フェイトが指差すその先に、立派な建物が建っている。

「この世界を観測するだけにあるなんて、ここで勤めている人は色々不便だな」

「あはは、まあ、こういうのが好きで勤めてる人もいるみたいだけどね」

そうやって俺たちは降下して行った。着地すると、よろめいてしま

う。

「おっとっと・・・」

「大丈夫？」

「ああ、まだ慣れてないから、ちょっとキツイかな」

『J a c k e t O f f 』

ジャケットを解除し、基地の中に向かう。

「さて、基地のほうは・・・と」

中に入ると、二人の局員に迎えられた。

「遠路お疲れ様です！本局管理補佐官グリフェイス・ロウランです
！」

「シャリオ・フィニーノ通信士です！」

「ありがとうございます」

なのはが軽く敬礼した。

「ご休憩の準備がしてありますので、こちらへどうぞ」

「あ、平気だよ。すぐに出るから」

「私らこれくらいの飛行じゃ疲れたりせーへんよ。グリフェイス君は知ってるやろ？」

「疲れたりしない……か。少し疲れている俺はまだまだ未熟なのかもな……」

「はい……存じ上げてはいるのですが……」

と、少し焦っている。なんでだろう？

「あ、二人はあったことなかったな。こちらグリフェイス君。レティ提督の息子さんや」

「はじめましてー！」

「「あー！」」

と、二人が納得してる。提督が知り合いって、お前らどんだけだ。

「フィニーノ通信士とは初めてだよな？」

「はい！でも皆さんのことはすごく知ってます！本局次元航空部隊のエリート魔導師 フェイト・T・ハラウン執務官！ いくつもの事件を解決に導いた本局地上部隊の切り札 八神はやて特別捜査官！ 武装隊のトップ 航空戦技教導隊所属！不屈のエース 高町なのは二等空尉！陸海空の若手トップエースの皆さんとお会いできるなんて光栄です〜！」

と、フィニーノ通信士が首をぶんぶんと振る。この人あれか？時空管理局マニアみたいなものか？

「あ、あはは・・・」

なのはが困ったように笑ってる。まあ、あれだけ語られたらそんなるわな。

「リインフォースさんのことも聞いてますよ！とっても優秀なデバイスだって！」

「ありがとうございますです！」

それにしても、この3人は有名人なのか。驚きだな。すると、フィニーノ通信士が俺のことと不思議そうに見ている。

「えーと？どちらさまでしょう？」

「こらシャーリー！失礼だろう！」

「あ、すみません！私ったらつい！」

まあ、しょうがないか。俺を知ってるのって、この三人とクロノさんたちくらいだもんな。

「申し遅れました。先日囑託魔導師に任命された井上直人です。以後よろしく」

「えっ……！井上直人って、あの！？」

「あの？」

「シャーリー！」

「あ、す、すいません！囑託魔導師試験を満点でクリアし、実戦試験でシグナム三尉を倒したという騎士の方の話で話題が持ちきりです！まさかお会いできるとは……」

そんなにすごいのか、シグナムさん。

「なんや、もう直人君も有名人やな」

「そんなに騒ぐことなのか？」

「まあ、シグナムも歴戦の猛者で名前が通ってるから」

そうなのか、というか、そんな人と戦ってよく生き残れたな……俺。

「そういえばシャーリーって呼んでたよね、仲良し？」

「す、すみません！子供のころから家が近所だったもので……」

そこは謝るところか？ロウラン補佐官。

「幼馴染だ！」

「いいね、私たちも幼馴染だよ。」

「幼馴染の友達は貴重なんだから……大事にしてね！」

「「はい！」」

一方、荒野そこにいるのは二人の男と、一匹の豹のような獣。

「この辺り……？」

「ああ、ボスからそう言われている。どうする？」

「ボスより、まだ表立った行動はすると言われてる。管理局の連中が一ヶ所に集まり次第、叩くぞ……」

「ああ……」

男と獣はその場を後にした。

さて、俺たちは基地から飛び立ち、遺跡がある場所へ向かうことになった。

「ようやく慣れた・・・この浮遊感」

「ホント？でも気をつけてね？コントロールしないと、魔力を駄々漏れにしちゃうから」

「わかった。気をつける。」

つまり戦闘での魔力配分を考えなきゃいけないってことか。すると、
フィニーノ通信士から通信が入った。

『皆さんの速度ならポイントまでは15分ほどです。古代遺物の受
け取りと艦船の移動までナビゲートします。』
ロストロギア

「はい・・・よろしくね、シャーリー」

「グリフィス君もね！」

『はい！』

「しかし私たちも16年目かー」

「中学も今年で卒業だしね」

「卒業後は今より忙しくなるかな」

「みんな大変なんだな。」

「そうだね。私は長期の執務官任務も受けることになるし」

「私も教導隊の一員としてあちこちを回ることになるね」

「私は卒業の少し前にミッドの地上にお引越しや」

へえ、ミッドチルダにねえ・・・というか、みんな就職ってことか？

「ミッド首都の南側で家族6人で暮らせる家、エーカンジのところを探し中や。決まったら遊びに来てな」

「うん！」

「行く行く！」

「そういえば、直人君はどうなん？」

「え？」

「中学卒業したら、どないするん？」

そういえば考えたことなかったな。中学卒業してから・・・なんて魔法に出会う前は、もっと世間なんてどうでも良くて、ただただ生きていただけだった。

「うーん・・・進路のことなんて全然決めてないな・・・」

「じゃあ時空管理局に入ったら？」

「はは、まあ考えておくよ。まずはマリカの願いを叶えること。それからだ」

そう、今の目標はそれだ。俺と同じ思い、絶対にさせたくない。

「あ、見えてきたよ……でもあれって……」

確かに遺跡は見えてきたのだが、煙が上がっている。そして、その先には人が機械に襲われていた。

「現場確認、機械兵器らしき未確認体が多数出てきてます！」

「ん！」

「フェイトちゃん！救助には私が回る！」

「なら俺は斬り込みに行かせてもらう！」

「私は遊撃する！はやてとリインは上から指揮をお願い！」

「了解！」

それぞれがやるべきことを考え、散開する。

「マリカ！行くぞ！」

「はい、主！ユニゾンインッ！」

俺の髪が青く染まり、メシアの白銀の刀身も稲妻を帯びた。

（「ライトニングスラッシュ！」）

俺とマリカの声が重なり、敵を迎撃する。しかし・・・

「何！？」

刃が通らない。帯びていた魔力の稲妻も消えてしまった。

「ちい！」

「あれは、フィールドエフェクト！？」

「直人君！下がって！」

なのはの言葉に従い、勢いよくジャンプする。すると、なのはのデ
イバインシューターが当たるが、無効化されてしまった。

「無効化フィールド！」

「どういうことだ！？」

「AMF・・・AAAランクの魔法防御が機械兵器に！？」

「直人君、離れて！そこにいたら魔法は使えない！」

「ちい！下がるしかないのか！」

確かに、先ほどより飛ぶ出力が落ちている。

「直人（君）避けて！」

「え！？うおおおおお！」

見ると、なのはのスターダストフォールと、フェイトのサンダーフォールがガシエット達に当たった。俺も危つく当たるところだった。

「危ないだろ！」

「避けてっていったよー？」

もっとテンションあげて言えっつーの！

（主、お二人は魔法によって作り出された効果を相手に当てたのです。ならば我々にもできます！）

「ああ、あれをやるか！メシア！」

『Lode Cartridge！』

「虚空雷閃！」

メシアを思いつきり振るった。すると、その衝撃刃が稲妻を帯びて機械兵器に向かっていき、切り裂いた。すると、ははやてが機械兵器を捕獲して、下りてきた。

「すごいです！」

「ほんまや、よく考えたな、そんなん」

「まあな。今のは筋肉をすごい使うから嫌いなんだが、手が見つからなくてな」

さて、古代遺物は無事かな？あ、フエイトが確認している。どうやら無事らしい。発掘員を基地に転送し、俺達はゲートに向かうことになった。別の場所に回収に向かったシグナムさんたちもガシエツトに遭遇したが、一蹴した。俺、こんな人に勝てたのか。そして合流し、ゲートを開いてもらった。

「ふう、これでお終いか・・・任務も楽じゃないな・・・」

「お疲れ様。この後お食事会だから、気にしない気にしない」

「そうだ・・・っ!」

突然殺気を感じた。殺気を感じた方向を見ると、そこには二人の男と、一匹の豹のような獣がいた。

「管理局の人間・・・ってわけじゃなさそうだな・・・」

コートの男が笑う。なのはたちも全員デバイスを構えている。やはり味方ではないようだ。

「無能な管理局と一緒にしてもらっては困る」

「シャドウ・・・か？」

「ほう、よく知っているな・・・いや、その蒼き甲冑。成る程、貴様が井上直人か？」

「そつだ・・・」

「わが名はヴァン！あのダンピールを退けた実力、俺に見せてみる！」

「・・・！」

男が斧を持って迫る。速い！一気に距離を詰められた！

「マリカ！」

（はい！主！）

魔力が一層高まり、メシアで対抗した。その斧の一撃が重い。

「ぐう・・・！」

「ははは！ふつとべえ！」

「うわあああああ！」

そのまま俺は吹き飛ばされた。

直人君が襲われた。この前のシャドウという革命団・・・狙いはまたリンカーコア？

「あんなら・・・可愛い子たちばかりじゃなあい？」

「なんだテメエ！」

「あらあら、女の子がそんな言葉使ったらだめよお？オカマの私が
いえないけどお」

男の人は体をくねらせながら太刀を構える。正直気持ち悪い。

「さあて、私は無意味な争いは嫌いなもの、あそこの馬鹿と違ってね。
そのエネルギー体を渡してくれれば見逃してあげるわ。どうする
？」

「そんなこと、応じる分けなかるう。それに、その太刀、何人も人
を斬っているな・・・」

「あんら、そこのお姉さん、よくわかったわね」

その言葉と共に、私たちに殺気が放たれた。う、動けない・・・

「あらら、この程度なの？期待外れねえ・・・」

「これしきで・・・！」

そう言つてシグナムさんが剣を構えた。ザフィーラも動く。

「さすがは古代ベルカの歴戦の猛者・・・と言ったところかしら？
闇の書プログラムのヴァルケンリッター？」

「違う！我々は夜天の書の守護騎士だ！」

「一緒じゃない？でもね、今日の目的はあなた達じゃないの・・・」

その古代遺物ロストロギアが欲しいのよ……それさえあれば、あなた達のリ
ンカーコアも不要だから。」

「目的は何だ……」

「うーん……教えても良いのだけど、ボスに止められてるのよね
え」

「アビス……作戦の時間の無駄だ……さつさと回収するぞ。そ
この雑魚など、放っておけ」

「あらあら、アウスちゃんも言うようになったわねえ……まあい
いわ、さつさともらって帰りましょう」

そうアビスという男が言った瞬間、風が吹いた。そして、いつの間
にかアビスが後ろにいて、ロストロギアのケースを持っている。

「ば、馬鹿な……」

「は、速い!？」

「私が速いんじゃないわぁ……あなた達が遅いのよ……」

「作戦時間が迫っている。行くぞ……」

そういつた瞬間、一人と一匹は消えてしまった。

「そろそろそろそろあー!」

俺は吹き飛ばされ、荒野の下で戦闘を繰り広げていた。

「メシア！3nd!」

『3nd mode!』

メシアが西洋剣からレイピアの姿に変わる。これが第3のフォームだ。突発的な「突き」に特化したレイピアで、振り下ろされた斧を交わしながら反撃する。

「やるじゃねえか・・・だが、そんな細い剣じゃあこいつは貫けねえぜ!」

「どづかな？メシア!」

『Speed bust!』

メシアの声とともに、突きの速度と威力が倍増する。

「ぐお・・・速くなったと!?!」

「メシア!」

『Lode Cartridge!』

「雷速連牙!」

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!--!--!--!」

その連続で放った突きによって。そのまま男が吹き飛ばされる。

「はぁ・・・はぁ・・・」

『やりましたね、主』

「ああ、なんとかな・・・」

「ふう〜危ない危ない・・・」

煙の中から声がした。馬鹿な・・・あれを喰らって平気なんて・・・。出てきた男は多少傷は作っているものの、致命傷は負っていない。

「さて、中々だったが・・・本気でやらせてもらおう。俺はシャドウの幹部「ヴァン」この名前、冥土の土産に覚えておけ・・・デバイス複合！行くぞ、チェーン、ハルバー！」

『ジャ・』

すると、その斧は鎖と複合し、鎖鎌ならぬ、鎖斧へと変化した。

「ハルバートチェーン・・・その名の通りだが、だからと言って舐めてもらっては困るぞ！」

ヴァンが俺に突っ込んでくる。鎖を投げってきて、俺はそれを避ける。しかし、第二波があった。今度はハルバートが飛んでくる。

「ちい・・・！」

「甘い・・・」

「何……があ！」

『主！』

後ろからチェーンにナイフがついたものが突き刺さった。

「が……あ……まさか、追尾……型……」

「だから言っただろう。舐めてもらっては困る……とな」

「負ける……か……」

俺は立ち上がる。今の刺され、ナイフを抜かれた痛みで激痛が走るが、俺は立ち上がる。目の前の敵を倒すために。

「立つ……か……何故だ？もう圧倒的だ。あきらめる」

「ふざ……けんな……ここで諦めたら……俺は……こいつの夢、叶えられなくなっちまう……」

「ふん、たかがデバイスのために命を捨てるか？」

「……たかがデバイスじゃない……マリカは……家族だ」

『あ、主……！主、もうやめてください！これ以上は体が……』

「面白いやつだ……そして気が変わった。その命、預けよう」

「な……に……？」

男はデバイスを引っ込めた。もう足はフラフラで、俺は倒れてしまった。

「井上直人……お前は俺と戦うにふさわしい男だ……その執念で私の所まで這い上がって来い……」

そう言うと、男の足元が光る。どうやら魔法陣が展開されているらしい。

「ま……て……」

「強くなるがいい……そして、このヴァンを倒せるほど、強くなってみろ」

そうやって男は消え、俺の意識も、闇の底へ沈んで行った。時空管理局に就いてから3日目の初任務。初任務は失敗に終わった。

祝 5万ヒット (前書き)

ありがとうございます。おかげさまで5万ヒットを超えました。これからも頑張って小説を書き、10万ヒットを目指します

祝 5万ヒット

5万ヒット記念!

秋風「5万ヒット!」

一同「おめでとー!」

直人「まさかもう5万ヒットとは・・・」

秋風「こんな小説を読んでもくれる人たちには一人一人土下座してお礼言わなきゃな」

はやて「5万人で・・・キリがないで」

なのは「秋風くん嬉しくて暴走してるね」

直人「いつもどおりアホ丸出しだな」

秋風「そんなこと言ってるのいいのかな?直人君」

直人「何?」

秋風「次回から君の出番が消えるよ?」

直人「またそれが。本当に成長しないな。」

なのは「まあ、秋風君だし」

フェイト「そうだね」

秋風「そこ！納得するな！」

アリサ「それにしても最近あたしたち出番少ないわね」

すずか「ホント、どうして？」

秋風「えつと・・・なんというか・・・」

直人「出し忘れてたそうです」

アリサ「なんですってえ！」

秋風「ぎゃあああああ！首絞めないで！苦しい！」

アリサ「だったら私たちもっと出しなさいよ！」

秋風「だ、大丈夫だって！ちゃんと出すから！」

はやて「そういえばザフィーラ出てきたな。ほんのちょっとだけ」

フェイト「クロノとエイミイも出てきたね」

秋風「ああ、でもリンディさんは船を下りてるから、当分出番はないかも」

フェイト「そうなんだ」

直人「姉さんも最近出てこないな」

秋風「まあ、その代わりに新キャラ沢山出したからね」

直人「ああ、あのオカマとでかいやつと豹？」

秋風「アビスとヴァンとアウスだよ。七話参照で」

直人「無駄にキャラばっか増やしやがって」

秋風「だってダンピールとオーガだけじゃ寂しいだろ」

はやて「ちなみに後何人くらいいるん？」

秋風「いや、もういない。あとは雑魚兵。あとはシャドウが封印をといた時にでもロストロギアがオリジナルなことぐらいかな」

なのは「これ以上出されたら原作のキャラたちが薄れちゃうもんね」

秋風「なのははないでしょ？直人に抱きついたんだから」

なのは「ふえ！？あの、えっと、それは……」

直人「どうした？なのは、顔赤いけど……」

なのは「なんでもない！なんでもないの！」

秋風「鈍感だな、直人」

直人「は？何が？」

祝 5万ヒット (後書き)

これからも頑張りますので、感想、質問などをよろしくお願いします

第八話「悪夢」(前書き)

五万ヒットを祝った後、すでに六万ヒットに到達していました。これだけ見てくれている人がいるととても嬉しいです。このまま頑張ります

第八話「悪夢」

ここはリゾートホテル。様々な人がその施設にあるもので楽しんでいる。僕はそのホテルを走る。

「わーい！」

「直人、走ったらこけますよ？」

母さんが注意した時、僕はそのままこけてしまった。

「あう！」

「ほら、言つとおりになつたでしょ？」

「ぐすつ……」

母さんは僕の涙を手で拭った。

「泣いては駄目よ？ほら、お父さんとお姉ちゃんのところに向かいましょ？」

「うん……」

そう言つて僕はお母さんと手を繋ぎ、ロビーへと向かう。滅多に仕事で家にいない母さんと父さんが、今日は一緒にいてくれる。こんな嬉しいことはない。この後はみんな海に行くんだ。嬉しいな……違う。駄目だ……このまま行つては行けない

「ほら、どうしたの?」

「行ったら・・・駄目だよ」

「どうして?お父さんとお姉ちゃんが待ってるのよ?」

「違うの!行ったら、行ったら!」

「どうしたの?直人?もうロビーはそこなのよ?」

「お母さん!」

「千草」

「直人?どうしたの?」

早く逃げなきゃ・・・

「逃げなきゃ・・・早く・・・」から・・・

「何言ってるの?」

ドオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

「きゃあああああああああああ!」

「火事だあああああああ!」

そう言って私は直人君を強く抱きしめた。

「大丈夫・・・直人君は悪くないの・・・大丈夫・・・私がついてるから・・・」

「・・・なの・・・は？」

俺はようやく正気を取り戻した。

「うん。なのはだよ。」

「俺・・・」

暖かい。俺は今、なのはに抱きしめられている。恥ずかしいことなのだが、まるで母さんが抱きしめてくれているみたいだった。

「ごめん、もう大丈夫だ・・・ありがとう、なのは」

「うん・・・よかった、いつもの直人君だ。」

なのはは顔を赤らめながら、俺に笑いかけてくれる。

「うなされてたね、悪い夢を見たの？」

「ああ・・・あの火事の・・・悪夢だ」

もう随分昔のことだと、自分自身で割り切っていたはずだった。な

のに、今になって思い出してしまった。すると、またなのはが俺に抱きついた。

「な、なのは？」

「大丈夫。直人君は何にも悪くないんだよ？私がいるから、安心して？」

「ありがとう……」

俺はそれしか言えなかった。すると、ドアが開く。

「主！」

フルサイズになったマリカが俺に飛びついた。

「マリカ……痛い……痛いからどけ……」

「主……！主……！主！」

大量に涙を流し、マリカは俺を呼び続ける。

「大丈夫だ。俺はここにいるぞ」

そう言って俺はマリカの頭を撫でた。

「グスッ！主……もう無茶はしないでください……」

「わかったよ。まったく、お前は泣き虫だな。」

そんな話をしていると、後ろにフェイトとはやてが立っていた。

「あ、二人とも・・・」

「大丈夫？直人」

「まったく、びっくりしたで？」

「ははは、もうこの通りだ。」

俺は笑っていたが、その笑いを止めた。なんか、後ろに黒いオーラが出てる。

「マリカさんはともかく、今なのはと抱き合ってたの・・・あれは私たちの見間違いかな？」

「返答によってはお仕置きが必要やで？」

「い、いや、その・・・今は・・・あ！なのは！逃げるな！」

いつの間にかなのはが戦線離脱している。そして念話で（後はお願
い！）と言って逃げていつてしまった。

「じゃあ直人、少しお話しようか・・・」

「さて、覚悟はええな？」

「ちよつと待ってくれ！俺は何も・・・」

「「問答無用！」」

界で管理局員や魔力生命体が襲われている。」

「つまり、今まで目立った動きはしてへんかったゆうちょうことやな。」

「そのとおり。だが、ロストロギアを狙うほど、その何かがある。」

「魔力を集めるのが必要なもの？」

「何かロストロギアを目覚めさせるものなのか、それとも何かの封印を解くために必要なのか」

クロノさんが考え込む。すると、はやての顔が若干暗かった気がした。どうしたのだろうか？すると、マリカが手を上げた。

「あの、クロノ提督。」

「なんだ？」

「盗賊団シャドウと、何か繋がりがあったでしょうか？」

「ああ、その件だが・・・」

そう言ってクロノさんは別のモニターを表示する。

「盗賊団シャドウ・・・ずいぶん昔から活動してきた盗賊団・・・村を襲ったりする盗賊で、危険視はBランク・・・だった。」

「だった？」

「ここ数年で壊滅の噂を聞いた。そこで調査し、アジトに踏み込ん

だ武装隊によると、そこにはシャドウの党首の遺体が発見されたりしい。原因は仲間うちの揉め事だと考えたが、どうも奇妙な点が多くてな。」

「奇妙な点・・・というと？」

「まず死んでいたのは首領らしき男のみ。そして今まで集めたらしき金は手付かずで残っていた。」

「それはおかしいね。仲間の揉め事なら、お金は持っていくはずなのに。」

フェイトの言葉に、クロノさんは頷き、言葉が続ける。

「実はこのシャドウが壊滅した時期と、革命団シャドウの出没の時期がほぼ一致している。」

その言葉に、俺たち全員が驚く。まさか、盗賊団から革命団に変わったというのか？

「クロノ提督・・・その最初に革命団シャドウの出没したのは正確には何年前ですか？」

「ああ、3年前だ」

「！！！！」

俺とマリカは驚きを隠せなかった。まさかゼオンさんが失踪した年数と一致するとは、夢にも思わなかった。マリカは顔が青ざめ、それ以後喋らなくなった。

「さて、君たちの休暇の後、本格的にシャドウを追うことになった。各自、気を引き締めて捜査に当たってくれ。以上！」

「」「」「はい！」「」「」

こうして会議は終わった。

会議が終わってから、俺たちは家に戻った。数日は安静にするということで、家で休養となった。そして次の日。マリカは相変わらず元気がないまま、窓を見ている。時刻はすでに夕方。学校を休んだ俺としては、退屈な一日だった。

「マリカ」

「はい、なんですか？主」

「お前が考えていることはだいたいわかる。ゼオンさんのことか？」

「………はい」

まあ、あの話の後でこいつがこんな状態になるのだとしたら、これくらいしか原因は見つからない。

「ゼオンさんのことと、シャドウのこと……俺は、関係していると思っている。」

「主……！主はゼオンがシャドウの頭首を殺し、革命団を作ったとでも！？？」

「そこまでは言っていない。だが、その可能性もある。」

「ありえませんか！ゼオンはそんなことをする人間では……」

「わかってる。俺はお前の話を3年も聞いてきたんだ。」

俺はため息をついてペットボトルの水を飲み干す。

「これは俺の推測だが、もしゼオンさんがシャドウに捕まり逃れるために何かをしたとしたら？」

「……………」

「そして革命団シャドウは間違いなく盗賊団シャドウが関係している。資料だと、金の他に魔導書やロストロギアもいくつかあったらしい。盗賊団を革命団へと変えた何か……か」

俺はその多くの謎に頭を抱えるしかなかった。そして問題といえば……

「メシア……」

『はい、なんでしょう？』

「すまなかつたな……」

『いえ、これは私の油断でもありました。気にすることはありません。』

実は攻撃を受けたとき、メシアも破損していた。それほど致命的なものでもなかったのだが、預かっているデバイスを傷つけてしまった。そして、俺は負けたのだ。

「革命団シャドウ・・・か」

ピンポーン

「姉さんいないんだっけ・・・しょうがないな」

そう言っただけは玄関に向かうと、ドアを開ける。そこにはなのは、フェイト、はやての姿があった。3人とも制服で、どうやら学校帰りらしい。

「みんな・・・」

「直人君、大丈夫？」

「ああ、どうせなら上がってってくれよ」

「あ、うん。おじゃまします」

そう言っただけで3人をリビングに通した。

「今お茶入れるから。ちょっと待ってて」

「あ、ありがとう」

そう言って紅茶を入れる。千草姉さんみたいに上手にはできないが
まあ、こんなものだろう。

「はい。」

「いただきます」

「あ、おいしいなあ、直人君、紅茶入れるのうまいんとちゃう？」

「姉さんはもつと上手だし、翠屋の紅茶には勝てないよ」

「でもおいしいよ。」

「ありがとう。」

皆で笑う。しかし、それは長くは続かなかつた。

「直人君、マリカさんは大丈夫？」

「あんまり大丈夫じゃないな。正直、今あいつはゼオンさんのこと
で頭がいっぱいだ」

「そうなんだ・・・」

「だけど、大丈夫じゃないのははやてもなんじゃないか？」

「え？」

はやてが驚いた顔になる。

「はやて、会議の途中で様子がおかしかっただろ。丁度、ロストロギアについての話の時に」

「あつ……」

なのはとフェイトもそういえばと気がつき、はやてを見た。

「よく気がついたね。ちょっとな、少し前のことを思い出したんよ……」

「はやてちゃん、それは……」

「ええんや、直人君にはいずれ話すべきやと思つとつた所やし」

「いったい、何の話だろうか？すると、はやてが静かに語りだした。5年前に起こつた、はやてに魔法の存在を教えた事件と、はやて自身の「罪」の話を……」

30分後

「そんな所や……」

「……俺は、余計なことを言ったのかもしれないな」

「うづん、そんなことないんよ。直人君には、前につらい話をさせてもつたし、おあいこや。」

「……だが、ひとつだけ言わせてくれないか？」

「なんや?」

「はやくに、罪なんかない」

少し強い口調で、はっきりとはやくに言った。

「でも、うちは皆を止められなかった・・・それはうちの・・・」

「それは罪じゃない。知らない所でおきていた事を自分の罪にするのは間違ってる。」

「直人君・・・」

なのはとフェイトは黙ってそれを聞いている。俺はそのまま言葉を続けた。

「過ちを犯すことが罪じゃない。その過ちから目を背けることが、最大の罪だ。少なくとも、はやくは違う。」

過ちを犯してそれを償う。それは普通かもしれない。だがその意思こそ、罪を消す最大の特效薬だ。しかし、過ちを見ずに逃げるからこそ最大の罪なのだ。

「直人君・・・」

「何?」

「ありがとう」

はやてが、笑顔で俺に言ってくれた。

「どういたしまして」

俺も笑ってそう返した。すると、はやての顔が一気に赤くなった。

「はやて？大丈夫？」

「う、うん・・・大丈夫・・・」

「ただいまー」

すると、そこに姉さんが帰ってきた。

「あ、姉さん。お帰り。」

「ただいま、直人。あら、いらっしやい」

「「「おじゃましています」「」」

「なのはさんはあったことあるけど、二人は初めましてね。直人の姉の千草です。よろしく。」

「フェイト・T・ハラオウンです」

「八神はやてです」

「フェイトさんにはやてさんね。そろそろ夕食にするから、あなたたちも食べてく？」

「え、いえ・・・私たちはもうこれで・・・」

「忘れたのか？姉さんの職業」

俺の言葉に、3人が固まった。どうやら俺が言ったことを思い出したらしい。

「アトランティカの、シェフ・・・」

「正解。どうせなら食べてけよ。皆食べたがっていただろ？それに、食事は皆としたほうが楽しいしな。」

「ふふふ、そうね。今日は腕によりをかけて料理を作るわね」

そう言って姉さんが台所に立った。

「あ、あたしたちも手伝いましょうか？」

「やめとけ、姉さんは人に手を出されるの嫌いだから」

「自分で調節しないと味が変わっちゃうのよ・・・仕事柄の癖なの。ごめんなさいね」

「あ、いえ・・・」

姉さんが申し訳なさそうに謝った。まあ、姉さんも気持ちは嬉しいんだろうし、なのはたちも理解してるし、いいか。

「すぐ作るから、ちょっと待ってね」

そう言つて姉さんは料理に取り掛かった。さつきと違い、料理人の目だ。

「ふええ・・・なんだか雰囲気が変わつちやつたね・・・」

「まあ、姉さんは仕事と料理には人一倍気力を使つてるから。」

正直、あの今の台所フィールドには入りたくない。理由、怖いから。

「あ、なあなあ、直人君？」

「何？はやて」

「直人君の部屋、どうなつてるんや？」

「は？」

いきなり何を言い出すんだ。この関西娘は

「あ、それ私も思った。」

「私も」

と、なのはがはやてに賛同し、フェイトも少し顔を赤らめながら小さく咳く。

「あの、君たち何を言っているのかな？」

「なんや？入つたらまずい理由でもあるんか？」

「いや、特にないけど・・・君たちを部屋に入れる理由もないんじゃないか？」

「でも断る理由がないなら入ってもええんやないか？」

「ぬ・・・」

言い返せない。すると、マリカがふよふよと降りてきた。

「あ、皆様・・・」

「あ、マリカさんこんにちは」

「こんにちは・・・」

「あんな、直人君の部屋ってどこや？」

「主の部屋なら階段を上がったすぐ右です・・・」

「あ、おいマリカ！」

「よっしゃ！行くで！」

そう言って3人はダッシュで上がってしまった。俺はため息をつき、ただ無気力に浮遊しているマリカと向き合った。

「マリカ・・・」

「なんでしよう・・・あう！」

俺はマリカにデコペンした。

「お前、いつまでも引きずるなよ。」

「……………」

「俺を信じる。俺は必ず、ゼオンさんを見つける。」

「主……………」

あ！なんか小さいミニチュアがあるよ！

直人君の趣味なのかな？

今のうちにいろいろ探してしまおか？

「あ、あいつら！」

俺は急いで部屋に向かわなければいけないようだ。

「あとマリカ！」

「は、はい…！」

「皆の前では、笑ってる。お前は笑顔の方が安心する」

「……………はい、ありがとう、主」

俺はそう言っただけで階段を上がっていった。

「「「「「ごちそうさまでした!」「」」」」

「はい、お粗末さまでした」

そう言っただけで姉さんが料理を片付ける。3人はその料理のおいしさに感動していた。俺はいつもどおりだから特になんもないけど。

「アトランティカのシェフさんに料理を作ってもらえるなんて幸せだったね」

「うん、すごくおいしかった」

「ほんまや。今度作り方教えてほしいわ」

「あらあら、ありがとう。じゃあデザートも出すから、ちょっと待っててね」

そう言っただけで姉さんは冷蔵庫からゼリーを取り出し、みんなもそれを受け取って食べる。そして感動。なんだ、このコントみたいな流れは。

「マリカ、お前・・・それは太るぞ?」

「いいんです、これはユニゾンデバイスの特権ですから。ねえ、リイン?」

「はいです!マリカお姉ちゃん!」

と、二人仲良く巨大ゼリーを食べている。ミニサイズになった二人にとっては、この小さいゼリーも巨大ゼリーになる。ちなみにリイ
ンは今まで寝ていたのだが、夕食時になって丁度起きたのだ。

ピンポーン

あれ、また誰か来た？

「はい……って、クロノ提督？」

「ああ、夜遅くにすまないね。」

後ろにはシャルルさんと男性がいた。

「シャルルさんと……どなたでしょう？」

「高町恭也……なのはの兄だ。」

「はあ……で、みなさんどうしたんですか？」

「ええ、これをはやてちゃんにお願いね。」

そう言ってシャルルさんが大きなバッグを渡してきた。

「はい、わかりました……」

「僕たちのも頼むぞ」

さらにバッグが二つ追加される。

「わかりました・・・」

「それで、大丈夫か？傷は」

「ええ、なんとか。みんなのおかげで、傷も忘れられます。」

「そうか」

なんて話をクロノさんしていると、恭也さんがいきなり俺の肩を掴んだ。そしてクロノさんも同じように肩を掴む。

「直人君・・・」

「は、はい・・・なんでしょう？」

心なしか、肩に力が入っているような・・・

「「なのは（フェイト）に手を出したら、殺すからな」」

「そ、そんなことしませんよ」

「そうか・・・ならいいが・・・」

この二人、両方ともシスコンか・・・って、なんか肩がメキメキ言ってる！イタイ！

「では、失礼しますね」

「あ、後ひとつだけ」

「何ですかクロノ提督」

「あまり無理はするなよ。君も、デバイスも」

クロノは心配そうな目で俺を見てくれた。その言葉に、俺は笑って返すことにした。

「はい、わかりました」

そう言って家の中に戻った。すると、3人が楽しそうに姉さんと会話をしている。

「なのは、フェイト、はやて。なんか荷物が来てるけど・・・」

「あ、さっきのお兄ちゃんたちだったんだ。ありがとう」

そう言って皆がバックを受け取った。

「あの、そのバックは何？」

「」「」お泊りセットだよ（）や」「」「」

「.....は？」

お、お泊りセットお！？

「え、いや、何の話？」

「千草さんがどうせなら泊まってって欲しいって」

「姉さん!？」

「いいじゃない。うち、女の子が来ることなんてなかったんだから。」

「そういう問題じゃないだろお!」

正直、俺の周りの女はどうしてこついうことを聞かないんだ。というか、仮にも男子と女子だ。抵抗はある。

「てか、一泊二日にしてはこの量は多くないか？」

「何いつてるん?明日からGWやで?」

「は?」

「そのままミッドチルダの温泉地に行くことになってるんだ。直人君も行くんだよ?」

「初耳だよ!なんだそれ!てか、ミッドチルダに!？」

「うん、ついでにゼオンさんの捜索もできるかもしれないでしょ?」
なんつーめちゃくちな話だ。ついて行けない。

「マリカさんには言っておいたけど・・・」

「マリカ?」

「すみません、言い忘れてました。」

マリカがあははと笑う。俺はもうため息をつくしかなかった。

第八話「悪夢」(後書き)

はあ・・・最近はずが浮かばん。

直人「とりあえずその現在の状態じゃいい案なんて浮かばないだろ」

秋風「何が？」

直人「その睡眠時間4時間を何とかしろ」

秋風「仕方ないだろ。忙しいんだから」

直人「案が浮かばないのに駄作を書くのは読者に失礼だと思わないか？」

秋風「ぬ・・・確かに」

直人「それにしても、次回からとうとうミッドチルダか。」

秋風「ああ、GWということは、原作どおりだとあれが実行されるな」

直人「あれ？」

秋風「こつちの話だ。気にするな」

直人「まあいいや。それで、後何話くらい続くんのだ？」

秋風「とりあえず書けるところまでかな」

直人「アバウトだな」

秋風「崖と崖をトイレットペーパーで渡っている小説に文句を言うな」

直人「ほかの小説も書こうとか思っているお前が悪い」

秋風「……まあ、ね」

直人「次回第九話『出発 ミッドチルダ』 TAKE OFF!」

第九話「出発 ミッドチルダ」(前編) (前書き)

この作品初の前編です。少し長くなったので、分割しました。8話の予告では前編と書いてなかったので、直しておきます。

ちなみに今回からメシアは日本語表記になりましたので、よろしくお願ひします。

第九話「出発 ミッドチルダ」(前編)

その日の夜。私はお風呂から上がってリビングに来ていた。なんでも、直人君のことで千草さんがお話しがあるとか。フェイトちゃんとはやてちゃんも呼ばれているみたいだけどなんだろう？ちなみに今直人君はお風呂に入っているのでここにはいない。

「お待たせしました。」

「ごめんなさいね。ちょっとお話したくて」

「お話……ですか？」

「直人のことなの。」

千草さんが真剣な顔で、私たちを見ていた。

「火事の話……私たちの両親の話は、聞いたのね？」

「はい。」

私たち3人は頷く。

「そうなの……」

「あの、私たち、何かしてしまっただんですか？」

はやてちゃんがおもむろに口を開く。すると、千草さんは首を横に振った。

「いいえ、お話というか、お礼をしたかったのよ。」

「お礼？」

「あの子、小学校の時に両親を亡くしてから人との関わりを極端に避けるようになったの。」

「どうしてですか？」

「火事があったそのリゾートホテル。そのリゾートホテルに行きたいといったのは直人だった。そして、私たちの両親が死んでしまったのは、いまだに自分のせいだと思っている。」

千草さんの言葉で、私は思い出した。直人君が言っていた「俺のせいで」という言葉を。千草さんは言葉を続けた。

「あの子は、自分が人と関わることで、その関わった人が不幸になる。そう思っているのよ。」

「そんな・・・」

「でも、あなた達と会ってから、あの子は変わった。」

「え？」

「学校から帰ってくるたびに、あの子はいつもあなた達の話をしてくれるの。」

「」「」「え？」

フェイトちゃんとはやてちゃんが顔を赤くする。私も顔が熱くなる。

「皆といると、いつも毎日が楽しいって・・・」

「「「「「「「「「「「」

「だから、これからもあの子を支えてあげて欲しいの。昨日だって、任務で敵に負けて失敗したって、ずっとうなだれていたもの。なのに、あなた達が来てから、急に明るくなって。とても嬉しかった。」

千草さんは笑顔で話してくれる。

「そういえば、皆は直人が好きなのかしら？」

「「「「「「「「「「「」

「もしかして、本当に？」

私達が全員頷く。そしてはやてちゃんは・・・

「実は、後二人、直人君が好きな人が・・・」

すずかちゃんとアリサちゃんのこと。

「あらあら、直人ったらもてるのね。でもあの子鈍感だから気がついてないでしょ？」

「にゃはは、それはもう・・・」

実際気づいてもらえないと寂しいけど、本当のことなんだよね。

「頑張つてね。その2人も含めて、あなた達を応援するわ。そして、直人をよろしくね」

そう言つて千草さんはニコニコ笑っていた。

「・・・眠れない」

風呂から上がると、なにやら姉さんと3人がこつちを見ていた。とりあえず彼女達は空き部屋で寝ることとなった。俺はそのまま寝ようとしたが、つまらないの理由で家にあるゲームを使って遊ぶこととなった。午前1時・・・皆は0時過ぎに眠ってしまったが、どうも寝付けない。俺はリビングに降りて、ココアを入れることにした。そして、俺は相棒に話しかける。

「・・・負けか。経験したことがなかったが、あんなに悔しいのか。」

『マスター・・・』

「メシア。俺は強くなれるかな?」

『大丈夫です。マスターなら』

「お前も前の主は心配か?」

『心配はしていますが、今は、現マスターのあなたが心配です。』

メシアは俺を気遣ってくれる。心強い相棒だ。俺はこんなことを聞

いてみた。

「ゼオンさんは、負けたことはあったのか？」

『私の記憶では、クラウン家においては負けなしでしたが、管理局では負け続きでしたね。』

「そうなんだ。どうやって強くなったんだ？」

『そうですね・・・ひたすら努力でした。訓練を続けて、戦って、無茶ばかりでしたね。』

「無茶・・・か。それはできないな。なのはとの約束で無茶はしないことになってるから。」

『そうでしたね。』

そんな話をしていると、扉が開く。

「誰だ？」

「あ、ごめん・・・眠れなくて・・・」

なのはだった。噂をすればなんとやら・・・か？

「ココアでも飲むか？」

「いいの？」

「ああ、構わないよ。」

そう言つて俺はコップにココアを注ぎ、それを渡した。なのははそれを受け取り、俺の隣に座った。

「直人君・・・この前負けたこと、気にしてる？」

「・・・よくわかつたな」

「さつき千草さんから聞いたの。すごい落ち込んでたつて・・・」

「ああ・・・負けということを経験してなかったからな。悔しいよ」

「でも、よかつたと思つよ？今のうちに経験して。」

「え・・・？」

なのはの言葉を俺は理解できなかったが、なのははそのまま言葉を続け、静かに語り始めた。

「実はね、私は魔法使いになつてから、ほとんど負けたことがなかつたの」

初めて魔法を使い、フェイトと戦つた。そして負けそうになつた。でも、無理をして強くなつてから勝つて、事件を解決した。二回目に負けたときはヴィータに負けたという。そこで今度は同じように技術が確立されていなかったカートリッジシステムで戦い、事件を解決した。それ以外はほとんど負けたことはないという。

「でもね、私は無茶をしすぎて、体が限界なのがわからなかつた。」

管理局に入局して二年目。なのはは未確認に撃墜されたのだという。いつもの調子なら撃退できたのに、できなかつた。そして、もう飛

べない体にまでなつたらしい。だが空を飛びたいという願いから激痛を伴うリハビリに耐え、今に至る。

「どうして、そんな話を俺に？」

この話は極めてプライベートなことであり、なのは自身にとってはトラウマの一つだ。それをなのは俺に話してくれた。

「直人君には、知って欲しかったから・・・」

「え？」

「私はね、教導してる人には『無理はするな』って言うて言うけど、直人君には誰よりも、絶対に私と同じ想いになって欲しくないから・・・だから・・・」

「・・・わかった、約束しよう。俺もなのはやフェイトはやて。それにアリサやすずかを悲しませたくないから・・・だから、俺は無理をしないで、頑張つて強くなる。みんなを守るくらいに。」

俺の言葉に、なのはが苦笑していた。

「直人君・・・みんなつて言うのがちょっとアレだけど、約束ね」

「アレって？」

「うっん。なんでもない。それじゃあ、指切りしようか」

「・・・いい歳して恥ずかしくない？」

「いいから!」

「はいはい……」

指きりげんまん 嘘ついたら針千本のーます 指切った!

こうして、俺はなのはと一つの約束を交わした。無理はしない。だが、強くなつて、みんなを守ってみせる。そんな約束を。

「じゃあ、俺は寝るよ。なのはも早く寝ろよ?」

「うん、おやすみ直人君」

「ああ、おやすみ……」

こうして夜は更けていった。

朝。俺は違和感を感じて目を覚ました。妙な感触がある。なんとなくか、柔らかいものに当たっている。

「何だ……何か……!!!!!!」

俺脇にはなのはとフェイトが眠っている。当たっていたのは二人の胸だ。

「何でこうなるかな……」

確かに普通のベッドよりは少し大きいんだけど、3人で寝るベッド

ではない。というか、こいつらには空き部屋を貸したはずだが・・・

「この状況、どうしたものか・・・」

俺はとりあえずどこうとしたが、なのはの腕が絡まって抜け出せない。5分ほどかけて、俺はなのはの腕を解いた。すると、書置きがあった。はやてからである。

「なにになに・・・？」昨夜は一緒に寝れて嬉しかったです。先にミッドで仕事があるので、それから合流します。はやてより」

と書かれていた。はやても寝てたのか、ここで。俺はベッドから降りて、すぐに着替える。

「メシア、おはよう」

『おはようございます。幸せでしたか？』

「お前たまに変なこと言うな」

『そうですか？あ、マリカを起こしますか？』

「いや、寝かせておこう。あいつも無理はさせられないからな。」

『了解しました。』

そんな会話の後、俺は下に降りた。

「おはよう姉さん」

「おはよう直人。昨夜は幸せだったかしら？」

「姉さんまでメシアと同じこと言わないでくれよ」
ため息をつきながら、俺は紅茶を飲む。

「メシア、今日ミッドに行くのはいつからだ？」

『はい、3人の話では、午後からだそうです。』

「そうか・・・それまでに準備しとかないとな」

最低限、着替えを持っていけばいいだろう。向こうの通貨ってどうすればいいんだか知らないけど。まあ、なのは達に聞けばなんとなるか？

「ふにゃあ・・・おはようございます・・・」

「おはようございます」

なのはとフェイトが降りてきた。

「あら、おはよう。よく眠れたかしら？」

「はい、それはもう。直人君、おはよう」

「とても良く。直人、おはよう」

「あ、ああ・・・二人ともおはよう」

二人も席に着き、同じように紅茶を飲む。

「二人とも朝は洋食でいいかしら?」

「はい、全然」

「お願いします」

と、二人が頷いた。

「そういえば姉さん、はやてはいつごろ行った?」

「3時間くらい前かしら。お弁当を持っていってもらったから、大丈夫よ。」

「そっか・・・そういえば、俺むここの通貨持ってないぞ?」

「ああ、大丈夫。クロノからお金は預かっているから」

そう言ってフェイトがポケットに入っていたカードを渡してくれた。

「日本のお金で30万円くらい入っているから。」

「そんな大金をポンと手渡さないでくれ。てか、これは何?どこから出たお金?」

「千草さんが昨日の夜渡してくれた現金をクロノに無理言って両替してもらったの。」

そういえばクロノさん疲れた顔していたな・・・

「姉さん、こんな大金いらないよ」

「あら、いいじゃない。たくさんお土産買ってきて頂戴？」

「・・・はいはい」

「そうねえ・・・キイチちゃんのストラップかしら」

「そんなの売ってないだろ」

なんて話をしながら朝食を済ませ、俺は出かける準備に取り掛かった。なのは達に「手伝おうか？」と言われたが、全力で断った。そして準備が整い、俺達は出発の準備を終えた。

「じゃあ姉さん、行って来ます」

「はい、いつてらっしゃい。みんなも気をつけてね？」

「はい！」

「もちろんです」

『了解しました』

そう返事をして、俺達は出発した。しかし、疑問がもつひとつあった。

「でもどうやって行くんだ？」

「うん、転送ポイントをエイミィに教えてもらっているから、そこから。」

「そうなんだ。」

便利だな、魔法って。しばらく歩くと海上公園に出た。珍しく誰もいない。

「さて、ここが転送ポイントだよ」

「そうなのか」

魔方阵が出ている。確かにそのようだけど……

「人が来ないか？こんなところで……」

「一応阻害魔法かけているから大丈夫。さ、行こう」

こうして、俺達はミッドチルダへと行くことになった。

ここは闇。沈みかける次元の島。我はそこにいる。

「もう少しだ……」

「ボス……」

「なんだ？」

「この前の騎士のことですが……」

「ヴァン、お前が倒したという？」

我が部下、ヴァンが頷き、腕の傷を見せた。

「倒したというより、虚を突いただけです。殺していません」

「お前らしくないな……」

「あの男はまだまだ強くなります。ここで殺しては、ボスが面白くないでしょう?」

「ふっ……わかつているではないか……そして……」

我はその目の前の扉を見る。

「もうすぐだ……もうすぐ私の夢が叶う」

「世界を変える、一つの可能性……ですね」

「そうだ。そして私は、人の命すら操る神となる……」

ミットチルダ首都クラナガン。地上本部に守られたその首都は、日本の首都圏とは比べ物にならない。

「すごいな……」

「ほんとだよね」

「うん。後で南に向かって、自然のある観光スポットに行こう。」

そう言って3人で歩く俺達。何故か、なのはとフェイトに腕組みを

されて歩いている。ちなみにマリカは俺の肩に乗っている。

「……………」

「直人君、どうしたの？」

「いや、周りの視線が……」

そう、先ほどから周りの視線がこちらに向いているのだ。もちろんただの視線ではなく、殺気が。しかも主に男性からだ。

「気にしない気にしない」

「そうそう、そのうち慣れるよ。」

多分この二人は殺気ではなく視線だけのことなのだろう。正直、やめて欲しい。

「これからどうするんだ？」

「うん、はやてちゃんとデパートで待ち合わせしてて、その後自然が多い南エリアの観光地に行く予定。」

「そうか、ならデパートに行くか……」

「うん、目の前」

「は？」

そこにあるのは大きな建造物。これ、デパートだったのか。さすがクラナガンか？デパートに入ると、なのはとフェイトに手を引かれ、

服売り場に連行された。

「ねえ、これどう？」

「いいんじゃないか？」

なのはが笑顔で試着した服を見せてくる。

「こっちは？直人」

「あ、ああ・・・似合っているよ」

フエイトも隣から出て、服を見せる。これでもう3着目だぞ、二人とも。結局気に入った一着を買ったらしい。すると、俺の目線はあるものに行く。

「・・・へえ、こんなものもあるのか」

そこにあるのは文房具店。二人が服に夢中になっている隙に、俺は中に入った。

「見たことない色ばかりだな」

そこには色とりどりの絵の具が並んでいる。

「主、本当に絵を描くための道具にこだわりますね。」

マリカが絵の具のある場所に着地し、それを見る。

「まあな。別に質を求めているわけじゃないが、欲しい色は、その時の気分で決まるものだ。」

いいながら俺はひとつの絵の具を手取る。それは空の色に近い水色だ。

「ここまで空に近い色は初めてみたな・・・」

「あ、いた！直人君！」

「どこに行ったかと思ったら・・・」

「ごめん、ここの店が気になって」

すると、なのはが絵の具を不思議そうに手に取った。

「へえ、ミッドチルダの絵の具はたくさんあるねえ・・・」

「そっちは油絵の具だ。」

「ふえ？」

「絵の具には様々な種類があつて、大まかだと水彩絵の具と油絵の具の二つ。なのはが持っているのは油絵の具。俺が持っているのは水彩絵の具だ。」

「どつ違つての？」

「学校で大体使うのは水彩絵の具。色が鮮やかで、色を混ぜやすい。安価だし、汚れてもすぐに落ちる。油絵の具は原色が多くて、絵を浮き出ているように見せたり、よりリアルに書くことができるが、高価で服になんかつくと落ちない。」

「詳しいね」

「色々勉強しているからな」

なんて会話をしていると、走ってくる足跡が聞こえた。

「なのはちゃん！フェイトちゃん！直人くん！」

「「「はやて」」」

遠くから駆けてきたのは仕事を終えたらしいはやてだった。当然私服である。

「仕事終わったの？」

「うん、全部終わりや。」

「大変だったですう！」

「ラインもお疲れ様」

「はいです、マリカお姉ちゃん」

と、みんなで騒ぐ。

「ほな、南エリアに行こか？」

「あ、ちょっと待っててくれ・・・」

そう言って俺はレジに並び、絵の具を買った。

「何買ったん？」

「絵の具。今度書く絵に使つための」

「ああ、屋上の風景の？」

「まあ、な」

覚えてるのか、みんな。

「完成したら見せてね？」

「………完成させることに努力しよう。」

絵を完成させるのには大体一ヶ月以上かかるけど、このことは黙っておこう。そんなことを話しながら、俺達は南側の観光スポットを訪れた。

「ふえ〜……ミッドの地上も首都と北側は結構違うねえ」

「こつちのほうは自然が多いから観光スポット多いよー」

「へえ、同じ町なのに場所が違うだけで環境まで違うのか。おもしろいな。」

「一応こちらは自然保護区域。地球で言うと国立公園と言つたところでしょうか」

などと会話しながら歩いていく。

「さ、観光スポットはこつちだよ！行こうー！」

こうして、俺達はその観光スポットへと脚を運んだ。

第九話「出発 ミッドチルダ」(前編)(後書き)

さあ、いよいよミッドチルダです。直人にどんな試練が待ち受けるのか、楽しみにしていて欲しいです。

直人「そういえば五万ヒットの時にさ、キャラのこと話したる？」

秋風「ああ、そうだね」

直人「出てないやつもう一人いるでしょ？」

秋風「え？」

雨月「どうせ俺なんて・・・」

秋風「あ・・・」

雨月「ちゃんとプロフィール紹介までされてるのに出ないって・・・」

アリサ「単なる一発キャラだったんじゃないの？」

雨月「ガン・・・」

直人「アリサ、言いすぎ」

アリサ「いいじゃない。所詮は脇役よ」

秋風「アリサ、雨月がだんだん小さくなってよ？体育座りで」

アリサ「え？」

雨月「どうせ俺なんて・・・どうせ俺なんて・・・」

アリサ「ああもう！うじうじしてんじゃないわよ！それでも男!？」

すずか「いや、今の悪いのは確実にアリサだよ・・・」

アリサ「うつ・・・!」

秋風「誰のせいだろうね・・・?このまま雨月はこの小説から消えちゃうよ?」

アリサ「わ、わかったわよ!悪かったわ、水嶋」

雨月「・・・・・・・・・・・・・・・・」

秋風「ん?何々・・・」

アリサ「何よ?」

秋風「今度一回デートしてくれたら許すって」

アリサ「調子に乗るなああああああああああ!.....!」

雨月「ぎゃあああああああああ!.....!」

秋風「次回第十話『出発 ミッドチルダ』(後編) TAKE OF F!」

直人「無視してしめた！」

第十話「出発 ミッドチルタ」(後編)(前書き)

来てしまいました。とうとう10話です。これからも頑張ります。
連続投稿というか、前半と後半に分けたただけですので・・・多分

第十話「出発 ミッドチルダ」(後編)

ようやくスポットを回り終わると、いつの間にか夕暮れになっていた。ここから少し乗り物に乗って移動するため、そのリニアの手配をしてそのまま温泉地に向かうことになるはずだった。しかし突然、はやてのデバイスに通信が入った。

「はい、こちら八神です・・・ええ!? ほんまですか!? わかりました!」

「どうしたの? はやてちゃん」

「大変や! ミッド臨海空港が火災に見舞われとる!」

「ええ!?」

「すぐに行こう!」

「うん!」

俺もすぐにメシアを手に取った。

「メシア、行くぞ!」

『オーライ、しかし大丈夫ですか?』

「ああ、行くぞ! セットアップ!」

俺がバリアジャケットを纏うと、3人もバリアジャケットを纏い、

空を飛び、空港を目指した。数分の飛行で火災現場に到着、管理局の服に身を包んだ男性が駆け寄ってきた。

「はやくか！それにエースのお嬢ちゃんたち！こいつぁ助かる！」

「ゲンヤさん！状況は！？」

「ああ、ひどい火の回りようだ。まだ何人が取り残されてる。」

火は空港全体に及んでいる。中に人がいるなら、このままではまずい。

「どうやって入ればいい！？」

「ん？お前さんは？」

俺を見て男性は首を傾げるが、俺はそんな答える余裕がない。

「それは後でいい！空港に入るには！？」

「あ、ああ・・・入り口はまだ火が来ていない。そこから入れば・・・」

「わかった！」

そう言って俺は空港へと向かった。

「直人君！」

なのはの声が聞こえたが、俺はそのまま飛び去って行った。

直人君が突然慌てて行ってしまった。私もすぐに追いかげなきゃ。すると、108部隊の部隊長、ゲンヤ・ナカジマさんが不思議そうに飛び去った直人君を見ていた。

「なんだい、今の坊主は・・・」

「彼は井上直人君。本局の囑託魔導士です。」

「井上直人っていやあ、はやてんとこのシグナムを倒したっていう、あの？」

「はい、そうです。」

「ほう、そんな頼もしい援軍がいるとは、心強い」

と、ゲンヤさんが頷く。もう直人君の噂は広まってるんだ。

「私達も行きます。なのは、行こう！はやてとリインは外をお願い
！」

「まかせとき！」

「ハイです！」

そうやって私とフェイトちゃんは空を飛んだ。フェイトちゃんが若干あせっているようにも見える。

「フェイトちゃん、どうしたの？」

メシアの言つとおり、俺は火災の時のことを思い出してしまう。

「う……がはぁ……げえ……」

思わず嘔吐するほどの何かが襲い、幻聴が聞こえ始める。

（お前のせいだ……お前がこんなホテルにするから……）

（あなたのせいで、私達死んじゃったわ……）

（あなたを許さない！家族でもなんでもない！）

父さんの、母さんの、姉さんの声が聞こえ、木霊する。

「やめろ……やめろお……！」

「主！しっかり、しっかりしてください！」

（お前が……）

「う、うう……」

俺は限界に来て、頭を抱えてひざを突いた。

（直人君のせいじゃないよ……直人君は何も悪くない……）

「な……のは……」

突然、聞こえる幻聴の中に、なのはの声が聞こえる。

（直人君は何も悪くないんだよ？私がいるから、心配しないで・・・）

なのはの言葉に、救われた気がした。

「ハア・・・ハア・・・」

「主、大丈夫ですか？」

いつの間にか、マリカがフルサイズになって俺を支えていた。

「ああ・・・もう、大丈夫だ。ありがとな」

「本当ですか？」

「ああ、先を急ごう。」

俺は立ち上がり、エントランスの方へと向かう。すると、そこには一人の少女が泣いていた。

「ギン姉え・・・どこお・・・？」

恐らく姉妹とはぐれたのかもしれない。すると、その少女の上へ、本来人々へ幸福をもたらす象徴の女神像が、無残にも落ちてくる。そしてその横から柱も落ちてくる。

「ひいつ！」

「危ない！メシア！」

『ロードカートリッジ！』

「虚空雷閃！」

雷の衝撃刃が飛び、柱と女神を切り裂いた。そして、少女を庇った。

「大丈夫か！？」

「う、うん！」

青い髪をした少女は涙目で俺を見た。とりあえず間に合ってた。よかった。

「主、上です！」

「え！？」

マリカの言葉を聞いて上を見ると、上から瓦礫が落ちてくる。防御魔法は間に合わない。

「きゃあああああああああ！！！！！！」

「ちい！」

少女を庇い、俺は少女を強く抱きしめる。しかし、その瓦礫は桜色の魔力光を放つネットによって遮られた。

「この魔法は……」

「直人君！大丈夫！？」

「なのは!」

なのはが上から飛来してきた。

「間に合ってよかったよ。あなたも大丈夫?」

なのはが少女に笑顔を向けた。すると、少女は顔を赤くして頷いた。

「は、はい……」

「じゃあ、一気に出るよ。直人君、バリアを張っていてくれる?」

「わかった。」

なのはに言われるがまま、俺はマリカと共に防御魔法を展開した。

「レイジンググハート!」

『オーライ、マイマスター。ロードカートリッジ!』

カートリッジがロードされ、魔法陣が展開される。なのははレイジンググハートを向ける。

「デイベイイン……バスターアアア!!!!!!」

桜色の砲撃が火を噴き、天井を破壊していく。そしてその先には夜天の空があつた。

「さ、行こう。」

そうやってなのはが少女の手を取るが、少女が首を振る。

「まだ、ギン姉が・・・」

「君のお姉さん？」

少女は俺の言葉に頷いた。

「自分の名前は言える？後、お姉さんの名前も」

「スバル・ナカジマ・・・お姉ちゃんは、ギンガ・ナカジマ・・・」

「なのは、救助者リストにその子の名前は？」

「ううん。ないみたい・・・」

「わかった、この子を頼む。俺はもう少し奥へ行ってみよう」

俺の言葉に、なのはが驚く。

「え、でも・・・!!」

「大丈夫、後で会える。スバルって言ったな。すぐにお姉ちゃん見つけてやるから、待っているよ?」

「本当に？」

「ああ、俺を信じろ」

「うん!!」

スバルは俺に嬉しそうに頷いてくれた。そしてなのはがため息をつく。

「……でも、無茶しないでね？さあ、行くよ？しっかり捕まっ
いて」

「はい……」

二人が飛んでいくのを見守ると、俺は奥へと駆けて行った。

そこは四角形の壁に沿って作られた非常用階段。そこを私は歩いて
いた。

「スバル……どこお……？」

私は自分の妹を呼ぶ。途中で何度も振動が来るため、私は四つん這
いになって上へと進む。すると、ものすごい勢いで揺れが来る。

「きゃあああああああ！！！！」

階段が崩れ、横になっていく。私は宙に放り出された。その時だっ
た。突然、高速で何かが接近し、そして私を助けてくれた。

「ギリギリセーフってところか？大丈夫だったか？」

「は、はい……」

そこにいたのは私より年上の男の人。青い騎士甲冑が輝いている。

髪は青く、瞳も蒼い。

「君はもしかして、ギンガ・ナカジマさんかな？」

「は、はい……」

突然名前を呼ばれて驚いた。どうしてこの人、私の名前を知っているのかな？

「君の妹さんが君の事を探していた。すぐに脱出する。」

「スバル……スバルは無事なんですか!？」

「ああ、大丈夫。ちゃんと保護したよ。さあ、ここから出よう!」

そう言って男の人は空を飛び、脱出路へと向かって行った。

とりあえずギンガという女の子の保護には成功。後は脱出するのみ。すると、そこでフェイトと出会った。

「フェイト」

「直人!よかった、無事だったんだね」

「ああ、心配かけてすまない。この子で最後だ。すぐに脱出しよう」

「うん、わかった。」

そう言って俺とフェイトは脱出するが、出口の近くまで行くと、そこには怪物がいた。

「なんだ、あれ・・・!？」

「見たことない生物・・・」

「ガルルルルルルルルル・・・」

そのライオンのような顔立ちに、ゴリラのような体。足は鷹のような爪だ。

「気持ち悪いな・・・そして、出てきたらどうだ?」

俺は視線を感じ、声を出した。するとそこには、一組の男女。以前あったことのある顔だ。

「・・・お前らは」

「お久しぶりですね・・・」

「・・・」

「シャドウ、この火災はお前らの・・・」

俺が言いかけると、オーガは首を横に振った。

「残念ながら、これは我々の仕業ではない。だが、ある種そうとも言える」

「どつという意味だ!？」

「秘密裏に受け取るうとした荷物が受け取る前に爆発しまして。こ
うなったわけです。嚴重封印しなかった相手が悪いんですよ。」

「まさか、ロストロギアの密輸を……」

フェイトがうなるような声で言うと、オーガはニヤリと笑う。

「正解。この前のロストロギア、一つや二つじゃないんですよ？」

「なんだと……！？貴様ら、あの「レリック」とか言っやつを集
めてどうするつもりだ!？」

「ロストロギアはエネルギーの結晶……そしてボスのために、我
らは働く。残念ながら時間がありません。君達の相手をする暇はあ
りません。前回に引き続き、面白い人形も見れましたし、良しとし
ましょう。」

「人形？」

「その金髪のお嬢さんですよ。知らなかったんですか？」

「黙れ！」

フェイトが声を荒げ、バルディッシュを構えた。しかし、オーガ達
の足元に魔法陣が広がる。

「ではさようなら、プロジェクトFの残滓……フェイト・テスト
ロッサ？」

そう言つてオーガ達は消えた。フェイトはそのまま立ち尽くしてしまふ。そして、目の前の化け物が吼える。

「ちっ！来るぞ！フェイト！」

「……………」

しかし、フェイトは答えない。

「フェイト！しっかりしろお！」

「……………！」

「お前になにがあるのかは知らないし、聞かない！だが、今はそれどころじゃないだろう！」

「な、直人……」

「マリカ！二人を連れて行け！早く！」

「はい、主！」

俺はマリカとのユニゾンを解除し、マリカがギンガを抱く。

「来い！化け物！」

俺は剣を構え、怪物に向かっていく。

「はあああああああ………！」

いかん、雨月みたいのこと言っちゃった。あいつなら絶対そういうこと言うよな。この状況でも。

「しかし、接近戦だけかと思ったら・・・仕方ない・・・メシア」

『リミットブレイクですか？しかし、なのは嬢には・・・』

「今は非常時だ。行くぞ。」

『了解、リミットブレイク！』

俺の体の装甲が紅く変化する。

「行くぞ・・・」

俺は瞬時に回りこみ、剣を入れる。しかし、その背中には亀のような甲羅が纏われ、はじかれた。

「何!？」

「グルアアアアアアアアアア!!!!」

「うわあああ!」

俺は剣を盾にしたものの、吹き飛ばされた。

「くっ・・・固い・・・」

まさか攻撃が通らないとは思わなかった。正面から行けば、あの爪の餌食。後ろには攻撃が行かない。ではどうすればいい?すると、

「リフォメーション」

「・・・ふう」

メシアが元に戻り、俺は周囲を見渡した。するとそこには、黒いビームのようなものが転がっていた。

「何だ、これ・・・？」

しかし、触れた瞬間、それは砕け散り、消えてしまった。

「あ!？」

『主!脱出しましょう!ここはもう持ちません!』

「何!？」

よく見れば、周囲は先ほどの戦闘でギリギリだ。このままだとマズイ!

「脱出だ!メシア!」

『了解です!こんなところでデバイスの丸焼きはまっぴらです!』

「お前それうまくねーよ!」

そんな文句をいいながら、俺は脱出した。

余談ではあるが、そのあとメシアはデバイスの丸焼きが受けると思

っていたのに、俺に一蹴されたことから、少しだけいじけていた。

第十話「出発 ミッドチルダ」(後編) (後書き)

もうオリジナルは出さないといっておきながら出てしまいました。
しかし、今回は雑魚の種別なのであしからず・・・眠い・・・

直人「今日は作者の気力がないのでお話は中止です」

フェイト「まあ、今は寝かせてあげようね？連続投稿だし」

直人・フェイト「第十一話『動き始めた影と、少女の告白』 TAK
E OFF」

第十一話「動き始めた影と少女の告白」(前書き)

話的にはここが中間地点って感じですが。まだまだ先は長いですが、頑張って更新しようと思います。いつも閲覧してくれている方々、ありがとうございます。これからも応援をよろしくおねがいます。では本編をどうぞ

第十一話「動き始めた影と少女の告白」

空港火災から次の日。俺達は温泉地ではなく、陸士108部隊に泊めてもらうこととなった。後の報告書や話などで遅くなったため、温泉地には一日分をキャンセル。俺は囑託魔導士なので、そこまで仕事はなく、とりあえずシャドウについての報告書をクロノ提督に送って仕事は終わり、部屋で寝ることにした。マリカはすでにベッドで寝ている。

「ふう・・・あの怪物、気持ち悪かったなあ・・・」

『まったくですね。しかし主、あのような怪物、何かの神話に出てきませんでしたっけ？』

「うーん・・・そうだよなあ。俺もそれが思い出せなくてさ・・・待てよ？神話の関連なら、あいつに聞けばいいのか？」

『なるほど、その手がありましたか。』

俺は立ち上がると、魔法陣を展開する。

「古よりある癒しの一族よ我が名において契約を果たしし者の来訪を願わん癒しのエルフ「カナリア」我が前に姿を現せ！」

詠唱の後、カナリアが姿を現した。

「お呼びでしょうか？マイマスター」

「ああ、ちょっと聞きたいことがあってさ」

そうやって俺はメシアが撮影したという怪物の画像を見せた。

「こいつについて、何か知らないか？」

「・・・そんな、何故こんなものがここに」

カナリアが驚きの声を上げる。その映像のものが、存在しないというまでの目で。

「カナリア？」

「ありえない、これはキメラです・・・！」

「キメラ？キメラって・・・あのドラ・・・」

『駄目ですよマスター、それ以上言ったら』

「すまん、で？キメラって言うと確かギリシヤ神話に登場するキマイラのことだろ。キメラはヨーロッパの呼び名だっけ。」

「それはマスターの世界での話です。この世界ではありえない生物なのです。」

「どついう意味だ？」

「キメラは遺伝子配列を組み替えて作る人工的な生物です。かつて旧世紀において、質量兵器に対抗して作られました。しかし現在、製造は禁止されて、製造方法も葬られているのです。」

カナリアはその詳細を詳しく説明する。

「じゃあ、誰かがそいつを作ったってことか？」

「はい。そうなりますが・・・ありえないのです。その製造法を葬ったのは、メシアとマリカが契約した魔導士の一族、クラウン家なのですから。」

「・・・・・・・・それは、本当なのか？」

「はい。私の前のマスターもクラウン家の人間でした。その時に私は立ち会っていたのですから、当然です。」

「己自身がその製造法を灰にするところを見れば、詳しいのも当然か。」

「メシア、カナリア」

「はい、マイマスター」

『なんでしょうか？主』

「このことはマリカや、なのは達には言うな」

俺は静かな声で、カナリア達に言った。

「了解です、マイマスター」

『そうしたほうが良さそうですね』

これ以上、マリカに荷を背負わせるわけにもいかないしな。

「ありがとうカナリア、助かったよ。」

「いえ、また何かありましたら、いつでもお呼びください。」

そう言ってカナリアは消えた。そして、俺はあることを考える。

「・・・クラウン家。少し、調べる必要があるそうだな」

そう言って俺はクロノ提督に通信を繋いだ。画面にはクロノ提督が映る。

「クロノ提督」

『ああ、直人か。どうした？』

「少し、調べて欲しいことがあるんですが・・・」

『ああ、なんだ？』

「クラウン家について、概要、歴史、頭首、魔法について・・・とにかくなんでもいいんです。資料が欲しい。」

『クラウン家について？何故だ？』

「今日の空港火災で、キメラ・・・いえ、キマイラが現れたんです。」

『なに！？報告書には未確認と書かれていたんだぞ！？』

クロノ提督が驚く。そして俺は言葉を続けた。

「もしそうだとしたら、やはりクラウン家が絡んでいます。クラウン家は管理局の資金提供者でしょう?」

『隠蔽か・・・』

「そうなりますね。」

『わかった。調べたらすぐにメシアに転送する。』

「ありがとうございます。あ、それとも一つだけ」

画面を切ろうとしたクロノ提督が不思議そうに俺を見る。

『なんだ?まだ何かあるのか?』

「フェイトのことなんですけど・・・」

『フェイト?フェイトがどうかしたのか?』

「実は・・・」

俺はシャドウのオーガが言っていたことを話した。すると、クロノ提督は暗い顔になってしまった。

『確かに、そう言ったのか?』

「はい。間違いなく“人形”と。あと、Fの残滓とも・・・」

『そうか・・・悪いが、それは僕の口からは言えないんだ。フェイ

トの過去に関わるからね。』

「そうですね。なら、余計なことは聞きません」

『そうしてやってくれ。それと、フェイトを頼む。』

「はい。」

そう言ってクロノ提督はモニターを切った。

「過去・・・か」

俺のように、フェイトも何かを背負っているのだろうか？あのいつもニコニコした笑顔からは、何も想像ができない。すると、部屋のドアがノックされた。

「はい、どうぞ」

ドアが開くと、そこにはフェイトの姿があった。なんとタイミングが悪く、グが悪いといつかなんというか。

「フェイト、どうした？」

「うん、ちょっと・・・」

そう言ってフェイトは俺の部屋に入ってきた。

「仕事お疲れ様、終わったの？」

「うん。とりあえずはね。直人が保護した二人の子供も、無事に病

院に運ばれたって。」

「そっか、そいつはよかった……で？何か俺に言うことがあって来たんだろ？」

「え？」

フェイトは驚いて俺を見る。

「フェイトの顔を見ればわかる。それに、そんな報告ならモニターでもできたはずだからな。」

「……あの、あの時のことなんだけど」

やっぱりそのことか……気にならないと言えば嘘だが、俺が知る必要はない。

「別に無理して言わなくていいよ、フェイト」

「え……？」

「お前、今自分の顔がどうなっているかわかる？」

フェイトははつとして部屋にあつた窓を見る。外が夜のため、鏡のように自分の姿が写る。その顔は目元が赤く、今にも泣きそうな目だった。

「別に過去がどうだからって俺はお前の接し方を変えようなんて思わないからな」

「・・・直人・・・ううん、でもだからこそ、直人には聞いて欲しい」

泣きそうだった目が、輝きを取り戻したように見えた。そいえばこいつ意地っ張りだっけ？

「わかった。聞くよ」

フェイトの言葉に、俺は頷くしかなかった。

どれだけ時が経ったかはわからない。俺は、フェイトの話の聞くことになった。自分がアリシアと呼ばれる少女を元に、「プロジェクトF」（当時の研究ではプロジェクトF・A・T・Eというらしい）と呼ばれる技術によって作られた人造魔導士であること。そして、作った母に、自分が失敗作だといって捨てられたこと。

「・・・それで？」

俺はただ一言、そう言った。フェイトは驚いた顔をした。

「それでって・・・だから、私は人間じゃ・・・」

「ふざけんな。」

「えっ・・・」

「お前が人間じゃない？そこから根本的に間違ってたんだよ。お前はコピーでもなんでもないだろ。フェイト・T・はラオウンという一人の人間だろ？」

「でも、私は……」

そこまで割り切れないとでも言うのだろうか？俺はため息をついた。

「そのこと、なのはやはやて……それにアリサやすすかだって知ってるんだろ？」

「うん……」

「それ聞いて皆は態度を変えたか？違うだろ？」

「……」

「一人で背負い込むな、俺が、いや……皆がついてる。お前は幸せになるべきなんだ」

俺は優しく、フェイトの頭を撫でた。すると、フェイトが俺に抱きついてきた。

「直人……ありがとう……」

フェイトはしばらく泣いていた。俺はそれを見ないように、天井を眺めていた。そして。

「直人……」

「何？」

「ん……」

「!?!?」

突然、フェイトにキスをされた。脱出しようにも、フェイトに手を回され離れられない。数秒間の静寂が流れる。

「ん．．．んん．．．」

「ぶはあ!」

「フェ、フェイト．．．お前、何を?」

「えへへ 私はね、直人が好きなんだ。」

「は?」

「でも、なのはやはやて達も同じみたいだから、負けないよ?」

フェイトは顔を赤くして、部屋を出て行った。俺は呆然とそれを見送った。

「．．．．．」

「主?大丈夫ですか?」

「．．．．．」

『思考回路が止まっていますね．．．えい!』

そう言ってメシアが先ほどのキスシーンを映したものを俺の目の前

に出した。

「!?!?!?!?!」

顔が赤くなる。キスなんて、生まれてこの方したことがなかったのだが・・・その前に

「メシア・・・初めてお前をスクラップにしたいと思ったよ」

『す、すみません、調子に乗りました。だから窓から投げるのは勘弁してください』

俺はため息をついて、その画像を消して、ベッドに寝た。

「今日は・・・色々あり過ぎたな・・・寝よう・・・」

俺は眠りについた。

ここは闇の世界。夢の跡

「オーガ・・・どういうことだ?」

「は!?!?!?!?! どうやらブローカーに問題があったかと・・・」

任務に失敗した二人が戻ってきた。だが、今はロストログア（レリック）のことではない。

「そこではない。キマイラが敗れた・・・と聞いた。」

「はい、戻ってこないと思っていましたが、まさかあの少年に破壊

されるとは」

「キマイラはシャドウの守護獣のうちの一匹だが・・・まさか、ここまで成長しているとは」

我は笑っていた。いつたい、どのような男がキマイラを倒したのか、是非ともあってみたいものだ。

「ボス、申し訳ありません」

「謝る必要はない。むしろ、奴と会うという楽しみが増えた。下がってよいぞ」

「はっ！」

そう言っつてオーガとダンピールが下がった。

「もうすぐだ・・・ティーナ・・・我・・・は・・・」

我の手には、ロケットがある。それに映るのは我と、世界で一番愛した女性の姿だった。

「ん・・・朝か・・・」

次の日、俺は目を覚ました。何故かまた違和感を覚えたからだ。

「・・・はやて、どうやってロックを・・・」

目を覚ますと目の前にははやてが俺のところまで寝ていた。その反対

側にはなのはとフェイトが寝ている。

「こいつらは……」

昨日確かに部屋にはロックを駆けて寝たはずだ。なのに、なんでこんなことになってる？すると、寝ぼけているのかはやてが俺を腕で引き寄せる。

「う、うおー！」

予想以上に強い力だった。俺は不意をつかれ、顔の距離が確実に近い。その時だった。

「うふふ、おはようさん」

「な！？はやて！？」

突然はやてがいたずらな笑みをしながら目を開けた。おかしいと思っただ。寝ぼけているのにこんな力を出せるなんて。まさか、狸寝入りしているとは。

「はやて、近い……離れろって！」

「ふふふ、昨日のこと覚えとるか？」

「え！？」

「フェイトちゃんとキスしたやろ？」

「……！！」

その言葉に絶句する。何故そのことをはやてが知っているのだろうか？

「フェイトちゃんも抜け目ないなあ・・・そして、そんなことをする直人君？どうなるかわかるか？」

「はやて、どうしてそんなことを知って・・・」

「それは乙女の秘密っちゅうやつちゃ」

「わかった、わかったからこの手を離せ」

さつきから離脱しようにも、この体制では力が入らず、どんどんはやてとの距離が近くなる。

「うぶぶ、いやや」

「ん・・・!!」

俺とはやての唇が重なった。数秒間、いやらしい音がたってしまふ。

「ん・・・」

「んん・・・ん!!」

「うっ・・・は・・・!!は、はやて、お前・・・」

「フェイトちゃんとキスした罰や。有難く受け取ったとき」

はやては若干顔を赤くしながら、意地悪な笑みを崩さない。俺は恐

る恐る後ろを見るが、二人はまだ爆睡している。

「どっして・・・」

「ん？どうしてって、好きな人にキスをすることに何か問題か？」

「そ、そうじゃなくて・・・って、は!？」

「うちは直人君が好きや」

硬直する。フェイトがそんなことを言っていたが、何かの冗談だと思っただけにしていなかった。

「フェイトちゃんも言っただけ、私だって負けへんで？」

「っ・・・!」

俺はそのまま上着を羽織ると、その部屋を脱出した。

「あーあ、逃げてもうた・・・」

ちよつと残念やけど、ファーストキスをあげることができただけでもよしとしようか

「ん・・・あ、はやてちゃんおはよー」

「おはよう、はやて」

「おはよーさん」

二人が直人君のドアを閉めた音で起きてしまった。ま、ええか。でも、二人が起きたらな、先にお話しとくのも悪ないな。

「あんな、二人とも・・・」

うちは二人に、私の将来のあることについて話すことにした。

俺はとりあえず隊舎の外へと出た。なんとか脱出したけど、マリカ放置してきちまった。まあ、あいつはまだ爆睡しているだろうからいいか。

「はぁ・・・」

「おや、どうかしたか？」

一人の男が、俺の前に立っていた。黒いコートに、上下黒一色の服。そして赤い髪。

「あなたは？」

「私か？ただの通りすがりだ。」

『・・・何が通りすがりですか』

「メシア？」

『ゼオン！あなたがどうしてここに！』

「え！？あ、あなたが・・・ゼオンさん！？」

「ほう、メシア・・・久しいな。本当に別のマスターを持っているとは驚いたぞ。メシア」

「どうして、ここに・・・」

まさかの展開だ。探そうと考えていた人物が目の前にいるとは。だがメシアの様子がおかしい。警戒しているのだ。

「なに、君を見に来たのさ・・・なんせ、あのキマイラを倒したのだからな！」

「・・・！キマイラだって！？じゃあ、あなたはまさか・・・」

「初めまして、二代目マスター、井上直人。私は革命団の首領、ゼオンだ・・・」

「そんな・・・どうして！」

俺は待機モードのメシアを握る。まさか、本当にこんな事態になるとは思わなかった。すると、ゼオンさんの手には黒い剣が握られていた。

「この剣がすべてを教えてくれた。」

「なんだ、その剣・・・」

その剣からは黒いオーラがあふれ出ている。まさか、あれが魔力なのか？

「手並み・・・拝見」

一瞬にして接近された。俺はとっさに防御魔法を展開し、バツクする。

「ほう、今のに反応できるか・・・」

「メシア！ゼオンさんを止めるぞ！セットアップ！」

「オーライ、セットアップ！」

俺は騎士甲冑を纏い、メシアを構えた。

「ほう、私の甲冑とはまた違うな・・・」

「あなたは、どうして！」

「君が知る必要はない。君は、私と戦えばそれでいい！」

剣と剣が交じり合う。

「くっ・・・ハア！」

「ふふ・・・確かにダンピールやヴァンが心躍るわけだ。その剣技、見事！だが・・・」

俺は剣を弾かれ、ゼオンの剣が頬を掠めた。

「その剣技、マリカに習ったなら私には勝てん！」

「ぐっ……はあああ！」

俺は距離を離し、メシアを構えなおして再び斬りかかる。しかしその軌道は見切られ、受け止められてしまった。

「マリカの剣技は私が元になっているのだ。その剣技が見切れぬわけがない！」

「ぐっ……！」

メシアの上から蹴り飛ばされ、再び距離をとった。

「あなたは盗賊団と戦って消息不明だったはずだ！なのに何故！」

「マリカに聞いたのか……そう、私はそのあと盗賊団に乗り込み、そして見つけたのだ。神さえ超える力を」

「神を超える力……？」

「話はここまでだ。そろそろ本気で行こう……目覚めよ、我がデバイス『ラグナ』そして、『ロック』……デバイス複合」

「デバイス複合」

黒い剣型のデバイス「ラグナ」と待機状態に見えるその角のようなデバイス「ロック」が黒い光を放ち、別の剣に変わった。それは刀身から柄まで、すべてが黒い、漆黒の剣。

「覇者の剣『ラグナロク』これが私の手に入れた、最強の剣……そして私は『カオス』を目覚めさせ、人の命さえも操る神となろう。」

「・・・」

「人の命を操る・・・だと!?!」

「おっと、話しすぎたな・・・さあ、やるつか?」

凄まじい殺気が俺を襲う。

「ぐっ・・・!メシア!リミットブレイク!」

『リミットブレイク!』

装甲が真紅に変わり、メシアの形状も変化する。

「・・・行くぞ」

俺が駆け出す。メシアを振り下ろしたが、ゼオンが視界から消えた。

「なっ・・・!」

「どこを見ている?」

「何!?!」

ゼオンがすでに後ろに回りこんでいた。

「幻夢残刃・・・」

黒い剣のオーラが増した。そのまま俺に剣が振り下ろされる。

再びメシアを構え、剣を交える。リミットブレイクを使っているのにも関わらず、その速さに追いつけない。

「くっ……そお！」

「ふ……」

すると、隊舎からなのはたちが現れる。

「直人君！」

「みんな！？駄目だ！来るな！」

「主！……！！！？？」

マリカも駆けつけたが、すぐに表情が一変する。

「ゼ……ゼオン……！？？」

「ほう、マリカか……久しぶりだな」

最悪の再会が、そこには待っていた。

第十一話「動き始めた影と少女の告白」（後書き）

ファンからすれば9割が殺意を沸かせる展開となりました。コメントをくれ闘我様の言うとおり、このあとどうなるんでしょうか（笑）

直人「・・・・・・・・・・・・・・・・」

秋風「ふふふ・・・直人君」

直人「なんだ？」

秋風「面白い展開だな。」

直人「いつペン死んでみるか？なんだこの話は」

秋風「前に言っただろ？この小説のジャンルは恋愛だぞ？」

直人「だからっていきなりすぎだろ！なんだあのふざけた展開は！」

秋風「だって書いてるうちにこうかなあと思ったんだもん！」

直人「口調を変えるな！気持ち悪い！」

秋風「5股する奴に言われたくない！」

直人「あんたが書いたんだろ！どうすんだこれ！」

秋風「まああせるな、今後で読者の7割くらいを裏切ることになるから」

直人「は？」

なのは「秋風君？」

フェイト「それはいつたい」

はやて「どういことや？」

すずか「ちゃんと説明」

アリサ「しなさいよ？」

秋風「え、いや、その・・・まあ落ち着いて。ね？」

5人「「「「「問答無用！！」「」「」「」

秋風「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あ！！！！！！！」

直人「・・・第十二話『折れた心と二人の過去』 TAKE OF
F」

第十二話「折れた心と二人の過去」(前書き)

タイトルが予告と変わりました。十一話を改定しておきます。申し訳ありません。

それでは本編をどうぞ

第十二話「折れた心と二人の過去」

状況のすべてが最悪だった。魔力は削がれ、戦えるだけの体力も口に残っていない。そして、一番いてはならない人物が、そこにいた。

「これは、いつたい・・・」

「この状況を見てわからないか？私は彼と死合っているのだ。」

「そんな・・・何故!？」

マリカは戸惑いを隠せない。しかし、ゼオンは笑うのをやめない。

「何故？お前も気づいていないか？私は、シャドウの首領なのだ」

「そ・・・んな・・・」

「私のところへ戻って来い、マリカ・・・お前が必要だ」

「ゼオン・・・」

「マリカ！そいつの言葉を聞くな！」

俺はマリカの前に立ち、剣を構えた。

「あんたは、ゼオンさんじゃない・・・」

「ほう、その根拠は？」

「マリカは・・・いつもあなたのことを幸せそうに語っていた・・・でも、あなたは違う。あなたは、あのマリカが語っていたあなたじゃない・・・!」

「君がマリカから私をどう聞いたかは知らんが、私は真正正銘、本物のゼオン・クラウンだ! さあ、来いマリカ・・・主の下へ」

「ある・・・じ・・・」

「マリカ!」

マリカは俺を通り抜け、マリカはゆっくりと歩き出す。その目は、単色で光がない。

「私の主は・・・ゼオン・・・クラウン・・・」

マリカはゼオンの元へ歩み寄った。

「ふふふ、戻ってきたか・・・さて、君は用済みだ・・・消えるといい」

そう言ってゼオンが無数に黒い玉を投げ捨てた。そこから黒い光が放たれ、大量のキマイラが出現する。

「な、これは・・・!」

「キマイラ・・・おおかた、そのエルフに聞いたのだろうか?」

「何故あなたはキマイラを・・・!」

「ふふふ・・・もうずいぶん昔、私はクラウン家の地下で製造法を見つけたのだよ。」

そのゼオンの言葉に、カナリアが叫ぶ。

「馬鹿な！あれは確かに私の目の前で・・・！」

「本物が焼かれたとでも？」

「馬鹿な！私の主は・・・！」

「クラウン家のことを知らぬお前たちが、それを知ることはない・・・さて、消えうせろ」

ゼオンの言葉に、キマイラ達がいつせいに襲い掛かった。

「ぐっ・・・！どけえ！」

俺はキマイラたちを斬り捨てながら、ゼオンに近づいていく。

「マリカ・・・」

「はい、主・・・クリスタルダガー」

一瞬、すべてが止まった。その現れたダガーが、俺を貫いた。俺は激痛を受け、その場で膝を突いた。そのダガーは巨大で、そしてどんなものよりも冷たい。そんなダガーだった。

「これが、主の器の差だ。貴様が使つようなものではない」

「が……はっ……」

そして、そのダガーが引き抜かれる。

「がっ……！」

俺は倒れる。最早、立つ気力すらない。

「さらばだ、永久に眠れ……」

「デイベイイイン……バスター！！」

ゼオンと俺の間に、桜色の砲撃が巻き起こる。

「直人君！」

そして、なのはとフェイト、そしてはやてが俺の前に立った。

「ほう、管理局の犬か……これでは分が悪い。さらばだ……」

「マ……リ……カ……」

俺を見下ろすゼオン。そしてマリカ。俺はそれを見た後、闇に墮ちた。

数時間後。直人君はミッドチルダの病院へと搬送された。意識不明で出血がひどいことから、手術が開始された。そして三時間が経ち、ようやく手術室のランプが消えた。とりあえず一命は取り留めて、数時間後には目を覚ますらしい。その後はやてちゃんはことの報告

をするために本局へ。フェイトちゃんは現場検証をするらしい。なので、結果的に私が残ることになった。二人とも少し悔しそうだったけど、それよりも二人は直人君の心配のほうが大きかった。すると、直人君がゆっくりと目を開けた。

「う、うう……」

「直人君！目が覚めた？」

「なのは……ここは？」

「病院だよ」

「俺は……また、負けたのか……そうだ！マリカ！」

直人君が体を無理に起こした。

「ぐう……！」

「あ、まだ駄目！寝てなくちゃ！」

「マリカは……どうして……」

直人君が、力なく呟いた。

「直人君、私は先生を呼んでくるから、大人しくしていてね？」

「……呼ばなくていい」

「え？」

「少し、一人にしてくれ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん」

私はそう答えるしかできなかった。

「・・・・・・・・俺はまた、負けたのか」

『マスター・・・・・・・・』

「しかも、マリカを守れず・・・家族を・・・守れず・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「俺は・・・何も守れない」

もう俺に、何かをするという心は消えてしまった。俺は痛みを耐えながら服を着替え、そして、病室を後にした。メシアを置いて。

直人君が目覚めたことを聞いて、フェイトちゃんとはやてちやんが帰ってきた。一人にしてあげたいという話をして、しばらくはロビーにいた。

「直人君、どうなんや？」

「傷のほうは心配ないみたい。でも、心のほうは・・・・・・・・」

「マリカさんが、直人のことを刺した。これが、直人にとっては一番大きい・・・」

「うん、立ち直れるかな・・・直人君」

私は不安だった。かつてのフェイトちゃんみたいに、気力すらなくした姿を見ていたから。

「大丈夫。直人はきつと立ち直れるよ」

「そうや、直人君ならきつとな。そろそろ、様子でも見に行こか？」

「うん、そうだね」

直人君は強い。だからきつと大丈夫。それは私が一番知ってる。「あの時」のことがあるから、きつと・・・そう思いながら病室の扉を開けた。でも、そこに直人君の姿はなかった。あるのは直人君のデバイスのメシアだけ。

「な、直人君!？」

「あの体でどこに!？」

「メシア、何があつたんや!？」

『なのは嬢、フェイト嬢、はやて嬢・・・マスターは、着替えてどこかへ行ってしまいました。申し訳ありません。私では止めることは出来ませんでした。申し訳ありません』

「どこに行つたかわかる？」

『わかりません。しかしマスターが出て行ってから、まだ2時間も経っていません。今ならまだ探せます!』

「うん、皆で手分けして探そう!」

私はメシアを手に取り、フェイトちゃんはやてちゃんと一緒に病院を出た。

「はあ・・・はあ・・・直人君、どこに・・・」

私は今クラナガンの南側を走り回っている。直人君が行きそうな場所。それは自然がある、この地帯。私は知っている。直人君がこういった所にいる理由を。

『なのは嬢、何故マスターがこの辺りにいると?』

「うん、確証はあんまりないけど、直人君は考えることがあるといつも自然公園にいるの。絵を描くときもほとんど自然公園!」

『そうですね。マスターも以前から、そこが落ち着ける場所と言っていました。ご存知だったとは・・・』

「うん、もう随分昔のこと・・・あ!いた!」

直人君がベンチに座り、うな垂れていた。

「見つけたよ、直人君・・・」

「なのは・・・どうして、ここが・・・」

「直人君は考え事があると自然公園にいるって、いつも言っていたから。ほら、病院に帰ろう?」

そう言っただけで私は手を出す。でも、直人君にその手を弾かれてしまった。

「直人君?」

「もう、放っておいてくれ・・・」

「直人君・・・」

「所詮俺には、もう何も出来やしない・・・家族を救うことさえ・・・」

「そんなことないよ。直人君はきっと・・・」

「お前に何がわかる!」

「・・・!!」

私は直人君の言葉に、一瞬びつくりしてしまふ。

「家族を救おうとして、その家族に裏切られた気持ちなんか・・・誰にもわかりはしない!」

「例えわからなくても、私達はわかりたいと・・・」

「それが偽善以外のなんだ!俺にはもう、何も無い!誰も救えない

「！今までだって誰も救えた事がない！俺はいつも……誰も……」

「直人君」

「パァン！」

乾いた音が、辺りに響き渡った。誰もいないからか、その音は随分と木霊していた。私は、かつてのアリサちゃんのように、直人君の頬を叩いていた。

「誰も救えない？嘘を言わないでよ！昨日だって、二人助けたじゃない！それに、それに直人君は……私を救ってくれたんだよ……！？」

「俺が……お前を……？」

私は言つて、深呼吸をすると、直人君の隣に座った。

「覚えてるかな？もう、随分昔……私がまだ、アリサちゃんやすずかちゃんと友達になる前……私が、魔法と出会った前……」

9年前

「……ひゅぐ……ひゅぐ……」

私は、自然公園で泣いていた。お父さんがお仕事で怪我をして、お母さんやお兄ちゃんたちはお店で頑張つて働いている。お姉ちゃんはずつとお父さんの看病をして、私はいつも一人だった。遊ぶ友達もいない。私はただ一人、その公園で毎日泣いていた。そう、今日までは。

「どうしたの？どこか痛いの？」

突然、私の隣に見知らぬ男の子がいた。男の子はスケッチブックを手に、私に聞いてきていた。私は戸惑いながらも、首を横に振った。

「ううん、違うの・・・」

「じゃあどうしたの？悲しいことがあったの？」

「うん、お父さんが怪我しちゃって・・・起きないの」

私の話を聞くと、男の子は紙と鉛筆を私に渡した。

「じゃあ、お父さんに絵を描いてあげようよ。お父さんが部屋で寝てるなら、外の絵を描いてあげたら、きっと喜ぶよ？」

私はその言葉に戸惑った。いきなり見知らずの男の子がそんなことを言えば、当然だった。しかし男の子はそれに構うことなく、スケッチブックに絵を描き始める。

「絵を描くとね、楽しかった日のことや、嬉しかった日のことがいっぱい出てきて、悲しいことなんてすぐに消えちゃうんだって。お父さんが教えてくれたんだ。」

男の子はただ笑顔で、絵を描き続ける。それは決して上手な絵ではないけれど、でも温かさが出ている、そんな絵だった。するといつの間にか私も、隣で絵を描き始めていた。すると自然に、その悲しかった心から、何かが消えていた。

「ふう、こんな所かなー？」

男の子は首を傾げながら、絵を上に掲げる。でも、男の子はまた絵を描き始める。

「また、同じ絵を描くの？」

「ううん、今度は君の絵を描くよ。気にしないで書いていてね」

そうやって私を見ながら、絵を描き始めた。私は少し恥ずかしがりながら、絵を描いていた。そして・・・

「「できたー！」」

二人の声が重なった。

「ねえ、絵を見せてよ」

「え、でも、ヘタクソだよ？」

「いいからいいから！」

男の子はニコニコした顔で私の絵を見た。

「わあ、優しい絵だね」

男の子は私の絵をジッと見つめていた。

「じゃあ、はい。これあげる。」

そう言って渡してくれたのは、さっき私を書いた絵だった。似てはいないけど、茶色い髪に、ツインテール。そして今日着ていた服。とても私の特徴を捉えた絵だった。

「あ、ありがとう・・・」

「ありがとうって言うときは笑顔じゃないと駄目だよ？お父さんが言ってたんだ」

「え・・・？じゃあ、その、ありがとう」

私が笑顔で言うと、男の子も笑顔になった。

「どういたしまして！もう夕方だね・・・僕はそろそろ帰らなきゃ」
そう言って男の子がベンチから降りる。

「あ、待って！」

「なあに？」

「お名前、なんていうの？」

「僕は井上直人だよ！」

「私は、高町なのはっていうの……その、本当にありがとう！」

「僕は絵を描いただけだよ。それじゃあね、なのはちゃん！」

そう言つて、直人君は走つて行つてしまった。私は何故だか、とても心がスツとしていた。

「ありがとう……」

私は一人になつてから、もう一度お礼を言つた。それ以後、私は直人君とよく会うようになった。学校が同じでびっくりしたけど、自然公園で一緒に絵を描くようになった。そして、夏休みの終わり。

「今度お父さんやお母さん、それにお姉ちゃんと旅行に行くんだ」

「いいな」

「お土産買つてくるから、そう言わないでよ」

「うん 楽しみにしてる。」

そう言つて二人で笑い合う。いつしか、私はその笑顔ばかりを追いかけていた。そして……

「ねえ、直人君」

「なあに？」

「直人君、私のこと、好き？」

「え？えつと・・・うん、好きだよ？」

「じゃあ、えい」

私は不意打ちで直人君にキスをした。

「ん・・・！」

「ぶう・・・えへへ」

「なのはちゃん・・・」

直人君の顔が真っ赤だった。私も顔が熱いし、同じかな？

「私のファーストキスだよ」

「僕だって人とキスしたことなんてないよ・・・」

「じゃあ直人君のファーストキスは私がもらったね」

当時小学一年生。お姉ちゃんが色々教えてくれたので、私はそれがたまらなく嬉しかった。

「いきなりびつくりしたよ・・・」

「えへへ、ごめんね？」

「いいよ、なのはちゃんだから許してあげる。」

そう言って直人君はそれを笑顔で許してくれた。そしていつもどお

りにお話をして、別れた。これが、私と直人君の最後に会った日だった。二学期になって、直人君は転校したと聞いた。家庭の事情だったらしい。私はその日だけ泣いていた。

6年後

「あ、みんなと同じクラスだ」

「皆同じクラスなんてすごいね」

中学生になって、その始業式。私達は一年一組になった。今日から中学生。管理局のお仕事も、学校も頑張らないと。すると、私は廊下で人とぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい」

「こつちこそ、余所見をしていた。」

そうして、目が合った。それはどこかで見た人だった。誰だっけ？すると、遠くから声がする。

「直人！早くしろー！」

「ああ、雨月。今行くよ。すまなかった。それじゃあ」

そう言って男の子は行ってしまった。

「直……人……君」

私は思い出した。この数年間が濃すぎて忘れていた。私の大切な人を。でも、彼から笑顔が消えていた。直人君の担任だった当時の先生に聞くと直人君は両親を事故で失い、学校に来れなくなったのだという。だから私は決心した。直人君に笑顔を取り戻したいと。

再び現代

「私はね、あれから変わってないよ。直人君が忘れても、私は直人君が好き。だから・・・」

「・・・俺は、お前に嘘をついていた」

「え？」

「覚えているんだ、全て。なのはと会った日々を・・・」

意外な言葉だった。つい最近名前を覚えてもらっていたと思ったのに。

「始業式のあの日・・・お前と会ったとき、気がついていて・・・でも、怖かった。俺が関われば、なのはちゃんの笑顔が消えてしまいかもしれない。そう思って、なのはちゃんをずっと避けてきた。」

「直人君・・・」

今、直人君は「なのはちゃん」と私を呼んでくれた。それは、小学生のあの頃言ってくれていた呼び方だった。

「俺は・・・失うのが怖いんだ・・・両親を失い、今度はマリカを失ってしまった・・・次になのはちゃんやフェイト、それにはやてまで失ってしまうかと思うと、俺はもう、剣を握るれない」

「直人君」

「直人君」

全てを語ると、なのはちゃんが俺を呼ぶ。俺がその方向を向くと、俺となのはちゃんの唇が合わさる。9年前にしたキスとはまた違うものだった。

「ん・・・」

「んん・・・ふぁ」

唇が離れると、なのはちゃんは俺を強く抱きしめた。

「直人君、私はどこにも行かないよ？フェイトちゃんやはやてちゃんだって、どこにも行かない。直人君の力になる。直人君はどうしたいの？」

「・・・俺は・・・戦う・・・みんなを守るために・・・」

「うん・・・」

「マリカを助けて、ゼオンを救う。だから、俺に力を貸してくれ、なのは」

「うん！」

なのはが強く頷いてくれた。するとそこへ・・・

「直人（君）！」

フェイトとはやてがやって来た。

「もう！心配したんだよ！？」

「ほんまや！そんな怪我で！」

「ごめん・・・でも、もう大丈夫だ。フェイト、はやて」

「何？」

「俺に、力を貸してくれ。」

「何を言うかと思えば、そんなの当たり前だよ？」

フェイトに続き、はやてがう頷く。

「まったくや。力になるで？直人君」

『マスター？私を忘れてませんか？』

「メシア・・・」

『まったく、相棒を置いてくとは、マスター失格ですよ？』

「すまない」

俺が謝ると、メシアは珍しくため息をついた。

『まあ、今回は許してあげましょう。次はありませんよ。』

「ああ、わかったよ」

そう言って俺は苦笑した。

「それじゃ、病院に戻ろう？すっかり暗くなっちゃった」

そう言ってなのはが立ち上がり。俺も立ち上がる。すると、なのはとフェイトが腕を絡める。

「おい、何を？」

「直人君が逃げないように」

「そうそう、逃げないようにね？」

二人の笑顔が怖い。そして

「ずるい！うちも！」

そう言うてはやてが俺の背中に乗っかる。

「うわっ！」

「あ、はやてちゃん、直人君怪我人だよ!？」

「交代で腕組むから我慢してよ、はやて」

「じゃあ、しゃーないな、許したる」

あれ？俺の意見は？全員でギヤーギヤー騒ぎながら病院に戻った。俺はもう一度誓った。全てを守るために、戦う道を選ぶと。そして、マリカを救い、皆を守る。それが俺の新たなる目標になった。

第十二話「折れた心と二人の過去」（後書き）

過去に入るのは当初から決まっていた。とりあえず自分で書いて楽しかったです。

直人「……………」

秋風「くつくつく……おもしろいねえ、直人君」

直人「なに？このフラグ立ちまくりは」

秋風「作者の気まぐれ」

直人「ふざけんなあ！」

秋風「ぎゃあああ！嘘だから！当初からこういう風に決まっていたんだよ！」

直人「しかし、とうとうシャドウが動き出したな」

秋風「ああ、こっからとうとうバトルばかりか……やるせないなあ……………」

直人「頑張れ、お前なら出来るさ」

秋風「何を根拠に？」

直人「挫折させないために言ったただけだ」

第十三話「真実の中の真実」(前書き)

二話連続で過去話になってしまった。とりあえず今回はゼオンの過去です。

では本編をどうぞ

第十三話「真実の中の真実」

二日後、俺は退院して、皆で海鳴に戻った。怪我をした話をする、アリサに鉄拳を喰らって「心配をかけるな！」と怒られ、すずかには「無理したら駄目だよ？」と、黒いオーラを出して言っていた。結局は抱きつかれて泣かれてしまったが、その後3人の攻撃を受けたのは言うまでもない。放課後、4人になって翠屋でお茶を飲んでいると、クロノ提督から通信が入った。

『直人、君に頼まれていた資料と、僕の友人が調べた独自の調査書だ、目を通しておいてくれ。』

「ありがとうございます。」

「え、これ何？」

フエイトが不思議そうに聞く。

「ああ、クラウン家に関する資料だ。」

『クラウン家の資料は機密事項のものでもあった。』

「どうしてですか？」

『管理局支援者だから、というべきかもしれないな。』

「そうですか。で、この独自の調査書というのは？」

『ああ、色々と裏の事情をまとめた資料だ。頭首のゼオンが何も知

らないくせにと言っていたなら、とことん知るといい。』

「わかりました。ありがとうございます。」

こうして、俺は通信を切ると、そのデータを展開した。

クラウン家 情報特別秘密レベルA

数少ない古代ベルカの生き残りの一族。一人一人が武術の才能を持って生まれ、その力は一人一人で一騎当千。さまざまな戦いにおいて戦火を上げており、質量兵器にも劣らぬその攻撃は凄まじいものである。旧暦末期において、時空管理局に支援提供者として協力者となっている。

そこで、資料は終わっていた。

「え、これだけ？」

「みたいだ・・・」

なのはと俺が首を傾げる。すると、追記事項に、これ以上はSSランク以上の秘密レベルであり、閲覧には上層部の許可が必要。と書かれていた。

「これだけを見れば、確かにクラウン家は味方に見えるね」

「ああ、だが問題はこいつだな」

「裏、だね」

「開いてみよう・・・」

こうして、俺は二つ目のファイルを開いた。

クラウン家の魔導研究

デバイス同士を合わせた「デバイスの複合」の研究が進められていたが、人体に悪影響が出ることから、管理局から条例により禁止となったが、それ以後も研究は続けられていた様子。

キマイラの生成によって、多大な戦果を挙げる。キマイラは複数の生命体を融合させることで作られているため、人道から外れているとされている。そのため新暦ではその開発が中止となり、製造法も葬られた。

旧暦の末期において莫大な権力と資金を得ており、それと同時に管理局の支援者になっている。

人造魔導計画に関与。キマイラの製造法を元に、より優れた人造魔導士を作る事を考える。当時最有力の人工的な人間を作り出す「プロジェクトF」を参考。それによって誕生したのは、初代頭首のコ

ピー「ゼオン・クラウン」

「なっ……！」

「ゼオンが、人造魔導士!？」

「そんな……」

俺達全員が驚いた。まさか、ゼオンが「プロジェクトF」によって作られたものだとは、思いもよらなかった。フェイトは青ざめ、うな垂れる。

「フェイト、ここからは見ないほうが……」

「大丈夫、大丈夫だから……」

俺は服を掴む手をそつと握った。

「わかった、続きを見よう」

初代頭首「ゼオン・クラウン」を媒体に作られた人造魔導士だが「プロジェクトF」と違う点が多くある。

一つ目、体の寿命は通常より短い。

二つ目、身体能力はオリジナルよりも劣っており、劣化がいくつも見られる。

三つ目、魔力を開放すると、それを留める枷としてユニゾンデバイスが必須。

「劣化に、調整・・・それに枷・・・」

「もしそれが本当なら、ひとつの謎が解けた」

「え？」

「ゼオンは俺に、命さえ操る神になると言った。つまりそれは・・・」

「自分自身の、延命・・・」

はやての言葉に、俺は頷く。

「体が劣化しているとしたら、本物はもっと恐ろしかったのかもな。」

その力を俺は肌で感じ取った。もし本物だったら、俺は殺気だけで死んでいたかもしれない。すると、資料はここまでのようだ。だが、色々とわかったことがあった。

「デバイスの複合・・・それにキマイラの精製、人造魔導士計画・・・違法のオンパレードだな。そして全てをゼオンが受け継ぎ、実行してる。」

「クラウン家・・・どうして、こんなことを」

「さあな。だが、俺はもう一つ気になる項目がある。」
「え？」

「ここだ。『旧暦の末期において強力な権力と莫大な資金を得ており、それと同時に管理局の支援者になっている。』ってところ」

「確かに、旧暦の末期に莫大な資金と強力な権力を手に入れるのはおかしいね」

全員が首を傾げる。だが、俺には一つの仮説があつた。恐ろしい、仮説が。

「なあみんな、戦争に必要なのはなんだと思う？」

「えっと、武器かな？」

「正解。で、戦争をして得をするのは？」

「えっと、戦争で勝った方かな」

「不正解。それよりもっと利益を得る奴らがいる」

「誰？」

「武器を『製造する人間』だ」

3人とも俺の言葉が理解できないのか、首を傾げている。俺はわかりやすく説明する。

「じゃあもつと簡単に言うよ。ある二つの国が戦争をする。だがそれには武器がいる。なら武器をどこからか買う必要がある。一つの

会社から、二つの国が武器を買ったら一番得するのは……」

「その、会社……」

「ああ、それによってその会社は莫大な資金を手に入れることが出来る。つまり、戦争を経済に変えていたってこと。もしこれが、クラウン家の強力な兵器と入れ替えると？」

「キマイラの密売……」

「そう、莫大な資金と強力な権力はキマイラの密売から得た。だから管理局関係者の一部が買収され、クラウン家の情報が機密事項になった……まあ、全部俺の仮説だけど」

「でも、それには……」

なのはが言いかけて、俺は頷く。

「そう、証拠がない。」

それを証明する確実な証拠がこちらには一つもない。これでは、管理局は動くことが出来ない。

「だが、証明することが出来る方法が二つある。」

「二つの方法？」

「一つ目、ゼオンに真実を話させる。二つ目、クラウン家が今まで
の罪を認める。」

「どつちも難しいね。」

「ああ、だが二つ目は可能性が低すぎる。俺達が行っても、買収された人間に阻まれるのが関の山だ・・・はあ」

全員でため息をつく。真実に近づこうとしても、その手が届かない。

「あらあら、皆でため息ついて、どうしたの？」

「お母さん・・・」

「いえ、ちよっと・・・」

「ほら、疲れてるでしょ？ハーブティーを入れたわ」

そう言って桃子さんが俺達にハーブティーを置いてくれる。

「ありがとうございます」

「お母さん、ハーブティーなんてメニューにあった？」

「ううん、今度出そうと思っているのよ。疲れた体がすぐに元気になるわ。」

「あ、おいしいですね」

「本当、落ち着けるね・・・」

皆で和む。とりあえずこれ以上は調べられそうにない。結局それで今日はお開きになり、解散になった。その帰り、俺はまだ一つだけ

気になることをメシアに聞いた。

「メシア」

『はい、なんでしょう?』

「聞きたいことがある」

『なんですか?』

「ゼオンの恋人についてだ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「それを俺は、マリカの口から聞いたことがなかった。だが、ゼオンは恋人を亡くして、管理局を辞めたと聞いた」

『それは・・・私達の闇です。』

「お前達の、闇?」

『そう、私達が清算しなければいけない過去の闇です。』

メシアの声が、いつもと違って低かった。

「俺は、ゼオンの目的を知るには、その話を聞く必要があると思う。」「

『真実の中の真実・・・ですか?』

「そうかもしれないな・・・」

『・・・わかりました。話しましょう、4年前の真実を』

今から4年前・・・私とマリカはゼオンと共に管理局へと入局しました。次期頭首がすべきことではないと反対もありましたがその反対を押し切り、ゼオンは管理局の武装隊へと入隊しました。入隊後戦果を挙げたゼオンは武装隊「フロンティア」の隊長になりました。

「ふう・・・これで3件か。まったく、世の中物騒だな」

「そうですね、犯罪は増す一方、私達も戦うのが仕事ですが、その根源を消さない」と

そんなことを話していると、一人の女性がテーブルに座る。

「ゼオン、調子はどう?」

「ティーナ・・・まあまあだな。この後また出動だよ」

「ふふふ、実はね、私も今回は一緒なのよ。」

笑顔で話しをするこの女性。ゼオンの恋人であり武装隊「ファントム」の隊長を務めるティーナ・アーク。その温厚で明るい性格から、部隊で慕われる存在でした。

「なら、今度は「フロンティア」と「ファントム」の合同捜査か。」

「そういうこと。じゃ、後でね？ゼオン隊長」

「はいはい、ティーナ隊長」

そう言つてティーナさんと別れました。するとマリカがニヤニヤと笑つていた。

「ふふふ、主はラブラブですね」

「変なことを言つな。さて、俺達も行くぞ。」

「了解です、主」

『了解』

こうして、私達は悪夢を見に行くこととなります。二つの武装隊の合同捜査は、順調でした。犯罪者のアジトを発見し、あとは突入のみとなったのです。

「先行はファントム、後からフロンティアが援護で行くけど、いいのね？」

「ああ、地の利はファントムのほうが高いからな。お前の力はすごいからな。」

「そうかしら、最近教導隊で大活躍の『不屈のエース』には敵わないわ」

「ははは、あの子はすごいな。怪我からリハビリで復帰したエース。あの子はその年で有名人だ・・・っと、無駄話になつたな。作戦は

聞いたとおりだ。『フロンティア』は援護する。いいな？」

「……ラジャー！」「……」

「フロントム01、突入開始！行くわよ！」

「……ラジャー！」「……」

こうして、ティーナさんたちが突入を開始しました。

「フロンティア01、行くぞ！」

私達も後に続き、突入しました。アジトには気絶してバインドを駆けられた犯罪者がいました。しかし、それだけではありませんでした。突然、私に通信が入りました。

『ぜ、ゼオン！』

「ティーナ！？どうした！」

『た、助けて！か、怪物が……！ああ！ジャック！　ブツ』

「くっ！フロンティア！急ぐぞ！」

「ラジャー！」

こうして、私達は最深部へと急ぎました。そして、そこで待っていたのは、悪夢といえる光景でした。

「なんだよ……これ……」

そこには無残にもやられたファントムの隊員達でした。ティーナはデバイスを砕かれ、倒れていました。そして目の前にいたのは、三つ首の龍でした。ゼオンは障壁で怪物の進行を防ぐと、ティーナに駆け寄りました。

「なんだ！こいつは・・・！ティーナ！しっかりしろ！」

「あ、ああ・・・ゼ・・・ゼオン・・・みんなが・・・みんなが・・・」

「気をしっかり持て！マリカ、ヒーリングを！」

「ええ、わかってます！」

マリカがヒーリングをしようとしたその時でした。

バリイン！！

「な！？」

フロンティア全員で作り出した障壁がいとたやすく破壊され、爪や牙でやられていきました。

「やめろおおお！！！！！！」

ゼオンが私を振り上げ、斬りかかりました。しかし、その刃は通らず・・・

ゼオンはその後救援に来た別の部隊に助けられました。その後ゼオンは管理局を辞め、世界を周る旅を始めました。罪を償うのと同様に、その怪物を作った人間を探すために。そして、盗賊団シャドウとの戦いに繋がるのです。

俺は話を聞き終え、俺は一つの真実に辿り着いた。

「ゼオンは、もしかしたら延命なんかのために神になろうとしないかもしれない。」

『何故ですか？』

「あいつはもしかしたら、ティーナさんを・・・」

『生き返らせる・・・と？』

「ああ、人の命を操る神となる・・・それはすなわち、人間の蘇生・・・」

そう、ゼオンは恐らく世界を変えるためになど戦ってはいない。そして自分の延命のためでもない。ゼオンはきつと、たった一つの我侭のために神になろうというのだ。

「そんなこと、させるものか・・・」

『主？』

「人を生き返らせるなんて・・・あつてはいけないことだ・・・」

脳裏に浮かぶのは、両親の優しい笑顔。自分も大切な人を失った悲しみはわかる。だが、人を生き返らせることなど、あつてはならない。

「俺は何が何でも止めてやるぞ・・・ゼオン・クラウン！」

俺は強く拳を握っていた。

ここは夢の跡。一つの世界のなれの果て・・・

我の前には4人の幹部と数千人の部下。そしてキマイラ達がいた。

「良くぞ集まった・・・世界に絶望した者達よ。我らの力を現すまでの時間はまだあるが・・・貴様達は世界の管理者となり、すべてを救うことができる。そして我は神となり、全てを支配して見せよう！」

我の言葉に、全員が声を上げる。

「計画の決行は3ヶ月後！武装を整え、封印を解き！全ての世界を我らの手に！」

私の計画が始まる。世界の全てを変えるその戦い。我は神となり、そして・・・

(我は、かならずティーナを・・・)

第十三話「真実の中の真実」(後書き)

前回到引き続き過去話を投入。とても文を稼いでしまいました。

直人「それにしても、今回俺達は出番が少なかったな。」

なのは「でも話には出てきたよ。」

秋風「まあ、なのはは有名だからね。」

アリサ「秋風、そんなことよりあたし達はどうなってるのよ。」

すずか「そうだよ！冒頭に出てきただけじゃない！」

秋風「あ、あはは・・・まあまあ、落ち着いてくれよ。」

アリサ「あんたが言っていた番外編だって欠片もできてないじゃないかい！」

秋風「いや、アレやめた。」

アリサ「なんですつてえ！」

秋風「ぎゃああああ！話を聞け！本編でちゃんと出すことにしたから！」

アリサ「ホントに？」

秋風「ホント、ホントだよ。」

すずか「そう言っただけまかす気？」

秋風「大丈夫、だつてわざわざ決行を3ヶ月後にしたんだ。つまりGWから8月までは余裕がある。その間修行やら日常やらを書くから・・・多分」

アリサ「今多分って言わなかった？」

秋風「言ってますせん。」

アリサ「ちゃんと書かなかつたら殺すわよ？」

秋風「努力します・・・」

直人・なのは・フェイト・はやて「次回 第十四話『強さを求めて』
TAKE OFF!」

祝 10万ヒット！（前書き）

おかげさまで10万を超えました。これからもトイレットペーパーで綱渡りしているようなこの小説を頑張って書いていきますので、応援よろしくお願いします

祝 10万ヒット!

秋風「祝!10万ヒット!」

一同「わーい!」

なのは「まさか五万ヒットから一週間と少しで十万ヒットになるなんてびっくりだね」

直人「ああ、これも俺たちの頑張りのおかげだな」

秋風「おい、これは俺の努力だろ」

フェイト「でも最近は小説以外のことそっちのけでしょ?部屋だつてすごく汚いし」

はやて「バイトのことだつてまともに考えていてもやらへんし」

アリサ「テストだつて危なかったし」

すずか「MGOだつてまともにレベル上がらないし」

秋風「それ以上は言うなあ!」

直人「まあ、いろいろあったけど、今回は集計結果を見ようと思う。」

なのは「なんの?」

はやて「日にち別の結果やな」

直人「正解」

フェイト「残っているのは12月13日からのユニークからだね」

秋風「これを見るとどれが一番人気があつたかわかるな」

直人「一番多いのは15日の879か・・・」

フェイト「確かこの日は・・・」

はやて「第十話やね。」

フェイト「十話って確か空港火災の話だね」

なのは「で、次は16日の760だね。これは十一話かな？」

フェイト・はやて「じゅ、十一話！／＼／」

なのは「どうしたの？」

フェイト「なんでもないよ」

直人「そ、それでだな。この10万ヒットになったことで、秋風がなんか企んでるらしいな？」

秋風「おう、まあその辺は半分期待しとけ」

アリサ「なによ半分って！」

なのは「さて、これで今日はおしまい！」

フエイト「でも魔法少女リリカルなのは蒼天に舞う騎士はまだまだ続くよ？」

はやて「私達の活躍、見といてな？」

なのは「それじゃあ、次の本編に向かって？」

一同「TAKE OFF！」

祝 10万ヒット！（後書き）

ありがとうございました。記念の企画は恐らくお正月くらいになる
かもしねません。これからも応援よろしく願います。

第十四話「強さを求めて」(前書き)

今回はちょっとだけ短いです。

しかし次の話がとても長いので勘弁してください。そしてこれ以上オリジナルキャラを出さないとか言っておいてまたしても出てきます。申し訳ない。

第十四話「強さを求めて」

ここは高町家の道場。そこにいるのは俺となのはの兄、恭也さんだ。

「さあ、行くぞ」

「お願いします」

俺たちはお互いに駆け出し、剣を振るう。振るっているのはもちろん木刀。恭也さんは小太刀を二刀流で振るう。それに対して俺は木刀で対処する。もうかれこれ一時間以上の戦いだ。戦うことになったのには、こんな背景がある。それは、メシアから話を聞いた3日後のこと。

「なのは、頼みがある。」

「な、何かな？直人君・・・」

俺は翠屋でなのはと会話をしている。他の人たちは仕事ということ、で、なのはにしか頼めなかったことがあった。

「なのはは武装隊や教導隊に顔が利くんだよな？」

「え、うん・・・まあ・・・」

「腕に覚えのある騎士と模擬戦がしたいんだ。」

そう、これが頼みだった。シグナムさんでも良いのだが、彼女は仕事で忙しい。相手にはしてくれないだろう。だが生半可な相手ではゼオンに勝つことはおろか、シャドウを潰すことはできない。

「うん・・・まあ、いるといえばいるんだけど・・・難しいんだよね」

「頼む、聞いてくれたら何か一つ言っことを聞く」

「ホントに!？」

「あ、ああ・・・」

いきなり前に出てきたのでびっくりした。なのはの目が、キラキラと光っているような気がするけどまあ、気のせいだろう。

「じゃ、じゃあ・・・私と・・・デート、して?」

「デートって・・・まあ、いいけど・・・」

一瞬戸惑ったが、それを了承した。それくらいで頼みを聞いてくれるなら、安いものだ。すると、凄まじい殺気を感じ、その方向を見た。そこには鬼のような形相でこちらを睨み付けるなのはの兄、恭也の姿があった。すると、土郎さんが歩み寄ってくる。

「直人君、ちょっといいかい?」

「え?」

「お父さん?どうしたの?」

「恭也がさっきからすごく怒っていてね。大体理由もわかるのだが・・・道場に来てくれ」

「道場？」

「うちには道場もあるんだよ？」

なのは手を引かれ、俺達は翠屋を後にする。もう遅いので閉店らしく、士郎さんと桃子さんまでついて来ていた。道場に向かう途中、高町の家の男は御神流の剣術を習得しているとのはから聞いた。そして道場につくと、木刀を投げられ、恭也さんも小太刀の木刀を二本構えた。

「……戦う相手を探しているらしいな」

「え、あ、まあ……」

「俺が相手になろう。貴様に妹は渡さん！」

なんか趣旨が変わってるんだけど……てか、この人やっぱりシスコン？そして冒頭に戻る。

私は直人君とお兄ちゃんが戦う姿を見てる。なんか結果オーライ？すると、お父さんとお母さんが笑いながら二人の戦いを観戦する。

「すごいわねえ、恭也に追いつくなんて」

「ああ、彼の戦い方は独特だが、恭也に喰らいついているな」

「でもあなた？あなたもなのはが取られるのは嫌じゃないの？ねえ？なのは？」

「ふえ!?!」

「まあ、なのはもいつかはお嫁に行くだろうしな。それは悔しいが、彼なら許すぞ」

と、お父さんが満面の笑みで頷いている。

「あの、お父さん? 直人君ならって……?」

「なんだなのは、覚えてないのか? 父さんが怪我してしばらくしたら、絵を持ってきてくれたじゃないか。その時、直人君という子に優しくしてもらったと喜んでいただろう?」

「あ……」

そのことを思い出し、驚いた。まさか、お父さんがそれを覚えていたなんて。

「それでこの間自己紹介してもらったときびっくりしたよ。まさか、なのはを救った子が現れたからね。」

救った。確かにその通りだった。直人君は、闇のどん底にいた私を助けてくれた。だからそんな彼の優しさと笑顔に惹かれた。そんなことを思っていると、戦いに決着がつこうとしていた。

「さあ、最後だ……覚悟しろよ?」

「はあ……はあ……それは、こちらのセリフ……です」

「うおおおおおおおおおおおおお！……………」
「……………」

二人の木刀が激突する。そして……

「はあ！」

「ぐっ……くう……」

お兄ちゃんが倒れた直人君に小太刀を向けている。私はすぐに直人君のところに駆け寄った。

「直人君！大丈夫！？」

「あ、ああ……まさか、こんなに強い人がいるとは、びっくりだよ」

「な、なのは……勝ったのは俺なのに……」

と、お兄ちゃんが言ってるけど無視。すると、お父さんが来た。

「直人君、惜しかったね。」

そう言ってお父さんが手を差し出し、直人君がその手を取って立ち上がった。

「ありがとうございます」

「一つ聞きたいんだが、君はどうして剣を振るうんだい？」

「それは……なのは達を守り、家族を助けるためです」

「……………守ることと助けること……………か。難しいぞ？両方は」

「それでもやります。」

直人君がお父さんの質問に真剣な目で答えている。すると、お父さんがニツコリと笑顔を作った。

「いい目だ。直人君、強くなりたいならうちに通いなさい。俺と恭也が面倒を見よう。」

「え、いいんですか？」

「ああ、だがちゃんと今言った二つをやり通すことが条件だ。」

「はい、必ず」

直人君が強く頷いた。

「じゃあ、直人君今日は泊まってごう？もう遅いし、それに明日は休みだから」

「え、まだ8時だけど……………」

「いいから泊まってくの！」

「……………わかったよ、そうする。」

私の言葉に、直人君は頷いてくれた。

とりあえず、今日はなのはの家に泊まることとなった。何故かって、もうなのはの目が恐ろしく怖かったからだ。だがその真後ろで剣を構えている恭也さんが怖かったが、土郎さんの「やめろ」の一言でその件は片付いた。夕食をもらい、空き部屋を借りた。とりあえず恭也さんが強かった。それはもう恐ろしいくらいに。お兄ちゃんじやなくて鬼じゃないかと思うくらい。土郎さんは恐らくもっと強いだろう。この人たちに鍛えてもらえば、きっと俺は強くなれる。そう思った。

『主』

「なんだ？メシア」

『主はなのは嬢達にあのことを言わないんですか？』

「言うわけがないだろ。お前達のことなんだ。」

人の過去など、そんなたやすくばらしてしまうことはしない。

『そうですか……ありがとう、主』

「どういたしました。お前にお礼を言われたのは初めてな気がするよ」

と、俺が苦笑する。

『マスター、一つ正直な話をしていますか？』

「なんだ？」

『ゼオンには剣術だけでは勝てません』

「……だろうな。それは俺も思ってたところだ」

『ゼオンは恐らく、多くのキマイラを出して来るでしょう』

「そのためにはどうすればいい？」

『目には目を、歯には歯を。こちらと同じように手数をそろえればいいのです』

手数を増やす？ いったいどういうことだろうか？

『マスターが契約しているのは現在『エルフ』であるカナリアだけです』

「それはつまり……？」

『そう、他の召喚者との契約です。』

「……それは無理が生じるか？」

『多少は生じます。魔力配分が今まで異常に辛くなるでしょう』

俺は考える。確かに手数は多いほうがいいし、強さを手にするのは悪いことじゃない。だが……

「なのはとの約束を、破りたくない……」

そう、無茶はしないという約束。多少の無茶でも、無茶は無理だ。
すると、ドアがノックされ、ドアが開いた。

「直人君、今いい？」

「ああ、どうしたんだ？なのは」

「うん、あのね・・・直人君？どうしたの？」

「え？何が？」

「元気がないみたいだけど・・・」

「いや、何でもないよ・・・」

「嘘」

「うっ・・・」

何でこいつはこういうときにそういうことを見破るかな？

「何かあったでしょ。どうしたの？」

「ああ・・・新しい力について、ちょっとな・・・」

俺は召喚について話した。

「そっか・・・」

「強くなりたいが、俺はお前との約束は……」

「いいよ、無茶しても。」

「は？」

なのはがニツコリと笑う。

「強くなるには、多少無茶したって構わない。でも、無理をしすぎるのがいけないだけ。ごめんね、言い方が間違えてたかも。」

「ありがとう、なのは……俺は、もっと強くなる。そして、みんなを守る。」

俺がそういうと、なのはが顔を赤くする。

「う、うん……あ、それでね、お願いがあつたの」

「お願い？」

「今日、一緒に寝たら駄目かな？」

駄目かなじゃないだろ。仮にも15の男と女だぞ？そんなことを言おうとしたが、なのはが目をウルウルとさせ、上目遣いでこちらを見ってくる。

「好きにしてくれ……」

俺はそれしか言えなかった。

「うん、好きにする」

こうして、俺はなのはと寝ることになった。

次の日の朝。俺となのはは海鳴の丘の公園に来ていた。朝4時30分人の気配はない。俺は新たな召喚者を呼び出す準備を始めていた。

「じゃあ、やってみて？危ないと思ったたらすぐに戻すんだよ？」

「ああ、わかってる。」

そう言っただ俺は詠唱を始めた。

我は望む、汝の力……その力は焰……永遠の業火なり

全てを焼き尽くし、その炎は悪を浄化する

聖なる光を纏いし者には永遠の温和を与える

全てを焼き尽くすその業火と共に、我の前にその姿を現せ！

『ケルベロス！』

我は汝との契約を求める！

俺の言葉と共に、魔法陣から炎が現れる。そして、そこから三つ首で、紺色の獣が現れた。そして三つ首が一斉に喋り出す。

「……俺の名は『ケルベロス』のニド……俺を呼んだのはお前か

「小僧……」

「ああ、そうだ。俺と契約してくれ。」

「……はっはっはっは！面白いことを言う餓鬼だ！俺を恐れないのか！」「」

「呼んで恐れてどうするんだよ。」

「……本当に面白いことをいう餓鬼だ！我が求めるのは戦！貴様と契約して俺は戦えるのか！」「」

「当たり前だ。戦わないのにお前みたいな誰が呼ぶか。それと、俺には餓鬼じゃなくて直人って名前があるんだ、二ド」

「……ほう、俺達を名前で呼ぶか。気に入ったぞ直人！お前と契約しよう！戦になったら呼ぶがいい！」「」

そう言って二ドは消えていった。

「ふう、これでケルベロスとの契約は完了だな。」

『はい、彼は戦いを求めます。今度戦うには持って来いですね』

そんな話をしていると、なのはが震えながらこちらに近づいてきた。

「なのは、どうした？」

「こ、怖かったぁ……」

「あー、はいはい、わかったから抱きつくな」

「うう……なんであんなのが出てくるの？」

なんかホントに怖がつてる。すると、メシアが説明を始める。

『ケルベロスは元来より好戦的で、見かけが怖いのがほとんどです。あれはまだいいほうだと思いますよ？』

「そ、そうなんだ……」

『じゃ、二人目行きますよ、主』

「え、まだやるの!？」

「ああ、契約数が二人じゃ足りないんだ。最低でも3人だそうだ。」

「うう、また怖いのが出てきたらどうしよう……」

「はいはい、わかったから下がっててくれ？」

「………うん」

なのはが離れると、俺は再び魔法陣を展開する。

「よし、やるぞ……」

我は望む、汝の力……その力は水の力

その力は全てを流し、洗い去る 人々を潤し、悪を消し去る浄化の水
悪には苦しみの癒しを

聖者には潤いの水を

大いなる聖なる水と共に、我の前にその姿を現せ！

『ポセイドン！』

我は汝との契約を求める！

魔法陣が光、今度は一つの水の柱が現れ、そこには透き通るような
水色の肌をした女性がいる。てつきりごつい爺さんかと思っていた
けれど違ったみたいだ。そして水が弾け飛び、女性が目を開けた。

「私を呼び出したのはあなたね？」

「ああ、そうだ。」

「私と契約を望むの？」

「そうだ。望みは何だ？」

「私の望み・・・それは気高き心。貴方は何故戦うの？」

「俺は、皆を守り、家族を救うために戦う。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

睨み合う二人の間に、沈黙が流れる。

「ふ、ふふふふ・・・貴方、面白いわね。カナリアが言ったとおりだわ」

「カナリアが？」

「私はカナリアの親友。「ポセイドン」のターナ。それと、さっき契約したニドの腐れ縁よ」

「そう、なのか？」

「面白いものね。ニドが面白い子供と契約したと言ったら、今度は私と契約しようなんて」

「普通はしないのか？複数に契約を」

「普通はしないわ。でも、複数に契約するなんて、よほどその守りたいものと救いたいものが大きいのね。いいわ、契約しましょう。名前を教えて？我が主」

「井上直人だ。力になってくれ、ターナ」

「ふふ、私達を名前で読んでくれるのね。わかったわ、我が主、直人。貴方の力になりました。必要になったらいつでも呼んで頂戴。ニドの馬鹿よりは私は強いから」

そう言ってターナが消えた。

「ふう・・・これで終わりか・・・」

俺はため息をつく。時計を見るといつの間にか6時だ。

「なのは、帰ろうか」

「うん。この後お父さんが特訓してくれるって」

「そうだった。急いで戻るぞ」

そう言って俺が駆け出す。

「あ！待ってよ！」

なのはも後から走ってくる。共に並び、俺達は高町家へと戻っていた。

第十四話「強さを求めて」(後書き)

さて、今回は新しく二匹の召喚者が現れました。獣ではないなあなんて思ったので、者にしました。さて、プロフィールをどうぞ。

名前 二ド

種族 ケルベロス

属性 炎

契約者 井上直人

力 獄炎の炎

効力 絶対的な破壊力を持った炎を放つ。その攻撃力は凄まじく、1000000の炎を繰り出す。その炎をによって倒す敵は二ドの意思によって決められる。

名前 ターナ

種族 ポセイドン

属性 水

契約者 井上直人

力 絶対零度

効力 敵の行動を停止させるほどの温度を持った水の力を持ち、その水はケルベロスの炎を持ってしても蒸発する事はない。ただし、ケルベロス同様その力は本人の意思に委ねられている。

直人「ひとついい？」

秋風「なに？」

直人「何でポセイドンは女なの？」

秋風「当初おっさんにしようと思ったんだが、カナリアの親友と考えたら女がいいかと」

直人「ケルベロスか、相変わらず好きだな」

秋風「なんで？」

直人「お前某アーケードゲームで毎回のように使っじゃないか」

秋風「いいだろ、ちゃんと北欧神話の神や聖獣で固めてるんだから」

直人「まあ、そうなんだけどさ。」

秋風「そのうちもっとすごいのが出てくるから期待しておいてくれ。」

直人「まあ、あんまり期待してねえよ」

秋風「・・・フェイト、はやて。この話見たよね？」

第十五話「二人の想いと新たなる力」(前書き)

またしてもサブタイトルが変わってしまいました。申し訳ありません！

しかしながら、内容は今回とてもこっているつもりです。どうか温かい目で見守ってあげてください。

第十五話「二人の想いと新たなる力」

季節は6月。高町家に通うようになってもう一ヶ月が経とうとしていた。まだシャドウは動きを見せず、沈黙を続ける。そして、俺は士郎さんと剣の特訓を重ねていた。

「つく！ハア！」

「甘い！」

「ぐっ……！」

剣を振るうが、捌かれすぐに反撃される。駄目だ、これ以上やっていても勝てる気がしない。すると、士郎さんが剣を収めてしまった。

「えっ……!?!」

「今日はこちらまでだ。今の状態じゃ、俺には勝てない」

「大丈夫です。まだやれます！」

「駄目だ。なのはから無理はさせないように言われていてね。それに店に戻らないと」

士郎さんが指を指すと、もう6時半だ。これ以上店を開けるのはまずいだろっ。

「わかりました。ありがとうございます」

「うん。だが、確実に強くなっているよ。自信を持つといい。」

「あ、はい・・・とりあえず店に戻りましょう。桃子さんたちがきつと苦労していますから」

「ああ、そうだな」

そう言っただけで俺たちは道場を後にする。俺は土郎さんたちに教えてもらう代わりに、店の手伝いをしている。店に着き、扉を開けた。その瞬間、ものすごい殺気を感じた。こころなしか、冷や汗まで出てくる始末だ。すると、そこには4人の修羅というべき存在がいた。その真ん中で、なのはが汗をダラダラと掻いて、ソファー席で正座している。その修羅の一人に手招きされた。逃げようとも考えたが、なのはが助けてと視線を送ってくるため、俺は仕方なく席に座った。もちろん、なのはと同じ真ん中に。

「じゃあ、説明してくれる？直人・・・？」

修羅の一人、フェイトがニツコリと笑って俺に言う。ただし、その背中にはドス黒いオーラが立ち上っている。他の修羅、はやて、アリサ、すずかも同じだ。

「えつと、何を？」

「どうして連日なのはの家に泊まっていたのかに決まっているじゃない？」

アリサが拳を固めている。恐らく返答しただけでは鉄拳制裁が待っているのだろつ。とりあえず真実を話しすぎるのは良くないようだ。

「とりあえず、簡単に説明「簡略禁止！」・・・はい」

アリサに怒鳴られ、とりあえず俺は説明した。なのはに知り合いに腕に覚えのある騎士がいないか尋ねると、なのはの兄の恭也さんが戦うと買って出て、その後土郎さんに剣術を習うこととなり、帰ろうとしたらもう遅いということと泊まることとなったこと。それ以後、熱が入りすぎた日には9時を過ぎてしまい、致し方なくなのはの家に泊まっていたと話した。とりあえず恭也さんと戦うことになった少し前のことは黙っておくことにした。これ以上言ったら殺されそうだから。

「・・・事情はわかったで・・・でも、その前に、なんでその相談をうちらにはせんのか？」

「そうだよ、私だって剣は使えるし、はやての所にはシグナムがいる」

「あたしだって力になるうと思うわよ！」

「どうしてなのはちゃんだけに相談したのかな？」

皆の目が怖い。なんかもうその睨みつけるだけで人を殺せそうな勢いだ。周りの席の人たちはそそくさと代金を払って出て行ってしまった。

「フェイトとはやては忙しそうだし、アリサやすずかは魔法のこと関係ないし・・・」

「「関係ないわけない！」」

アリスとすずかに怒鳴られる。フェイトとはやても睨みつけている
ままだ。

「あたし達だつてもう赤の他人じゃないのよ！」

「フェイトちゃん達に聞いたよ？マリカさんが敵に連れ去られたつ
て」

「でも、それは二人には・・・」

「「関係ある！」」

もう圧倒されっぱなしである。いつの間にか店内には自分達しかない。
桃子さんが遠くで苦笑しながら閉店の看板をかけていた。

「あなたね、一人で苦しんで何になるのよ！」

「そうだよ！私達は魔法も使えないし、戦うことも出来ない。でも・
・・・」

「「一緒にその苦しみを背負うことは出来る！」」

「二人とも・・・」

なのはもこれには驚いていた。まさか、二人もここまで言うとは思
つていなかったのだらう。俺だつてそうだ。フェイトとはやてはそ
れを聞いていたのか、もう睨んではいなかった。

「だけど・・・」「口答えしない！」・・・はい」

「いい!? あたしだってね、好きでこんなこと言ってないのよ!?
あんたが心配だから言っているの! わかる!？」

「私達を守ってくれる・・・そう言ってくれるのはとても嬉しい。
でも、直人君は誰に守ってもらおうの?」

二人の言葉が見に染み渡る。この二人は俺を心配してくれていたんだ。怪我をした時だって、泣きついて心配までしてくれた。そんなこと、普通はしてくるものじゃない。

「・・・二人とも」

「何?」

「ごめん」

俺はただ一言、そう言った。俺はただ一人で走り続けていたことによくやく気がついた。俺だって、守ってもらっているんだ。すると二人が顔を赤くした。

「わ、わかればいいのよ!」

「うん、わかってくれたなら、それでいいよ・・・」

俺は心の中でため息をついた。これでようやくこの威圧感から開放される。そう思った。しかし・・・

「直人君? これで終わりかと思ったたら大間違いやで?」

「そう、まだなのは家に泊まったことは片付いてないよ?」

二人に心を読まれた気がする。二人の笑顔が怖い。アリサとすずかも笑っている。

「4人で色々考えたんだけどね」

「明日から土日+月曜と火曜と水曜は連休でしょ？」

そう、学校の小学、中学、高等学校の設立記念日が月曜と火曜と水曜日で並んでいるのだ。

「よって、直人は明日から私達全員の家へ一日ずつ交代で泊まりに来るようにしなさい！」

「「ええ〜!？」」

俺となのはは思わず声を上げた。なんだその休日を潰されるような企画は……

「お、おい!なんだその滅茶苦茶な話は!」

「そうだよ!なんでそうなるの!??」

「なのは?直人を独り占めにしようなんて100年早いわよ?」

「そうそう、大切なものは皆で共有するんだよ?」

俺はものか。という突っ込みをすずかにする前に、アリサが机を叩いて立ち上がる。

「と、に、か、く!これは決定事項よ!それで、これが予定表ね!」

一日目 フェイト

二日目 アリサ

三日目 はやて

四日目 すずか

五日目なのは

「おい、なんでなのはに怒っていたのになのはまで日程に入ってるんだ。」

「それは当然、共有するからには、なのはが入らないのはおかしいからよ。」

おい、俺に人権はないのか。などと思っているが、フェイトがニッコリと笑みを浮かべる。

「直人？明日はちゃんと家に来るんだよ？」

脱出不可能。転移魔法はマリカがないから出来ない。俺はため息をつくしかなかった。

みんなが帰った後、俺は翠屋の掃除を終え、帰宅することになった。すると、なのはが寄ってきた。

「ごめんね、直人君。私が最初にあんな我俣言ったから・・・」

「いいよ、おかげで強くなる特訓をさせてもらってるんだ。これぐらいはね・・・それに」

「それに？」

「皆と会えて、こんな楽しい日々を送れるんだ。恩返しくらいしいないとな。それじゃあね」

そう言っただけで俺は店を出て行った。俺は帰路につき、しばらく歩いているといくつかの視線を感じた。俺は360度が見渡せる広い公園に出ると、立ち止まった。

「・・・出てきたらどうだ？」

俺がそういうと、複数の影が飛び出した。4人の黒服。

「・・・誰だ？お前ら」

「我々と一緒に来てもらおう」

「嫌だ・・・と、言ったら？」

「無理やりでも連れて行く」

黒服の中でも、一番体格のいい男がデバイスらしきものを構えた。俺もメシアに手をかける。

「メシア、やるぞ」

『了解、マスター』

そう言つてセツトアップする。それと同時に4人が俺に襲い掛かった。

「きええええええ！」

「ん！？」

敵が襲い掛かつてくるとき、俺は異変に気がつく。

「はあ！」

「ぐあ！」

敵をいともたやすく吹き飛ばした。ぜんぜん力を入れた覚えがない。

「なんだ、この感覚……」

「よそ見している暇があるのか！」

別の男が今度は槍を突き出すが、俺はそれを避け、掴み取った。

「一つ聞くぞ？本気でやっているか？」

「なんだと！？ガキの癖に生意気を！」

そう言つて怒つた男が槍を振る。だが、やはり一つのことには確信を得た。

「遅い！」

俺はそのままメシアを使わず、とび蹴りで槍を持った男を吹き飛ばした。そう、遅い。敵の攻撃も、動きも全て見えるのだ。

「これが、士郎さんが言ったことか・・・」

その後も襲い掛かってきた一人を吹き飛ばし、最後に先ほどの体格のいい男が残った。

「ふむ、貴様やるな・・・」

「・・・あんたみたいなおっさんに言われても嬉しくない」

「ふっ・・・まあいい・・・今度は私が相手だ」

そう言って男は手に持っていたランスを構えた。俺は構えを取る。正直、こいつは強い。理由は殺気が尋常ではないからだ。

「・・・いいだろう」

数秒の沈黙。そして・・・

「「うおおおおおおおおおお！！！！！！」」

俺は駆け出し、男も駆け出した。そして男のランスとメシアが激突する、まさにその時だった。

「やめいー！！」

「「！！」」

一人の男の湯が入った。ほんのあと数センチで互いの武器が交わる寸前だった。そして声がしたほうを見た。そこにいたのは、紺色のスーツに身を包んだ初老の男。

「アルザック、そのランスをしまえ、失礼だ」

「はっ！」

そう言つてアルザックと呼ばれた男がランスを待機モードに戻し、懐にしまった。俺もメシアを戻し、男を見た。

「誰だ？」

「自己紹介が遅くなった。私はクラウン家20代目頭首レット・クラウンだ」

「クラウン家・・・そのクラウン家が何のようだ？」

「少し君と話がしたくてね。もちろん、ゼオンのことだ」

レットが喋る。俺はその理由がいまいち理解できなかった。なぜ、この男は俺の前に現れたのか？それが理解不能だ。だが、その前にやるべきことがあった。

「聞いてもいいが・・・その影にいる奴の武器を引っ込めてもらおう」

「ほう、気がついていたか・・・やめさせろ、アルザック」

「はっ！」

アルザックが手を上げると、黒いスーツを着た女性が武器を収め、肩ひざを突く。

「君の名前を聞いていいかね？」

「管理局嘱託魔導士、井上直人」

「ほう、管理局員か・・・」

と、レットは少し驚いた表情だ。だが、俺はそんなことを話している場合じゃない。

「とつとと本題に入ってくれ・・・あんたは何故俺に会いに来た？」

「貴様！レット様に対して・・・」

「いい、アルザック。君を探していたのは言うまでもない。我が息子、ゼオンのことだ」

「ゼオンの・・・？」

「そうだ。我が息子が革命団を率い、何かをやらかそうとしている事を局から聞いた。3年間、ゼオンとそのデバイス、マリカとメシアを探したが、見つからず困っていた。だが、君が現れ、ゼオンと接触したと聞いてね。」

「それで？俺に何をしろと？」

「君にゼオンを止めてもらいたい。報酬は望むまま支払うでしょう」
そう言つてアルザックがアタッシュケースから金を見せる。だが、
俺の答えは決まっていた。

「断る。そんなものを受け取る気も、あんたらのために戦つ気もな
い」

「ほう、どういう意味だ？」

「俺は管理局のためでもあんた達のために戦つてはいない。俺は、
俺のために戦っている。」

その言葉に、レットが眉を少し吊り上げる。そして……

「……ふっふっふ……はっはっは！」

「何がおかしい？」

「いや、君のような若者を見るのは久しぶりでね。」

「俺を試したな？」

「いや、すまなかつた。確かに君達にゼオンを止めて欲しいのは確
かだ。そして、その様子では私達一族のことはもう調べているよう
だな。」

「あんた達一族がどれだけ非道なことをしてきたのか……俺たち
はもう調べた。ゼオンだつて、その被害者の一人だ」

「……確かに、ゼオンは人工的に作られた人間だ。だが、私は奴

を息子と思っている。」

「なに？」

「ゼオンは、プロジェクトFの力を元に生まれた子供だ。だが、それには理由があった。結婚した私達夫婦には子供が宿らなかつた。だから人工的に子供を作り出した。それがゼオンだ。」

「違法だとわかっていて作ったのか」

「もちろんだ。私達はその罪を償うために、あの子を息子として育て続けた」

レットの表情に悲しみが浮かぶ。だが、俺は警戒を解かない。

「だが、あんた達の罪はそれだけじゃない。キマイラの精製、密売に始まり、デバイスの違法実験・・・あんた達は、どれほどの罪を重ねる気だ」

「わかっている。先代から行ってきたことだ・・・」

「なら、どうして!」

俺には今までにないほどの怒りがこみ上げていた。先代から？なら何故償おうとしない？そして何故、わかっけていて罪を重ね続ける？

「私の代で、その罪を全て清算する。もしゼオンを止めてくれたら、私は管理局にいや、管理世界全てに私達一族の罪を認めるとしよう。」

「・・・それは、信じていいのか？」

「ああ、もちろんだ。今にも、ゼオンは苦しんでいる。私はそれを助けたいのだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もちろん、先ほど言ったようにただとは言わない。金を受け取ってくれないなら、代わりにこれを受け取ってもらえぬか。」

そう言ってレットが取り出したのは一つの十字架に燕が飛ぶ姿を付けられた、鎖のブレスレット。

「それは？」

「我がクラウン家に伝わる初代頭首が使っていたデバイス『ブレイブスワロー（勇敢なる燕）』だ。これを君に託したい。」

「ブレイブ・・・スワロー・・・」

俺はそのデバイスの美しさに見惚れた。その十字架の上に跳ぶ燕の姿が、美しかったのだ。

「頼む、ゼオンを救ってくれ」

「・・・勘違いするなよ。俺はゼオンのためには戦わない。俺は、俺のため・・・俺の大切なもののために戦うんだ。」

そう言って俺はブレイブスワローを受け取った。すると、女性の声がする。

『初めまして、新たなマスター』

「お前もインテリジェントデバイスか」

『はい、メシアは私を元に開発されています』

「そうなのか、メシア」

『はい、その通りです。ブレイブスワローは私の兄弟機にあたりま
す』

俺はそのブレイブスワローを腕に付け、レットを見た。

「約束は守れよ……」

「ああ、わかっている。頼むぞ、井上直人」

「ああ」

そうやって俺は公園を後にした。

「よろしかったのですか？あのような子供に……」

「アルザックよ……お前の目は節穴か？」

「は？」

「彼の目には、一人前の戦士としての覚悟があった。私は彼に賭けてみたいと思った。彼なら、ゼオンを救い、私達の罪を消してくれ
そうな気がした」

「レット様……」

アルザックは未だ心配そうだ。だが、私には心配などなかった。

「アルザックよ……私達老人ではなく、彼のような若者が未来を変えるのだ。汚れきったこの古いぼれには、道標になることしか出来るのだよ。」

そう言って私は帰路につく彼の背中を見続けていた。

第十五話「二人の想いと新たなる力」（後書き）

さて、またしてもオリキャラが出ましたね、そして次の話はとうとうギャグというか、恋愛話が連発します。多分一話じゃ終わらないな。

直人「おい、どういうことだ？」

秋風「なにが？」

直人「新デバイスのことだ。なんであんなのが出て来るんだよ」

秋風「今回はまじめに考えて出してみた」

直人「いつもまじめじゃなかったのか！」

秋風「そういうわけじゃないが、今回はこれはいいな。という理由があつてのことだ。」

直人「それならいいが・・・」

秋風「まあ、君の乱立フラグは揺るがないけどね」

直人「やっぱりか！てか、なんであんなの書くんだよー！」

秋風「楽しいからに決まってるじゃん」

直人「やっぱりか！あんたはいつも・・・」

秋風「ストップ、今回はブレイブスワローの紹介あるからここまでな」

直人「なんだとおおおお!!!」

ブレイブスワロー

稼動暦 旧暦からのため、不明

形式 古代ベルカ式

待機モード 十字架のブレスレット

展開形態 剣（メシアとは形が異なる）

好きなもの 光 気高き心

嫌いなもの 闇 歪んだ心

クラウン家初代頭首「ゼオン・クラウン」が使っていたデバイス。旧暦からというのもあり、その剣の破壊力は凄まじい。扱える人間も限られており、訓練をつまなければ使うことは不可能。気高き心を持つものを主と認め、戦いにも自らの誇りと信念を持つ。メシアとは兄弟機であり、メシアにとっては姉のようなものである。剣は普通の剣で、変化はないが、デバイス複合システムを備えている。

秋風「それでは次回第十六話『騒がしくも平凡な日常（ハラオウン家編）』TAKE OFF!」

第十六話「騒がしくも平凡な日常（ハラオウン家編）」（前書き）

今回はファンの方が直人に殺意を抱く作品です。

書いていた自分も主人公に殺意が沸きました。それでは本編をどうぞ

第十六話「騒がしくも平凡な日常（ハラオウン家編）」

ブレイブスワローを受け取った次の日。俺はフェイトの家を訪れた。が、ここで一つ問題があった。クロノ提督である。あの人もシスコンであることはわかっている。あの人の魔法で殺されることもあるかもしれない。まあ、とりあえず家の前で突っ立っていても迷惑なので、とりあえずインターフォンを押した。

「はい！」

「井上直人です。」

「ちょっと待っててね、フェイトー！」

インターフォンから女性の声が聞こえ、バタバタと階段を下りる音が聞こえた。扉が開き、フェイトが出てきた。そういえば私服のフェイトを見るのは久しぶりだな。

「い、いらっしやい・・・」

「ああ、とりあえず時間通りか？」

「ううん、少し早いね。じゃあ入って」

「おじゃまします」

そうやって俺はハラオウン家にお邪魔することになった。家に入ると、緑色の髪の女性が迎えてくれた。

「いらっしやい、あなたが井上君ね？」

「あ、はい……」

随分と若い女性だ……クロノ提督のお姉さん？

「クロノとフェイトの母のリンディよ。よろしくね」

お母さんかよ！と、内心突っ込みを入れたかったが、入れると後が怖いのでやめた。

「はい、お世話になります。」

「まさかフェイトが彼氏を家に呼ぶなんてびっくりね」

「え！？」

「か、母さん！まだ違うんだってば！」

フェイトが顔を赤くする。まだってなんだよ。すると、ただならぬ殺気を感じ、後ろを見た。そこにはクロノ提督がいた。

「く、クロノ提督……」

「やあ、直人」

「あの、その手にある杖はなんですか？」

「これが、これでお前を永久的に氷漬けにしようと思ってな……」

やばい、目が本気だ。すると、俺の背後からまた殺気が出てきた。今度はフェイトだ。

「クロノ？直人に手を出したらどうなると思うっ？」

「フェ、フェイト待て、……僕が悪かった……冗談だよ」

「冗談でデュランダルは出さないよね？」

フェイトもいつの間にかバルディッシュをザンバーモードにしていた。こいつが、フェイトの剣か……そんなことを思っている間に、ザンバーを当てられたクロノ提督は吹き飛び、窓の外へと突っ込んだ。ご愁傷様、クロノ提督。

「まったくクロノは……ゴメンね直人」

「あ、あはは……」

怖いんだけど、滅茶苦茶。なのはが一番怖いと思ったのは間違いだな。フェイトも十分怖い。

「じゃ、行こう」

「は？どこに？」

「一日家にいるのもつまらないし、動物園に行こう」

「動物園って隣町だろ？」

「うん、だから早く！」

そう言っつてフェイトが俺の手を引く。時刻は9時30分。早かったから疑問に思っつていたけど、こつういふことだつたのか。俺たちは動物園へ向かうこととなつた。

「うわあ！私、動物園初めてなんだ！」

「そつなのか。俺もここに来るのは初めてだな。」

家族で来たときはもつと違つところだつたしな。それにしても、フェイトははしゃぎまくりだな。そんなに嬉しいか、動物園が。

「さ、行こつ！目標は全部の動物を見ることだよ！」

そんな目標立てるなよ。といふか、何故かフェイトは俺の腕に手を絡ませてきた。

「おい、フェイト！？」

「こつうしたら恋人同士に見えるかな？」

「あのな・・・」

「ほら、行くよ！」

そつ言っつて俺はフェイトに引つ張られ、動物園を回ることになつた。

「ライオンだよ！直人！」

「ほんとだな。てかフェイト、随分はしゃぐな」

「だって、管理局に入ってからこんな風に遊んだことが少なくて・・・あー！ライオンバスだって！アレに乗ろうよ！」

ああ、ライオンの形した奴でライオンがいるエリアを回るあれか。あれって逆にライオンを挑発するんじゃないか？バスに乗り、途中で止まったりしてライオンが寄ってくる。すると・・・

「ガアアアア！！」

「きゃわあああ！」

「フェ、フェイト・・・」

大声出すなよ。まあびっくりするのはわかるけどさ。あとくつつき過ぎだ。周囲の人間めっちゃこっちを見てるから。

「もう大丈夫だから離れる、フェイト」

「い、ごめん・・・」

そう言ってフェイトが離れてくれた。すると、周囲から殺気（主に男）から来る。俺はフェイトを連れ、そそくさとその場を後にした。

「直人、次はペンギンを見に行こう？」

「ああ、わかった」

この後結局4時ごろまで俺は動物園を回り、俺たちはお土産を販売

しているショップへと足を運んだ。

「わぁ、可愛い」

そう言ってフェイトが見ていたのは文字盤が動物になったの時計。
値段は12400円

「それ、欲しいのか？」

「え、うん。でも高いから・・・」

「フェイトには試験のとき大分助けられたからな。すみません、これ一つください」

店員が反応し、ケースから時計を取り出し、気を利かせて包装して、しかも値引きまでしてくれた。どんだけ気前がいいんだ、この店員さん。

「直人・・・いいの？こんな高いもの・・・」

「ああ、言っただろ？お礼だってな。ほら。」

そう言って俺はその時計の入った箱を渡した。

「ありがとう・・・大切にする」

フェイトは顔を赤らめ、嬉しそうに笑ってくれた。ハラオウン家に帰ると、すでにリンディさんが料理の支度を始めていた。

「あら、お帰りなさい二人とも。楽しかった？」

「うんー!」

「ええ、とても。」

フェイトと俺が頷いていると、クロノが手招きをしている。フェイトがバルディッシュを構えようとするが、先ほどとは表情が違うことから俺はフェイトに部屋へ行くように言って、ソファアに腰を下ろした。

「どうかしましたか?」

「ああ、昨日のことだが、君はレット卿に会ったようだな」

「ええ、会いました」

「レット卿はなんと?」

「ゼオンを止められたら、一族の罪を認める・・・そう言っていました。って、どうして俺が会ったことを知ってるんですか?」

「ああ、実はレット卿を調べたら、昨日こちらに来たという履歴を見つけてね。もしかしたらと思ったんだ。」

「なるほど。」

さすがはクロノ提督。それだけでここまで予測できるのか。

「だが、そのレット卿の言葉は信じられるのか?」

「・・・正直、俺はレット卿を知らないので、はっきりとした答え

は言えません。でも、これを俺に託したなら、信じてもいいと思います。」

そう言っただけ腕に付けていたブレイブスワローを見せた。

「なんだい？それは」

「クラウン家に伝わるデバイス、ブレイブスワローです」

『お初にお目にかかります。クロノ・ハラウン提督』

「・・・レット卿がデバイスを託すほど、君は信頼されているのか・・・わかった。君の言葉を信じよう。それと、早く行ってあげてくれ。そろそろ視線が痛い。」

クロノが指す方向には、今か今かと待ち続けているフェイトの姿があった。俺は苦笑し、フェイトの所へ向かった。

「お待ちせフェイト」

「何の話？」

「ん？ああ、ちょっとな」

そう言っただけ俺は階段を上がる。荷物を持っているが、どうすればいいのだろうか？

「なあフェイト？俺は今日どこに寝るんだ？」

「私の部屋」

「は？ごめん、もう一度言ってくれろ？」

「だから、私の部屋。これはもう決定だよ」

フェイトが嬉しそうに言う。勘弁してくれ。部屋に入ると、良い匂いがする。女子の部屋に入るのは初めてだな。

「あ、そこに荷物置いてね。」

「あ、ああ・・・」

本当にここで寝かせる気か。すると、俺の目の前に沢山の写真が目に入った。それはなのは、はやて、すずか、アリサと共に映るフェイトの写真。

「へえ、いっぱい写真があるんだな」

「うん、私の人生が動き始めたのは皆のおかげ。だから大切にとつてあるの」

「そうなんだ・・・あれ？この写真は？」

そこには赤い髪の男の子と一緒に映る写真があった。年齢的に5、6歳だろうか？その隣にも、見慣れぬ小さな子供達の写真があった。

「あ、そっちは私が仕事の関係上で保護した子供達。その赤い髪の子、エリオって言うんだけど、その子は私が保護者になってるの。法的後見人はうちのお母さん」

「保護者って……大変だな、でもなんでこいつだけ？」

「……その子、私と同じなの」

「まさか、プロジェクトF？」

「うん、この子の両親が死んだ息子の代わりに作った子。それがエリオ。」

「……ごめん、聞いたらいけないことだったな」

俺はそれしか言えなかった。しかし、フェイトは優しく微笑み、首を振った。

「大丈夫。私、直人に言われて気がついたから。」

「え？」

「私はね、最近まで自分は人造魔導士だから幸せになっちゃいけないと思ってた。でも、直人は私を人間だって言ってくれて、幸せになるべきだって言ってくれた。だから、私は自分と同じ思いをした子供を助けたいと改めて思ったんだ。」

「フェイト……」

「あ、ごめんね変な話して。でも、嬉しいんだ。誰かに幸せになれるなんて言われたの、初めてだったから。」

フェイトはゆっくりと俺に近づき、手を握った。

「だから、今度は私の番。一緒に戦おう、直人。そしてマリカさんを取り戻そう?」

「……ありがとう、フェイト」

「フェイトー!直人君ー!ご飯できたわよー!」

「はい!」

「今行きます」

そう言つて俺たちが階段を下りた。すると、見たことのない女性と女の子がいた。

「あ、直人君だ。」

「あ、あれ、エイミイさんですか?」

「うん、正解。顔を合わせるのは初めてだよね」

見知らぬ女性はエイミイさんだった。そういえば試験のときも任務のときも音声だけだったな。すると、隣にいた小さな女の子がフェイト抱きついた。

「ただいまフェイト!」

「お帰りアルフ」

よく見ると耳が獣だ。

「フェイト、この子は？」

「この子はアルフ。あたしの使い魔なの。」

どつりで耳が獣なのか。じゃあつまり・・・

「犬？」

「あたしは狼だ！・・・あんたがフェイトの彼氏かい？随分と優男だね」

「アルフ！だからまだ彼氏じゃないんだってば！」

だからフェイト『まだ』をつけるな。またクロノ提督が後ろで睨んでるから。

「てか、エイミイさんはどうしてここに？」

「えつとねえ・・・」

「エイミイはね、来年クロノと結婚するの」

「あ、そうなんだ」

「フェイトちゃん！まだそれ秘密なんだよ！？」

エイミイさんがすつごく焦ってる。後ろではクロノ提督が顔を赤くしてる。シスコンの癖に初心つぎだな。

「へえ、おめでとつございます。」

「うう、ありがとう・・・」

エイミーさんは顔を赤くしながらエプロンを付けてご飯を運んでくる。メニユーはグラタン。うん、すごくおいしそう。でもねリンデイさん、僕の目の前で緑茶に砂糖とミルクを入れているのは何で？

「あ、母さん、私にも砂糖取って」

「はい、どうぞ」

フェイトは角砂糖を受け取り、ぼちゃぼちゃとそれを中に入れる。間違ってる！この親子緑茶の楽しみ方を間違ってる！

「直人は？」

フェイトに聞かれ、俺はブンブンと首を横に振った。エイミーさんとクロノ提督が苦笑している。二人はコーヒーだからいいけど、緑茶にこんなもの入れたら死ぬよ。でもどっかの国にそんな習慣はあるらしいけど、知ったことじゃない！

「俺はそのままでもいいよ」

フェイト、残念そうな顔しないで。俺甘党じゃないから。そんなこんなで夕食を終えると、リンデイさんとクロノ提督が改まって俺を呼んだ。ちなみにフェイトはお風呂に入っている。

「直人君、あなたにはなんてお礼を言ったらいいのか・・・」

「え？何のことですか？」

「え？あの、意味がよくわからないんですけど・・・」

「幸せにするんだろ？フェイトのこと」

「いや、幸せになるべきとは言いましたが、幸せにするとは言ってませんよ？」

俺の言葉に、二人は笑ってしまった。

「ふふ、通りでフェイトがあんなにオドオドしてたのね？」

「そういえばなのはやはやてたちに負けなと言っていたが、そういうことか」

二人が納得したけど、俺が納得できないのは何故だろう？するとフェイトが風呂から上がり、リビングに来ていた。

「ふう、上がったよ、エイミィ。」

「あ、オッケー！」

そう言ってエイミィさんが風呂に向かった。

「何の話してたの？」

「なに、ただの世間話さ。明日は本局に行くことになるし、フェイト、もう寝るといい」

「うん、そうする。直人、寝よっか」

「え？」

「ほら、早く」

俺はフェイトに手を引っ張られ、俺たちは部屋に向かった。部屋に向かうと、何故か一つのベッドに二つの枕があった。うん、幻覚と
思いたいね、これ。

「俺はどこで寝るんだ？」

「ここだよ」

指差す先にあるのはフェイトのベッド。おいおい、色々とおかしくないか？

「いいから早く！」

「うわっ！」

俺はそのまま手を引かれ、ベッドに入ることになった。

「おいフェイト、現状わかってる？」

「直人と二人つきりでベッドの中」

「もういいや・・・俺はもう寝るぞ」

「ふふ、照れちゃって」

照れちゃってじゃねーよ。普通こんなことしねーよ。

「じゃ、お休み」

「!」

そう言っつてフェイトが俺にキスをしてきた。

「お、お前なあ!」

「私はね、どんな手を使っつても直人を振り向かせる予定だから、よろしくね。」

そう言っつてフェイトは目を瞑つた。そして数分で寢息を立てて眠つてしまつた。

「はあ……まったくこいつは……」

俺はもう30分くらい眠れていない。理由はさっきの通りだ。仕方ない、椅子で寝るか。そう思っつてベッドから出よつとするが、フェイトが俺の服を掴んでいた。その手を離すと、その温もりを探すよつに手が動いた。こいつは子供か。俺は仕方なくベッドに戻り、手を握らせる。不安だつた顔が一気に落ち着いた顔になつた。そして・

「直人……ありがとう……」

涙を流していた。怖い夢でも見ていたのだろう。

「どういたしまして」

俺は眠るフェイトの頭を撫で、眠ることにした。

第十六話「騒がしくも平凡な日常（ハラオウン家編）」（後書き）

秋風「はい、ハラオウン家編おしまい」

直人「もうやだ・・・これが後4回続くわけ？」

秋風「もちろん。ま、みんな違うけどねストーリーは」

直人「当たり前だ」

秋風「そして増えていくフラグ・・・」

直人「そうそう・・・って！はあ！？何の話だ！」

秋風「それは話が進んでからのお楽しみだ」

直人「ふざけんなこら！ちゃんと説明しろ！」

秋風「大丈夫。フラグが立つのは4年後だから」

直人「どういう意味だ！」

秋風「読者の人たちがわかってるからそれでいいよ。ちなみに4年後はこのストーリーで」

直人「ほぼネタばれじゃねーか！」

秋風「それじゃ、またねー！」

直人「放置か！・・・次回第十七話「騒がしくも平凡な日常（バニングス家編）TAKE OFF！」

第十七話「騒がしくも平凡な日常（バニングス家編）」（前書き）

今回もファンの方が殺意を沸く作品です。

だんだん直人のキャラが壊れてるけどきつと気のせいだよな・・・

第十七話「騒がしくも平凡な日常（バニングス家編）」

ハラオウン家で一夜を過ごした次の日。俺は自宅に一度帰宅した。それというのも、アリサからのメールで「家に迎えに行く」というメールが来たからだ。すると、家のインターフォンが鳴った。出ると、十中八九アリサだった。後ろにはリムジンがある。初めて見たな、リムジン。

「お待たせ、迎えに着たわよ」

「ああ、悪いな」

そう言っただけ荷物を持って出ると、執事らしき男が横に出てきた。

「井上様。お荷物をお預かりいたします」

「ああ、どうも・・・」

俺は荷物を預けた。すると、姉の千草が出てきた。

「あらあら、貴方がアリサさんね。姉の千草です。」

「アリサ・バニングスです。直人君を一日お借りします」

「ええどうぞ。」

姉さんがニツコリ笑うけど、俺は笑えない。アリサの性格ががらりと変わっているからだ。そんな風に笑うのか、お前。車に乗り、しばらく二人とも無言。すると、先ほどのアリサが消え、いつものア

リサになった。

「ちょっと直人！なんか喋りなさいよ！」

「ははは、いつものアリサに戻った。」

「なんですつってえ！」

「わかった！わかったからその拳を下ろせ！」

アリサは「まったく」と愚痴を漏らしながら口を膨らませる。

「それにしても、本当にアリサはお嬢様だったんだな。」

「悪い？」

「誰が悪いって言ったよ？似合っていると思うぞ？アリサお嬢様？」

「もう！馬鹿にしないでよ！」

アリサが顔を真っ赤にしている。アリサって意外とからかうと面白いな。

「で、今日だけど、どうしたい？」

「は？何が？」

「一日家にいるって言うのもあれでしょ？どうせなら二人で出かけたいのよ」

「うーん、アリサに任せる」

まあ、動物園以外ならいいか。動物園はフェイトと行ったし。

「じゃあ、ショッピングモールに行きましょう!」

「ショッピングモール?この辺にあった?」

「海鳴から少し遠くに行ったところにある町に新しくオープンしたのよ。丁度行きたいと思ってたのよ」

「あ、そう・・・」

もともと俺に選択権はなかったわけか。まあ、いいか。そんなわけで、俺はアリサと共にそのショッピングモールに向かうことになった。

ショッピングモールに着くと、そこは人がごった返していた。新設オープンだからというのもあるが、今日は日曜日だ。人がいっぱいいるのも無理はない。

「随分人がいるな。で、何が欲しいんだ?」

「そんなの見ながら決めるわ!」

そうですね。さすがお嬢様・・・

「ほら、行くわよ!」

そう言っアリスが俺の手をひく。

「はいはい。」

アリスが顔を赤らめながら俺の手をひいていたので、俺は思わず苦笑してしまった。アリスにもこんな一面があったのか。二人で歩いていると、アリスが足を止めた。そこは婦人服売り場である。どのブランドかは知らないが、ちらりと見えたお値段を見て血の気が引いた。

「ねえ直人、これどう？」

アリスが見せてきたのは青いワンピースだ。

「いいと思うけど・・・」

「何よ？」

「そっちのオレンジの方が、アリスには合っていると思う。」

アリスってイメージ的には青よりもオレンジのほうが似合うよな。俺の感だけど。

「そ、そうかしら・・・」

「うん、それにそっちの黄色いシャツとかも似合うと思う。」

「・・・直人、あんたセンスいいのね」

「そうか？」

アリサは何故か俺を褒めていた。で、お値段は言えないほど高い額だった。うわぁ・・・進言したものの全部買っちゃったよアリサ・・・金持ちの買い物って本当にむちゃくちゃだ。この後も色々な所を引っ張りまわされ、ようやく午前が終了。え？これで午前終わり？もうくたくたなんだけど。俺たちはレストランで食事を取っている。もちろん普通のレストランだ。俺はピザを。アリサはスパゲッティを注文し、水を飲んで落ち着いていた。

「それにしても、直人は全然買わないわね」

「はは、まあ欲しいものが特にないからね」

服やら何やらを買ったアリサに対し、俺はシャツと靴だけ。まあ、そこまでお金持ってないし、すごく欲しいと思うものもなかったからね。

「でもあんたがあたしの買ったものまで持たなくていいわよ。私そこまでお嬢じゃないわ」

「そっ？視線でちらちら持てって言った気がするが？」

「もう！違っって言うてるでしょ！」

そう言ってアリサが俺の腕をつねった。

「いだだだだ！わかったから手を離せ！」

「ふんっ！わかればいいのよ！」

そう言ってアリサが手を離してくれた。

「お待たせしました」

店員さんが料理を運んできた。へえ、普通にうまそうだな。

「いただきます」

そう言って二人で食事を食べ始める。うん、まあ普通に旨いけどアリサは微妙な顔している。やっぱり金持ちはグルメなのか？

「どうした？まずいのか？」

「違うわよ・・・辛い・・・」

そういえば結構赤いな、そのスパゲッティ。アリサは辛いのが苦手なのか。

「交換するか？アリサ」

「な、何言ってるのよ！もう私が食べた後よ！？」

「他人ならまだしも、誰が食べたってわかるなら俺はいいけど？」

「うっ・・・でも・・・」

「俺は好き嫌いないから。それにこのピザは辛くないよ。ほら」

そう言って俺は10枚に切り分けられたうち、残った5枚をアリサの取り皿に置くと、俺はアリサのスパゲッティを食べる。

「ん、確かに辛いけど旨いな・・・」

「もう知らないわよ、バカ・・・」

アリサは顔を赤くしてピザを食べる。なんか俺まずいこといったか？それから20分ぐらいでお互いに食事を終え、店を出た。

「次はどこに行くんだ？」

「北エリアは見終えたからね。南に行くわよ」

このショッピングモールは二つに分かれており、北と南が存在する。いまさらだけどどんだけでかいんだ、このショッピングモール。そんなことを考えながらアリサと橋を歩く。橋を渡り終わると、異変に気がつく。俺の手を握るアリサの手が、若干汗を掻いていた。

「アリサ？大丈夫か？」

「だ、大丈夫よ・・・」

いや、そんな顔真つ青にして声を震わせて言われても・・・

「もしかして、高いところが駄目だったとか？」

まあ、そんなに高くないんだけど・・・

「う、うるさいわね！悪い!？」

「あのな、アリサ。駄目なら駄目で先に言えよ。ちゃんと下から行けるルートだってあるんだから。」

「だって、それだと・・・」

それだとなんだよ。まあいい。どこか落ち着ける場所を探すか。しばらく歩くと、丁度いい所にベンチを見つけた。

「アリサ、座っている。飲み物買ってこるから」

直人が飲み物を買に行ってくれた。ああ、情けない・・・こんな醜態見せるなら無理して橋を渡るんじゃないかな。でも直人は優しいわね。なんかここに来てから迷惑かけっぱなし。なんかお礼しなくちゃ・・・

「はあ・・・なんでかなあ・・・直人はっかり目が行っちゃう」

最近直人といることが楽しくて仕方なかった。今まで男なんて思ってた。何度誘拐されたかわからないし、変な男に絡まれたのも数え切れない。でも直人は違った。とても明るく、私に話をしてくれる。別に私だけってわけじゃないけど、私達の輪の中に直人が入ってくれたのがとても嬉しかった。あいつ、もう忘れちゃってるかな？あの時のこと

2年前

「もう！しつこい！」

「なあいいだろ？遊ぼうぜ？」

ダサい格好をした男が私をナンパしてくる。今日はたまたまみんな

と別れて買い物に来たのに、もう最悪だった。

「いいから来いよ！」

男の口調が激しくなる。いつの間にか裏路地に連れ込まれていた。

「まったく！小娘がいい気になりやがって！テメエは言うこと聞けばいいんだよ！」

すると、男の周りには4、5人の男がいた。どうして男ってこんな
のばかりなの！怖くて声が出ない・・・なのは、フェイト、はや
て、すずか・・・助けて！

「ぎゃー！」

すると、男の一人が倒れた。その後ろには別の男が立っていた。私
と年齢は同じくらい。そんな男の子が木刀手に立っていた。

「・・・訓練用の木刀を使うことになるとは思わなかった」

「なんだてめえ！正義の味方気取りか！」

「別に、ただよってたかって女の子に乱暴するのが気に入らないだ
けだ。」

「ざけんな！失せる！」

「はっ！」

男の子が男の攻撃を避け、木刀で顔面を殴り飛ばした。

「やべ、手加減忘れてた」

「や、やっちまえ!」

残った3人が一斉に襲い掛かる。

「・・・・・・・・」

その瞬間、一瞬にして襲い掛かった奴らが吹き飛んだ。私にはそれが何かわからなかった。

「ん!初めて実戦で使ったけど問題なさそうだな。・・・はいはい」

なんか独り言言ってる。すると、男の子が近づいてきた。

「大丈夫?」

「え、ええ・・・ありがとう」

すると、男の子が使っている木刀が粉々に砕けていた。

「あゝあ、無理やったから木刀折れたな。ま、いいか」

「あ、あの、木刀・・・弁償を・・・」

「あー、いいよいいよ。その辺のスポーツショップで買った安物だから。どうせ買い換えるつもりだったし。てか、そんなことより怪我ない?」

「え、ええ・・・」

何だろう、このドキドキは。私、どうしたのかしら？

「一人で帰れるか？」

「え、ええ……」

「じゃ、気をつけて帰れよ？あ、そうそう。これ落としてたぞ」

そう言って私に投げてよこしたのは生徒手帳だった。

「じゃあな！」

そう言っつて男の子は走り去っていった。

回想終了

「覚えてるわけないか。一方的に私が覚えて、あいつのこと探したんだもん」

そう、それから私は再会するまでその男の子を捜した。そうしたら同じ学校だったのは驚いた。そしてあんな形で再会するなんて思いもしなかったけど……

「やあそこの彼女？俺たちと遊ばない？」

そこにいるのは複数の男。はあ、どうして男ってこんなものばかりなの？

「・・・連れがいるの。結構よ」

「そんなこと言わないでさ、俺たちと・・・」

男が私の手を引っ張る。

「離してよ!」

そうやって私は反射的に男を殴り飛ばした。

「いつてえ!何すんだこのアマ!」

そうやって殴った男が私を殴ろうとした。その瞬間、私は思いつきり叫んでしまった。

「直人!助けて!」

その瞬間、男の頬を何かが掠め、後ろの電柱に何かが突き刺さった。それは蒼い、透明なダガー。そしてそこにいたのは・・・

「直人・・・」

「呼んだ?アリサ」

「何もんだてめえ!」

「・・・そいつの連れ。消えな?じゃないと・・・怪我するよ?」

そう言うと直人のブレスレッドが光り、一本の剣が現れた。透き通るような白銀の刀身で、刀にしては太く、西洋剣のような形にも見

える。あれが直人のデバイス・・・

「て、てめえ今何を！」

「手品」

「ふざけんなあ！」

男が殴りかかった。すると直人は剣の峰の部分でその男を殴り飛ばした。

「うん、感度良好。丁度いい・・・俺の新しい相棒の錆にしてやる・・・」

直人から殺気が放たれた。すると男達は怯えて逃げてしまった。

「大丈夫？アリサ」

「く、来るのが遅いのよ！」

「はいはい、ほら、これでも飲め」

そう言つて直人は私にオレンジジュースを渡してきた。

「私子供じゃないのよ？」

「そうか？とりあえず元気が出るぞ。飲んどけ」

「・・・ありがとう」

「どづいたしまして」

そう言つて直人が笑っている。

「何ニヤニヤしてるのよ。」

「いや、アリサが俺のこと大声で呼んだからさ。アリサも案外乙女な部分があると思つて」

「なっ・・・あ、あれは！つて、ちょっと待ちなさい！乙女な部分でどつという意味！？」

「そのままの意味だよ」

私は顔が熱くなつた。すつごい不覚！あんな恥ずかしいところを見られるなんて！・・・でも、悪くなかつたかな。私は一気にジュースを飲み干し、直人の手を引つ張る。

「ほら、行くわよ！」

「わかつたから引つ張るな」

こうして私達は南エリアへと足を運んだ。

ふう、なんというか、ブレイブスワローをあんなところで起動したのはまずかつた。周りからは見世物だと思つて拍手もらつし、もう散々だな。

(ごめんブレイブスワロー)

(いいえ、お気になさらず。大切な方が危なかったのでしょうか?)
まあ、そうなんだが。特にそこまで特別な意味じゃないんだよな。
ただ、友達が危ないと思ったから。必死になってた。

(・・・やはりマリカの言うとおり、主は女泣かせです)

(・・・?なんか言った?)

(いいえ、何も)

メシアがなんか言っていたけど無視だ無視。すると、アリサが足を止めた。そこにあるのはゲームセンターだ。

「へえ、こんなところにゲームセンターがあるんだな」

「面白そうね。入らない？」

「ああ、いいよ。」

そうやって俺たちはゲームセンターに入り、様々なゲームで遊んだ。すると、アリサがあるものに目を止めていた。

「・・・アリサ？」

「か、可愛い・・・」

それは巨大な犬のぬいぐるみがあるUFOキャッチャー。一回300円・・・ぼったくりだな。

「直人、あれ取れない？」

「・・・難しいな」

「そう・・・」

「おい、難しいって言ったただけだぞ？取れないとは誰も言ってないだろ」

そうやって俺は300円をUFOキャッチャーに入れる。上のほうにアドバースとして頭を掴めとか書いてあるけど気休めだな。正直アリサにこんなこと言ったが無理がある。そんなことを思っている
と・・・

ゴトン

取れてしまった。

「や、やるじゃない！」

「まぐれだよ。はい、アリサ」

「いいの？」

「アリサが欲しがってたんだ。俺はこういうの家に置けないし。」

「わ、わかったわ。ありがたくもらってあげようじゃない！」

いや、そんな受けて立とうみたいに言われても困るんだけど。そんなこんなでもう6時を回っていた。

「さて、そろそろ帰るわよ。丁度時間だし」

そう言っただけで歩き出し、パーキングエリアまで歩く。俺はアリサの荷物を持っている。

「だから自分で・・・」

「俺はこういうことしか出来ないんだ。やらせてくれよ」

そう言うと、アリサが腕を組んできた。

「バカ・・・」

「はいはい・・・」

こうして俺たちの買い物が終わり、アリサの家に着いた。家というか、屋敷だな。でかい・・・うちの何個分あるんだ。で、驚いたのが飼っている大型犬の数だ。10や20じゃないだろ、これ・・・そしてその犬達に一斉に飛び掛られた。知ってる？犬って体重が大きいのだと70キロ超えるんだよ？死ぬって。そんな光景を見て、アリサが大爆笑したのは言うまでもない。食事はなんかドラマに出てきそうなものばかり。とりあえず上品に食べることを努力した。食べるときは俺とアリサだけ。アリサの両親は仕事で海外にいるらしい。そして、俺は今客人用の部屋で、なぜかアリサとゲームをしている。

「くっ！」の！」

「隙アリってね」

ゲームは格闘ゲーム。うん、なんか大画面だから迫力満載だけど、そこは置いておこう。

「はい、俺の勝ち」

「う〜・・・くやしい！もう一回よ！」

もう20回戦ってるじゃん。もういいだろ？

「もう寝ないか？疲れた」

「そ、そうね・・・寝ましようか」

うんそうだね、お休みって言おうとしたんだけど、何故アリサは俺が寝るはずのベッドに入ってる？

「アリサ、なんで俺が寝る場所にいるんだ？自分の部屋で寝ろよ」

「なんでよ！あたしに部屋まで戻れって言っの！？」

え、何この状況？その「戻れって言っの！？」が強く強調されていた。俺はドアを開ける。もう消灯時間だからか、屋敷の電気が消えている。まさか、アリサ・・・

「暗いところも苦手か？」

「そ、そうよ！悪い！？」

顔を真っ赤にするアリサ。なるほど、だからずっとゲームをしたか

ったわけね。俺はため息をついて電気を消してベッドに入った。

「直人・・・？」

「何？」

「怒ってる？」

「なんで？」

「だって、直人に迷惑・・・」

恥ずかしながら言うアリサを見て、苦笑した。ほんと、普段は見せない女の子らしさが見れた。

「別に思っていないさ。」

「そ、ありがとう」

そう言ってアリサがキスをしてきた。またか、これで何回目だ！？

「ア、アリサ・・・」

「今日助けてくれたのお礼よ！」

そう言って顔を真っ赤にし、俺のところにつづくまっぴら寝てしまった。

「はあ、どうしたものか・・・」

これで何回目だろうか？キスをされたのは・・・

「まったく、世話がやけるお嬢様だな・・・おやすみ、アリサ」

俺はそう呟き、眠りについた。

第十七話「騒がしくも平凡な日常（バニングス家編）」（後書き）

なんかだんだん直人のキャラが壊れてるなあ・・・修正に努力します。

アリサ「やっとあたしが出たわね！」

すずか「ずるいよアリサちゃん・・・」

直人「大丈夫だよ、多分作者が出すから」

秋風「当たり前だ。今回は直人を弄り倒すからな。」

直人「てめえそれが目的なのか！」

秋風「だってほら、これはアリサファンが殺意を抱く確立100パーセントだよ？」

直人「そう思うなら書くな！」

秋風「いいじゃん、楽しいんだから」

直人「楽しさで話を決めるな！」

秋風「もう眠いからまた次回で・・・」

直人「またかあ！次回第十八話『騒がしくも平凡な日常（八神家編）』

TAKE OFF」

第十八話「騒がしくも平凡な日常（八神家編）」（前書き）

なんやかんやでもう十八話・・・もういけるところまで行こうと思います。

どうかこの小説、見捨てないで上げてください。
それでは本編をどうぞ

第十八話「騒がしくも平凡な日常（八神家編）」

バニングス家を後にした俺は八神家へと向かった。はやての家には4人と1匹が住んでいる。はやて、シグナムさん、シャマルさん、ヴィータ、そしてザフィーラ。一応八神家の人間には全員と顔合わせしているの、初対面の人間はいない。ただ、その中でもヴィータが何故か俺に敵対心を剥き出しにしている。何故だろうか？そんなことを考えているうちに、八神と書かれた表札を見つけた。住所も合っている。約束の時間は3時。時間ぴったりだ。俺はインターフォンを押した。

ピンポーン

「はい？」

「井上です。」

「あ、はいはい！はやてちゃん！直人君ですよー！」

この声は多分シャマルさんだ。ドアが開き、はやてが出てきた。

「直人君！いらっしやい！」

「ああ」

「さ、入ってや」

「わかった。」

はやてに言われるまま、俺は家に入った。リビングに通されると、そこにはヴァルケンリッター全員が揃っていた。

「井上か。よく来たな」

「あ、シグナムさん。どうも」

そう言っただけ俺は軽く頭を下げる。シグナムさんも土郎さんと同様、たまに俺の剣を見てくれるようになった。しかし一回一回が彼女にとっては真剣勝負らしく、勝ったためしがない。

「あ、荷物はそこな？直人君、何か飲む？」

「え、ああ・・・じゃあ、緑茶を・・・砂糖とミルクなしで・・・俺がそういうと、はやてが笑う。」

「ふふふ、それ、リンディ統括が？」

「あ、ああ・・・フェイトまで砂糖を入れてて、断るのが大変だった。」

「はいはい、普通のお茶入れたるから、そこ座ってな」

俺は席に座る。すると・・・

「おい、そこはあたしの席だ」

ヴィータがいた。なんかまた不機嫌そうに俺を睨む。だから俺は何かした？

「ヴィータ、いつも適当に座ってるのに急にどうした」

「うっせえー今日はそこがいい気分なんだよ！」

「はいはい、どうぞ」

そう言っただけは席をどき、別の席に座った。相変わらず俺のことを睨んでる。何かあるなら言えればいいのに。

「はい、直人君」

「ありがとう・・・おいしいな」

「そう？ええお茶やかな」

はやてが俺の向かい側に座り、同じようにお茶を飲む。すると、シヤマルさんが和菓子・・・らしきものを出してくれた。

「どうぞ、直人君」

「あ、どうも・・・あの、なんですか？これ？」

見た目からして多分、本当に多分羊羹だろう。だが、色がなんといつか青い。

「羊羹。作ってみたんだけど、どうかしら？」

それを見て、はやても顔を引きつらせている。すると、シグナムさんが肩を叩き俺に胃薬を渡してくれた。

「な、直人君！」

「シャマル！この羊羹もどきに何を入れた！」

「えっと、羊羹の材料と薬草と食用蛙の肝と、隠し味に蜜柑の皮と・・・」

「そんなもの入れるな！井上！気をしっかり持て！」

「う・・・だ、大丈夫です・・・なんとか・・・」

シグナムさんに起こされ、俺は水と胃薬を飲み、落ち着いた。シャマルさんに次からちゃん材料だけを入れるようにとアドバイスをしておいた。

「ご、ごめんなあ・・・シャマルが・・・」

「いや、本人はわざとじゃないし、研究方向が間違ってたただけだから、気にしてないよ」

実際はもうこれ以後シャマルさんの料理を食べたくないと思っているが、言うのはやめておこう。シャマルさんまたへこむから。でも初めてだな、料理でトラウマを持つなんて。すると、はやてが「さて」とお茶を飲みきってから話題を出した。

「直人君、せっかくの休日や。どこかに行かへんか？」

やっぱりそう来たか・・・フェイトやアリサも同じようなことを言う。まあ、俺としては特に希望はない。

「はやてはどこかに行きたいの？」

「一応買い物に行く予定何や。」

「そっか、じゃあ付き合っよ」

「ホンマか？じゃ、さっそく行こ」

こうして、俺は夕食の買い物へと向かうこととなった。

俺たちは海鳴の一番大きなデパートに来ている。なんというか、でかい。こんななのいつの間に建ったんだよ。

「で、何を買った？」

「今夜の夕飯の材料や。今夜はご馳走やで？」

「へえ、楽しみだ。」

こうして俺たちはデパートに入り、買い物を始めた。買い物はそこまで多くない。食材は後回しにして、はやては上の階へと上がった。必要なのは電球や電池などを買った。するとはやてがどうせなら服なども見に行こうと手を引く。

「どや？似合っ？」

そう言って試着室から着替えたはやてが出てくる。

「うん、いいと思っよ」

率直な感想だ。似合ってる。

「こっちはどうや？」

「いいんじゃない？」

素直に感想を言ったのに、はやてが頬を膨らませた。

「どうしてもよさそうやな・・・」

「えっ・・・そんなことないけど・・・」

「ほんまか？」

「ああ、本当だよ」

俺が頷くと、はやては試着室に戻り、元の服装に戻った。

「さ、次や」

この後も俺ははやてに振り回され、デパートの中を歩き回った。時刻は6時30分俺たちは買い物を終え、デパートを出た。

「あー！楽しかった」

「そうか、よかったよ。」

「ふふ、ありがとな、直人君。あ、あそこの福引、一回出来る・・・」

「

そう言つてはやては俺の手を引き、福引の前にやつて来る。年末ならまだしも、季節はずれじゃないか？一等は温泉旅行。二等はブランドものの2万円相当のプレスレッド。3等は洗剤セット。4等はお菓子の詰め合わせ。なんだ、この二等と三等の差は・・・

「直人君、任せた」

そう言つてはやては俺に福引の券を渡した。

「え？俺がやるのか？」

「なんや今日は直人君に任せたほうがええ気がするんよ」

と、はやてが俺にニッコリ笑う。俺に何を期待してるんだよ、はやて。俺はそう思いながらも俺は福引のくじを回した。すると、そこに出てきたのは銀色の玉。2等・・・プレスレッドか。おっさんが鈴を鳴らし、俺にプレスレッドを渡した。でも俺はこういうのつけないからな・・・

「はい、はやて」

「え？」

「これ元々はやての福引券だったし、はやてにあげる。」

「ありがとう！大切にするな！」

はやては嬉しそうにそれを腕につけ、喜んだ。喜んでくれたみたいだからよしとしよう。帰り道。はやてが「こっちから帰りたい」と

いっつので俺は希望通りにその道を歩く。すごく遠回りだが、気にしないでおっつ。

「でもホンマに来てくれるなんて嬉しかったわ。」

「はやてたちが言い出したんじゃないか。」

「ふふふ、そうやったな。でも、直人君は変わってくれた」

「え？」

「笑顔が増えたとちゃうか？」

そういえば、と俺は気がつく。いつもみんなとなると、俺は自然に笑えていた。

「最初はずっと無表情。うちが帰りに聞いたときも答えてくれん、でも一緒に戦って、魔導士になって、うちはすっごく楽しくなったと思う。」

「そうか・・・そうだな・・・」

「だからこそ、うちは直人君と一緒にいたい。直人君の笑顔が好きやから」

「はやて・・・」

俺の顔が赤くなる。みんなが俺のことを好きと喋ってくれる。はやても、俺に好きだと言ってくれた。すると、俺たちの前に一人の男が現れた。

「くつくつく・・・犯罪者が、笑わせる」

「なんだ、あんた？」

俺ははやてを庇つように立ちふさがった。

「俺か？俺はその闇の書事件を起こした奴の被害者さ・・・」

「何・・・？」

闇の書事件・・・その言葉に、はやてがびくりと体を震わせた。

「俺はそいつの守護騎士に殺されかけ、リンカーコアを奪われ、魔導士としての地位も落とされた！そんな俺に対してそいつはどうだ！？平和に罰も受けず！ぬくぬくと生きている！犯罪者は罰せられるべきだ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

はやての顔色がだんだんと青くなっていく。俺は荷物を置き、メシアを起動させた。

「・・・あんたが、はやての何を知っている？」

俺はゆっくりと、その男に向かって歩き出す。

「あいつが今どれだけ罪を償おうと必死なのかも知らず・・・あいつがあ的事件でどれだけ傷を負ったのかも知らず・・・あんたのそんなちっぽけなことを誇張させてんじゃねえぞ・・・」

「き、貴様！その女を庇うのか！？だったら貴様も悪だ！死ねえ！」
男がデバイスを構え、スファイアを撃ち出す。俺はそれを無言で斬り続ける。

「この！この・・・！」

「あなたにはわからないさ・・・あいつの想いも、あいつの悲しみも・・・。そして、あなたは・・・」

「ひ、ひい！」

『ロードカートリッジ』

「いつまでも過去に捕らわれてんじゃねえ！」

俺は叫ぶと同時に蒼雷一閃を放った。男はそれを喰らい、崩れ落ちた。

この後、管理局員が駆けつけ、男を逮捕した。男は元々地位の低い男で、魔力もさほどない魔導士だった。しかし金と権力でその地位を確立し、威張り腐っていたらしい。そこにヴァルケンリッターが現れ「蒐集」をされたらしい。その後地位と権力を失った男ははやてに復讐を企てていたらしい。まあ、俺がいたせいで見事に失敗に終わったのだが。

「はやて、大丈夫？」

「・・・うちはやっぱり、犯罪者なんやな・・・」
「はやて・・・」

「うちは闇の書事件で犠牲になった人たちに謝罪をし続けた。でも、それで罪が無くなったわけやないのはわかってる。でも、やっぱりああいう風に言われると、うちは・・・」

自分を責め続けるはやてを、俺はゆっくりと抱きしめた。

「はやて・・・俺さ、前に言ったよな。家族が死んだこと」

はやては無言で頷く。

「あれさ、俺も“罪”だと思ってる。」

「直人君・・・」

「だけど、姉さんに言われたことが一つだけある」

罪を背負うつもりなら、未来を見なさい！

「未来・・・」

「俺も当時言われたときはわけがわからなかった。でも、今にして思えば、過去を攻め続けていた俺にとっては、よくわかることだった。」

「うちも、未来を見るべきなんやろうか？」

はやての問いに、俺は強く頷いた。

「勿論だ。なのはやフェイト達・・・それにヴァルケンリッターの皆のために、はやくも未来を見るんだ。そして、その一歩で、世界が変わる」

「直人君・・・おおきにな」

そう言って俺にはやくはキスをした。俺も今回は何も言わず、目を瞑った。そして離れる。

「さて、帰るか？みんなが待つとるしな」

「ああ、俺もお腹がすいたな・・・」

「じゃ、帰ろう！うちまで競争や！」

そう言ってはやくが駆け出す。

「あ！待てはやく！」

「えへへ、待たへんよ〜！」

そう言って俺たちは家まで走り続けた。そしてその後夕食を食べ、皆と談笑して眠ることとなった。空き部屋があったため、俺はそこに泊めてもらうこととなった。そしてみんなと同じく、俺が寝る部屋にはやくがいる。

「さ、ねよか？」

「はあ・・・なんで自分の部屋で寝ないかな？はやく」

「今日だけ、お願いや」

今日のこともある。俺は結局断れずに……

「もう、好きにしてくれ……」

「好きにしまゝす」

あきらめるのだった。

次の日、それがシグナムさんに見つかり、焼きを入られたのは言うまでもない。

第十八話「騒がしくも平凡な日常（八神家編）」（後書き）

直人「今回も作者のあとがきはお休みです」

すずか「今回も忙しくてやってる暇がないそうです。」

直人「次回 第十九話「騒がしくも平凡な日常（月村家編）」 TAK

OFF!」

第十九話「騒がしくも平凡な日常」(月村家編)「(前書き)

忙しくて更新できなくてすいません。とりあえず眠いので頑張っ
てこうしんしましたが、もうすぐ二十話です。頑張りますw

それでは本編をどうぞ。

第十九話「騒がしくも平凡な日常（月村家編）」

八神家を出て、俺はとりあえず自宅へ。すずかから「家に迎えに行きます」とメールが来た。そういえばすずかの家もお金持ちだったな。などと思う。家に戻って着替えをバッグに入れ替え終えると、インターフォンがなった。リムジンでのお出迎えパート2だ。

「おはよう、直人君」

「おはようすずか。久しぶり。」

心なしか、すずかから黒いオーラが出てるような気がするのは気のせいだろうか？ バッグはメイドさんらしき人に預け、車に乗ることになった。車に乗ってから、心なしかすずかの笑顔が怖い……

「あの、すずか？」

「何かな？直人君」

「何か怒ってないか？」

「別に？直人君が私と会ったときに素っ気無かったことなんて怒ってないよ？」

「原因はそれですか……そんなに素っ気無かったかな？」

「それはその……」

「直人君、この数日で女の子にそんなに馴れたのかな？ついこの間

だって私達が抱きついたときは顔を真っ赤にしていたのに」

耐性が出来たのかもね、色々な意味で。

「わかった、悪かったよ、すずか・・・」

そう言っただけはすずかの頭を撫でる。すると隣に座っていたすずかは嬉しそうに俺に擦り寄ってきた。猫か、お前は。俺はこの後、理由を明確に理解する。

家に着くと、豪邸があった。アリサもそうだけど、こんな屋敷建てるなんて、親はなんの仕事してんだ。屋敷に足を踏み入れると、そこには大量の猫がいた。アリサは犬を飼ってたっけ？それに対してすずかは猫か・・・うん、なんか性格も相対してるし、そんな感じがするな。

「じゃあお屋敷に行こう。姉さん達もいるから」

すずかは俺の手を引き、屋敷へと入った。屋敷を歩いて数分。そこはテラスだった。そこには二人のメイドさんと、すずかにそっくりな女性がいた。

「あら、おかえりなさいすずか。」

「お帰りなさいませ、すずかお嬢様」

「ただいま、忍お姉ちゃん、ノエルさん、ファリン」

笑顔ですずかが返事をする。そっくりなのはお姉さんか・・・

「あら、そちらがすずかの言っていた？」

「うん、そうなの。直人君、あたしのお姉ちゃんだよ」

「忍です。妹がいつもお世話になってます。」

「で、こっちがお世話係のノエルさんとファリン」

「ノエル・K・エアリヒカイトです。」

「ファリン・K・エアリヒカイトです。」

と、3人が自己紹介をしてくれた。うん、すごいね、メイドさんとか初めて見た。

「井上直人です。初めまして」

そう言って挨拶すると・・・

「私の未来の旦那さんなんだよ」

と、すずかが言う。何を言ってるんだこの天然娘。それに対して忍さんがあらあらと笑い、ノエルさんとファリンさんが口をあぐりと開けて驚いている。

「すずか、さらりと嘘を言わないでくれるかな？」

「だってそのつもりなんだもん。」

つもりなら違うんじゃないだろうか？すずかは笑顔のままだ。なん

かだんだんすずかの性格がわかってきたな・・・

「とりあえずお話ししながらお茶でもどうかしら？」

丁度3時。確かにティータイムにはいいかもしれない。

「ノエル、ファリン二人分の紅茶とお茶菓子をお願いね」

「はっ、お嬢様」

そう言つて二人は退場し、俺とすずかは席に座つた。

「それにしても、すずかに男の子の友達が出るのはびっくりね」

「そうかな？」

「ええ、それに、直人君は昔の恭也そっくり」

「え、あの、恭也つて、高町恭也さん？」

俺の言葉に、忍さんが笑いながら頷く。あのシスコンさんとどこが似ているんだろう、俺。というより、どうして恭也さんが出てくるのだろうか？

「お姉ちゃんはね、恭也さんの恋人なんだよ？」

「そ、そうなのか・・・」

「初めて会ったときの恭也もそれはもう恥ずかしがりやで、大変だったのよ」

「へ、そうなんですか……」

あの恭也さんがねえ……。そんな話をしていると、ノエルさんたちが紅茶を運んできてくれた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

そう言っつて紅茶を受け取る。あ、おいしい。この紅茶。

「おいしいですね、この紅茶……」

「ありがとうございます、直人様」

……お客さんだからわかるけど、年上に様って付けられるのはなんだかなあ。

「あの、ノエルさん？」

「何でしょうか、直人様」

「様ってつけなくていいですから」

「いえ、すずかお嬢様のお客人ですし、未来の旦那様なら……」

「いや、その後半はすずかの嘘ですから。それになんか、年上の方に様とか付けられるのは少し気が引けるので……」

そういうとノエルさんが困ってしまった。言わなきゃよかったかな？すると忍さんが助け舟を出してくれた。

「直人君がそう言ってるんだから、そうしてあげたら？ノエル」

「はっ、わかりました。次から直人君と呼ばせてもらいます」

出来れば敬語もやめて欲しいけど、これ以上の追求はしないでおう・・・面倒くさいから。そう言えばマリカもはじめは俺に様がつけようとしてたな。あいつが言うとなんだかむかつくから言わせなかつたけど。

「そういえば、直人君はどうしてすずかと知り合ったのかしら？」

「え？ああ、4月の終わり頃に不良に絡まれてたすずか達を助けて知り合いました」

「あの時の直人君は格好よかつたなあ・・・」

そうかな、あんな雑魚だと興冷めもいいところだったんだけど。

「別にたいしたことじゃなかつたけど。」

「でも私なんかもう、怖くて震えてたんだよ？」

まあ、それが普通の子供中学生の反応かな？あの時はアリサが今にも殴りかかりそうだったから後が怖いと思って助けたけど。ほんと、こいつら性格が真逆だよな。

「なあ、前から聞きたかつたんだけど、なのはとアリサとはどうや

って友達になつたんだ？」

「え、聞きたい？」

「ん？ああ、聞いても大丈夫なら」

俺の言葉に、すすかは笑いながら話を始めた。

直人君が私達の友達になつた理由を聞いてきて、ちよつと意外だった。でも、後から友達になつたフェイトちゃんとはやてちゃんを除けば、私達3人の組み合わせは明らかに愛称が悪かった。そう、あの時から。

「最初はね、私はアリサちゃんに虐められていたの」

カチューシャを取られ私が泣いているところになのはちゃんが割って入ってきたことが、全ての始まりだった。

「アリサの奴、いじめっ子だったのか」

「うん、今はそうじゃないけど、昔はものすごく我侷なお嬢様だったんだよ？」

「それは・・・うん、想像できる」

直人君の言葉に苦笑する。あの気の強いアリサちゃんを見れば、当然かもしれないね。

「それでね、私がカチューシャを取られた時、なのはちゃんがアリ

サちゃんを思いっきりビンタしたの」

「ビンタって……」

突然のことだったけど、今でもはつきりと覚えている。アリサちゃんも一瞬何が起きたかわからなかった顔をしていた。

「それでね、なのはちゃんが『痛い？でもでも大事なものを取られちゃった人の心は、もっともつと痛いんだよ』って」

「……小学生が言うセリフか？それ」

私もそう思う。なのはちゃんはあんな言葉をどこで覚えたのやら。

「そうだよね、小学校一年生の時だったから、びっくりしちゃった。それでまあ、その後二人が取っ組み合いになって大喧嘩。私は泣いちゃって、運良く先生が見つけたからなんとかあったけど。」

「その後よく友達になんかあったな。」

「うん、お父さん達が学校に呼び出されて、その後お父さんが仲良くなつて、いつの間にか私たちも意気投合して、友達になつたの」

「それはすごいな。なんというか、壮絶だ」

「そうかな？でもそれから喧嘩もしたりするけど、皆で仲良くやってきたから。私は幸せかな。」

「そうかな？でもそれから喧嘩もしたりするけど、皆で仲良くやつ

てきたから。私は幸せかな。」

すずかが笑う。友達が少ない俺にとっては、非常に面白い話だ。すると、すずかがそういえば、と思い出す。

「直人君は、どうして水嶋君と友達になったの？」

「え、ああ、雨月のこと？」

「うん、私二年生の時同じクラスだったけど、水嶋君を見たことがほとんどないし、来ても午後からだし」

俺は苦笑する。確かあいつのとの出会いもすずかみたい突然だった。

「俺があいつと会ったのは、もう随分前……すずかは聞いたんだろ？俺の両親のこと」

「うん……」

「あいつは、保護された先の病院で会ったんだよ」

9年前

「ねえ、井上君あそぼーよ！」

「……いっ」

「いいから遊ぼうよ！」

「僕は放っておいて・・・」

俺は病院に保護されて、誰とも関わらずにいた。食事にはろくに手をつけないし、ずっと寝てばかり。周りの子からは「可愛そうな子」って認識されるし、看護婦さんたちは困らせっぱなし。するとある日、俺の隣に男の子がやってきた。当時は片方の目を怪我していたあいつは俺のことを見るや否や・・・

「根性なし・・・」

つと言ってきた。

「・・・・・・・・・・」

俺が無言で睨んでいると、男の子は笑っていた。

「なんだ、そんな顔も出来るのか。てつきり無表情かと思ってた」

「君に、僕の何がわかるんだよ・・・」

「しらねーよ。俺はお前じゃないからな」

一蹴。なんとも腹立たしい男の子。言ってる事の一言一言に腹が立った。

「お前さ、いつまでそうしてんの？」

「僕の勝手だろ・・・」

「聞いたぜ、リゾートホテルで火事にあっただってな」

「うるさい……」

「それで家族がいなくなっただけで落ち込んでるって？」

「うるさい……」

だんだんと俺は腹立たしくなる。もう苛立ちが爆発しそうだった。

「もう終わったことばかり気にしていて馬鹿みたいだな」

「うるさい！お前に何がわかるんだ！」

俺は思わずその男の子を殴った。それはもう思いっきり。男の子は口から血を流して立ち上がる。

「へっ！やるじゃねえかよ！」

そう言っただけで俺に殴り返す。もうそれは痛いなんの。壮絶な殴り合いが始まり、ナースコールで呼ばれた看護婦さんたちと、姉の千草に止められた。

「お前、自分だけが不幸だと思ってるじゃねーよ！」

「!？」

「俺だって、あのホテルにいたんだ！」

「!!!」

俺は驚いた。この病院に、俺と同じような子供がいるなんて。

「テメーは姉貴がいるだろうが！俺は親も兄弟もあの火事で死んだんだ！」

男の子から衝撃の言葉が飛ぶ。看護婦さんたちもびっくりして、思わず手を緩めた。そして、男の子は俺の胸倉を掴んだ。

「テメエだけが不幸じゃねーんだ。ここにいる大半の奴らは、みんなあのホテルの火事に逢った奴らなんだぞ！」

一同が静まり返った。俺はただ涙を流すことしかできなかった。後日、俺はその男の子の親戚から謝罪を受けた。彼もまた火事での被害者であり、そして数日間俺のことをずっと心配していたらしい。

「・・・なんだよ」

「僕、井上直人・・・君は？」

「・・・水嶋、雨月」

雨月が俺と初めて友達になった瞬間だった。

回想終了

「って、感じかな」

「そうなんだ・・・」

「ま、その後退院して学校に行ったらあいつが転校してきて、それからずっと一緒だったな。」

「じゃあ親友なんだね」

「んー・・・親友っていうか、悪友だな。」

俺の言葉にすずかと忍さんが苦笑していた。すると、もう5時近くになっていた。

「それでは、私はそろそろ夕食の準備を始めます。」

そう言ってノエルさんたちが退場。すると、すずかが立ち上がる。

「ねえ直人君、散歩しよう?」

「散歩?」

「うん、散歩」

すずかがニッコリ笑う。俺も笑うと、立ち上がった。

「いいよ、行こうか」

そう言ってテラスを出ると、すずかが手を繋ぐ。後ろで忍さんが「若いっていいわね」と言ったのは気のせいだろ。あんたも19だろ。

とにかく屋敷は広がった。そして歩く先々で猫を見る。

「猫、多いな」

「うん、猫好きなの。大半は里親がいない猫ちゃん達。野良の猫もたまに来るの」

「そうなんだ。」

そう言っただけは綺麗な池の前に来る。

「直人君、私ね、思うんだ・・・」

「？」

「なのはちゃんから聞いた火事の話。自分の罪って言ったことを聞いたの。でも、私も直人君に罪はないと思う。」

「すずか・・・」

すずかがそう言ってくれるのは嬉しかった。でも、俺には割り切れない。あれは、俺の“罪”なのだから。

「過ぎたことを悔やみ過ぎるのは毒・・・私はそう思う。水嶋君が言っていたみたいにね」

「すずか・・・」

「友達だって、水嶋君だけじゃない、私やなのはちゃんたちがいる。」

その私達が、少しでも不幸になった？」

「……それは……」

「なっていないでしょ？私はむしろ、幸せだと思ってるの」

「え？」

突然のすずかの言葉に、俺は戸惑う。

「私は、直人君が好きだから……」

「すずか……」

すずかがニツコリ笑い、俺にキスをした。俺は戸惑いながら目を閉じる。数秒後、俺たちは離れる。

「付き合ってください、って言いたいけど、それを言っても了承してくれないでしょ？」

「……ごめん」

「いいの、わかってるから。決められないんでしょう？私達5人から1人だけなんて」

「……そう、なのかな」

「きつとそうだと思う。」

すずかが笑う。俺には、理解できない。どうしてすずかはここまで

笑顔でいられるのか。

「だから私はいつか、直人君を振り向かせる。なのはちゃんたちに負けないように。」

「・・・お手柔らかに」

俺はただそういった。否、それしか言えなかった。すずかの言っていることは、確かにそうだと思ってしまったから。屋敷に戻ると、忍さんがなにやら作業をしていた。

「お姉ちゃん、何してるの?」

「ブローチを作ってるのよ」

手作りのブローチ。この人なら簡単に買えるのに、どうしてかな?

「自分の手作りって、面白いでしょう?」

心読まれたのか、俺にっこりと笑い、作業を続ける忍さん。すると、すずかが席に座る。

「お姉ちゃん、あたしもやらせて?」

「いいわよ。直人君もやったらどうかしら?」

「あ、じゃあお言葉に甘えて・・・」

そう言っただけとすずかはブローチを作る。簡単な基盤にビーズやらなにやらを作るものだ。すると、すずかは随分器用にそれを作り上げる。

「できた！」

それ羽根の形に彫ったブローチだった。

「はい、直人君」

「え？俺に？」

「うん、これ、ペンダントにもなるみたいだから、つけていて？」

そう言っただけか？チェーンを着け、俺の首にかける。これは、お返しをしたほうがいいな。そう言っただけ俺も彫る。

「じゃあ、これはさすがにあげる」

そう言っただけ俺が渡したのは、三日月と小さな星々を彫ったブローチ。

「わあ、上手・・・ありがとう、直人君」

そう言っただけか？顔は赤くし、笑ってくれた。

その後、俺と一緒に食事をして、夜遅くまでみんなと談笑した。ノエルさんやファリンさんたちとも仲良くなり、楽しい会話だった。そしてもう言うまでもないが、俺はさすがといっしょにベッドで寝ている。そしてさすがか？寝て、俺はさすがの言葉を思い出す。「決められないんでしょう？私達5人から1人だけなんて」という言葉。「俺は決められないんじゃない、決めるのが怖いのかも・・・な・・・」

1人だけを幸せにすると決めたら、後の4人が不幸になりそうで、俺は怖かった。だから選ばないのではなく、選べないのかもしれない。だからすずかはある風に言ってくれたのだ。

「でも、悪い気はしないな・・・ありがとう、すずか・・・」

俺が言うと、すずかが笑ってくれた気がした。そして、俺も目を閉じ、眠ることにした。明日がどれだけ恐ろしいかも想像せずに。

第十九話「騒がしくも平凡な日常（月村家編）」（後書き）

直人「また作者はお休みです。」

すずか「なんか疲れたみたいだね」

アリサ「あいつクリスマスなのに小説書いてるとか寂しくないのかしら」

なのは「というか、番外編書いてる人たちいっぱいいるのに書かないってどうかな？」

フェイト「根性なしだよね」

はやて「まあ、今日は色々忙しかったらしいけどな」

直人「それにしても、最近秋風はプレステ3にのめりこみらしいぞ」

アリサ「何よそれ！あたし達放置！？」

なのは「だから更新遅れたんだ」

フェイト「FF13、大人気だもんね」

はやて「だからって更新遅らせるのはどうや！」

直人「まあ、更新してるだけ良しとしようよ。」

なのは「とうとう次は私の話だね！」

フェイト「でも最初は私だったもん」

アリサ「順番は関係ないわ!」

すずか「そうだよ!」

はやて「うちだって負けへんで!」

直人「・・・次回第二十話『騒がしくも平凡な日常（高町家編）』
TAKE OFF!」

第二十話「騒がしくも平凡な日常」(高町家編)「(前書き)

とうとう20話です。長かったな・・・ここまで。

とりあえずこれからも蒼天に舞う騎士をよろしくお願いします。

第二十話「騒がしくも平凡な日常（高町家編）」

連休の最終日。俺はテーマパークに来ている。そこにいるのはもちろん……

「直人君！早く早く！」

白い悪魔、もとい高町なのはその人だ。今日は珍しく結んでいる髪を下ろしている。俺は手を引かれ、そのパスを見せて中に入る。こうなつた理由は、約2時間前をさかのぼる。それは翠屋のことだ。朝7時。開店前。

「聞いたよ、直人君。フェイトちゃんと動物園行つたんだって？」

俺はソファ席に正座で座っている。目の前には鬼になつた修羅がいるからだ。

「……」

「しかもアリサちゃんとはショッピングモールだっけ？」

その黒い笑みに恐怖を感じる。

「……俺にどうしろと？」

「もちろん、今日はフルで付き合ってもらいます」

やっぱりそうきますか……なのははその黒い笑みのまま何かのチケットを取り出す。それは新しく出来たテーマパークのチケット。

一日フリーパスかよ。

「前にデートの約束もしたし、丁度いいよね？」

「・・・はい」

もう断ることが出来ないほどの負のオーラが立ち昇っている。うん、もう死ぬかもしれない。こうして、俺はなのはと共にテーマパークを訪れることとなった。

「すごい、人がいっぱいだね」

確かに、平日にも関わらず、その人数は多かった。俺たちが休みなのはあくまでも学校が休みだからであり、世間が休みであるわけではない。

「じゃあ、どれから乗ろうか？」

「・・・じゃあ、あれにするか？」

俺が指を指したのはジェットコースターだ。なのはもこういふところに来たら乗るべきだと頷き、乗ることになった。

「うわぁ・・・怖い・・・」

「・・・どれくらい楽しめるんだろうな」

俺は高いところに恐怖はないけど、なのはの顔が強張っている。お前、普段は空を飛び回ってるだろう。そして頂上から落下。

「きゃあああああああああ！！！！！！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

その後も回ったり曲がったり約1分。そのジェットコースターは終了した。

「ふええ・・・・・・・・」

目を回しているなのは。そこまで怖かったかな？

「おい、大丈夫かなのは」

「大丈夫だよ。どんどん行こう」

首を横に振り、なのはは俺の手を取って歩き出す。その後も午前中はアトラクションを乗りまくった。

メリーゴーランド。一つの馬に何故か俺がなのはをお姫様抱っこして乗る。

「なんで俺がお前を抱っこして乗らなきゃいけないんだ？」

「にははは、私も女の子だもん。こういうのには憧れるんだ」

年齢的にこれはどうなんだろうな？ま、考えても仕方ないか。

「はいはい、どうですか？お姫様」

「とても良い乗り心地です、王子様」

周りの視線と殺気を我慢して、俺はおとなしくそれに乗る。なのは顔を赤らめ、満足そうに笑っていた。

お化け屋敷。俺はどんなものがあるか見てみたかったので入ろうとしたが、なのはが首を横にぶんぶんと振り、入ることを断念。なのははお化けが大嫌いらしい。

「駄目！絶対、駄目！」

「わかった。わかったから手を緩めろ。すごく痛いから」

「うん・・・」

そうやってなのはが腕を握る強さを弱めてくれた。このまま握る潰されるかと思った。

こんどはシューティングゲーム。そこではなのはが高得点をたたき出した。

「普段狙い打ちが多いからこういうのは、ね」

「俺は必殺技の光線出すときに『ダイバインバスター！』って言うててびつくりしたぞ。」

「にゃはは、つい癖で・・・」

きつと苦勞してんだな、こいつに教導してもらっている人たちは・・・

こうして午前が終了。俺となのはは園内のレストランで食事を取ることになった。時間は2時過ぎ。昼を食べるのには少し遅い時間だ。

しかし、人もなかなか多い。俺たちは禁煙席の二人席に座ることになった。

「ご注文は？」

「クラブハウスサンドウィッチ」

「私もそれで」

「かしこまりました」

そう言って店員さんが戻っていく。

「あ、そうだ。明日からお父さんが本格的に鍛えるって言ってたよ」

「そうなのか？」

「うん、ものすごく気合入れてた」

「怖いのやら期待できるのやら・・・」

二人して笑う。強くなるのが出来るのなら、俺は喜ぶべきかもしれない。すると、なのはが「そういえば」と、一つの話題を出した。

「ねえ、直人君は将来何をするの？」

「え？」

「この前の任務の時、」わからない」って言っていたでしょ？」

「見つからない……のかもしれない」

「見つからない？」

「わからないんだ……俺は将来、何をして生きていけばいいのかわかって……」

普通、俺の年齢くらいの間人間なら、夢の一つや二つは持っている。だが、俺にはそれが無い。

「俺には、夢がないんだよ……」

俺が言うと、なのはは苦笑していた。結構本気で答えたのに……。すると、なのはがこんなことを言い出した。

「私もね、昔は夢がなかったの」

「え？」

「というか、もう決め付けていたかな。」

突然何を言い出すのだろうか。なのはが言い出したことに、俺は戸惑う。

「決め付けていた？」

「うん。翠屋を継ぐことがもうなんか当たり前だと思ってた。だから、夢なんて見たことなかった」

確かに、家がそういう家系ならそうなるのが当たり前だな。

「でも、魔法と出会って、私は夢を持ったの」

「魔法と？」

「うん。航空の教導隊で、皆と空を飛んで、空も地上も守る！それが、今の私の夢。」

「なのは……………」

単純だけど、素晴らしい夢。そう思った。確かに、俺には夢がない。だが、そんな風にやり遂げることができそうな夢なら、俺も持つことが出来るかもしれない。すると、店員がサンドウィッチを持ってきた。

「お待たせしました」

「いただきます」

二人で昼食を食べ、俺たちはその後もテーマパークを回り、楽しんで。夕方になり、俺たちは最後に観覧車に乗ることになった。時刻はもう6時前。

「わあ、綺麗だねえ」

「ん？ああ、本当だ」

外には綺麗な夕焼けが見える。ここからだといいい位置で見ることができた。

「なあ、なのは……」

「何？直人君」

「さっきの夢の話だけど……」

「うん」

「俺にはまだ、やっぱり将来のことなんてわからない」

俺の言葉に、なのははちょっと残念そうだった。だが、俺は言葉を続ける。

「でも俺は、みんなの笑顔を守りたい。俺は、皆の笑顔と幸福を守る騎士になる。これが、俺の夢だ。」

この5日間、皆の笑顔が太陽のように眩しかった。そして、俺はその太陽を守りたい。そう思った。この皆と過ごした期間は、俺に一つの夢を与えてくれた。なのはは俺の言葉に、笑顔で頷いてくれた。

「うん……！直人君ならきつとできるよ！」

「ああ、ありがとうなのは」

俺がそういうと、なのはが近づき、キスをしてきた。もうなんといふか馴れた。キスをされるの。馴れていいものかはわからない。だけど、その人たちの想いなら、俺は否定する理由がない。そう思った。

「にやはは、これで3回目かな？」

「……まったくお前は」

「私は絶対にみんなには負けない。そう思ってるからね？私は一応直人君に昔「好き」って言ってもらってるんだから」

俺はそれを聞いて顔が熱くなる。そういえばそんなこともあった。だが、それは……

「そ、それは小学生の時だろ！」

「でも好きって言うてくれたことには変わらないもん」

いたずらな笑みを浮かべ、なのはが言う。すると、観覧車が終わり、なのはが下りる。

「さ、帰ろう。帰りにお母さんにデパートで買い物頼まれてるの」

「はいはい……」

こうして、俺たちはテーマパークを後にした。

その日の帰り道。俺たちはデパートに寄り、桃子さんが頼んだというケーキ作りに必要な道具を買った。すると、はやての時同様、なのはが他のものを見たいと言い出した。

「女ってみんなそうなのか……？」

「・・・？何か言った？」

「いや・・・言っていない」

俺はなのはに言われるまま、俺はなのはとデパートを歩き回る。すると、なのはが足を止めた。そこにあるのは、綺麗に光るロケットだった。

「わあ・・・綺麗」

「へえ、確かに・・・」

値段は・・・うわ、2万円か。まあ、姉さんが俺に滅茶苦茶に金を渡してるから問題ないな。今日のお礼もかねて買ってあげようか。

「なのは、それ欲しいのか？」

「え、うん。でもいいよ。直人君、みんなにも色々買ってあげたんでしょ？」

「え？」

「フエイトちゃんが時計で、アリサちゃんがぬいぐるみ。はやてちゃんはブレスレッドで、すずかちゃんはブローチだったっけ？」

正確にははやてのは福引だし、すずかのは手作りだ。というか、どこでそんな情報を知ったんだよ。それはさておき、今回はお礼も兼ねている。出来ればなのはに何かお礼がしたい。

「遠慮するなよ。今回のことや、俺を立ち直らせてくれたお礼がしたいんだ。」

「・・・直人君がそういうなら、私はこれが欲しいかな？」

なのはが指を指したのはペアのネックレスだった。長細いシルバーボードに羽が描かれ、その真ん中にハートの穴が開いている。二つのを合わせることでハートが綺麗に出来上がるというものだ。値段は・・・2万5千円。あんまり変わんない額だった。それを購入し、俺となのははそれぞれそれを首から掛けた。

「えへへ、ありがとう直人君。大切にするね？」

「ああ、そうしてくれると嬉しいよ」

なのはは本当に嬉しそうに笑っていた。こうして俺たちはデパートを後にし、高町家へと帰宅した。夕食をいただいたあと、俺は土郎さんから指導をもらいながら、恭也さんと戦っている。

「はあ！」

「ぬっ！」

「まだまだあ！」

俺が恭也さんに連撃を叩き込み、押していく。しかし恭也さんもバ力ではない。俺の連撃を小太刀で受け止め、切り替えしてくる。

「11のっ！」

「見切った！ここだ！」

恭也さんの攻撃を避けると、出来た隙を突いて攻撃を入れた。

「ぐっ……！」

「はぁ、はぁ、俺の勝ち……です」

俺は恭也さんに木刀を突きつける。

「参った。俺の負けだな。」

恭也さんが言うと、俺は木刀を引っ込めた。

「やっと勝った……」

「ああ、見事だ。ここまで成長するとはな」

「まったく。とても強くなったよ。見ていても、太刀筋が良くなっているし、勝ちたいという想いが伝わってきていた。何かあったのかい？」

「なのはと約束したんです。皆の笑顔と幸福を守る騎士になるって」

「そうか……よし、今日はこれで上がりましょう。恭也は俺が鍛えなおすからな」

「あ、はい。ありがとうございました。」

そう言って俺は道場を後にした。風呂から上って借りた部屋に行く
と、すでになのはがベッドの中で待っていた。

「お帰り、井上君」

「……たまには自分の部屋で寝ようか？」

「気にしないの！ほら、寝よう！」

俺はため息をつき、ベッドに入った。

「聞いたよ？お兄ちゃんに勝ったんだって？」

「ああ、一回だけな。かなりギリギリだったけど」

「すごいね。御神流の剣士は強いから。」

「これもなのはのおかげだよ」

「ふえ？」

なのはが驚いたように首を傾げる。まあ、当然だよな。

「もし、なのはにビンタくらってなかったら、俺はもう二度と立ち上がれてなかったよ」

「あうう……あれは勢いだったのに……」

「それでも助けられた。俺は十分感謝してるよ」

「うん……どういたしまして、おやすみ、直人君……」

そう言ってなのはは俺のところへうずくまり、眠りについた。

「・・・おやすみ、なのは」

俺もこの5日間の出来事と、5人の気遣いに感謝し、俺は静かに眠りについた。

第二十話「騒がしくも平凡な日常（高町家編）」（後書き）

直人「はー・・・終わった」

秋風「ああ、これで日常編のだいたいが終わったな」

直人「だいたい!?!」

秋風「次回まで日常は続く。まあ、その後は8月になって決戦だよな」

直人「それにしても・・・」

秋風「ああ、フラグが立ちまくったな。この日常編。何人のファンが殺意を持ったことか」

直人「まあ、これは秋風のせいであり、俺のせいではない」

秋風「何を言うか、連帯責任だ」

直人「何を言う!俺は貴様に作られた存在だぞ!」

秋風「はっ!じっさいそう願っているのではないか!?!」

直人「んなわけねえだろ!」

秋風「まったく、当初では結構な卑屈&引きこもりキャラだったのに」

直人「作者の腕が悪い証拠だ」

秋風「しかたない、最終回はバッドエンドで終わってやる」

直人「それが作者のセリフか！」

秋風・直人「次回 第二十一話『生誕の宴』 TAKE OFF！」

第二十一話「生誕の宴」(前書き)

これedyouやく日常編が終了です。次回からはバトル一直線なので、
今まで殺意が沸いた方は申し訳ありませんでした。

では本編をどうぞ

「じゃあプレゼントも考えなきゃ」

「料理とかも考えないといけないわね」

と、みんながはしゃぐ。そこで、私はあることを皆に話した。

「それでね、準備をする間、直人君を誰かが連れて、ばれないように時間を稼いで、準備が出来たら連れてくる役を作ろうと思うけど・・・」

「・・・私がやる!」「・・・」

みんなが声を上げた。私だってそれをやりたい。

「みんながそういうと思ったよ。だから、やることは一つなの」

「そうだね、絶対に負けないよ!」

「うちが勝つで!」

「上等よ!」

「負けないから!」

全員が声をあげ、席を立ち上がる。その勝負内容とは・・・

「じゃんけん!ポン!」

じゃんけんでした。

「あいこでしょ！」

「あいこでしょ！」

延々と続くじゃんけん。そして・・・

「やった！私の勝ち！」

勝ったのはフェイトちゃんだった。

7月25日

朝8時。いつもどおりの朝だ。

「おはよう、姉さん」

「おはよう直人。今日は私、仕事で遅いからね？」

そう言っつて姉さんは仕事に出かけた。

「はいよー・・・」

俺はメシアを起動させ、いつもどおりに素振りをする。

『マスター』

「ん？どうした、ブレイブスワロー」

『一度試してみたいことがあるのですが』

「なんだ？」

『私とメシアの融合です。』

俺はその言葉に驚いた。

「もしかして……」

『はい、デバイス複合システムです。あれが私にも組み込まれています。』

「でもあれは違法だろ？」

『それは少し違います。その違法なのは私をベースとして作り上げた贋作のシステムのことです。私に搭載されているのは本物のシステムですから。』

「どついう意味だ？」

いまいち納得できない。そんなこと、資料にはなかった。

『少し昔話をしましょう。旧暦のベルカの大戦において、クラウン家はデバイス複合システムを完成させました。ここまではよろしいですね？』

「ああ……それは知っている」

『そのデバイス複合システムは初代頭首、ゼオンしか使うことは出来ませんでした。何故かわかりますか？』

「体が耐えられないからか？」

『その通り。強大な負荷に体が耐えられず、自我崩壊を起こしてしまい、限られた才能を持つ人間にしか使えないのです。だから研究者達は『擬似』のシステムを完成させたのです。それでも負荷がかかり、使いこなす人間はほとんどいません』

なるほど、だから違法なのか。ん？ちよつと待て・・・

「その理論なら、俺も使えないだろ」

『いいえ、マスターには使えます。メシア、リミットブレイクはマスターが何分耐えられますか？』

『最近使っていないか知りませんが、主は鍛えられる前は20分が限度です』

「ああ、最大で20分。静止だと30分だっけ？」

『今計算したところ、リミットブレイクなら今のマスターは5時間以上の維持が可能です。これはマスターの修行の成果と言えるでしょう。』

「本当か!？」

驚いた。この2ヶ月間士郎さんたちに鍛えてもらったおかげで、そこまで強くなっていたのか。

『リミットブレイクは本来、体に耐えられるだけの力と持久力が必要です。リミットブレイクは開放するにも体に先天的なものがない』

れば使えるものではないのです。』

「そうなのか？メシア」

『はい、主の体は数万人に1人の割合での適合者です。身近にいえば、なのは嬢などもそうですが。』

確かに、管理局のエースオペーは伊達じゃないし、そうかもな。

「ん？でもリミットブレイクとデバイス複合はなんの繋がりがあるんだ？」

『はい、それを今から説明しましょう。まず、リミットブレイクとデバイス複合のシステムはどちらも同じように身体のリミッターを解除する力なのです』

「どちらも同じ？」

『はい。しかし大きな違いは、その適合したデバイスを合わせることで、その二つのデバイスのリミッターさえ解除するところにあります。』

「なるほどな。それで、その体の負荷はどれくらい違うんだ？」

『負荷はマスターの耐えられる時間を言ったほうがわかりやすいでしょう。マスターがリミットブレイクを耐えられる時間は5時間として、その5分の1と言っていていいでしょう。』

「つまり、1時間が限度か・・・」

『さらに主が技を放つことに、10分ずつ、減っていくと考えてく

ださい』

「ずいぶん厳しいな・・・ま、やってみるか。ものは試した」

そう言っただ俺はメシアを片手に、ブレイブスワローを起動させた。

「ブレイブスワローセットアップ」

『オーライ、セットアップ』

俺の左手にブレイブスワローが現れる。俺は深呼吸をして、魔力を集中して練り始める。

「さあ、行くぞ。準備はいいな」

『いつでもどうぞ、主』

『同じく平気です。』

「よし、デバイス・・・」

ピンポーン

やろうとした瞬間インターフォンが鳴った。俺は思わずずっとけそ
うになる。出ると、そこにはフェイトがいた。

「フェイト？どうかしたのか？」

「あ、うん・・・今日、暇かな？」

「ああ、予定はないな」

「じゃあ、私とデートしない？」

「……………え？」

突然何を言い出すかと思えば……………まあ暇だし、いいけど

「その、一緒に遊びに行きたくて」

「わかった。支度するからちょっと待っていてくれ」

「うん」

そう言って俺は部屋に戻り、着替えて準備する。

『主、どうします？実験』

『まあ、今度にしておきますか、マスター』

「ああ、じゃ、フェイトを待たせるのもまずいから行くか」

俺は階段を降りて、外へ向かった。

『主はやっぱり女泣かせですね』

『まったくですね』

メシアとブレイブスワローがなんか言っていたが、俺は気にしないことにした。

外に出ると、フェイトがちゃんと玄関先で待っていた。

「悪い、待たせたな」

「うん。急に誘ってごめんね。じゃあ、行こうか」

そう言って俺の腕を絡める。もう慣れたから気にしないでおう。

「で、どこに行くんだ？」

「うん。隣町にできた新しい水族館なんてどうかな？」

「いいんじゃないか？」

特に断る理由もないし。

「じゃ、行こうー！」

俺はフェイトに手を引かれ、走り出す。その時一瞬、ものすごい寒気を感じたが、気のせいだということにしておう。

水族館は去年オープンした所だ。こういった場所にはあまり訪れたことがないので、少し興味がある。それ以上に隣にいるフェイトが興味心身だ。リンディさん、こいつに休暇をやるべきだと思う。

「じゃあ行こう。」

「ああ、また一周か？」

「もちろん！」

フェイトが満面の笑みを浮かべる。最近こんなのばかりだなと思うけど、気にしたら負けなんだろうな・・・多分。とりあえず手始めに海の魚。

「わあ・・・綺麗・・・」

その中を泳ぐのは綺麗な海でしか見られない魚ばかり。最近技術が発達してできることが増えてきている。

「ああ、確かにそうだな。」

「でもすごいね、あれ」

フェイトが指差すのは中に入って餌を巻いている飼育委員。ああいうのを見ると息苦しくなるな・・・

「あ、あれってジュゴンだね？」

「そうだな。ジュゴンだ。」

フェイトが次に指差したのは灰色のでかい哺乳類。

「なんでも、昔漁師が月夜に海でアレを人魚と間違えたそうだ。」

「へえ、そうなんだ・・・」

フェイトが感心し、ジユゴンをジッと見る。

「駄目だ、私には人魚には見えないや」

「当たり前だ」

俺は言つて苦笑する。フェイトが最近見えていて面白い。

「じゃ、どんどん行こう」

「はいはい……」

俺たちは水族館の奥へと進んでいく。すると、お知らせのアナウンスが聞こえる。

『これより、イルカのショーを行います。ご覧になる方は、3階のギャラリーホールへ……』

「直人！イルカだつて！」

「はいはい、3階だつてな。行こうか」

「うん！」

こうして俺たちはイルカのショーを見るため、ギャラリーホールへと向かった。

イルカのショーを見てから数時間。海鳴が夕焼けに染まる頃、俺たちは戻ってきていた。

「あー！楽しかった」

「ああ、そうだな」

「あ、ねえ直人？これから翠屋に行かない？」

「翠屋？いいけど・・・」

どうしたんだ？フェイトが自分から翠屋に行こうだなんて。下手したらなのはにボコされるような気がするが。そんなことを考えながら俺たちは翠屋に入る。珍しくカーテンが閉まっている。どうしたんだろう？だがやってるし。俺は翠屋の扉を開けた。その瞬間・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・誕生日おめでとう！！」「」「」「」「」「」

クラッカーの音が鳴り響き、そこはパーティ会場と化していた。・・・そういえば俺、今日誕生日だっけ？そこにはなのは、はやて、アリサ、すずか、ヴァルケンリッター、高町家、ハラオウン家、それに姉さんまでもがいた。

「さ、主役はこっちこっち！」

なのはに連れられ、ケーキの前に連れて来られた。そして、みんなが歌を歌い始める。

『ハッピーバースデー トゥーユー』

『ハッピーバースデー トゥーユー』

『ハッピーバースデー デイア 直人君』

『ハッピーバースデー トウユー！』

俺は歌が終わると同時に、蝋燭の火を消した。そして、みんなから拍手が巻き起こった。

「さ、一言！」

と、はやてに言われる。

「え、えっと……今日はありがとう！」

「いえー！」

みんなで騒ぎ、食事が始まった。リンディさん、高町夫婦、シャマルさんが酒を飲み始め、他の皆はジュースで乾杯。みんなで食事を楽しんだ。料理は姉さんたちが作ったらしい。料理を食べていると、途中からカラオケ大会が始まった。酔った勢いのリンディさんが実行し、フェイトたちを連れて歌い始める。こんな騒がしい誕生日は初めてだな……。そんなことを思っていると、歌い終えたなのは達が近づいてきた。

「直人君」

「ん？どうした」

「はい、誕生日プレゼント」

そう言って5人がそれぞれ箱を渡してきた。

「え、あ、ありがとう」

「何よ、もっと喜ばなさい」

「うん、ありがとう、みんな。開けてもいいかな？」

「『『『『勿論』』』』」

5人の言われるまま、俺はプレゼントを開けた。プレゼントは以下の通り。

なのは

十字架が針になった腕時計。白と蒼の綺麗なデザインだ。

フェイト

お出かけ用のバッグ。肩から掛けるタイプのやつだ。

はやて

この前話の中で話題になったアーティストのアルバム。そういえば持ってなかったな。

アリサ

スニーカー。黒と色の落ち着いたデザインのやつだ。アリサにはいいセンスだ。

すずか

男物のジーンズ。サイズはぴったりだけど、これどこで調べたんだ？

「なんか、俺が欲しいと思ってたものばかりなんだけど・・・」

「うん、千草さんから聞いたの。」

「あ、そう・・・」

姉さん、あんたおしゃべりだな。

「いいじゃない。嬉しいんでしょ？」

心を読むな。まあ、そうなんだけど。

「じゃあお返しも考えなきゃな・・・」

「は？あんた何言ってるのよ」

「そうだよ。これは直人君の誕生日だからだよ？」

「そうそう、気にせんとき？」

「いや、今度はみんなの誕生日の時にさ」

俺がいうと、皆が納得してくれた。

「そういうことなら楽しみにするよ」

「そうだね。期待してるよ直人」

皆で笑い、今日は解散となった。家に帰るともう11時を回っていた。俺は部屋に行き、ベッドに入った。

「疲れた・・・でも、楽しかったな」

眩き、俺は天井を見上げる。このような楽しい日々、想像もしなかった。この楽しい日々をマリカにも味わってもらいたかった。そう思う。そして全てが終わっても、またこんな平和な日々を夢見て、俺は眠りに着いた。

第二十一話「生誕の宴」(後書き)

秋風「今回にて、日常編は終了。今後はバトルものに戻りますが。なんとつかすいませんでした。」

直人「何が？」

秋風「なんとというか、殺意が沸く作品になった気がします」

直人「そりゃあねえ……」

秋風「次回第二十二話『開戦の狼煙』 TAKE OFF!!」

直人「引き続き感想なども待ってます！」

第二十二話「開戦の狼煙」(前書き)

とうとう最終決戦編に突入です。新年になっても頑張りますので、どうか直人たちを応援してあげてください。
それでは本編をどうぞ！

第二十二話「開戦の狼煙」

ここは人々の夢の果て。ここを私は「混沌の楽園」と呼ぶ。かつて人々は追及に溺れ、力を求めた。そして生まれたのは「混沌」^{カオス}だった。すべてを破壊し、全てを飲み込み、人々の夢は消え去った。唯一つ、その命を操る力を残して。残された混沌は魔導士の手によって封印され、今なおこの混沌の楽園に身を潜めているという。我はその扉の前に立つ。全てを手に入れるために。

「もうすぐだ・・・もうすぐ開戦する。我らの反逆が・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私の隣で、我がデバイスは沈黙を続ける。理由は否、我が魔力で押さえ込んでいる。すると、隣に我が部下のオーガが姿を現した。

「ボス。全てが整いました。いつでも実行可能です」

数百の反旗を翻す駒と、混沌によって作られた人形達が数千。この軍勢ならば、管理局に負けることなどない。

「さあ、始めよう。我らの、世界への「逆襲」を・・・」

私の前には、大量のカメラがあった。

高町家道場。今日俺はなのはの姉、美由希さんと戦っている。

「はあー！」

「うっ！」の！」

「甘いよ！えい！」

「わぁ！」

攻めても一撃を流され、反撃されてしまう。そしてそのまま押し切られ、剣を向けられた。

「あたしの勝ち」

「参りました」

「そこまで。ふむ、直人君。美由希はやりにくいかい？」

「すみません・・・やっぱり女性と戦うとどうしても・・・」

戦うときに女性だから、攻撃する場所を迷ってしまう。例えば顔とか、そういう場所を攻撃するのにはいつも躊躇してしまう。実を言えば、ダンピールと戦ったときも攻撃に困っていた。

「まあ、その辺は仕方ないね。わからなくもないよ。」

「でも直人君強くなったね。びつくりしちゃった」

「そうですか？ありがとうございます」

「どういたしまして」

そう言って美由希さんが手を差し出してくれたので、手を取り立ち

上がる。その瞬間、殺気を感じた。そこにいたのはなのは、フェイト、はやての3人だ。

「……みんなどうしたの？」

「「別に!」「」」

不機嫌そうに顔を振ってしまった。すると、今度はクロノ提督から緊急連絡回線が送られてくる。

「……?緊急用?どうしたんだろっ」

そう思いながら、みんなで回線を開く。

「クロノ提督。どうしたんですか？」

「大変だ!革命団シャドウがクラナガンに攻撃を始めた!」

「なんですって!?!」

すると、クロノ提督がその映像を映し出す。そこには高く笑い声を上げながら演説するゼオンの姿があった。

『我らは革命団シャドウ!我らがこの腐りきった世界を浄化し、世界を救って見せよう!喜べ愚民共!貴様らは世界を変えるための礎となるのだ!』

『もうすでに武装隊が向かっているが、まるで刃が立たない!転送ポートを開くから、急いでクラナガンへ飛んでくれ!』

「了解！」「」

「よし、行かないと・・・！」

「直人！」

転送用のポートが展開され、行こうとしたとき姉さんが現れた。

「え、姉さん！？」

「何か嫌な予感がして来て見たんだけど・・・」

十中八九、大当たりなんだけど。

「行くのね？」

「うん、マリカを取り戻してくるよ。」

「そう・・・私には貴方達のことを待つことしかできないわ。だからなのはさん、フェイトさん、はやてさん、この子をよろしくお願ひします」

「はい、もちろんです」

「必ずマリカさんを連れて帰ってきます」

「直人君のこともうちらに任せておいてください」

三人がそれぞれ頷く。そして、俺はメシアを起動させ、手に取った。

「行ってきます、姉さん」

「行ってらっしゃい・・・気をつけてね」

俺たちは転送し、クラナガンへと飛んだ。

クラナガンに着くと、すでに激しい戦闘が行われていた。

「行こう、全てに決着をつける・・・！」

『オーライ、主とならどこまでも』

『行きましょう、マスター』

「直人君」

「なのは？」

「戦うとき、無茶したら駄目だよ？」

「わかってる。お前の言いつけは守るさ。さあ、行こう！」

俺たちは駆け出し、人形達に踊りかかった。

我は映像でそのクラナガンの様子を見ている。そこには懐かしきものが目に映った。

「ほう、懲りずに戦うか・・・」

そこにあるのは数ヶ月前に我に敗れた男、井上直人。次々と人形を撃破していく。

「あ……る……じ……」

「まだ残っているのか、あの男への感情が……」

マリカへかけた魔法が解けることはあまりない。だが、それ以前にあの男、強くなっている。あれが全力かは知らないが、腕を上げたようだ。

「だが、我が力に勝てるものはない……」

我の後ろには巨大な魔力の塊、今まで集めてきた「力」がそこにあった。

「今度こそ、完膚なきまでに消し去ってやる……」

我が指を鳴らす。すると、井上直人の目の前に、いくつもの人形が現れた。

「さあ、楽しむがいい……」

我は引き続きその街を必死に守ろうとあがく魔導士たちを見続けた。

「たく！次から次へと！……蒼雷一閃！」

俺が謎の人形を切り捨てる。すると、後ろからキメラが襲い掛かっ

てきた。

「くっ！」

「トライデント・・・スマツシャー！」

フェイトのトライデントスマツシャーが炸裂し、キメラが吹き飛んだ。

「直人、平気？」

「ああ、なんとかな・・・それにしても、なんて数だ・・・」

「うん・・・きりがいいよ・・・一気に敵を倒すものがあればいいんだけど」

「・・・一気に敵を倒す・・・あるぞ！そんな方法が！」

俺はあることを思いついた。あるのだ、唯一つ、敵を一気に倒す方法が。俺はすぐさま詠唱を唱え始める。

「我が求めるは業火の力・・・その炎は全てを焼き尽くし、全てを消し去る・・・契約の元、姿を現せ！『ケルベロス！』」

魔法陣が展開され、ケルベロスが姿を現した。

「戦か？」

「ああ、思い切り暴れてくれ。さて・・・もう一体だな・・・我が求めるは全てを流す水の力・・・全てを飲み込み、流し去る・・・」

・契約の元、姿を現せ！『ポセイドン！』」

もう一度魔法陣が展開され、ポセイドンが姿を現した。

「お呼び？マスター」

「ああ、二ドと共に、あの人形とキメラを蹴散らしてくれ。」

「わかったわ。二ドよりは役に立ってみましょう」

そう言ってポセイドンが技を放つ。

『全ての魔を払う聖なる荒波を！ウォーターアクエリオン！』

どこからか大津波が現れ、キメラたちを飲み込んでいく。

「ターナに負けるか！『全ての魔を焼き払う煉獄の業火！ヘルフレイム！』」

二ドの三つ首から炎が吐かれる。それによって、キメラ達が灰になった。上へと避難した俺たちはその力に圧倒される。

「これが、聖獣たちの力か・・・」

「すごい、敵が一気に減ったね・・・」

確かに、随分と減った。そして、すでに撤退を始めているようだ。それに気がついたのか、ケルベロスとポセイドンが上に上がってくる。

「どうする主、敵は逃げ始めたようだぞ」

「これ以上やればマスターの魔力に限界が来る。私達は戻るわ。」

「ああ、ありがとう・・・」

俺がお礼を言うと、二人は粒子になって消えていった。すると、今度はクロノ提督から通信が入った。

「みんな無事か！」

「はい、なんとか・・・」

「敵は撤退を始めたようだ。一度対策をとる。アースラに来てくれ。」

「・・・了解」

俺たちはアースラへと転移した。

アースラに転移すると、そこには俺たち以外にも、ヴォルケンリッター達がいた。そして、すぐに会議が始まった。

「敵の本拠地がわかった!？」

「ああ、転送先の逆探知に成功した。」

「誘ってるのかな？」

「そうかもしれないが、手がかりはこれだけだ。」

逆探知に引つかかるような真似を、ゼオンがするとは思えない。こちらに招いているようにも思える。

「それでクロノ、その転送先はどこなの？」

「ああ、ここは『アルカディア』かつてアルハザードと同じような技術力を持っていた世界だ。」

「アルハザードと・・・」

フェイトは驚きを隠せない。だが、俺は別の言葉が引つかかった。

「持っていた？」

「ああ、もう何百年も前に滅んでいる。」

「そこには何があったんですか？」

「残念だが今は調査中だ・・・」

「敵地に取り込むか、それともここで戦うか・・・か・・・」

俺としては、敵が出てこようが倒し、ゼオンのところに行きたい。そしてマリカを取り戻せれば、それでいい。それに、こんな所で手ごまいていると、ジリ貧になるだけだ。

「クロノ提督・・・俺、乗り込みます。アルカディアへ」

「正気か？何があるかもわからないのに・・・」

「それでも、ここで戦ってたらジリ貧です。根源を叩かなければ、こちらが負ける」

クロノ提督は考えるが、そこでなのはが立ち上がる。

「クロノ君、直人君に賛成だよ。行こう、アルカディアへ！」

「そうだよクロノ。このままじゃクラナガンだけじゃない、ミッドチルダ全部が危ないんだよ？」

「せや。うちらなら何とかなる」

「まったく、君達にはあきれるな・・・」

「いやいや、勇ましいじゃないか・・・未来のエースたちは・・・」

すると、扉から声が聞こえる。そこにいたのはクラウン家党首、レット・クラウンだった。

「レット卿！どうしてここへ！」

「何、バカ息子がやったことを親が見届けんわけにはいかんだろう。直人君」

「なんだ？」

「君達に、全てが掛かることになる。それでもやるか？」

レットの言葉に、俺はため息をつく。

「何を今さら。俺は・・・いや、俺たちは、俺たちのために戦いに行くんだ。」

「そうか・・・そうだったな。ならば・・・」

レットが俺の手に付けられているブレイブスワローに魔力光を当てた。

「何を・・・!?!」

「プロテクトを解除する。ブレイブスワロー、オールリミッター解除」

『リミッター開放。エネルギーフル。』

「これで君は力を得た。その力で、あのバカを止めてくれ」

「任せとけ。クロノ提督。指示を」

「まったく・・・わかった。囑託魔導士 井上直人 高町なのは二等空尉 フェイト・T・ハラオウン執務官 八神はやて特別捜査官 シグナム二尉 ヴィータ三尉の以上6名は、アルカディアに突入。ゼオン・クラウンを逮捕、及び撃破しろ。」

「『『『『『了解!』『』『』『』』』』』」

「ああ、クロノ提督」

「なんでしょうか、レット卿」

「我が一族の10人の騎士たち、どうぞ使ってください」

レットが言うと、黒服に様々な武器を備えた男達が現れる。

「わかりました。協力感謝します。」

「どうか、ご武運を・・・」

レット卿はそう言って、モニターを見る。そこには、再び進行を開始したキメラ達の姿があった。

「時間がない。行こう！全てに決着をつけるんだ！」

『おお！』

俺の言葉に全員が賛同し、俺たちはゲートポートへ向う。

こうして、俺たちの最終決戦が始まった。

第二十二話「開戦の狼煙」(後書き)

2009年ももう終わりですね。これからも頑張っていくので、来年もよろしく願います。みなさん良いお年をW

直人「とうとう最終決戦だな」

秋風「思えば長かったなここまで」

直人「余計な話ばかり書くからだろ」

秋風「余計ではないぞ！主人公をいじり倒すなど、この上なく幸せだった！」

直人「それただの自己満足だろうが！」

秋風「ぎゃあああああ！！！」

直人「次回、第二十三話「決戦(前編)」TAKE OFF！」

第二十三話「決戦（前編）」（前書き）

あけましておめでとございます。本年度もよろしくお願いします。今年も直人は全力で頑張っていくので、どうかよろしくお願いします。

でわ、本編をどうぞ

第二十三話「決戦（前編）」

《直人side》

転送され、俺たちはアルカディアに到着した。そのあまりのひどい景色に、俺たちは絶句した。見渡す限りに広がる崩壊した建物と、枯れた木々。そして中央にそびえ立つ漆黒の城。

「あそこに、ゼオンがいるな・・・」

その漆黒の古城は鈍い光を放っている。恐らく、あそこに今までゼオンが集めたであろう魔力があるのだ。俺たちは古城を目指して進んでいく。城の近くまで行くと、キメラたちが沸いてくる。その数は相当なものだ。

「おめでとうございます・・・」

全員がデバイスを構える。すると、レットの側近だったアルザックが俺に近づく。

「井上直人・・・我々はレット卿の命により、お前の命に従いように言われている。」

「・・・なら、ここを任せてもいいか？」

「ああ、その言葉を待っていたぞ」

そう言ってランスを構える。

「後もう一つ。」

「なんだ？」

「全員、絶対に死ぬな」

俺の言葉に、アルザックは驚くが、強く頷いた。

「ああ、その頼み、引き受けた！」

そう言って側近達がキメラたちに襲い掛かる。

「みんな、行くぞ！」

俺たちは古城へと急いだ。

古城へ入ると、大きな広間に入る。そこには、二人の人間と、一匹の豹がいた。

「ふっふっふ……待っていたぞ。」

「ヴァン……あんたか」

「強くなったようだな。さあ、私と戦え！」

そう言って斧を構える。俺もメシアを構えようとするが、シグナムとヴィータに止められる。

「井上、ここで戦ったら、ゼオンと戦えなくなる」

「ここは、あたしらが片付ける。」

「しかし……」

「あらあ……一度負けた貴方達がやるのお？」

「我らの本気を知らぬものたちが何を言うか……いいから行け！
井上！」

「はやてたちになんかあつたら承知しねーぞ！」

「すまない！」

こうして、俺たちは二人を通り抜け、階段を上って行った。

《シグナムside》

「やけにあつさりと通してくれたな」

私はレヴァンティンを構えながら言う。すると、オカマこと、アビスが笑う。

「ボスの命令よ。それに、ヴァルケンリッターの強さ、見てみたくてね」

「そうか、なら私も本気で相手をしよう。行くぞ、ヴィータ」

「おう、いつまでもあんなヒョロイのにはやてを任せらんねーからな！」

ヴィータもグラーフアイゼンを構える。すると、ヴァンが笑う。

「はっはっは！俺に勝つ気か！チビッコ！」

「誰がチビだ！デカブツ！」

「威勢がいいな！ならば我らも本気で行くぞ！デバイス複合！」

「私達も行くわよ、アウスちゃん。デバイス複合」

ヴァンがハルバートチェーンを構えると、アビスの長剣とアウスが融合する。あの豹はデバイスだったのか。すると、曲を描く剣に変わる。

「私の長剣のデバイスの名はエリス。そしてアウスの名を取った複合型デバイス『アクエリアス』さあ、始めしようか？」

「望むところだ。夜天の王、八神はやての守護騎士、烈火の将シグナム」

「八神はやての守護騎士、鉄槌の騎士ヴィータ！」

「「いざ参る！！」」

こうして、私達の戦いが始まった。

《直人side》

「大丈夫かな、二人とも・・・」

「大丈夫、二人は強いから」

「ならいいけど・・・」

俺は心配だった。ヴァルケンリッターは高名であり、一騎当千であるものの、相手は複合デバイスを持っている。

「そういえば、もうすぐ夏祭りやな」

「ああ、そうだったな」

「この戦いが終わったら、みんなで行きたいね・・・」

「ああ、行けるよ。必ずな」

なのはたちが笑う。みんなと話して、少し緊張がほぐれた気がした。階段を上ると、さらにフロアがあった。今度はダンピールとオーガ。

「今度はお前らか・・・」

「おや、数が減っていますね。下の二人はその人たちと交戦中ですか・・・」

「・・・井上直人、勝負しろ」

ダンピールがすでにギルバクロイツを構えている。

「お前の相手をしている暇はない。俺はゼオンを止め、マリカを救

う

「ボスなら最上階で待っていますよ？さて、私の相手はそのお人形でよいでしょう。」

「・・・直人、行って。」

「フェイト？」

「ここは、私が！」

フェイトがバルディッシュを構える。すると、はやても前に出た。

「うちも残る。なのはちゃん、直人君を頼むで？」

「うん、任せて！」

「貴様ら雑魚に用はない・・・」

「この前と同じと思うたら大間違いや！行くで！フェイトちゃん！」

「うん！はやて！」

二人がデバイスを構える。本当に大丈夫だろうか？

「本当に、いいんだな？」

「大丈夫、私はもう迷わないよ。直人は、私に生きる希望をくれたから」

「うちは未来に踏み出す勇気をもらった。だから、ここで恩返しさせてや」

二人の決心は固い。二人なら、任せても平気だ。きっと、そんな気がする。

「わかった・・・頼んだぞ！」

俺となのはは駆け出し、階段へと向かった。

《フェイトside》

「行かせるか！」

ダンピールはギルバクロイツを振るおうとするが、それははやてのブラッティダガーによって防がれた。

「貴様・・・！」

「あんたの相手はうちらやでー？忘れんといてな」

「いいだろう・・・！すぐに殺してやる！」

はやてはダンピールと戦うらしい。そして私は・・・

「おやおや、人形さんが懲りずに・・・」

このオーガと、私は戦う。もう迷わない。直人が教えてくれた大切なことのために、私は戦うんだ。

「あなたが、どうして私のことを知っているか・・・この際、そんなことはどうでもいい。でも、一つだけ言えることがある・・・」

「ほう、なんですか？」

「私は、フェイト・T・ハラオウンという名の、1人の人間だ！」

私もオーガにレヴァンティンを振り、戦いが始まった。

《直人side》

フェイトとはやてまで、敵の幹部と交戦している。とてつもなく不安だ。大丈夫だろうか？

「大丈夫、二人も強いんだから」

「わかっていても、心配はする・・・なのはは心配じゃないのか？」

「うん、心配だよ？でも信じてるもん、みんなのこと」

「・・・そっか、そうだな。皆を信じる・・・」

確かに、そうすれば、きっと皆は勝ってくれる。そう思いながら、長い廊下を走り続ける。次階段に差し掛かったとき、後ろから砲撃が飛んでくる。

「なっ！」

「直人君！伏せて！」

俺たちが後ろを見る。するとそこには、後ろからキメラの大群が迫っていた。

「ちっ！こいつら・・・！」

「直人君！行つて！」

「だが、さすがのお前でもこの数は・・・！」

数は見るだけで20以上はいる。それも大型のキメラばかりだ。これでは、さすがのなのはでも戦うことなど不可能だ。

「大丈夫、私を信じて！」

「なのは・・・」

「私もフェイトちゃんやはやてちゃんと同じだよ・・・私も、絶望のそこにいた・・・でも、直人君がそれを救ってくれた。だから今度は私の番。直人君が決着をつけるために、私は力になる。直人君を絶望から救う光になる。」

「・・・わかった、信じる。なのはを、みんなを・・・」

「うん！」

「必ず後で来いよ！なのは！」

「わかってるよ！」

俺はここをなのはに任せ、最上階へと急いだ。

《なのはside》

直人君が行った。本当は行きたかったけど、これは彼のための戦い。私は、手伝うことしか出来ない。だから残った。

「レイジングハート、ちょっとかつこつけちゃったかな？」

『そんなことはないと思いますよ、マスター』

「そうかな。私は、直人君のために精一杯戦うよ。力を貸してね？
レイジングハート」

『オーライ。任せてください、マイマスター』

本当に頼りになる。相棒は私のために戦ってくれる。だから私も、直人君と、自分自身のために戦う。それが、今私に出来ることだから。

「エクシードモード！行くよ、レイジングハート！」

『オーライ、マイマスター！』

こうして、私の戦いが始まった。

《直人side》

なのはに後を任せ、俺はとうとう最上階へと上り詰めた。その王の玉座にはゼオンが座っている。

「ゼオン……！」

「とうとう来たか……一人……仲間があいつらの相手を引き受け、貴様はここに来たわけか」

「……そっだ」

ゼオンは笑う。

「それでは、貴様が押し付けたというわだ。孤独で戦うとは……哀れだな」

「違う」

「!?!」

俺が言ったことにゼオンが意外な表情を見せる。

「押し付けたわけじゃない……みんなは俺のことを信頼し、俺も皆を信頼してここに来た。例え1人でも俺たちの絆はここにある。俺は、1人で戦っているんじゃない」

「くつくつく……面白い、その絆の力とやら、見せてみる」

ゼオンが指を鳴らした。すると、影からマリカが現れた。その姿は戦闘用の服で、手にはクリスタルの剣を持っている。目は虚ろで、

輝きがない。

「マリカ！」

「さあ、その絆の力でこいつと戦ってみろ！」

ゼオンが言うと同時に、マリカが剣を振るう。

「くっ！」

「敵・・・排除・・・」

「マリカ！やめろ！」

俺は必死にその連撃を防ぐ。迷がないのか、その攻撃は凄まじい。

「くっくっく！マリカ！その侵入者を蹴散らせ！」

「了解・・・我が、主・・・」

「思い出せマリカ！お前のマスターが誰なのか！」

俺は必死に防御し、その剣を弾き飛ばす。しかし、マリカは次々と剣を作り出し、向かってくる。

「主は・・・ゼオン・・・」

「違う！今の主は俺だ！そうだろう、マリカ！」

「違う・・・」

「ぐっ！」

今度は二刀流で突っ込んでくる。やはりマリカは強い。

「マリカ・・・こうしてやってると思い出すよ・・・お前と修行してた日のこと」

「・・・？」

剣が変わると同時に、俺はマリカに語り出す。

「一回も勝てなくて落ち込むと、すぐにお前は優しく励ましてくれたよなあ！」

「ぐっ！」

「はあ！」

クリスタルの剣を叩き折り、メシアを振りかぶる。しかし、再び精製された巨大な剣に防がれる。

「いつも修行の途中！ゼオンがどんな人物か楽しそうに教えてくれたよな！」

「知らない・・・」

「俺が修行してるのにもかかわらず姉さんの弁当を早弁をしたときもあつた！」

「そんなの・・・しら・・・ない・・・」

マリカの剣が鈍くなっていく。すると、マリカの目から涙が流れてくる。

「俺は一日たりとも、お前のことを忘れたことはない！」

「しら・・・な・・・」

「だってお前は・・・俺の道具でも、ただのユニゾンデバイスでもない・・・俺とお前は、家族だろう！」

「！...」

言うと同時に、マリカの持っていた大剣が砕け散った。

「帰って来い、マリカ・・・お前の居場所は、ここにある」

「あ・・・ある・・・じ・・・主！」

マリカの目に光が戻り、俺に抱きついた。

「主！主！主！」

「マリカ・・・よく、戻ってきたな」

「ごめんなさい、ごめんなさい、主・・・私は・・・私は・・・」

「大丈夫だ・・・俺は怒っていない。お帰り、マリカ」

「ただいま戻りました。主直人」

マイマスター

「馬鹿な・・・自我を取り戻した・・・だと!？」

ゼオンは驚きを隠せず、立ち上がる。俺はゼオンを睨みつける。

「ゼオン・・・俺はあんたを許さない・・・マリカの心につけこみ、力を手に入れ、命を操る神を目指したあんたを、俺は認めない」

「黙れえ!こんな腐った世界に、ティーナを奪ったこの世界に!いつたい何の価値がある!」

ゼオンの顔が険しくなる。先ほどとは大違いだ。マリカも怯え、俺の後ろに隠れている。

「あんたがどんなに想っても、どんな力を手に入れても、あんたの恋人は・・・ティーナさんは帰ってこない!」

「貴様に何がわかる!愛するものが消えた悲しみ!貴様にわかるものか!」

「わかるさ・・・」

俺の脳裏に、父さんと母さんの顔が映る。

「だからって、人を蘇らせるなんて間違ってる・・・人は、神になんかなれはしない」

「なれる!このラグナロクとかき集めた魔力によって!カオスは復活する!」

「絶対の君臨だ・・・我が前にひれ伏すが良い！」

ゼオンが消える。一瞬で背後に回りこみ、剣を振るう。

「くっ！メシア！」

『オーライ、リミットブレイク！』

ゼオンの攻撃を間一髪で避ける。そして、マリカを抱え、後ろに飛ぶと、リミットブレイクを発動させた。

「・・・マリカ」

「はい、主」

「お前の力が、必要だ」

「わかってますよ、主・・・私は、主と共にゼオンを救うのですか
ら」

「「ユニゾン・イン！」」

再び、俺たちの力、「蒼天の騎士」の絆は蘇った。

第二十三話「決戦（前編）」（後書き）

一同「あけましておめでとございます！」

秋風「とうとう年を越えましたね！」

直人「で、今年の抱負は？」

秋風「小説全力投球！」

直人「いいのか悪いのかわからんな」

なのは「私は今年も全力全開だよ」

フェイト「私は・・・直人と・・・（顔が真っ赤になる）」

はやて「一年間突っ走るで！」

アリサ「とりあえず今年から秋風がふざけることに蹴りを入れるわ
！」

すずか「そんな、また出番なくされちゃうよ？とりあえず一年、静
かに過ごしたいな」

秋風「ま、とりあえず変わらないだろうな、未だに実感ないし」

直人「それは仕方ないだろ。それじゃ、読者の皆さん」

一同「今年もよろしくー！」

直人「次回！第24話「決戦（後編）TAKE OFF！」

第二十四話「決戦（後編）」（前書き）

バトルってやっぱり大変ですね。もうなんかボロボロです。
とりあえず頑張って書いたので、後半戦をどうぞ

第二十四話「決戦（後編）」

再びユニゾンの力を取り戻し、俺は剣を握りなおす。甲冑は真紅の状態から、再び蒼に変わる。その濃い蒼は、マリカとの絆が増した証だ。それに以前より出力が安定し、力が沸いて来る。しかし、それを見たゼオンは鼻で笑う。

「ふん、貴様・・・その程度で勝てるか？」

「さあな・・・」

「あきらめろ、我には勝てん・・・」

「御託はいい、さつさと来い」

俺が言った瞬間、再びゼオンが消えるが、俺には「見えて」いた。

「ほう・・・」

ゼオンの背後から来る攻撃を避けると、すぐに攻撃に移る。

「メシア！」

『ロードカートリッジ！』

「蒼雷一閃！」

メシアを振り下ろし、攻撃が当たる「はず」だった。振り下ろされた蒼雷一閃はゼオンの剣に受け止められる。

互いの剣が再び交わり、互いに傷が増えていく。その少し深く入った傷により、俺の攻撃速度が遅れる。ゼオンはその瞬間を見逃さなかった。

「もらったぁ！」

そのまま重い一撃が当たり、メシアで防ぐが、そのまま吹き飛び、崖に激突した。

「うっ……ぐう……」

「どうした、そんなものか？」

「ハア……ハア……！」

「所詮、貴様はその程度ということだ」

俺の全てを知ったように笑うゼオン。だが、俺はこれだけが全力なわけじゃない。“とっておき”を使うときが来たようだ。

「メシア、アレをやる」

『アレ……ですか。実験は済んでいませんか？』

「それでもやる。マリカ、今まで以上に集中して調整を頼む」

『な、何をする気ですか？』

「ブレイブスワロー、セットアップ」

『オーライ、セットアップ』

ブレイブスワローが光る。上着が消え、インナーの服になると、別の服に覆われる。それは白いバリアジャケット。さらにズボンも白く変わり、手には、白い剣、ブレイブスワローが現れた。

「それは・・・そうか、あの老いぼれが・・・くく・・・くははははは！」

「何がおかしい」

「貴様には言っていないが、この様子はミッドチルダや、ミッドチルダに深く関わる世界に放送している。」

「・・・何が言いたい？」

「お前があることをすれば、クラウン家は滅亡するのさ！」

ゼオンが言うが、そんなこと、承知の上だ。それに、これを託した時点で、レットに言われていることがある。

「そんなことか・・・」

「何!？」

「レット卿は、これを俺に託したとき、ある約束を交わしている。」

「約束？」

「貴様を止めたなら、あの男はすべての罪を認め、罪を償うのだと

な」

俺の言葉に、ゼオンは驚きを隠せなかったらしい。

「あの・・・老いぼれ・・・」

「だから、俺はこの力を使うんだ。メシア、ブレイブスワロー・・・行くぞ！デバイス、複合！」

『了解、主。デバイス複合システム起動！』

メシアとブレイブスワローから光が放たれる。それによって、メシアとブレイブスワローが一つになった。さらに、背中には羽が生える。その羽はまるで、天使の羽だった。デバイスの形状も、通常では見ないような特殊な剣で、魔力刃と剣が混ざった、そんな剣。

「英雄の剣・・・メシアスワロー（英雄の燕）・・・これで、貴様を倒す！」

「やれるものならやってみろお！」

互いに駆け出し、剣が交わる。ゼオンが攻撃した瞬間、俺は最大千速でそれを避け、後ろに回りこむ。

「遅い！」

「な、なにに！」

「『蒼天雷刃！』」

白い雷がメシアスワローを駆け巡り、ゼオンを斬りつける。

「ぐはあ！な、なめるなあ！」

ゼオンが再び斬りかかると、俺はそれを受け止め、そのまま受け流した。

「馬鹿な！」

「『紅蓮虚空刃！』」

紅い斬撃がゼオンを襲う。

「漆黑雷斬！」

ゼオンもラグナロクに黒い雷を纏い、斬りかかった。そして互いの剣が交わり、またしても爆発を起こした。

「ぐっ！くう・・・！何故だ・・・何故貴様はそのシステムを使いこなしている！」

ゼオンが肩膝を突きながら言う。確かに、このシステムは人体へ多大な負荷を掛けている。それには、その力を調節するものが必要になる。その俺とデバイスを繋ぐその調節機能を果たして言うのはと
いうと・・・

「マリカのおかげだ・・・」

「な、何い！」

「マリカは、クラウン家で生まれたユニゾンデバイス・・・そのク

ラウン家で生まれたデバイスを操ることなど、容易い・・・そうだな、マリカ」

『はい！簡単です！しかもシステムも主と波長を合わせているので！バツチリです！』

俺の中でマリカが右手の親指を立てる。おいおい、それはあいつには見えないから。

「貴様は見誤ったんだ・・・マリカの力を・・・マリカを・・・仲間を捨て、唯一つのことにしか目が行かなくなったお前が、俺に・・・俺たちに！勝てるわけがない！」

「小僧がああ・・・なめた口を聞くなあ！」

ゼオンの漆黒の魔力が肥大化していく。そして、それは巨大な剣になる。

「次の一撃で、終わりにしてくれる・・・塵一つ残さず消えるがいい！」

「いいだろう・・・メシアスワロー、マリカ・・・準備はいいな？」

『『『勿論です！我が主！』』』』

「出力最大で行くぞ！」

『ロードカードリッジ！』

5回のカートリッジロードを済ませ、メシアスワローの魔力が一層

煙が消え、そこには倒れているゼオンの姿があった。ラグナロクもヒビが入っている。すると、強制的にメシアとの融合が解除された。

「おっととと・・・解除されたか・・・」

『カードリッジ6回・・・つまり一つ5分として30分プラス、30分戦いましたからね。』

「主、大丈夫ですか？」

「ああ、なんとかな・・・だけど魔力はそこまで減ってないな・・・」

そう、体の魔力が空になると思ったら、案外そうでもなかった。

『それはブレイブスワローのお陰ですよ』

「どづいっことだ？」

『私のリミッターを解除したことで、マイマスターの中に溜めておける魔力量が上がったわけです。それに、マリカもいたので、だいぶ安定して戦えましたし』

「そっか・・・」

そんな話をしていると、背中に悪寒が走った。驚いて振り向くと、そこにはボロボロになって立ち上がるゼオンの姿があった。

「なっ！まだ立てるのか!？」

「『ふん……我を蘇らせた割には、情けない……』」

「何……?」

「主、アレはゼオンではありません……魔力が、凶悪すぎる……!」

マリカが冷や汗をどっさり掻いている。俺も同じだ。冷や汗が止まらない。

「お前、何者だ……!? いや、ゼオンに憑いている奴……誰なんだ!」

「『我が名はカオス……この世界の混沌なり……』」

「混沌カオスだと!？」

かつてアルカディアを滅ぼした邪心が、そこにはいた。

「こやつを唆し、私の封印を解かせ、力をくれてやったのもこのワシだ……」

「何だと!？」

「馬鹿な奴よ……最愛の人間を蘇らせるためにこのような馬鹿なことをしておつて。」

ゼオンが、いや、カオスが邪悪な笑みで笑う。そして、ゼオンの体が宙に浮いた。

「どうした！アビス！」

私は何もしていない。アビスの体から黒い霧が出て、アビスはその場に倒れた。かろうじて息はある。しかし、アビスの持っていたデバイスが灰と化し、消えていた。

一階フロア・ヴィータside

「やるじゃねーか」

「貴様もよくやっているぞ、ちびっこ……いや、鉄槌の騎士ヴィータ」

あたしらは場外で戦っている。あそこで暴れるのは互いに狭いという意見が一致したからだ。認めたくないけど、コイツ強いし。

「ガッハッハ！こんなに楽しいのは久しぶりだぞ！」

「はん、そろそろ終わりにしてやるよ！グラーファイゼン！」

あたしはカードリッジをロードし、殴りかかろうとした。

「ガッハッハ！全力で受けて……が！？がああああ……」

突然、ヴァンの奴が苦しみ始め、落下した。

「おい！どうした！」

すが・・・やりますね。」

そう言つてオーガが私の血の付いたディスプレイカーを舐める。

「あなたは、ここで倒します」

「いいでしょう・・・来なさ・・・! ?ぐつくう・・・! ?」

突然、オーガが苦しみ始める。体からは黒い霧が溢れている。私はまだバルディッシュで攻撃もしていない。

「これは・・・カオス・・・」

「カオス？」

「がああああああああああああああああああ!!!!!!」

オーガが絶叫し、その場に倒れ伏した。そして、ディスプレイカーが粉々に砕け、灰になった。

8階フロア・なのはside

「ふう、しつこいなあ・・・」

私は未だにキメラたちと戦っている。大型なだけあって、結構めんどくさい。それに強いし。

「レイジングハート、いける？」

『勿論です。しかし、体に負荷がかかりますよ?』

「多少はしょうがないよ・・・いくよ、レイジングハート!」

『オーライ、マイマスター!』

エクシードモードからのエクセリオンバスター・・・結構つらいけど、行くしかない!そう思ってレイジングハートを構えた瞬間、キメラたちは消えてしまった。あ、あれ?

「レイジングハート、私何かしたかな?」

『いいえ、しかし、完全に魔力反応がロストしました。しかし、上の階から強烈な魔力を感じます。』

「直人君に何かあったのかもしれない。急ごう!」

こうして、私は最上階へと向かった。

最上階・王の間

「な、なんだ!?!」

突然、カオスの体に黒い魔力が吸収され、体を変貌した。その体は先ほどより凶悪になり、足はたたまれ、宙に浮遊している。さらに成長を続けると、カオスが波動を出した。

「ぐっ!マリカ!」

「了解です！主！」

「ユニゾン・イン！」

再びユニゾンし、かろうじてその衝撃に耐える。そして風が止み、目を開けた。そして、そこには完全体となったであろうカオスの姿があった。見ると周りの壁は全て吹き飛び、外がある。

「よく耐えた……と言っておこう。」

「カオス……何が目的なんだ」

「世界の破滅、混沌の訪れ……それ以外に、我は存在しない」

カオスが笑う。その笑みは恐ろしいものだ。

「直人君！」

「なのは！」

なのはが駆けつける。

「なに？あれは……」

「直人（君）！」

そこへ、今度はフェイトたちも駆けつけた。

「みんな！」

「なんやあれ!？」

「ゼオン・・・いや、アルカディアにかつて封印された究極の生命体“カオス”だ」

「カオス・・・」

なのはも冷や汗を流し、レイジングハートを強く握っていた。無理もない。俺だつて怖いんだ。フェイトに限っては、少し震えている。

「『哀れな人間ども・・・私が全ての世界に絶望と終焉を与えてやるう・・・』」

カオスが戦闘態勢をとつた。俺もメシアとブレイブスワローを持ち、構えを取つた。

「そんなことはさせない!俺たちは勝つて、帰るんだ!」

「そつだよ!私たちは絶望を打ち砕く!」

なのはもレイジングハートを構える。

「私達は未来を掴む!」

フェイトもバルディツシュザンバーを手取る。

「うちらは混沌を消し去る光になる!」

はやてもシュベルトクロイツを構えた。

「我が主と、世界のために！」

「はやてに手出しはさせねえぞ！」

守護騎士の二人もそれぞれデバイスを構えた。

「行くぞ！これが最後の戦いだ！」

こうして、俺たちの「最終決戦」が始まった。

第二十四話「決戦（後編）」（後書き）

いよいよ次回で決着。さて、結末は待て、次回！

直人「さて、緊張感があるな」

秋風「まあな」

直人「しかしなんでお前は片手間にガンブラ作るかな？しかもダブルオーライザー」

秋風「いいじゃん、デザイナーズカラーだぜ？」

直人「そういうもんだいじゃねーんだよ。せつかく二階堂先生とか有名な方が感想くれたのにそんなことしてるかな？」

秋風「大丈夫、まじめにやってるから」

直人「そうには見えねえよ」

秋風「あ、もう時間だ」

直人「ごまかすんじゃねえ！」

秋風「次回第二十五話『蒼天に舞う騎士』 TAKE OFF！」

第二十五話「蒼天に舞う騎士」(前書き)

さあ、ラストバトルです!どうぞ

第二十五話「蒼天に舞う騎士」

そこにいるのは俺たち6人の騎士と魔導士。そして相手は世界の混沌。

「わしに挑むとは・・・愚かな・・・」

「行くぞ！」

俺はカオスの言葉を無視し、全員で総攻撃を開始する。

「虚空雷閃！」

「デイベインバスター！」

「トライデントスマッシュャー！」

「デボリテックエミッション！」

「飛竜一閃！」

「ラケーテンハンマー！」

全員の一斉攻撃が当たる。しかし・・・

「そんなもの効かん！」

「「「「「うわあああああああ！……！……！……！……！」」」」」

そのまま波動に吹き飛ばされ、全員地面に叩きつけられた。

「俺たち全員の攻撃を……」

「ものともしないなんて……」

俺たちの攻撃は一人一人でAAからSSにまで相当する威力を持っている。なのに、それがまったくをもつて効いていない。

「だが、あきらめてたまるか……!」

「そつだよ!みんなで勝つんだもん!」

全員が立ち上がる。それを見たカオスは笑っていた。

「くつくつく!力の差を知つてなお、立ち上がるうとするか……いいだろう、その敬意を称し、全力で相手してやろう……絶望して逝くがいい……」

カオスからまたしても力が解放される。それは、先ほどの比ではなかった。

「あいつ、化け物か!？」

「化け物……そんなものは生温い……究極といえる、世界の混沌……それが私だ。貴様らはわかつていないだろう……相手にしているものが、どれだけのものなのか……」

「なんだと……?」

何を言っているんだ、こいつは・・・

「わしはこのアルカディアで生み出された・・・そしてわしは人の心の闇を取り除く魔法具だった・・・」

「人の心の闇・・・？」

「悲しみ、苦しみ、憎しみ、憎悪、欲望・・・人々のその闇をわしは吸収し、人を救い続けた・・・だが、一つの出来事がワシを狂わせた・・・それが、戦争」

戦争・・・俺はその瞬間理解した。その果てしない人々闇を、カオスは吸収してしまったのだ。

「そしてワシは暴走し、このアルカディアを滅ぼした・・・そして、それによって出てきた闇をも吸収した・・・つまり・・・」

カオスが笑う。俺たちは冷や汗しか出ない。もう、すぐにでも逃げ出したい気分だ。

「貴様らはアルカディアにいた全ての人間の闇と戦わなければならぬのだ！」

カオスが右手から砲撃を放った。それは黒い魔力砲。威力はなのはこのスターライトブレイカー並だ。

「避ける！」

全員が飛び、それを避ける。すると、城の床が腐敗し、砕け散った。

『（主……カオスを倒すのに、一つだけ方法があります。）』

「（……！）」

『（カオスの体内には、素体であるゼオンがあります……その素体を引っ張り出せば……）』

「（奴の力が消える……！）」

「直人君……」

「なのは……？」

なのは達は全てをわかっているかのように頷き、カオスを見ながらデバイスを強く握っていた。

「私達が時間を稼ぐ。だからその間に……」

「任せて、いいんだな？」

「もちろんや……前にも、こんなことがあった。だからこそ、可能性は0やない。」

はやてはかつての闇の書事件のことを言っているのだろっ。なら、その言葉を信じよう。そう思った。

「わかった。頼む」

「必ず、帰ってきてね……」

「ああ、必ず」

「作戦は終わったのか？愚かな者達よ・・・」

カオスが更なる肥大化を繰り返している。これは好都合かもしれない。

「・・・ああ、お前を倒す、最大の秘策をな」

「くつくつく！なら来るがいい！愚かなる者達よ！」

「行くぞ！」

その言葉とともに、全員が飛んだ。そしてカオスに攻撃を始める。

「全力全開！スターライト！」

「雷光一閃！プラズマザンバー！」

「響け！終焉の笛！ラグナロク！」

「・・・ブレイカアアアアアア！！！！！！」

3人の最大必殺技がカオスに直撃した。これはさすがに応えたのか、カオスがよろめいた。

「・・・直人（君）！！」

「ああ！」

俺はリミットブレイクを発動し、カオスの口の中へと飛び込んで行

った。

カオス体内 中心部 ??? side

ここはどこだろう・・・俺は、今まで何をしていたんだ？駄目だ。何も考え付かない。眠ろう。

カオス体内 直人 side

ここが、カオスの中・・・か。

「恐ろしく、ひどい魔力が渦巻いていますね」

「マリカ？いつの間にユニゾンを解除したんだ？」

「飛び込んでからすぐにです。中の魔力は主には毒になります。境界を張らないといけませんから。」

言いながら、マリカが結界を展開する。正直、それでも気分が悪い。なんだ、これは。すると、頭の中で声がしてくる。

助けて・・・どうか、命だけは・・・！

死ね！みんな死ねばいいんだ！

どうして死んでしまったんだ！

殺す殺す殺す！

「なんだ、これは・・・！頭の中に・・・！」

「主！しっかりしてください！」

「これは、カオスが取り込んだ人の闇なのか・・・」

苦しい。何百、何千という人間の声が頭の中で響く。気がおかしくなりそうだ。

「主！気をしっかり持ってください！」

「だ、大丈夫・・・だ・・・ここで倒れるわけには・・・！」

そう、外でなのはたちが戦っている。こんなところで、倒れてなどいられない。俺は気を持ち直し、奥へと進んでいく。しかし、奥に進めば進むほど、その声は大きく聞こえる。

助けて！助けて！助けて！

ああ・・・人を殺すのがこんなに楽しいとはなあ！

金が欲しい！女が欲しい！全てが欲しい！

「黙れ・・・！黙れ・・・！」

「主・・・」

俺はマリカに支えながら、カオスの中心部にいた。そこにあったのは、驚くべき光景だった。

「ゼオン・・・なのか・・・」

俺の前にいたのは、カオスに取り込まれ、上半身が出て、手を止められているゼオンの姿だった。

「誰だ……？」

ゼオンがつつすらと目を開けた。

「お前は、誰だ？」

「……散々戦ったのに、もう忘れたのか？」

「戦った？俺と？何の話だ……？」

ゼオンが虚ろな目で首を傾げる。こいつ、記憶がなくなっているのか？

「ゼオン……」

「そこにいるのは、マリカ……？どうしてここにいるんだ？」

こいつはついさっきまでマリカを操っていたのに、何を言っているんだ？

「お前が持っているのは、メシア……そうか、お前はマリカ達のマスターになってくれたのか……」

「おい、さっきから何を言ってるんだ？お前は、俺と戦っただろ」

「俺にそんな覚えはない。盗賊弾シャドウと戦って、アジトに乗り込んで……変な剣を手にして……それから何をしていたんだ？」

まさか、ラグナロクに意識を封じ込められたのか？違う。こいつはティーナを蘇らせようとしていた。まさか、人間の闇の人格が普通の人間の人格を押さえ込んでいたのか？

「教えてくれ、俺は今まで何を……？」

「それは……」

「私が説明します。ゼオン……」

マリカが一步前に出ると、静かに語り出す。この3年間という悲劇を……

「そう、か……俺がそんなことを……」

「……あんたを引っ張り出して、コイツを止めなければ、世界が終わる」

俺がそう言うと、ゼオンは「そうだな……」と言って、顔を伏せる。

「俺は、どこかで望んでいたんだ。ティーナに会うことを……」

「……」

「その弱さが、俺の闇を作った。」

「……俺も昔、両親を亡くした」

「……？」

勝手に口が動いていた。どうしてだろう。言わなければいけない気がする。

「確かに寂しいし、会いたいと思う。だけど、俺は・・・俺はそれを、弱さだとは思わない！」

「!?!」

「それは、誰よりもその人を思う気持ちの強さだ。あんたが選べ。ここで朽ち果てるか、ティーナさんの分まで生きるために戦つか！」

「俺は・・・俺は・・・!」

カオスの体内壁が、ミシミシと音を立て始める。そして、ゼオンの右腕が出て、左腕が出てくる。

「づぐうう!!うおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

ゼオンは無理やりその壁を破り、出てきた。

「・・・まったく、相変わらず貴方は無茶苦茶です」

「はは、まあな・・・さて、井上直人・・・だったな。行くぞ」

「覚悟は決まったらしいな。だが、あんた生身で戦う気か？」

「まさか。ラグナロク、セットアップ」

ゼオンの声とともに、その力が再び戻った。それは先ほど戦ったゼ

オンの甲冑。だが、先ほどとは違い、温かさがあった。

「どうやら、俺の闇の意思の力はそのまま使えるらしいな」

「じゃあ行くか・・・マリカ、どうする？」

「なら、私は現主とユニゾンします、アレで行きましょう。」

「ああ、行くか。」

俺とマリカがユニゾンし、再びブレイブスワローを手に持った。

「ブレイブスワロー・・・行けるな？」

「ええ、勿論」

「ブレイブスワロー！メシア！デバイス複合！」

『オーライ、デバイス複合システム起動開始！』

外・なのはside

ブレイカーを3人分食らったのに、カオスは今だに健在だった。私達の魔力も、あと少しでなくなってしまう。

「よくやった・・・愚かなる人間達よ・・・」

カオスが砲撃をしようとしている。私達に、アレが防げるのかな？

「ここまで、なの・・・？」

「直人・・・」

「もう、駄目や・・・」

私達は戦意を喪失してしまった。勝てない。私達はそう思った。その時だった。

「ぐっ・・・！ぐおお・・・！」

突然カオスが苦しみ始めた。そして・・・

「蒼天雷斬！」

「紅天炎斬！」

蒼と真紅の魔力が飛び出てきた。カオスの胸が開き、二つの影が飛び出てくる。そして、そこにいたのは・・・

「直人君！」

「みんな、待たせたな・・・」

「直人、その姿は・・・？」

フェイトちゃんがいう。私もそう思った。その白い騎士甲冑に、白い翼。その姿はまるで天使だった。

「ブレイブスワローとメシアの複合デバイス、メシアスワローの姿

だ。」

「綺麗・・・天使みたいや」

「それより井上、何故そこにゼオンがいる？」

そこにいたのは、直人君と相対して上から下まで真っ黒な騎士甲冑で、悪魔のような翼を持ったゼオンさん・・・

「今のゼオンは、革命団シャドウのゼオンじゃない。本物の、ゼオン・クラウンだ」

そう言うてから、直人君は私達にゼオンさんのことを説明してくれた。

「それ、本当なの？」

「・・・すまなかった。私の闇・・・それが貴方達を傷つけた。この戦いが終わったら、私は罪を償うつもりだ。」

「皆様、どうか・・・ゼオンを信じてあげてください」

「俺からも頼む・・・」

直人君とマリカさんが言う。そこまで言うなら本当なんだ。

「うん。信じるよ・・・」

私がいうと、皆も頷く。

そうやって俺はメシアスワローを構える。全員もデバイスを構え、それぞれが囲むような位置に付く。そして、総攻撃が始まった。最初に攻撃するのはなのはとヴィータ。

「行くぞなのは！」

「うん！ヴィータちゃん！」

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵、グラーフアイゼン！」

ヴィータの足元に、ベルカの魔法陣が現れる。

『ギガントフォーム』

ヴィータのグラーフアイゼンがギガントフォームになった。アレは生身で喰らいたくないな。

「紅天爆砕！ギガントシュラーク」

ヴィータの攻撃が結界に防がれるが、そのままそれを破り、押しつぶす。そして、それになのははが続く。

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン！行きます！」

なのはの足元に魔法陣が展開され、レイジングハートに桃色の羽が現れる。

『ロードカードリッジ！』

「なっ……！」

「まさか、魔力の消費量が……！」

まさかの誤算だった。俺たちだけ転送されないとは……

「つくつくつく……貴様らだけでも消えるがいい！」

「ゼオン、コイツを使え……」

俺が渡したのは残りのカードリッジ。

「頼みがあるんだ……」

「なんだ？」

「……」

俺は小声で、あることを頼んだ。

「わかった。だが、お前は……」

「大丈夫だ。きっと、いつか会えるさ」

「わかった！行くぞ！」

俺たちは鎖を持ち、カオスに向かって突っ込んでいった。

なのはside

私達はアースラに転送された。でも、直人君たちの姿がない。わたしたちは急いでクロノ君たちの所に急いだ。

「クロノ君！直人君は・・・」

「まだ、あそこだ・・・」

クロノ君が指差したのはアルカディアで戦う直人君とゼオンさんの姿。大量のキメラを倒しながら、二人はカオスの核へと向かっていく。

「いったいどうして・・・」

「・・・先ほどゼオン・クラウンからメールが届いた。カオスが爆発すれば、その衝撃でアルカディアは勿論、ミッドチルダやその周囲の世界が消滅する。その前に、二人で爆発の規模を抑える・・・だそうだ」

「そ、そんな・・・！」

私達は絶句する。そんなこと、一言も言っていなかったのに・・・。映像を見ると、二人はカオスの核へとたどり着いていた。

直人 side

「ここが、核か・・・」

その黒く鈍い光りを放つ巨大な宝石。これを壊せば、爆発するもの

の、その規模を抑えることができる。

「すまないな・・・こんなことに付き合わせるなど」

「もう転送する方法もない・・・なら、付き合おう」

俺とゼオンはそれぞれ武器を構える。

『主、ゼオン、私も最後まで付き合います。』

「・・・ゼオン」

「ああ、稀少技能発動、「次元回路の旅人」」

俺はマリカとのユニゾンを強制解除し、マリカを魔法陣の中に入れた。

「主！？ゼオン！？」

「マリカ、すまない・・・姉さんを守ってやってくれ」

「そんな！駄目です！また・・・」

マリカがボタボタと涙を流す。俺も別れは辛い。だが、それでも守るものがある。

「直人！ゼオン！」

「ゼオン・・・」

「ああ、転送先「アースラ」……転送」

魔法陣が強い光を放つ。

「マリカ……なのは達に伝えてくれるか……」

「直人！ゼオン！そんな……」

「「またな」」

こうして、マリカはアースラに転送された。俺たちはもう一度剣を構えなおす。

「悪いなメシアスワロー……付き合ってもらって」

『構いませんよ。主とならば、どこまでも……』

「ゼオン、行こう！」

「ああ！」

俺たちは駆け出し、球体に最大攻撃を放った。

「蒼天雷斬！」

「紅天炎斬！」

技を放った瞬間、俺たちは光に包まれた。

なのはside

司令室に魔力反応が起こり、突然マリカさんが転送された。

「マリカさん！」

「直人・・・ゼオン・・・」

涙を流し、その先の映像を見る。二人が剣を振った瞬間、光が生まれ、爆発が起きた。

「魔力爆発発生！半径20キロの範囲！」

・ エイミーさんがいう。これで、世界が消えることは免れた。でも・

「エイミーさん！直人君と、ゼオンさんの反応は・・・」

「二人の魔力反応・・・っ！反応・・・ロスト・・・」

エイミーさんが悲しい事実を告げる。その瞬間、私は頭が真っ白になって、その場に倒れ伏せた。この日、世界を救った二人の英雄は消えて、世界が静寂に包まれた。

第二十五話「蒼天に舞う騎士」（後書き）

秋風「今回はお休みです。直人死んじゃったし。」

直人「勝手に殺すな！」

秋風「いや、このコーナーで生きてるのであって、お前完璧死んだら」

直人「作者が言うセリフか！それは！」

秋風「まあ、冗談はさておき、次回で最終回です。もっとも、この話ですがね。それでは、直人君どうぞ」

直人「次回、第二十六話・第1部最終回『物語は終わらない』TA
KE OFF！」

第二十六話・第1部最終回「物語は終わらない」(前書き)

第1部、とうとう完結です。これまで奇跡的に小説が続き、いままで見てくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。これからもどうか、第2部をどうかよろしくお願いします。

第二十六話・第1部最終回「物語は終わらない」

クロノside

この後の話をしよう。この事件の後、時空管理局が出勤して周辺を捜索。周辺にはゼオンが行ったであろう稀少技能により、幹部4人が発見され、逮捕される。4人はいずれもリンカーコアを失っていた。理由はやはり、カオスの擬似デバイス複合プログラムの影響かと思われる。その後、直人のデバイス複合システムの使用によってクラウン家は今までの「罪」を記者会見で暴露し、管理局に逮捕された。側近達も逮捕されたが、別に悔やんでいる様子は見られなかった。そして、その管理局で賄賂を貰っていた本局の幹部も逮捕されることとなった。そして、世界を守るために戦った騎士井上直人は管理局が正式にM I A（戦闘においての行方不明）とされ、世界を守った英雄として、ミッドチルダで称えられた。そんな戦いから、もう一週間が経過していた。

「ふう・・・」

僕は今までの報告書をまとめた。行方不明・・・正確には戦死した人間を記録するなど、正直嫌なことだ。

「クロノ、お疲れ様」

入ってきたのはエイミイだ。机にコーヒーを置いてくれる。

「どっつ？報告書はできた？」

「まあな。それよりどうだ？3人の様子は」

「フエイトちゃんとはやてちゃんは立ち直りつつあるけど、なのはちゃんは・・・」

そう、これが一番の問題だった。3人のエースは直人が行方不明になったとき、倒れるまで捜索をしていた。3人はここ数日ろくに食事を取らず、アースラで与えられている部屋に閉じこもったままなのだ。マリカは保護された後、直人の家に戻った。姉の千草もシヨックを受け、倒れたとマリカから聞いた。

「ねえクロノ・・・直人君は、本当に・・・」

「M I A・・・本局がそう決めたんだ。そうなんだろう。」

「でも・・・」

「わかってるよ。信じることも大切だからな。」

心配しながら、僕はカップに口をつけた。

なのはside

あれからもう一週間・・・私は、どうすればよかったんだろう？直人君は私達を助けてくれた。でも、直人君が代わりにいなくなっただろう。こんな悲しい結末を迎えてしまったのだろうか。すると、メールが来た。

「直人君の・・・携帯電話？」

急いでそれを開くと、マリカさんからだった。なんでも、明日直人君の家に来て欲しいというものだった。いったい、なんだろう？そ

う思いながら、私は眠りに着くことにした。

次の日、私は直人君の家を訪れた。入ると、フェイトちゃん、はやてちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんがいた。

「みんな……」

「なのは、ほら、座って」

フェイトちゃんに連れられ、私はソファーに座った。

「みんな揃ったかしら？」

千草さんとマリカさんが階段から降りてきた。

「あの、千草さん、お話というのは？」

「ええ……その、直人のことなんだけど」

聞いた瞬間、全員の空気が重くなる。

「……すみません、でした」

私は、自然にそう言っていた。

「別に、貴方達のせいじゃないわ。あの子が、選んだことだもの。」

「でも、直人を守れなかったのは……」

「……うちの責任です……」

私だけじゃない、フェイトちゃんとはやてちゃんも同じように口を開く。それでも、千草さんは笑顔だった。

「顔を上げて？3人とも」

千草さんが言うと、私達5人の前に、小さな箱が目の前に置かれていた。

「これは・・・？」

「直人の部屋から出てきたのよ」

箱の上には、小さくDear NANOHAと書かれていた。開けると、そこにあったのは・・・

「これって・・・」

そこにあったのは、綺麗なピンク色の星がついたネックレスだった。

「この前の誕生日の時に言っていたでしょう？お返しをしたって。」

フェイトちゃんはレモン色の雷がついたネックレス。はやてちゃんは雪の結晶がついたネックレス。アリサちゃんはオレンジ色の太陽がついたネックレス。すずかちゃんは淡い紫色の月がついたネックレスだった。そして、そこには小さなメッセージカードがあった。

《神にあなたと巡り合えたことを感謝し、これを送る。》

これを見た瞬間、ボロボロと目から涙がこぼれ出した。他の4人もそうだった。

「直人君・・・うつ・・・うつ・・・」

涙が止まらない。巡り合えたこと、それは私だって嬉しかった。私の運命を変えてくれた人。その人が、私達を守って死んでしまった。それがこの上なく悲しかった。

「皆さんに、言うておくことがあります。」

「・・・?」

「主・・・直人は・・・まだ、生きています」

「「「「え!?!」」」」

私達は驚いた。みんな泣くのをやめて、マリカさんの方を見た。

「それって、どういうこと?」

フェイトちゃんが聞く。すると、マリカさんは静かに説明を始める。

「私は主と契約をすると、その心や感覚がリンクしています。契約が切れてしまえば、その切れた時に感覚が消え、それがわかるのです。実際にゼオンの時はそうでした。しかし、今回は私に何の影響もなく、契約が切れた感じがしないのです。」

「そ、それじゃあ・・・!」

「間違いなく、主は生きています。この広大に広がり、数多に存在する世界の一つに間違いなく。」

その言葉を聞いて、自然と心の中にあつたモヤモヤが消えていた。生きている・・・それを信じたい。

「・・・マリカさんの言葉、信じます」

私と同じように泣いていたフェイトちゃんが、そのネックレスを握り締めて頷く。

「せやね、きつと、直人君は生きてる。」

はやてちゃんもニッコリと笑う。

「帰ってきたら、とりあえず殴るわ！私達を泣かせるなんて！」

アリサちゃんが拳と手のひらを合わせている。ちょっと怖いかも。

「そうだね、きつと・・・」

すずかちゃんも頷き、その手に取ったネックレスを首にかける。

「そうだね。いつかきつと、会えるよね・・・」

そうだ、私達の物語は、まだ始まったばかりなんだから・・・

第1部 完結

?????side ????????

「……ここは……」

俺は、どうしたんだ？確か、カオスに攻撃して、光に包まれて……それからが思い出せない。それにしても、体が痛い。俺、生きてるのか？

「大丈夫？しつかりして……」

俺の顔を覗き込んでいるのは、俺が知る人にそっくりな女性だった。俺はその女性に聞いた。

「ここは……？」

「ここは、アルハザード。人々が求めた理想郷だよ。」

「アルハザード？」

「そう、アルハザード」

こうして、俺の新しい物語が始まった。

第二十六話・第1部最終回「物語は終わらない」（後書き）

作者より

今までありがとうございました。無事、第1部が最終回を迎えることが出来ました。この作品を書き、色々な方から応援の声をいただいたことを大変嬉しく思えます。この先、第2部が始まりますが、具体的なことは決まっていますので、すぐに更新していきたいと思っています。これからもどうか、直人の成長と戦いを温かい目で見守って欲しいと思います。

ちなみに外伝をここで書いた後は、別の小説として書くので、よろしく願います。それでは、また次の機会に。

平成22年1月4日 魔法少女リリカルなのは蒼天に舞う騎士

作者 秋風

次回予告

「ここは？」

「ここは、アルハザード。人々が求めた理想郷だよ。」

「アルハザード？」

たどり着いたのは人々が求めた理想郷。

「貴方達は？」

「私はプレシア・テストロッサ」

「私はアリシア・テストロッサだよ」

出会ったのは友の家族

「ここはアルハザードという国」

「俺も、騎士隊に入るのか？」

新たに始まる物語

「蒼天の騎士 井上直人、出撃する」

魔法少女リリカルなのはStrikerS 蒼天に舞う騎士

T A K E
O F F

外伝 第一話「辿り着いた世界」(前書き)

お待たせしました！（待ってる人いるのか？）

蒼天の騎士外伝第一話です！

これは後のシリーズであるStrikersへ続く重要な物語です。
第一話から読んでいただいている方には是非とも読んで欲しいです。
それではどうぞw

外伝 第一話「辿り着いた世界」

俺は、どこかの草原にいた。ここは、どこだろう。カオスを倒して、光が俺に当たって、それから・・・それから、どうしたんだろう？俺は、死んだのか・・・？なら、母さんと父さんに会えるのかな。というか、ここはどこだ？起き上がってみるか。

「いつ！」

体を起こそうとしたが、起きられない。見れば、全身血だらけだった。死んだのに血だらけかよ・・・でも駄目だ。なんかすごい血が出てる。天国じゃなくて地獄に落ちるのかな、俺は。そう思って俺は目を閉じた。すると、足音がした。誰か来たのか？それとも獣がなんか俺を喰いに来たのか？このおびただしい血なら、獣の類はすぐに寄ってくるだろうし・・・って、地獄だと餓鬼なんかかな？

「あ・・・」

声が掛かった。よかった、人間だ。だけど、どこかで聞いた声だ・・・誰だっけ？

「大丈夫？しつかりして・・・」

声を聞き、考えながら俺は目を開いた。そこにいたのは金髪を一つに結わいて、さらには真紅の瞳・・・俺は思わず呟いてしまった。

「・・・・・・フェイト？」

ありえない。俺は死んだはず、第一ここにフェイトがいるのはおか

しい。あの時確かにゼオンが転送をしたはずだし、俺と一緒に死んだりしたはずがない。

「あなた、フェイトのことを知ってるの？」

「え？」

別人？だけどそっくりすぎる。髪型が違うだけで、髪を解いたら絶対にフェイトだ。

「とにかく、今私のお母さんに連絡したの。だからすぐに助かる。ただ、現状危ないよね。」

今から応急処置の魔法をかけるから・・・ちよつと我慢して？」

「ここは・・・？」

「ここは、アルハザード。人々が求めた理想郷だよ。」

「アルハザード？」

「そう、アルハザード」

そう言つてフェイトに似た少女は俺に手をかざして魔力光を当てた。フェイトとは異なる白い・・・いや、白銀の魔力が俺を包んでいく。温かい・・・そう思えた。その光に包まれ、俺の意識がだんだんと遠ざかっていく。目を閉じる寸前に、転移用の魔法陣が現れ、二人の女性が現れたのを見て、俺は気を失った。

再び目を覚ますと、そこはベッドの上だった。そこはずいぶん豪華

邸。部屋の中はとても広いし、ベッドも俺ベッドの二倍くらいか。赤絨毯にシャンデリア・・・どんな金持ちだ。この家の主は。そう思いながら俺は体の異変に気が付いた。手や体のあちこちに包帯が巻いてあった。あのフェイトに似た女性だろうか？って、そうだなんであいつがここにいるんだ！？そんなことを考えていると、そのフェイトに似た金髪の女性が入ってきた。

「あ、目が覚めたんだね？大丈夫？」

「君は・・・」

「私の名前はアリシア。アリシア・テストロッサだよ」

「俺は、井上直人・・・」

「まず君が思っていることを当ててあげる。どうして私がフェイトと同じ顔なのか・・・でしょ？」

アリシアと名乗る少女がニッコリと笑う。まさにそのとおりだ。すると、今度はまた別の女性が入ってきた。

「アリシア、彼が目覚めたのかしら？」

「うん、母さん」

その研究員のような白衣を着た女性。

「私はプレシア・テストロッサ。貴方の名前を聞いてもいいかしら？」

「井上直人です。あなた方が助けてくれたんですか？」

「ええ、そうよ。」

「ありがとうございます。助かりました。それで、ここはどこなんですか？」

「ここは人々が求めた理想郷『アルハザード』」

「アルハザード……？」

俺が首を傾げると、プレシアさんは少し驚いた顔をしていた。

「あなた、自分で望んでここに来たんじゃないの？」

「ええ。えっと、話せば長くなります」

俺はカオスとの戦いについて話した。

「そうだったの。じゃあ貴方は次元震に巻き込まれたんだと思うわ。」

「そうなんですか……」

「それで、貴方はフェイトとどういう関係？」

「えっと、学校のクラスメイトで、同じ職場(?)で働く仲間です。なんだか少し雰囲気が変わったので、明確に俺とフェイトについての関係を話した。」

「そう、貴方は友達なのね。」

「ええ・・・それで、気になるんですが・・・」

言いながら俺はアリシアさんをちらりと横目で見た。

「言いたいことはわかっているわ。アリシアとフェイトのことでしょう？アリシア、先に食堂に行つてて。」

「うん、母さん」

アリシアさんは素直に頷き、部屋を出て行った。

「さて、フェイトのことだけど・・・あなたは何か知っているような顔ね」

「・・・はい。貴方とアリシアさんのことは、フェイトから聞きました。」

「なら、もうわかってるんでしょう？アリシアはフェイトの姉であり、フェイトを生み出す際のオリジナル・・・そういえばわかるかしら？」

「はい・・・」

そう、二人の名前を聞いたとき、どこか頭の中で引つ掛かっているものがあつた。そして、フェイトとの会話を思い出し、全てを悟つた。

「フェイトは、元気？」

「ええ・・・彼女は今、時空管理局の執務官として働いています。」

「そう・・・あの子は、幸せに生きてるかしら？」

プレシアさんの目は、どこか寂しそうだった。

「・・・フェイトは、まだ苦しんでいます」

「え？」

「貴方を助けられなかったことです」

そう、フェイトが教えてくれた、そのこと。後にPT事件と言う名で受け継がれていくその事件を話してくれたフェイトの顔は、何よりも悲しそうだった。

「私も、この長い年月の中であの子のことを思い出すことが多くなつたわ。私は、あの子を捨ててしまった・・・もう、会う資格なんてないのよ」

「それは違います」

「？」

「だって、生まれ方が少し違うだけで、後は同じ。フェイトの母親も、アリシアさんの母親も、貴方1人じゃないですか」

母親は1人だ。フェイトの母親だって、プレシアさんで間違いはな

いはずなんだ。

「あの子は・・・私を許してくれるかしら？」

「きっと許してくれますよ。だって、親子でしょ？」

「そうね・・・そう信じるわ」

プレシアさんが笑ってくれた。きっと、いつか再会できるだろう。すると、ドアがノックされ、1人の女性が入ってきた。

「プレシア、食事の準備ができました」

「ええ、リニス・・・言われたとおりにしてくれた？」

「はい、もちろん」

リニスと呼ばれる女性は頷く。

「ほら、貴方もいらっしやい。」

「え？」

「食事よ。お腹が空いているでしょう？それに、傷も魔法を使ったからもう直ってるはずよ」

そういえば痛くない。それにお腹も空いている。「ご好意に甘えよう。すると、リニスと呼ばれた女性が近寄ってきた。

「リニスです。以後、よろしく」

「井上直人です。」

簡単な挨拶を済ませると、リニスさんとプレシアさんが歩き始めたので、俺もその後を追った。廊下も豪華だ。フェイトの話だとプレシアさんは科学者だったらしいが、こんなに稼げるものなのか？食堂に着くと、すでにアリシアさんが席に座っていた。俺はアリシアさんの隣に座った。目の前には豪華な食事が並んでいる。この人の職業は本当に何なんだよ。

「それで、あなたの今後のことだけど……」

「え？あ、はい……」

食事をしながら、プレシアさんが話を始めた。今後……？

「貴方、自分の世界に帰りたいの？」

「ええ、まあ……帰れることなら」

「一応この世界の技術はミッドチルダ以上のものよ。他の世界への転送装置を作るとは不可能じゃないわ。ただ……」

ただ？何かあるのか？

「その転送装置を作る時間が掛かるわ。10年以上掛かるわね」

「10年！？」

随分掛かるんだな。

「まあ、10年は地球へ行くために作る転送装置の年月。ミッドチルダなら3年と少しね」

「3年・・・」

「ミッドチルダなら事情を言えばすぐにでも地球に帰れるでしょう」
確かにそうだ。俺も囑託魔導士だし、事情を話せばきっと・・・

「ただし、条件があるわ」

「条件・・・ですか？」

「一つ目。轉移し、ミッドチルダに行っても、この場所は絶対に言わないこと。二つ目。3年間、私達と一緒にここで働くこと。この条件を飲むなら、協力するわ」

ここで働くって・・・3年なら、まあいいか。

「わかりました。条件を飲みます。」

「そう、じゃあ私もこの世界のことを話すわ。」

こうして、食事中に俺はこの世界のことを教えてもらい、自分の世界のことも話しながら、食事を終えた。食事を終え、部屋に戻るとリニスさんにメシアとブレイブスワローを返してもらった。両方も俺と同様にかなり傷ついていたらしい。

「メシア、ブレイブスワロー・・・大丈夫か？」

『ええ、もうすっかり』

『ご心配をお掛けしました、マイマスター』

「いや、無事で何よりだよ」

とりあえずよかった。プレシアさんからも稼働しているのが不思議だともで言われていたから、不安で仕方なかったんだけど。

『主、とりあえず今の状況を簡単に説明してくれませんか？』

『そうですね、私達眠っていたのでよくわかっていませんし・・・』

「ああ、わかった。」

こうして、俺はメシアたちに説明をした。説明したのは以下の通り。

俺たちは次元震によってアルハザードに辿りついた。

助けてくれたのはフェイトの実母のプレシアさんと姉のアリシアさん

アルハザードは一つの「国」であり、世界の名前ではないらしい

この世界では戦争こそないが、魔物が近年増加し、人々を襲っているらしい

アルハガードでは魔法の技術はミッドチルダ並みか、それ以上らしい
ミッドチルダへ行くための転送装置は作るのに3年掛かる

3年間俺はプレシアさんの紹介で騎士としてプレシアさんの仕事場の城で騎士になる

『なるほど、大体わかりました。』

『しかし主、最初の部分ですが、我々は次元震でこの世界で来たのではありません』

「え？どういうことだ？」

何を言い出すのだろうか、それ以外にここに来る方法はないはずなんだけど……

『ゼオンの稀少技能、お忘れですか？』

「まさか、次元回路の旅人？」

『カオスに攻撃した直前、ゼオンは我々を次元の狭間に放り込んだのでしよう。それによって、私達は偶然にもアルハガードに流れ着いたのだと思います。』

「じゃあ、ゼオンは？」

『わかりません。同じ方法で脱出したのか、それとも……』

「そっか……」

嫌な方向へは考えたくないな……出来れば無事でいて欲しい。そんなことを思っていると、急に眠くなってきた。今日は色々あって疲れたな……

「もう寝ようか……考えるのは明日にしよう……」

『はい、おやすみなさい主』

『よい夢を、マイマスター』

メシアたちの声を聞いてから俺はベッドに入り、眠りに着くことにした。

こうして、俺の3年間のアルハザードでの生活が始まった。

外伝 第一話「辿り着いた世界」（後書き）

秋風「さあ、始めました蒼天の外伝です」

直人「どうでもいいけどアルハザードがひとつの国ってどうよ？」

秋風「いいじゃん、小説によって違うんだし」

直人「例えば？」

秋風「赤夜叉先生の銀色の侍シリーズがそうでしょ」

直人「あれは元世界だっていう設定だったじゃん」

秋風「いいんじゃないの？お前の存在だって原作から見ればイレギ
ユラーじゃん」

直人「それを言うな！てか、それは他の作家の人に失礼だぞ！」

秋風「すいません！」

直人「まあとりあえず外伝の後はどうなる？」

秋風「とりあえず進むよ。ちゃんとね」

直人「あ、そう」

秋風「じゃ、張り切ってどうぞ」

直人「次回、外伝第二話『アルハザードの騎士』 TAKE OFF
！」

秋風「まだまだ感想待ってます！」

外伝 第二話「アルハザードの騎士」（前書き）

もうすぐ学校です・・・ああ、これで今まで以上に更新が出来なくなる・・・鬱だ

引き続き蒼天に舞う騎士をよろしくお願いします

外伝 第二話「アルハザードの騎士」

次の日、俺は目が覚めた瞬間硬直した。ベッドの中に、アリシアさんが眠っている。なんかこんなの前にもあったな。とりあえず思うけど、プレシアさんカリニスさんに見つかったら間違えなく殺される。

「メシア……」

『おはよございませす。この状況、頑張ってくださいませ』

「頑張ってるじゃねーよ！どうすんだこれ！」

「んん……あ、直人おはよう」

アリシアさんが俺の声に反応して目を覚ました。

「あの、アリシアさん？どうして俺のベッドで寝ているんですか？」

「アリシアって呼んで？」

「そうじゃなくて……」

「アリシアって呼んでくれなきゃ答えてあげない」

そう言ってアリシアさんは頬を膨らませてそっぽを向いてしまった。俺は思わずため息が出ってしまった。フェイトといいこの人といい……

「わかった、アリシア・・・どうしてここで寝てるんだ？」

「うん、昨日この部屋に遊びに来たら直人が寝てて、起こすのも悪いし、部屋に帰るのも面倒だから、ここで寝ちゃったの」

テへって、ペコちゃんみたいな顔をしているけど、アリシアの状態は詳しく言えばワイシャツに下着だけの半裸状態。目のやり場には困るし、現状を他の人が見たらやばい。そんなことを思っていると、部屋がノックされ、ドアが開いた。そこにいたのはリニスさん。

「直人さん、朝食の用意が・・・・・・・・・・・・・・・・!!!!!!!!!!!!」

入ってきた瞬間、リニスさんが絶句し、手に魔力を溜めていた。

「リ、リニスさん・・・？」

「アリシアに、何をしたんですか・・・？」

「いや、俺は何も・・・!!」

「嘘をおっしゃい!!」

必死の弁解にも関わらず、リニスさんの手にあつた魔力が無常にも叩きつけられた。

「あああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

この日、俺の悲鳴が屋敷で朝一番に轟いたらしい。

この後アリシアが事情を説明し、リニスさんは顔を真っ赤にして俺に謝罪をしてきた。

「本当に申し訳ありません！私っいたらてつきり！」

「い、いや・・・もう気にしていませんから・・・」

そんな涙目で謝らないで欲しい。なんかこっちが悪いことしているみたいだから。それにしても・・・

「あの、プレシアさんが見当たりませんが・・・」

「母さんならもうお城に行っただよ」

「城？」

「うん、アルハザードを統治する『アルハザード城』母さんはそこで科学者として働いてるんだ」

「そうなんだ。」

アルハザード城って・・・そのまんまなんだ。

「直人はお城で騎士隊に入るんだよ？」

「騎士隊・・・」

「魔導士隊と騎士隊・・・城と女王を守るそのアルカディア最強の槍と盾」

「その力は国のため、民のため、女王のためにある……ですね」
リニスさんが追記してくれる。なんだか、物語に出てくるような感じだな。

「じゃ、行こうか直人。母さんが推薦状を出してくれたらいいから。」
「え、行ってくつて城にか？」

「うん。ほら早く！」

俺はアリシアに手を引かれ、屋敷を出て城を目指した。

屋敷を出ると、そこはファンタジー満載の世界だった。

「ここが、アルハザード……」

「びっくりした？」

「ああ……まるで、御伽の国だ……」

そこは大都市でありながら、ビルなどではなく、レンガで造られた家々や長い建物。そして上を飛ぶ竜や大鷲達、そして遠くにそびえ立つ巨大な城。ここが、アルハザードなのか。

「さ、お城に行こう！」

そう言ってアリシアが手を引く。あの、手を引くのやめて欲しいんだけど。すると、店が並ぶ城下町から、アリシアへ声が掛かる。

「おはようアリシアちゃん」

「あ、リットさん」

「これ持って行きな！」

そう言って男はりんごを二つ投げてきた。

「ありがとう！」

「おはようアリシアお姉ちゃん！」

「レナ、おはよう」

「はい、お花」

「いくらかしら？」

「いいの、あげる！」

そう言って女の子が笑顔で花を渡す。その後もいろいろな人からパシやら何やらをもらった。

「アリシア、人気者だな」

「うーん、ちょっと違うかな。ここの人たちとは付き合いが長いから」

「そうなのか」

俺たちの世界じゃこんな光景は見られないだろうな。そんなことを思いながら歩いていると、いつの間にか城の門の前に着いた。

「アリシア殿、おはようございます!」

「うん、おはよう」

兵士が元気よく挨拶をする。すると、俺に槍を向けてくる。

「して、この輩は?」

「こら、槍を向けたらダメ。この人は母さんの紹介で来た騎士だよ」

「それは失礼しました」

そう言っつて槍を収めた。そのまま俺はアリシアと城の中を歩く。

「直人、それはしまっていてね?」

「気が付いていたのか・・・」

俺は槍を向けられた瞬間、とっさにメシアを手を取っていた。それを気が付いたアリシアは慌てたのだろう。

「城の中は魔力を抑えるAMFが強い。特別なプログラムを組んでいないと城の中じゃ魔法を使えない仕組みなんだ。」

なるほど、だからメシアに反応がないのか。

「だけどそれじゃあ使えないんじゃないか？試験の時に」

「ああ、そうだった。ちょっと貸して」

そう言ってアリシアは俺からメシアとブレイブスワローを取り、銀色の三角形の宝石を取り出す。

「バルディツシュ？」

「うん、バルディツシュ・アナザー・・・フェイトが使っていたバルディツシュの後続機。私はアナザーって呼んでいるけど。」

『以後よろしく』

「ああ・・・で、何をする気だ？」

「うん、母さんから預かっていた・・・あつた、アンチAMFプログラム、ダウンロード」

『ダウンロード』

アナザーが答え、メシアとブレイブスワローに光が注がれる。数秒で元に戻り、俺の手に返された。

「さ、話しかけてみて。これで大丈夫なはずだから」

「気分はどうだ？」

『問題なし、重圧が消えました』

『私もです。』

「万事解決！さ、奥へ行くよ！」

そうやってアリシアはどんどん奥へ進んでいく。奥へ行くと、広い中庭があった。そこでは多くの騎士と魔導士が訓練している。

「へえ、本格的だな」

「まあ、国の誇りも背負うわけだし、当然だよね」

と、アリシアがいう。すると、1人の男が歩み寄ってきた。

「アリシア、おはよう」

「ゼトさん、おはようございます」

そうやってアリシアが頭を下げる。すると、ゼトと呼ばれた男が俺を見る。

「では、この子が？」

「はい、騎士です。直人、この人はアルハザード騎士総隊長のゼトさん」

「井上直人です」

俺のことをじっと見ている。なんだ？

「うむ、少し若いがいいだろう。試験を始めよう」

ゼトさんがそういった瞬間、いきなり門にいた兵士が慌てて駆け込んできた。

「大変です！城下に魔物が！」

「なに！？」

一同が騒然となる。その一瞬、俺の頭に町の人たちの笑顔が過ぎる。

「総員戦闘態勢に……」

俺はゼトさんが言う前に城下へと走った。

「あ、ちよつと直人！？」

さつきまで平和だった世界が、一瞬で悪夢になっていた。すると、目の前に黒い影があった。その骸骨の敵……なんだ？あれは……。見ると、アリシアに花を渡した女の子が襲われようとしている。

「メシア！準備はいいな！？」

『オーライ、いつでも行けます』

「メシア、セットアップ！」

『スタンバイ レディ！』

「おおおおおおお！！！！！！！！！！」

俺はバリアジャケットを纏い、魔物に斬りかかった。

「さ、さっきのお兄ちゃん！」

「逃げろ！」

「う、うん！」

少女は返事をして逃げる。しかし、敵はまだ沢山いた。

「きゃあああ！」

「ちい！」

すぐさま剣を振り、敵を切り捨てて女の子を抱える。そして、俺は詠唱を唱える。これはキメラ戦以来だが、出来るはずだ。

「我が求めるは業火の力……その炎は全てを焼き尽くし、全てを消し去る……契約の元、姿を現せ！『ケルベロス！』」

魔法陣が展開され、ケルベロスが姿を現す。

「久しいな、戦か？」

「ああ、頼む。」

「そちらは手一杯か……わかった、我に任せよ」

そう言っつてケルベロスが魔物たちに襲い掛かる。

「お、お兄ちゃん・・・」

女の子が震えている。まあ、ケルベロスは見た目が怖いからなあ・・・

「大丈夫、あいつは味方だよ。俺の友達だ」

「本当？」

「ああ。」

そう言っつて前を見る。ケルベロスのおかげで数は減ったが、状況は良くないな・・・未だに敵が多い。

「があああああああああ！！！！！！」

突然敵が出てくる。まさか、反応できなかった！？俺は咄嗟に女の子を庇うが、そこへ白銀の閃光が現れ、魔物を貫いた。

「な！？」

「直人！レナ！」

「アリシアお姉ちゃん！」

そこにいたのはアリシアだ。フェイトとは色違いのバリアジャケット

トに、白いバルディッシュユが握られている。

「直人、大丈夫？」

「ああ、この子を頼む。俺も戦わないと」

「待って、今騎士隊が・・・」

「そんなの待ってられるかよ・・・」

「あ、ちよつと！」

俺はそのまま魔物を斬り捨てる。随分と脆いな、こいつら。

「主、敵の中に、強い魔力を持つものがあるぞ・・・」

「確かにな・・・さっきから感じてた・・・」

そう、ここに来たときに気にしていたもの。それは強大な魔力だった。

「あれだな・・・」

ケルベロスが見る先には、異常な魔力を持った魔物。見た感じ、悪魔のようにも見える。禍々しい槍を持ち、なんとも恐ろしい容姿だ。

「なんだ・・・あいつは」

「あれはガーゴイル！」

「ガーゴイル？」

「あいつは普通の騎士や魔導士でも勝てないよ！私達じゃ勝てない・・・！」

アリシアが叫ぶ。恐らく本当なのだろう。だが、ここで引けばこの町は消えてしまう。

「だが、ここで引くわけにもいかない・・・ケルベロス、引き続き雑魚は頼む」

「ああ、心得た」

ケルベロスが頷き、俺はガーゴイルに斬りかかった。しかし、ガーゴイルの持つ槍に受け止められた。

「ほう、威勢がいいな・・・人間」

「喋った・・・？」

「そこに驚くか、人間」

「まあな！」

そう言って離れ、構えを取り直す。コイツ、強い・・・

「恐れ、下がったか？人間」

「・・・どうだろうな」

正直強いし、スキがない・・・さて、どうするか・・・

「考える暇を与えようと思うか？」

行った瞬間、視界からガーゴイルが消えた。速い！

「ちい！」

すぐにメシアでガードする、そのまま弾き飛ばすと、ガーゴイルは宙を舞いながらヒラリと地面に着地する。

「あの一瞬の判断・・・おもしろい、久々に骨のある人間と出会えた」

人間には元々骨があるだろーが・・・って、そういう意味じゃないんだろうな。

「人間、名は？」

「井上直人」

「我が名はバル！冥土の土産に覚えておけい！」

またしても視界から消える。

「メシア・・・リミットブレイク」

『リミットブレイク！』

俺の魔力が跳ね上がり、騎士甲冑が紅く輝く。そして俺はバルの攻

撃を受け止めた。

「な、何!?!」

「メシア!」

『ロードカードリッジ!』

カードリッジがロードされてメシアが蒼い雷を纏うと、俺はそのままガーゴイルに斬りかかった。

「蒼雷一閃!」

「ぐはああああ!?!?!?!」

ガーゴイルが真つ二つに斬れた。

「や、やるな……」

この瞬間、俺は全てを悟った。

「……おい、芝居はやめてくれよ」

「何を……?」

「いい加減茶番もやめてくれ……アリシア、いい加減この結果を解け」

「あ、あちゃ……バレた?」

アリシアが言うと、結界が解け、元の風景が姿を現し、ガーゴイルや雑魚の魔物が消える。女の子の傷も一切なかった。

「合格だよ、直人」

「なにが？」

「試験に決まってるじゃない！」

やっぱりな・・・途中からおかしいと思った。やけに魔物たちは弱いし、さつき敵に反応できなかったのもおかしかった。ケルベロスもなんか攻撃を弱めてたし、ガーゴイルを真つ二つにできるように殺傷設定にした覚えはない。

「素晴らしいものだ、直人君」

一軒の家の中からゼトさんが現れた。

「どのあたりから気が付いていたんだ？」

「雑魚の骸骨斬ったときから妙に手ごたえがなかった。」

「なるほどな・・・城下に協力してもらって試験をやったのは正解だったわけだ」

ゼトさんが言っていると、周りから拍手が送られる。そこには城にいた兵士や、街の人たちだった。なるほど、皆グルだったのな。俺はため息をつく。ケルベロスもやれやれといった感じで戻っていた。

「井上直人。本日よりアルハザードの騎士と認定する。この後女王陛下に会うことになる。身だしなみを整え、アリシアと再び城に来るようじ。」

「了解です、隊長」

俺はそう答え、メシアを元に戻すと、先ほどのレナという女の子が駆け寄ってきた。

「お兄ちゃん、ありがとうね」

「はは、俺の試験に付き合ってくれてありがとうな」

そう言って俺が頭を撫でると、レナは嬉しそうに笑う。

「ほら、行くわよ直人」

「ああ、わかったよ」

俺は再び城へ向かう。いったいどんな人なんだろう、女王とやらは。そんなことを思いながら、俺は城へと歩き出した。

外伝 第二話「アルハザードの騎士」（後書き）

秋風「はい、というわけで第二話終了」

直人「なんか設定が奇想天外だよな、町を巻き込んだ試験なんてさ」

秋風「おもしろいだろ？」

直人「よくいうよ、さっき思いついた癖に」

秋風「そういうな、次回はとうとう女王様が登場！どんな波乱が巻き起こるかはお楽しみだ！」

直人「波乱・・・？お前、まさか・・・」

秋風「じゃ、おれA、S見に行くから！」

直人「逃げるな！じ、次回、外伝・第二話『女王と任務』TAKE

OFF！」

外伝 第三話「女王と任務」(前書き)

更新遅れました。すいません。最近疲れてしょうがないもので・・・
外伝はそんなに続きません。せめて五話で簡潔させるつもりです。

そうしたらStirikersになりますので、どうかお楽しみにw

では本編どうぞ

外伝 第三話「女王と任務」

再び城に入り、今度は階段を上がって奥へと進んだ。とりあえず身だしなみを整えた。・・・うん、まあいいんじゃないの？確認し、アリシアと共に扉を開けた。そこにいたのは、3人の男女。全員が騎士甲冑を纏い、それぞれが武器を掲げている。そして中央の玉座に女性が座っている。17か、18歳くらい・・・だろうか。少なくとも自分よりは年上の女性だろう。髪は水色で、瞳は美しい金色だ。服は御伽話に出てくるような純白のドレス。銀色のティアラが美しい水色の髪の上にちょこんと乗っている。

「皇女様、新たななる騎士をお連れしました」

アリシアが言って頭を下げる。俺は前に行くようにアリシアから念話を送られ、ゆっくりと前に歩き出した。近くで見れば見るほど、その人は美しいと思えた。

「私はアルハザードを統治する皇女、エレン・アルハザードです。」

「井上、直人です・・・」

俺はそう言って挨拶をする。

「先ほどの試験、見事なものでした。少女のために必死になって戦う貴方の姿はまさに騎士と呼べるでしょう。」

「ありがとうございます」

とても穏やかな声だ。なんだろうか、この雰囲気は・・・

「井上直人。あなたは騎士として、アルハザードのために戦ってくださいか？」

「・・・・・・・・・・」

アルハザードのため……か。俺は、そんな大層な物のために戦うわけじゃないんだよな……

「どうかしましたか？」

「皇女様……俺は、アルハザードのために戦うことは、出来るかどうか分かりません」

「では、あなたは何のために戦うのですか？」

「……俺は、この世界にいる人達の笑顔のために戦います」

「世界の人たちの笑顔ですか……」

俺は強く頷いた。すると、皇女は笑顔で近づいてくる。そして、手にある十字架を俺に手渡してくれた。それは、白銀の十字架。中央には紋章が刻まれている。

「これは、私を護衛する騎士が着ける騎士の証です。どうか、これを貴方に」

「俺に、これを？」

「貴方の覚悟、私の想いと同じようです。私も、国の利害のために戦ったりはしません。すべては、この世界の平和のために。そのた

めに戦うのです」

言われた瞬間俺は片膝を着き、頭を下げた。何故だかはわからない。だが、この人の背負うものが見えた気がした。

「顔を上げてください、井上直人」

「はい」

「貴方に、称号を授けます」

「称号？」

「はい、私の騎士として戦ってもらうからには、あなたに称号が必要になります」

そんなものがあるのか。すると、空中に文字が浮く。アルハザードの字なのだろうか？ミッドチルダの言葉は多少勉強したけど、これは読めない。

「その称号は『蒼天』。あなたの騎士甲冑の色・・・貴方にこの称号を授けます」

「その称号、有難く頂戴いたします」

すると、俺が受け取った十字架が蒼になった。これが、騎士の称号・・・

「これで騎士の証の授与は終わりです。皆さん、解散していいですよ」

そう言って皇女が奥へと歩いていった。すると、アリシアが近づいてくる。

「どうだった？直人」

「……疲れた」

「あはは、ちなみに私はこれだよ」

そう言っただけで同じ十字架を見せてきた。それは汚れのない白。

「アリシアも直属の？」

「私は魔導士だけだね。私の称号は『白銀』」

「白銀……」

白銀……マントがそうだからか？

「この後はどうすればいい？」

「とりあえず母さんの所で色々メシアたちを弄ってもらおう」

『私、今度は何をされるんでしょう？』

「大丈夫、ブレイブスワローも一緒だから」

『聞いてません……』

メシアたちが散々だという感じだ。あきらめろ、この世界で生きていく代償だろ。

「で、アリシア。プレシアさんの仕事場どこ？」

「4階の研究室。ここからだに近いよ」

「じゃ、行くか」

「避けてみる」

後ろから声がし、剣が降ってきた。俺は最小限の動きだけでそれを避ける。

「なかなかやるな」

「危ないな・・・なんだ？」

コイツは確か、黒い騎士甲冑の男か。

「なるほど、判定でSランクと出ただけはある」

「なんのつもりだ・・・？」

「ただの挨拶だ」

そんな危ない挨拶があるか。すると、今度は後ろから緑色の甲冑を来た茶髪の青年が駆け寄る。俺と同じ年くらいか？

「やめなよライ・・・始めまして。僕はラムザ・フェイムリット。

称号は『翡翠』の魔導士」

なるほどと納得する。まあ、コイツの甲冑を見ればそうだな。翠だし。

「ちなみに私はアクア。アクア・マリンハートよ。称号は『焰』の騎士」

その夕日の色をした甲冑は確かに焰だ。金色の髪がかかって綺麗だな。そして、ライと呼ばれた男が剣を鞘に収めていた。

「俺はライ・バーザム。称号は『漆黑』の騎士だ」

そんな真つ黒なやつ着てればそうだろうな。ってか、こいつ危ない。

「ちなみに僕とアリシアは魔導士隊から。アクアとライは騎士隊の出身なんだ」

「なるほど・・・」

「じゃあ行きましょ?」

「なにが?」

「プレシア博士の所に行くんでしょ?」

「ああ、そうだった・・・って、ついてくるの?」

なんでこいつらまで来るんだよ。

「私達も調整中なの、デバイス」

「僕もメンテナンス頼んだんだ。博士は丁寧にやってくれるし」

そういつてみんなでゾロゾロと歩く。なんだこれ。すると、周りの騎士や使用人らしき人たちが次々と頭を下げる。

「あれ？みんな何してるの？」

「私達はそうね、管理局でいえばAAA以上の実力者だから頭が下がるのよ」

アリシアがやれやれといった感じで説明する。隣ではラムザが苦笑する。

「まあ、それは総合的なものであって、色々低かったりするわけだし」

「そ、そうなんだ」

上下関係は実力で決まるのか。

「あ、ここだよ」

アリシアが足を止め、扉を開ける。そこにはプレシアさんがいた。

「あら、もう来たのね。3人のデバイスはそこよ。持って行って頂戴。」

「「「はい」」」

あれ？なんかみんなきつちりしてる。

「直人」

「あ、はい」

「メシアとブレイブスワローの調整をするわ。貸して頂戴」

いわね、俺はメシアたちを渡した。

「あれ、直人は二つデバイスを持っているの？」

「まあな。ブレイブスワローを手にしたのは最近だから、結構大変だけど」

「これは不思議なデバイスね。他のデバイスと融合する機能があるなんて」

「ええ・・・特別製ですから」

プレシアさんはコンソールを叩きながら、メシアとブレイブスワローに光が当たる。

「はい、おしまい」

「ありがとうございます」

そう言ってメシアたちを受け取る。

「さて、私達は任務だよ。」

「任務？」

「うん、陛下が国の外へ出て隣国のハーネスという国へ行くの。互いの国がどうやったらもつと平和になっていけるか。それを話し合う。私達はその護衛だよ」

アリシアが説明してくれる。なるほど、同盟国との会議か・・・

「わかった、行くう」

「ちなみに護衛隊の隊長は私、アクアよ。」

「わかった、隊長」

こうして、俺たちは任務へ向かうこととなった。

城の外もファンタジーの塊だった。周囲には草原が広がっている。しかし道は道路だ。皇女は車リムジンに乗り、俺たちは皇女を中央に右にライ、左にアクア。正面はアリシア、左にラムザ、右に俺がいる。一応解説するが、車には全員乗っている。この世界もミッドチルダ同様に魔法と科学（機械）などが発展しているが、あるハザードは中でもミッドチルダが科学と魔法の割合が7対3くらいに対してアルハザードは4対6となっている。城下でも車は見たし、店の中にはレジがある。なんとというか、滅茶苦茶だ。そんな話をすると、ミッドチルダと似たようなものだとアリシアに言われた。そんなものだろうか？

「それにしても、魔物はでないんだな。」

「この辺は人が結構手を加えたから、滅多に危ないのは出ないよ。試験の時のガーゴイルだって、出ることが珍しいから。」

アリシアは気楽そうに話す。まあ、現状で俺たち全員が騎士甲冑やバリアジャケットを纏ってない理由もそれだ。しばらく行くと、俺たちの世界とほとんど変わらない道路が見えた。

「そろそろ着くね。」

先に見えるのは国の国境らしきもの。国境を許可をもらって通り、俺たちはハーネスに到着した。そこは城などない、機械文明などが発達した場所だった。

「この世界の国は魔法と機械だと機械の方が主流・・・直人の世界に近いね」

「ああ・・・」

そんなことより・・・

「あのさ、あれは・・・」

街の中であちこちに見かける浮遊した青い物体。それは確か任務の時にあったアンノウン。

「ああ、あれはガシエットだよ」

「ガシエット？」

「そう、この世界で多く活動している無人機動機。兵器もあるけど、普段は人のサポートが主な仕事なんだ。アルハザードにもあるよ？ ガシエット。家の家の掃除もガシエットだし」

「そうなんだ・・・」

でもそうになると、あそこに現れたのはなんだったんだ・・・？そんなことを思っていると、いつの間にか車が止まる。

「さあ、着きました皇女様」

「ありがとう」

ライがエスコートし、皇女が降りた。なんか絵になるな。

「じゃあ3人達はここで待機して、警戒態勢を取っててね」

「了解」「」

俺とアリシア、ラムザが承諾。ライとアクアは皇女の護衛として中に入っていた。

それから二時間、今だに何も起こらない。俺は暇を持て余していた。

「暇、だな」

「そうだね、ま、滅多にテロとかなんて起こらないから」

アリシアが苦笑する。まあ、平和なのはいいことなんだが。

「そういえば直人、直人のデバイスの融合機能、他の人のも使えるのかな？」

「さあ、どうなんだろう。」

『事実上不可能ではありません。しかし、それを受け付ける機能を持ったデバイスでないと不可能でしょうね。』

「どういうこと？ブレイブスワロー」

『わかりやすく言うとパズルですよ。ピースが合わないと、それは完成しません』

「なるほど、発動をする側とその力を受け入れる側が一致しないとできないわけか」

『その通りです』

じゃあ他のデバイスにその受け入れる力を合わせたらできるのか？なんてことを考えていた。すると、突然爆発が起きる。皇女が入っていたビルからだ。

「な!？」

「大変！ラムザ、アクアさんに連絡を取って！」

「わかった！」

ラムザが連絡を入れる。俺は周囲を見る。逃げ惑う人々の中に、デ

バイスらしきものを持った男がいた。あきらかに落ち着いており、こちらを見て笑うと、そのまま走り去る。

「あいつは・・・？」

「直人？」

「アリシア、ここを頼む・・・犯人を見つけた」

俺は駆け出し、犯人を追った。

外伝 第三話「女王と任務」(後書き)

秋風「更新遅れて申し訳ありません」

直人「まあ、学校始まったしな」

秋風「それにしても、最近は他の人の更新ラッシュがすごいね」

直人「まあ、年末過ぎたからじゃないの？」

秋風「俺なんか毎日更新してたぞ！」

直人「それはお前が暇だったからだ」

秋風「うるさいよ」

直人「次回、外伝 第四話『騎士の名の下に』 TAKE OFF！」

外伝 第四話「騎士の名の下に」(前書き)

最近ゲームばかりやっています。もうすぐ大学生なのにいいのかな。
・

外伝 第四話「騎士の名の下に」

俺は犯人らしき男を追った。すでにバリアジャケットを装備し、空中から追うが、スピードが滅茶苦茶速い。なんだあいつは。男は急に止まってこちらを向いた。そこは自然公園らしき場所。森が生い茂り、あたりが良く見えない。

「・・・しつこいな。何の用だ？私はただの一般人だ」

「一般人がそんな物騒な杖を持つか？」

「フ・・・確かに」

男が短く笑う。金髪のこの男、いったいなんだ？

「俺が誰か・・・と考えているか？」

「何？」

「俺はそうだな。世界を救うもの・・・そう言っておこう」

「世界を救う？そのわりにはビルを爆破させたりを混乱させたり・・・やってることはテロリストだな」

言いながら俺はデバイスを構える。こいつ、隙がない。

「テロ・・・か。だが、それは平和になるための犠牲の上だ・・・」

「本当の平和に犠牲なんてつくものじゃない」

「ふっ・・・あの皇女と同じか。貴様も」

「やはり狙いは皇女か・・・お前はいつたい」

最後まで言おうとしたが、その瞬間にどこからか魔力弾が飛んでくる。

「くっ！」

俺はクリスタルダガーを発動し、それを貫いた。しかし、次から次へと全方向から攻撃が飛んでくる。

「これは・・・！」

「今さら気がついたところでもう遅い！」

今度は大型の砲撃。まさか、囲まれた！？罨だったのか！しかも、この砲撃の威力はなのは級だ。そして、左右からの攻撃に集中していたため、上から来た魔力弾が集中して俺に降り注いだ。

「！！！」

「くっくっく・・・これで騎士の一角は崩れたか」

「それは、どうだろうな・・・」

男が笑う・・・しかし、俺はまだ終わってはいない。俺は全ての魔力弾を弾き飛ばしていた。何発か喰らったけど。

「な、なに!？」

「……これで終わりか？」

「貴様、なんだそれは……」

真紅の甲冑……リミットブレイクを俺は発動させていた。

「お前に答える必要はない」

再び魔力弾が飛んでくるが、俺は最低限の動きだけで避けるとすぐにそのそれぞれの方向へクリスタルダガーを放った。

「ぐっ！」

「がっ！」

「わぁ！」

遠くで声がした。命中したんだな。

「貴様……アルハザードの騎士とは思えない。なんだ、その並外れた力は!」

「俺は……『蒼天』の称号を持つ騎士……井上直人だ。この騎士の名の下、貴様を倒す」

「舐めるなよ……皇女の犬があ!」

男が魔力弾を撃ち放つ。しかし、その力はあまりにもぬるい。

「カオス・・・！何故その名を！」

まさかコイツ・・・！

「気がついたか？私はかつてアルカディアにいたのだよ・・・そしてカオスを作った。それが私だ」

「カオスを作った張本人・・・！」

「私の名はマラキア・・・アルカディアの科学者だった男だ」

「マラキア・・・この国で何をするつもりだ！」

「知れたこと、アルカディアと同じように、この世界を混沌で満たすのだ！」

マラキアの体から黒い何かが出てくる。そしてそれがキメラを作り出す。

「なっ！？」

「さあ、見せてくれ・・・カオスを倒したその力を・・・！」
キメラたちが一斉に襲い掛かる。

「ちい！」

『マスター！私を！』

「いやダメだ！マリカがない以上、力は使えない！メシア！」

『リミットブレイク！』

再び装甲が紅くなる。そして、そのままキメラを倒した。

「ほう、なかなか・・・S+ランクくらいはありそうだな」

「マラキア・・・今のはいつたい！」

「カオスを倒したのにわからないのか？カオスとは、本来このように使うのだよ」

言いながら、マラキアは闇の中へと消えていった。

「待て！」

「くくく・・・カオス・レイは未だに未完・・・今日は帰るとしよう」

声だけが聞こえ、周囲に静寂が訪れた。

「クソ！」

逃げられた。そしてカオスの存在を知る男・・・あいつはいつたい。すると、上空からアリシアが飛んできた。

「直人！」

「アリシア！皇女は！？」

「うん、アクアとライがなんとか守ってくれたから無事。そっちは・・・?」

「すまない、逃げられた」

俺は頭を下げる。あんな大変な状況で犯人を見つけたのにも関わらず、捕まえることが出来なかった。騎士失格だ。

「気にしないで。ほら戻ろう? アクア達や皇女様が心配してるから」

「ああ、わかった」

こうして俺たちはビルへと戻って行った。

アルハザードに戻ると、すぐに会議が行われた。説明するのはプレシアさんだ。一応色々解析をしてくれたので、その説明を俺たちは受けている。

「さて、今回皇女様を襲った犯人はライが倒したけど、不思議なことに全員灰になったわ。」

モニターには人とも似つかぬ異形が灰になり消える。

「コレはいったい?」

「これは、キメラ・・・」

「キメラ?」

そうか、この世界の人間はキメラを知らないのか。

「キメラは俺の世界でカオスと呼ばれる存在が生み出す怪物……」

「けど、あなたは倒したんでしょう、そのカオスを」

プレシアさんの言葉に俺は頷く。

「でも、それで終わりじゃなかった。カオスを動かしていたのはこの男だ」

モニターに先ほどの男を出した瞬間、全員が驚く。

「マラキア!？」

「知ってるのか？」

「随分前、違法実験で国外追放を受けた科学者だよ!」

「コイツは元々お前のように異世界からの来訪者だった。」

ライが説明すると、デバイスから映像を出す。

「マラキアは生体研究に長けた科学者だ……色々と危ない男だ」

研究項目録に、人体の武器化などが記されている。

「皇女は彼の人道から外れた行為に激怒し、国を追放したわ」

あの人が怒るって・・・そうとう怖そうだな。

「テロも恐らく皇女への恨みだろうね。何しろ、この人の研究を全て破棄したのも皇女だ。」

「一方的な逆恨みね・・・こうというのが一番怖いわ・・・」

全員が暗くなる。確かに、こんなやつ放っておけない。

「ともかく、あの男が動かない以上、国及び城下周辺の強化が必要ね。ガシエットを出すと同時に、国の各地へ騎士隊と魔導士隊を出して。城下は私達も監視するわよ。」

アクアが言うと、俺たち全員が頷く。確かに、それしか手はないよ
うだ。それにしても・・・

「ガシエットかあ・・・ガシエットは誰が作ったんだ？」

「さあ、わかんない。この国にはすでにあつた技術だよ。でもガシエットっていう呼称はちょっと前に流れてきたブランクデータにあつたんだ。データは管理局の物で、正式名は『ガシエットドローン』
だつたかな？」

「ふーん・・・」

じゃああの時（5月）のはこの世界からの侵攻じゃない・・・か。

「とにかく皆頼むわよ。貴方達の力に掛かっているんだからね」

「」「」「はい！」「」「」

こうして、会議は終わった。

会議から数時間後。俺は夕食を城で済ませ、城の最上階から町を見ていた。その明かりは消えることなく、色々な人が行きかっている。どうやら、この辺も俺の世界とは変わらないらしい。

「お疲れ様です」

いきなり手が出てきた。コップにはコーヒーらしきものがある。夏だから寒くはないが、こういうのはありがたい。

「どうも、どなたが……！！！！？？？？」

隣を見た瞬間固まった。そこにいたのは皇女様だったのだ。

「あら、どうかいたしました？」

「お、お、お、皇女様！？どうしてこんなところへ！？」

「ふふ、驚きました？」

「当たり前です！」

「実は私も外を見たいと思ひまして……」

なんて自由気ままな皇女だ。自分が狙われているのに。っていつか・

「寒くないですか？」

ドレスのままだから上がすごく寒そうだ。

「いいえ、私の服は一定温度を保てるので。」

あ、そうですか

「あなたは どう思いますか？この世界を」

「綺麗な世界・・・そう思います」

「私もそう思います。だから守りたい。かつて、父や母がそうだったように」

「皇女様・・・」

その瞳には揺るがない決意があった。

「皇女様・・・私は異世界からの騎士・・・いつかは待つ人の所へ戻らなければなりません。しかし・・・」

俺は肩膝を突いて頭を下げる。

「この世界で、私は貴女とこの国を守って見せましょう」

「・・・ありがとうございます。頼もしい限りです。でも・・・死なないでくださいね」

「は？」

皇女様が苦笑した。不意に殺気を感じる。後ろを見ると、そこにはアリシアがいた。黒いオーラが出てる。コレは姉妹でできるのか・・・？

「直人く？なに皇女様にちよっかい出してるのかしら？」

「何の話だ・・・」

「アリシア？せつかく二人つきりだったのになにするの？」

「エレン！あなた直人を誘惑しないでよ！」

あれ？今アリシアの奴、エレンって言った？

「ああ、言い忘れていましたが、アリシアは目覚めてから私と親友なんですよ」

「だからこういうときは呼び捨てで話って決めてるのよ。と！にか！く！皇女の権限使って直人を誘惑するなんて卑怯よ！」

「いいじゃない。直人君は可愛いし」

あれ、皇女様いつの間にか俺のこと「直人君」って・・・？

「ダメかしら？」

「い、いえ・・・好きに呼んでください」

俺がそういうと、皇女様は笑顔になった。

「ありがとうございます。では、私もエレンでいいですよ？」

「そ、それはさすがに・・・エレン様、そう呼ばせてもらいます」

「・・・まあいいでしょう。これからよろしくお願いします
ね。我が騎士、直人」

「はい、エレン様」

俺とエレン様は固く握手を交わした。

外伝 最終話（第五話）「騎士達の絆」（前書き）

更新遅れてすいません。とうとう最終章です。

次回からは新連載で書きますので、そちらのほうを見てください。
新連載と言っても、Strikes編に突入するだけですが（笑）
それでは、最終外伝どうぞw

外伝 最終話（第五話） 「騎士達の絆」

事件から早くも3年と数ヶ月が過ぎた。まったく音沙汰が無くなったため、警戒態勢は解除された。そして、俺たちはそのまま騎士として生活を続けている。

「次！」

「はい！お願いします！」

俺に新米の兵士が木剣で斬りかかる。しかし、俺はそれを捌いて弾き飛ばす。

「切り替えしが遅すぎる！もっとすばやく動け！」

「は、はい！」

「次・・・ライ、お前か」

「ああ、久しぶりに勝負だ」

「いいだろう」

言った瞬間、互いに剣を交える。激しい攻防とともに、互いの剣が吹き飛ばされた。

「「ふっ・・・」」

互いが笑い、今度は互いにデバイスを構えた。ライは槍のデバイス

「そういえばラムザは？」

「ああ、また王立図書館で勉強してるよ。なんでもガシエットを新しく作るのにはどうすればいいかって考えてるんだって。」

「ふーん。さて、新人達！これから二人一組で勝負しろ。勝った奴は休み！負けたらスクワット500だ！」

『イエッサー！』

こうして新人達の訓練が始まる。

「で、アリシアは何をしにここへ？」

「そうそう、母さんが呼んでるよ」

「プレシアさんが？」

「装置が完成したつてさ。行こう！」

こうして、俺はプレシアさんのところへ向かった。

「井上直人、入ります」

「よく来たわ。」

この黒髪の女性はプレシアさんがいた。最強にして偉大なる魔導士だ。

「完成したんですか？」

「ええ、出来たわよ。転送装置」

「本当ですか。」

「ええ、これでいつでもミッドチルダへ行けるわ」

嬉しくも複雑だ。この4年で、多くの友人や部下を得た俺にとっては。

「大丈夫。メシアに転送座標を持たせているから。戻ろうと思えばここに来れるわ」

「そうですか。」

「でも、管理局の人間には渡したら駄目よ？」

「わかってますよ」

管理局にこの場所がばれたらプレシアさんが捕まってしまう。それは避けなければいけない。

「直人、とうとう行くんだね？」

「ああ。でも大丈夫だ、必ず戻ってくるよ」

俺はアリシアに笑顔で答える。

「でもすぐには出発しないでしょ？」

「ああ、王族騎士部隊の脱退願いは出したから、明日には出る。」

「そっか、寂しくなるね」

「すまない。」

「なんで謝るの。直人はここに偶然来たんだもん。帰る場所があるなら、帰らないと」

アリシアが笑顔で言ってくれる。ああ、こいつの言葉にどれだけ励まされたのかな、俺。そんなことを思いながら扉を開けると、アクア、ライ、ラムザ、それに騎士隊の隊士達がなだれ込んできた。

「み、みんな!？」

「直人さん!なんで自分達に黙ってたんですかあ!」

「お別れも言おうとしないなんてあんまりです!」

「まだ隊長から教えてもらってないこと沢山あるのに!」

それぞれが俺に対して不満を上げる。そう、俺はみんなには黙っていた。自分が異世界から来たことも、いずれ帰らなければならぬことも。

「みんなには本当に申し訳ない。あいつの捜査も終わってないのに」

「大丈夫。僕たちに任せておいて。」

「お前1人消えたところで、問題はない」

「ライ、そういうこと言わない」

みんなで笑い、騒ぐ。この4年間で一緒に戦い、喧嘩もして。4人は本当に最高の仲間となった。それが嬉しくてしょうがない。でも、別れるとなれば寂しい気持ちでいっぱいだ。

「さあ！今日は宴だ！盛大に隊長を送ろうぜえ！」

「おお！」

一同が声を上げ、盛大に盛り上がった。俺もつくづく、いい部下を持ったもんだな。

そして夜。室内演習場で俺のお別れパーティーが始まった。そこにいるのは全部の騎士団の隊員たち。総勢100名だ。みんなが大騒ぎで飲み食いを始める。俺も水を口にしながら、その様子を見る。これが当分見られないのはなんだか寂しい。

「すごい騒ぎですね、直人」

後ろから呼ばれ、振り向く。すると、そこにはアルハザードの皇女であるエレン皇女がいた。

「お、皇女様！なぜこのようなところに？」

一同が騒ぐ。それも当然だ。このようなところに殿下が来ることなんか滅多にない。

「ああ、私にはお気になさらず。宴をしてください。ほら、音楽も止めてはいけませんよ」

皇女の微笑みに、演奏者が再び演奏を始める。俺は皇女、エレン様

に手を引かれ、目立たない柱の裏に連れて来られた。

「エレン様……」

「直人、貴方がいなくなると聞いた時は驚きました。」

「申し訳ありません。急にやめるなど、蒼天の騎士失格です」

俺が頭を下げた。すると、エレン様は笑顔で俺を見ていた。

「いいえ、プレシアさんから聞いていました。いつか、直人が元の世界へ帰ると」

「直人、私の気持ちは変わりません。どうかこの地で、私と……」

「申し訳ありませんエレン様。私にも、帰りを持っている人達がいるのです」

「そうですね……でも、私はあきらめませんからね？」

笑顔で言われた。この笑顔はあいつらと同じく怖い。特に、背中に立ち上っている黒いオーラが。すると、エレン様が俺の手を取った。

「では、私と踊ってください。」

「え？」

「最後までいい、踊ってくれてもいいでしょう？」

「ええ、喜んで、殿下」

俺はエレン様の手を引き、踊りをしている中央で共に踊る。周りは驚きや冷やかしの目で俺たちを見ている。だがエレン様は楽しそうに踊ってくれている。その後も皆で食事をしたり話したり。俺は理想郷での一時を満喫した。

宴も終盤に差し掛かった。すると、俺はアリシアに連れられ、舞台上の上に連れて来られた。手にはマイクが握られている。もちろん、俺とアリシアの二人。

「じゃあ宴も終盤！最後に井上騎士隊長から皆さんにメッセージを！」

「うっ……えっ……井上直人です。今日は盛大な会を開いてくれたことに感謝します。」

そういうと、周りからありきたりー！とか言われ、笑いが起こる。俺は気にせず言葉を続けた。

「4年前、この世界に来てから今日まで、なんだかあつという間だった気がします。騎士隊長としてみんなと戦い、この国を守り、そして笑顔で過ごせたことは、元の世界に帰ってから絶対忘れないうい。そして、このアルハザードという理想郷を、これからも守り続けて欲しい。それだけが、願いです。みんな、本当にありがとう！」

俺が言い終わると、歓声が巻き起こる。

頑張って直人さん！

あんたやっぱ男だよ！

直人さんお元気でー！

皆が騒ぎ、宴は終わった。

宴が終わり、俺たちは館に戻った。今日はアリシアと一緒に寝ることになった。最後のアルハザードの夜。どうしても寝て欲しいと頼まれた。

「アリシア」

「ん？」

「今日は楽しかった・・・ありがとう」

「どういたしまして。」

アリシアが笑う。この4年間戦ったことは絶対に忘れない。楽しくも苦しく、嬉しくも悲しかったこの4年間。戦い、そして互いに励ましあった。もし魔法と出会わなかったら、俺はどうなっていたんだろうか。

「ねえ直人？」

「なんだ？」

「・・・あのね、大好き」

「ありがとう、アリシア」

俺はただ一言そう言った。すると、アリシアがキスをしてきた。俺は静かに眼を閉じ、それを受け入れる。

「だから、むこうでフェイトたちの所に行っても、私のこと、忘れないで？」

「大切な仲間を忘れると思うか？」

「ふーん、仲間止まりなのね。でもいいわ。直人は絶対に私に振り向かせるから」

「……………お手柔らかに」

俺はそう言って目を閉じ、アリシアも寝息を立てて寝てしまった。こうして、今日も夜が更けていく。

翌日。俺は大勢に見送られ、転送装置の前に立っていた。俺の手には、プレシアさんからフェイトへの手紙が握られている。

「じゃあみんな、行ってくる」

「ええ、気をつけて行ってらっしゃい。それと、フェイトをよろしく」

「頑張つてね、直人！」

「隊長、お気をつけて」

「ああ、行ってきます！」

俺が言うと、転送装置が起動する。

「転送座標コード0057・・・目標世界『ミッドチルダ』転送！」

（さようなら、理想郷「アルハザード」）

ここから、俺の新しい物語が始まる。

外伝 最終話（第五話）「騎士達の絆」（後書き）

はい、外伝はコレで終了です。今までありがとうございました。
次回より新連載として、StrikerS編に突入します。どうか
これからも直人の成長を見守ってあげてください。ちなみに、ここ
は完結にはせず、たまにちよくちよくと外伝を書いておこうと思う
ので、こちらも暇だったらどうか見てあげてくださいw
それでわ、新作に向かって〜？

一同「TAKE OFF！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7797i/>

魔法少女リリカルなのは～蒼天に舞う騎士～

2010年10月8日22時02分発行